# 市原市北旭台遺跡

1990

財団法人　市原市文化財センター



65号遺構出土有鉤銅釧



遺構出土鉄製品　上から74号・60号・75号・67号・70号（S＝1：2）

# 序　　文

千葉県の中央部に位置し、「王賜」銘鉄剣、あるいは上総国分僧寺・尼寺に代表される埋蔵文化財の豊庫として知られる市原市は、縄文時代から中世に至る遺跡が数多く分布しており、豊かな自然環境を背景に、いにしえより永く人々に愛され続け現在に至った地でもあります。

この様な我々先祖の残した貴重な文化遺産を保護・活用し、後世に継承していくことは我々市民に課せられた課題であり、切望するところでありますが、一方では首都圏に位置することから宅地造成、あるいはレジャーの場としてのゴルフ場建設などの地域開発が急速に進展してきております。

地域開発は、現代に生きる我々市民にとって、よりよい生活環境を提供するものでありますが、その反面、貴重な文化遺産の破壊につながることもしばしばあり、これらの地域開発と埋蔵文化財保護との調和の必要性が強く求められております。

今回ここに報告する「北旭台遺跡」はゴルフ練習場建設工事に先立ち、建設と埋蔵文化財保護との調整に基づき、関係諸機関の御協力をいただいて発掘調査を実施した遺跡であります。

その結果、千葉県では初出土、全国的にも貴重な発見となる「有鉤銅釧」を検出するなど数多くの成果を得ることが出来ました。

本報告書は、この調査成果をまとめたものであり、学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のために広く市民の皆様にも活用していただけるならば幸いです。

本書の刊行にあたり、御指導・御協力をいただいた千葉県教育庁文化課、並びに矢口建材加工株式会社の方々に厚く御礼申し上げます。

平成２年３月

市原市教育委員会
教育長　星　野　一　郎

# 例　　言

1．本書は千葉県市原市磯ケ谷字北旭台87―2番地他に所在する北旭台遺跡の調査報告書である。

2．調査はゴルフ練習場建設工事に伴い実施したものである。

3．発掘調査・整理作業は以下のとおり行った。

発掘調査　平成元年1月10日～同年3月31日　　担当　木對和紀

整理作業　平成元年4月1日～同年6月30日　　担当　木對和紀

4．本書の作成にあたり、遺物実測については田中清美、大村直、近藤敏、押澤成規、田中新史、半田堅三の、巻頭図版以外の遺物撮影については田中茂良の協力を得た。

5．本書の原稿執筆は、木對和紀が行った。

6．本書に使用した方位は、座標北である。

7．本書に使用した国土地理院発行の地図は、1：50,000姉崎・千葉である。

8．発掘調査から整理作業の課程で、矢口建材加工株式会社、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会社会教育部文化課の諸機関から御指導・御協力を賜った。

このほか有鉤銅釧に関しては、東京国立博物館文部技官である井上洋一氏及び理学博士である平尾良光氏の御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。

# ㈶市原市文化財センター組織表

## 昭和63年度（発掘調査）

### 役員

| | |
|---|---|
| 理事長 | 星野一郎(市原市教育委員会教育長) |
| 副理事長 | 大野義規(市原市教育委員会社会教育部長) |
| 常務理事 | 須田昇三(専任) |
| 理事 | 滝口　宏(早稲田大学名誉教授) |
| 理事 | 寺村光晴(和洋女子大学教授) |
| 理事 | 海上信久(姉崎神社宮司) |
| 理事 | 根本正夫(市原市企画部長) |
| 理事 | 宮崎芳雄(市原市総務部長) |
| 理事 | 地引希壹(市原市都市部長) |
| 理事 | 安藤隆一(市原市財務部財政課長) |
| 監事 | 元吉末喜(市原市会計課長) |
| 監事 | 河野徳三(市原市教育委員会総務課長) |

### 職員

| | | |
|---|---|---|
| 庶務課 | 課長 | 田丸萬富 |
| | 主事補 | 大鐘光江 |
| | 事務員(嘱託) | 秋田晴美 |
| | 事務員(嘱託) | 石渡あゆみ |
| 調査課 | 課長 | 石田広美 |
| | 主幹 | 加藤正信 |
| | 主任調査研究員 | 宮本敬一 |
| | 主任調査研究員 | 田中清美 |
| | 調査研究員 | 大村　直 |
| | 調査研究員 | 浅利幸一 |
| | 調査研究員 | 近藤　敏 |
| | 調査研究員 | 高橋康男 |
| | 調査研究員 | 田所　真 |
| | 調査研究員 | 木對和紀 |
| | 調査研究員(嘱託) | 田中新史 |
| | 調査研究員(嘱託) | 半田堅三 |
| | 事務員(嘱託) | 高浦貞子 |
| | 事務員(嘱託) | 田中裕子 |

## 平成元年度（整理作業）

### 役員

| | |
|---|---|
| 理事長 | 星野一郎(市原市教育委員会教育長) |
| 副理事長 | 大野義規(市原市教育委員会社会教育部長) |
| 常務理事 | 須田昇三(専任) |
| 理事 | 滝口　宏(早稲田大学名誉教授) |
| 理事 | 寺村光晴(和洋女子大学教授) |
| 理事 | 海上信久(姉崎神社宮司) |
| 理事 | 根本正夫(市原市企画部長) |
| 理事 | 宮崎芳雄(市原市総務部長) |
| 理事 | 地引希壹(市原市都市部長) |
| 理事 | 安藤隆一(市原市財務部財政課長) |
| 監事 | 佐久間章(市原市会計課長) |
| 監事 | 小宮　仁(市原市教育委員会総務課長) |

### 職員

| | | |
|---|---|---|
| 庶務課 | 課長 | 田丸萬富 |
| | 主事 | 大鐘光江 |
| | 事務員(嘱託) | 秋田晴美1.9.30まで |
| | 事務員(嘱託) | 石渡あゆみ |
| 調査課 | 課長 | 矢戸三男 |
| | 係長 | 宮本敬一 |
| | 主任調査研究員 | 田中清美 |
| | 主任調査研究員 | 浅利幸一 |
| | 調査研究員 | 大村　直 |
| | 調査研究員 | 近藤　敏 |
| | 調査研究員 | 高橋康男 |
| | 調査研究員 | 木對和紀 |
| | 調査研究員 | 忍澤成視 |
| | 調査研究員 | 田中茂良 |
| | 調査研究員(嘱託) | 田中新史 |
| | 調査研究員(嘱託) | 半田堅三 |
| | 事務員(嘱託) | 高浦貞子 |

# 本　文　目　次

序　文
例　言
財団法人市原市文化財センター組織表（昭和63年度・平成元年度）
第１章　序　説……1
Ⅰ　調査に至る経緯と経過……1
Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境……1
Ⅲ　遺跡の概要……10
第２章　遺構と遺物……15
１．縄文時代……15
１．住居跡……15
１号遺構……15
２号遺構……16
３号遺構……17
４号遺構……17
５号遺構……18
６号遺構……19
７号遺構……19
８号遺構……22
９号遺構……23
10号遺構……24
11号遺構……26
12号遺構……27
13号遺構……28
14号遺構……28
２．竪穴状遺構……29
15号遺構……29
３．炉　穴……29
16号遺構……29
17号遺構……30
18号遺構……31
19号遺構……31
20号遺構……31
４．集　石……31
21号遺構……31
22号遺構……32
５．土　坑……33
23号遺構……33
24号遺構……33
25号遺構……33
26号遺構……33
27号遺構……33
28号遺構……33
29号遺構……35
30号遺構……35
31号遺構……35
32号遺構……35
33号遺構……35
34号遺構……37
35号遺構……37
36号遺構……37
37号遺構……37
38号遺構……37
39号遺構……38
40号遺構……38
41号遺構……38
42号遺構……38
43号遺構……38
44号遺構……40
45号遺構……40
46号遺構……40
47号遺構……40
48号遺構……40
49号遺構……40
50号遺構……41
６．炉穴及び土坑出土遺物……41

16号遺構……41
17号遺構……41
18号遺構……41
19号遺構……41
20号遺構……41
7．遺物包含層及び遺構外出土遺物……43
縄文土器……43
石　　器……50
土 製 品……50
2．弥生時代……51
1．住居跡……51
51号遺構……51
52号遺構……51
53号遺構……51
54号遺構……51
55号遺構……56
56号遺構……56
2．方形周溝墓……58
57号遺構……58
58号遺構……58
3．土　坑……59
59号遺構……59
3．古墳時代……59
1．住居跡……59
60号遺構……59
61号遺構……60
62号遺構……61
63号遺構……64
64号遺構……66
65号遺構……66
66号遺構……69
67号遺構……72
68号遺構……73
69号遺構……74
70号遺構……78
2．土　坑……79
71号遺構……79
72号遺構……79
3．古　墳……80
73号遺構……80
74号遺構……84
75号遺構……87
76号遺構……91
4．奈良・平安時代……91
1．方形区画改葬墓……91
77号遺構……91
78号遺構……93
79号遺構……93
80号遺構……94
5．その他時期不明……95
1．土　坑……95
81号遺構……95
82号遺構……95
83号遺構……95
84号遺構……95
85号遺構……95
86号遺構……95
87号遺構……97
88号遺構……97
89号遺構……97
90号遺構……97
91号遺構……97
第3章　まとめ……106

# 挿　図　目　次

**第1図**　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
**第2図**　北旭台遺跡周辺地形図……11
**第3図**　北旭台遺跡全体図……12
**第4図**　北旭台遺跡遺構配置図……13

第５図　１号遺構実測図……15
第６図　２号遺構実測図・出土遺物実測図……16
第７図　３号遺構実測図・出土遺物実測図……17
第８図　４号遺構実測図・出土遺物実測図……18
第９図　５号遺構実測図・出土遺物実測図……19
第10図　６号遺構実測図・出土遺物実測図……20
第11図　７号遺構実測図・出土遺物実測図……21
第12図　８号遺構実測図・出土遺物実測図……22
第13図　９号遺構実測図・出土遺物実測図……23
第14図　10号遺構実測図・出土遺物実測図……24
第15図　11号遺構実測図及び出土遺物実測図…25
第16図　12号遺構実測図・出土遺物実測図……26
第17図　13号遺構実測図・出土遺物実測図……27
第18図　14号遺構実測図・出土遺物実測図……28
第19図　15号遺構実測図……29
第20図　16・17・18・19・20号遺構実測図……30
第21図　21・22号遺構実測図・出土遺物実測図32
第22図　23～30号遺構実測図……34
第23図　31～41号遺構実測図……36
第24図　42～50号遺構実測図……39
第25図　16・17号遺構出土遺物実測図……42
第26図　炉穴及び土坑出土遺物……43
第27図　遺物包含層及び遺構外出土遺物……44
第28図　遺物包含層及び遺構外出土遺物……45
第29図　遺物包含層及び遺構外出土遺物……46
第30図　遺物包含層及び遺構外出土遺物……47
第31図　遺物包含層及び遺構外出土遺物……48
第32図　遺物包含層及び遺構外出土遺物……49
第33図　51号遺構実測図・出土遺物実測図……52
第34図　52号遺構実測図……52
第35図　53号遺構実測図・出土遺物実測図……53
第36図　54号遺構実測図・出土遺物実測図……54
第37図　54号遺構出土遺物実測図……55
第38図　55号遺構実測図・出土遺物実測図……55
第39図　56号遺構実測図……56
第40図　57号遺構実測図及び出土遺物実測図…57
第41図　58号遺構実測図及び出土遺物実測図…58
第42図　59号遺構実測図……59
第43図　60号遺構実測図・出土遺物実測図……60
第44図　61号遺構実測図・出土遺物実測図……61
第45図　62号遺構実測図……62
第46図　62号遺構出土遺物実測図……63
第47図　63号遺構実測図……65
第48図　63号遺構出土遺物実測図……66
第49図　64号遺構実測図・出土遺物実測図……67
第50図　65号遺構実測図・出土遺物実測図……68
第51図　65号遺構出土遺物実測図……69
第52図　66号遺構実測図・出土遺物実測図……70
第53図　67号遺構実測図……71
第54図　67号遺構出土遺物実測図……72
第55図　68号遺構実測図・出土遺物実測図……73
第56図　69号遺構実測図……74
第57図　69号遺構出土遺物実測図……75
第58図　70号遺構実測図・出土遺物実測図……76
第59図　70号遺構出土遺物実測図……77
第60図　71・72号遺構実測図・出土遺物実測図78
第61図　73号遺構実測図……81
第62図　73号遺構出土遺物実測図……83
第63図　74号遺構実測図・出土遺物実測図……85
第64図　75号遺構実測図……88
第65図　76号遺構実測図・出土遺物実測図……89
第66図　75号遺構出土遺物実測図……91
第67図　77号遺構実測図……92
第68図　78号遺構実測図……93
第69図　79号遺構実測図……93
第70図　80号遺構実測図……94
第71図　81～91号遺構実測図……96
第72図　有鉤銅釧及び鋳型分布図 ……108
第73図　有鉤銅釧実測図 ……109
第74図　有鉤銅釧実測図 ……110
第75図　鋳型及び有鉤銅釧実測図 ……111

# 表　目　次


第１表　周辺遺跡一覧表……３
第２表　検出遺構一覧表……13
第３表　53～76号遺構出土遺物観察表……98
第４表　有鉤銅釧出土遺跡 ……108


# 図　版　目　次


図版１　北旭台遺跡近景（北側より）
北旭台遺跡遠景（北側より）
図版２　北旭台遺跡近景(西側より)
遺構群手前より75・２・６・52・73号遺構
図版３　１号遺構
３号遺構
４号遺構
５号遺構(左)・12号遺構(右)
６号遺構・52号遺構(手前)
７号遺構（右）　60号遺構（左）
８号遺構（住居跡）　50号遺構（土坑）
９号遺構（住居跡）
図版４　10・68・78号遺構全景(左側が、10号遺構)
11・25・33号遺構全景(最上が、10号遺構)
13号遺構
14号遺構
15号遺構
18号遺構
19号遺構
20号遺構
図版５　21号遺構礫検出状況
22号遺構礫検出状況
23号遺構
24号遺構
25号遺構
26号遺構
27号遺構
28号遺構
図版６　29・64号遺構
30号遺構
31号遺構
32号遺構
33号遺構
34号遺構
36号遺構
38・39号遺構
図版７　40号遺構
41・42号遺構
43号遺構
44号遺構
45号遺構
47号遺構（手前は、97号遺構）
48号遺構
49号遺構
図版８　50号遺構
51号遺構
52号遺構
53号遺構（右）　61号遺構（左）
54号遺構
55号遺構遺物出土状況
55号遺構（完掘状況）
37号遺構（奥）　56号遺構（手前）
図版９　57号遺構検出状況
57号遺構
57号遺構コーナー部遺物出土状況
58号遺構
59号遺構
図版10　60号遺構（手前は、７号遺構）

61号遺構調査状況（左は、53号遺構）
61号遺構遺物出土状況　1
61号遺構遺物出土状況　2
62・63号遺構
63号遺構遺物出土状況　1
61号遺構遺物出土状況　2
63号遺構床上ローム検出状況
図版11　64号遺構
65号遺構調査風景
65号遺構
65号遺構掘り方
65号遺構有鉤銅釧検出状況
図版12　66号遺構
66号遺構遺物出土状況
67号遺構
67号遺構遺物出土状況
68号遺構（周溝は、78号遺構）
69号遺構　焼土・炭化材検出状況
69号遺構炭化材及び遺物出土状況　1
69号遺構炭化材及び遺物出土状況　2
図版13　70号遺構完掘状況
70号遺構遺物出土状況　1
70号遺構遺物出土状況　2
71号遺構
73号遺構（調査前）
図版14　73号遺構
73号遺構旧表土上面遺物出土状況及び周辺の遺構
図版15　73号遺構主体部
73号遺構完掘状況
土層断面と、旧表土出土遺物
遺物出土状況
73号遺構北西コーナ大甕出土状況　1
73号遺構北西コーナ大甕出土状況　2
74号遺構第１主体部
74号遺構第２主体部
図版16　74号遺構全景及び第１主体部完掘状況
74号遺構第２主体部遺物出土状況　1
74号遺構第２主体部遺物出土状況　2
（西側より）
74号遺構第２主体部遺物出土状況　3
（南側より）
74号遺構周溝内遺物出土状況
図版17　75号遺構全景
76号遺構全景
図版18　76号遺構及び周辺の遺構
調査風景（76号遺構周辺）
76号遺構周溝内土坑
77号遺構全景
77号遺構主体部断面
図版19　78号遺構全景
79号遺構全景
81号遺構全景
82号遺構全景
83号遺構全景
85号遺構全景
87号遺構全景
88号遺構全景
図版20　８－13、11－13、14－１・２、53－１・３・５
図版21　55－１・３、57－１、60－１・２・４・５
図版22　61－１～４、62－４・５・６・15・20
図版23　62－21、63－５・６・８、64－２・５・６・７、65－３
図版24　66－１・２・３・５・９、67－５・13
図版25　67－12・13、68－１、69－１・２・３・６・８・10
図版26　69－４・９・11、70－１・２・４
図版27　70－３・５・８・12・13・14・15・16・18
図版28　70－６・９・10・19、73－１・２・３・５・12・13、76－１・２
図版29　包含層及び遺構外出土遺物

# Ⅰ．序　　説

## Ⅰ．調査に至る経緯と経過

昭和62年６月、矢口建材加工株式会社から市原市磯ヶ谷字北旭台地先におけるゴルフ練習場建設予定地内に埋蔵文化財が所在するか否かの照会が千葉県教育委員会及び市原市教育委員会になされた。

これを受けて現地踏査等を行ったところ、遺跡が所在することがわかり、昭和62年７月16日付けで千葉県教育委員会より遺跡が所在する旨の回答がなされた。

このことから、千葉県教育庁文化課・矢口建材加工株式会社・市原市教育委員会の３者により、埋蔵文化財の取扱いについての協議を行ない、造成工事により影響を受ける部分について遺構確認調査を実施した。この結果、遺構の存在する部分については基本的に現状保存（一部盛土保存）とし、存在しない部分について建物等を建設する方向で協議が進み、最終的には同内容を入れた協議書を作成した。

その後大幅な設計等の変更があり、当初現状保存とした部分については削平を伴う造成となったため、再度協議を行ない、当該部分については記録保存を行なうということで発掘調査を実施した。

調査は平成元年１月10日より開始し、同年３月末日をもって終了した。

（市原市教育委員会文化課）

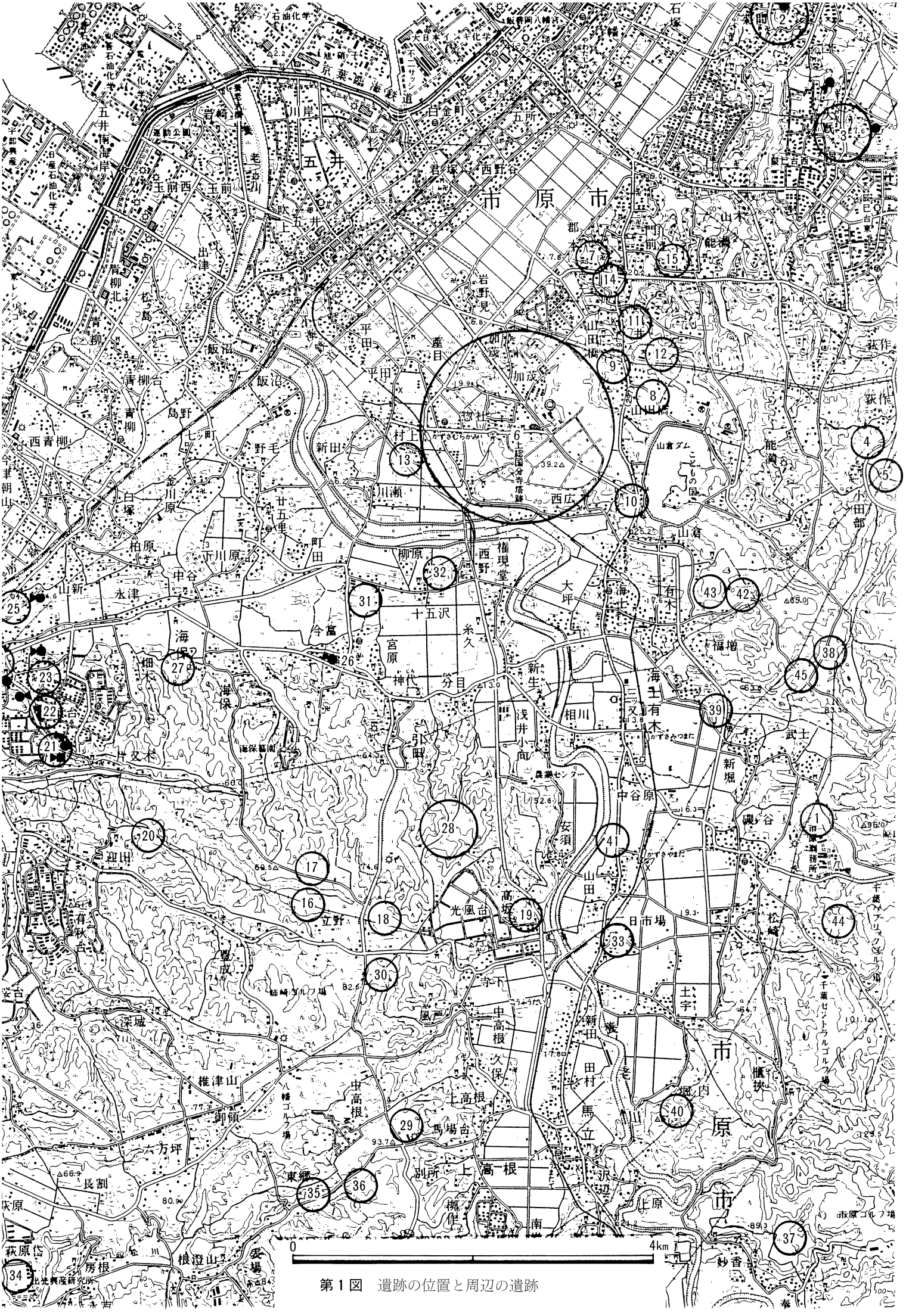
## Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境

北旭台遺跡は養老川右岸に灌ぐ大桶川の形成する標高45m前後の舌状台地突端部に位置し、市原交通刑務所の北に隣接している。また同刑務所内には未調査（一部周溝範囲のみ調査）の古墳数基が現状保存されており、今回調査された４基の古墳と供に北旭台古墳群を形成していることをはじめとして、周辺には多くの遺跡が分布している。ここでは、北旭台遺跡検出遺構と時期を共伴する遺跡のうちでも、調査が実施された遺跡を主体とし、広範囲に渡る周囲の歴史的環境を捉えることにしたい。

また第１図に示した遺跡分布図におけるそれぞれの遺跡は、便宜上分水嶺及びその流域を加味し概ね次の５つの地域に分ける。

| | | |
|---|---|---|
| A | 村田川及び神崎川流域 | 2～5 |
| B | 養老川下流域の通称国分寺台周辺地域 | 6～15 |
| C | 養老川中流域左岸及び椎津川流域 | 16～33 |
| D | 小櫃川支流域 | 34～36 |
| E | 養老川中流域左岸地域 | 37～45及び１（１が北旭台遺跡） |

Aはかつての菊間国造の支配下圏と考えられる地域である。２・３の番号を付した村田川南岸の地点は、その奥津城と考えられており、大型前方後円墳をはじめとする多数の遺跡が存在する地域でもある。集落跡としては、菊間遺跡・菊間手永遺跡・大厩遺跡などが存在し、３者は弥生時代中期以降における環濠集落跡としても古くから著名である。周辺には粘土槨２基が接合して検出され、内行花文鏡・珠文鏡・石釧・大刀・剣・鉄斧・鉇・水晶製勾玉・管玉・ガラス玉などを検出した前方後方墳と推定される新皇塚古墳や、珠文鏡・石釧・刀子・瑪瑙勾玉・琥珀勾玉・琥珀棗玉・琥珀小玉・管玉・




第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

# 第１表　周辺遺跡一覧表

| No | 遺跡名 | 遺跡の内容 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 北旭台 | 本報告書 | 昭和59年及び昭和62年に一部確認調査を実施 |
| 2 | 菊間遺跡群 | | |
| | 菊間遺跡 | 住居跡（弥生中～後期49軒）他 | |
| | 手永遺跡 | 縄文後期貝塚、弥生中期以降住居跡他 | 隣接地に菊間廃寺が存在する。 |
| | 新皇塚古墳 | 全長60m前後の前方後方墳 | 内部施設粘土木郭２基接合検出 |
| | 権現山古墳 | 復元全長75m、前方後円墳 | 未調査 |
| | 東関山古墳 | 全長61m、前方後円墳 | 〃 |
| | 姫宮古墳 | 全長51m、前方後円墳 | 〃 |
| | 天神山古墳 | 径45m、円墳 | 周溝一部調査 |
| 3 | 大厩遺跡群 | | |
| | 大厩遺跡 | 住居跡（弥生中～後期56軒、五領・和泉各１軒他）環濠２条 | |
| | 大厩古墳群 | 前方後円墳２、円墳１、方墳６調査 | |
| | 浅間様古墳 | 径45m、円墳 | 主体部墳丘内無墓壙 |
| | 二子塚古墳 | 全長63m、前方後円墳 | 未調査 |
| | 弁天台遺跡 | 円墳１、住居跡（弥生後期２） | 前述未調査大型古墳等の墳丘規模は同書を参照。 |
| 4 | 小田部新地 | 方形周溝墓（中～後期14）古墳２、土壙墓３、住居跡８<br>方形区画改葬墓２、地下式改葬墓２ | |
| 5 | 小田部向原 | 古墳（墳丘墓）１、住居跡（弥生後期～古墳時代後期11軒） | 住居跡は22軒確認、内11軒調査報告済 |
| 6 | 国分寺台遺跡群 | | |
| | 神門古墳群 | 出現期古墳（墳丘墓）３他 | 下層に弥生時代後期住居跡 |
| | 根田遺跡 | 墳墓、集落跡（御林跡遺跡） | 根田１号墳　墳丘下方形周溝墓、２基主体部より銅釧10点出土、古墳主体部より棗環頭大刀出土 |
| | 諏訪台遺跡 | 墳墓、集落跡（天神台遺跡） | 小銅鐸・盤龍鏡等出土 |
| | 上総国分寺僧寺 | 奈良時代以降、官営寺院跡、伽藍配置は大官大寺系 | 南北４、５町、東西最広部３町以上の寺地 |
| | 〃　尼寺 | 〃　、建物群は七堂伽藍 | 南北３、５町、東西２、５町と60尺の寺地、付属雑舎の検出 |
| | 他 | （長平台遺跡・南向原遺跡・蛇谷遺跡・東間部古多墳群 etc） | |
| 7 | 郡本 | 住居跡（弥生後期４、奈良・平安５） | 隣接地に国府推定地、及び市原郡家推定地あり |
| 8 | 山田橋表道 | 住居跡（弥生後期36、五領７、奈良・平安３）掘立柱建物跡３、土壙墓１他<br>古代道路跡他 | 古代道路跡は稲荷台遺跡へと続くものと推定される。 |
| 9 | 稲荷台遺跡 | 古墳12基、奈良・平安時代掘立柱建物跡群、古代道路跡他 | １号墳より「王賜」銘鉄剣出土 |
| 10 | 山倉古墳群 | 前方後円墳２、円墳３方墳１ | １号墳より横穴式石室、円筒83、人物11、鳥・家・翳・太刀形埴輪等検出 |
| 11 | 群本大宮 | 住居跡（弥生２、古墳時代後期38、奈良・平安35）掘立柱建物跡３、土師窯２他 | |
| 12 | 千草山 | 住居跡（弥生後期２、古墳時代後期105、奈良・平安19）掘立建物跡４、方墳１、方形区画改葬墓２、火葬墓１他 | 南側隣接地に千草山廃寺が存在する。 |
| 13 | 国府推定地 | 村上説 | 須田勉説 |
| 14 | 〃 | 郡本・市原説 | 田丸健良説（郡本）鴇田恵吉説（市原）他 |
| 15 | 〃 | 能満説 | 小沢治郎左衛門説 |
| 16 | 唐沢 | 縄文早期炉穴群他 | 縄文時代晩期遺物と伴に、弥生時代中期初頭丸子式土器検出　確認調査後消滅 |
| 17 | 大道 | 縄文早期炉穴群 | |
| 18 | 山見塚 | 縄文後期集落跡、終末期古墳～方形区画改葬墓群 | 確認調査後消滅 |
| 19 | 高板棒ヶ谷 | 住居跡（弥生後期11）木棺墓１、円墳１ | 木棺墓（弥生後期）よりガラス小玉20数点検出 |
| 20 | 片又木 | 住居跡（古墳前期17、奈良・平安７）、方形区画改葬墓５ | |
| 21 | 毛尻・六孫王原 | 住居跡（弥生後期～古墳後期初頭108）、方形周溝墓４、木棺墓４他 | 遺跡内に六孫王原古墳(前方後方45m)、隣接地に堰頭古墳（前方後円？45m）が存在する。 |
| 22 | 原 | 住居跡（弥生後期～古墳後期初頭28）他 | 原１号墳（消滅、全長70m）の下層遺跡、弥生後期が22軒と主体 |
| 23 | 東原 | 住居跡（弥生中～後期５）、方形周溝墓２、円墳１ | 北前面に姉崎天神山古墳（125m）が存在する。 |
| 24 | 宮山 | 住居跡（弥生後期２、古墳後期初頭７）、掘立柱建物跡１以上 | 式内社、姉崎神社本殿下層遺跡、周辺に釈迦山古墳・（未調査）山王山古墳（消滅）が存在する。 |
| 25 | 上野合 | 住居跡（古墳時代中期４）、円墳２、溝１ | 東約100mの地点に全長110mの姉崎二子塚古墳が存在。 |
| 26 | 今富塚山古墳 | 全長120m前後の前期大型前方後円墳 | 未調査、後円部の大半は削平されている。 |
| 27 | 海保大塚 | 径約60m、六角形、大型古墳改変の塚か？ | 測量調査のみ実施 |
| 28 | 荻原野 | 終末期方墳～方形区画改葬墓群、古墳時代後期集落跡他 | 未調査区域に前方後円墳存在。 |
| 29 | 南名山 | 方形区画改葬墓２他 | 「櫓山」＝「南名山」か？ |
| 30 | 外迎山 | 終末期方墳２、方形区画改葬墓28、火葬墓４他 | |
| 31 | 今富廃寺 | 白鳳・奈良時代寺院跡 | 大和、山田寺系の古瓦検出 |
| 32 | 海上郡家 | 掘立柱建物跡８、井戸８、住居跡４、溝、土壙他 | 大字「小折」郡衙関連区画溝検出 |
| 33 | 二日市場廃寺 | 白鳳・奈良時代寺院跡、掘立柱建物跡他 | 大和紀寺系の古瓦検出 |
| 34 | 打越岱 | 方形区画改葬墓４他 | |
| 35 | 川原井廃寺 | 奈良・平安時代寺院跡、建物跡６、住居跡（奈良・平安６）、溝６ | 四面廂３×４間、他の建物跡は、掘立柱建物跡から礎石建物への建て替えが行われている。 |
| 36 | 荻の原廃寺 | 平安時代寺院跡、基壇２、掘立柱建物跡４他 | |
| 37 | 上原台 | 縄文早期炉穴群・前期集落跡、前方後円墳１、終末期方墳～方形区画改葬墓群 | 凸面布目瓦、六葉単弁蓮華文鐙瓦、三重弧文字瓦検出 |
| 38 | 武士 | 縄文後期集落跡、弥生時代中～後期住居63、再葬墓５、終末期古墳～方形区画改葬墓群 | 弥生一集落をほぼ完掘 |
| 39 | 叶台 | 弥生中～後期、古墳前・中・後期集落跡 | 住居跡およそ70軒 |
| 40 | 土宇 | 住居跡128軒、内弥生時代住居跡85軒 | |
| 41 | 山田大宮 | 弥生中～後期、方形周溝墓８他 | |
| 42 | 福増古墳群 | 円墳３ | 一基は横穴式複室構造の内部施設 |
| 43 | 池谷 | 井戸跡他 | 10世紀初頭前後の井戸跡において「雨乞い」の祭りが行われたものと考えられる。 |
| 44 | 門脇 | 住居跡15、方形区画改葬墓４、掘立柱建物跡１ | 海郷に関すると考えられる「海里長」の墨書土器出土 |
| 45 | 武士廃寺 | 白鳳・奈良時代寺院跡 | 鋸歯文縁複弁蓮花文鐙瓦・深顎三重弧文字瓦の他、今富廃寺と同範関係の三重弧文鐙瓦検出 |

ガラス勾玉・ガラス小玉を検出した径45mを測る大厩浅間様古墳をはじめとして、未調査ではあるものの権現山古墳・東関山古墳・姫宮古墳・大厩二子塚古墳などの古くから著名な前方後円墳や、径44mの円墳と考えられる菊間天神山古墳などの大型古墳が集中している。また対岸における草刈遺跡を中心とする千原台遺跡群からは、小銅鐸3点、珠文鏡5面、銅釧8点、銅鏃7点などを検出し、周辺地域における青銅器の分布においても卓越したものがある。(註1) たしかに調査面積も拡大であるが、これを無視することはできない。さてこの村田川の一支流でもある神崎川を南下すると、3・4の番号を付した小田部新地遺跡・小田部向原遺跡が存在する。新地遺跡では、中期～後期につらなる方形周溝墓14基や古墳・土壙墓・奈良時代以降の方形区画改葬墓などが検出され、方形周溝墓の一基は中央主体部が甕棺となる特異な例や、古墳時代の土壙墓からは珠文鏡が検出されるなど、注目される遺跡でもある。(註2) また対岸の向原遺跡は、墳頂部周辺より元屋敷式土器を検出した周知の小田部古墳（墳丘墓）が存在する。この他弥生時代後期～古墳時代後期にかけての集落跡などが検出されており、古墳の出現期を考える上でも極て重要な遺跡であろう。

次にBとした国分寺台周辺地域の様相を窺ってみよう(6～15)。この地域は全国的にも著名な遺跡が集中する地域でもある。弥生時代から古墳時代を中心とする時期には、出現期の古墳とされる神門古墳群や、王賜銘鉄剣で著名な稲荷台1号墳、後期方形周溝墓2基の内部施設より、計10点の銅釧を検出した根田遺跡、弥生時代後期以降を中心として綿綿と続く集落跡や墳墓群を形成する天神台・諏訪台遺跡などが特筆される。また付近には、人物埴輪を検出した山倉1号墳をはじめとする山倉古墳群（10）や、古墳時代後期の集落跡を中心とする群本大宮遺跡や千草山遺跡（11・12）などが存在するものの、菊間・上海上両国造の奥津城と考えられる周辺地域のごとく、前期大型前方後円墳の存在しない地域でもあることは注目しなければならない。(註3) やはりこの地が古墳時代以降における中心的な役割を果たしていくのは、律令制施行後の奈良時代を中心とする時期であり、古代上総を代表する僧寺・尼寺の建立を期にさらに飛躍的発展を遂げたものと考えられる。そしてその時期には、古代官道と考えられる幅6mの道路を検出した山田橋表道遺跡や稲荷台遺跡（8・9）や国府推定地（13・14・15）が周辺に存在する。

さて今度はCとした養老川左岸及び椎津川流域とDとした小櫃川支流域最奥部の相様を概観してみたい。まず養老川右岸地帯の台地上であるが、この周辺は、近年のゴルフ場建設工事に伴ない、極めて広範囲に渡る発掘調査が実施されているにも関わらず、検出される遺構は極めて貧弱な地域でもある。しかし未調査や一部の確認調査のみで煙滅してしまった遺跡も多く、全体像は不明瞭ではあるものの、唐沢遺跡（16）において弥生時代中期初頭の東海系条痕文土器である丸子式土器が検出されていることは注目すべきことである。この他、高板棒ヶ谷遺跡（19）においては、弥生時代後期集落跡とガラス小玉を検出した木棺墓や、古墳時代後期円墳などが検出されている。また付近には未調査のまま煙滅した前方後円墳2基を含む金比羅台古墳群が存在しており、(註4) その関連性が注目されるが、他の古墳時代の遺構検出例は、片又木遺跡（20）や荻原野遺跡（28）において、それぞれ古墳時代前期と後期に比定される住居跡が僅かに認められるだけであり極めて不明瞭である。古墳時代終末～奈良・平安時代においては、終末期方墳や方形区画改葬墓群の存在が顕著に認められる。これらの遺構を検出する遺跡は、山見塚遺跡（18）・片又木遺跡・荻原野遺跡・南名山遺跡（29）・外迎山遺跡（30）、及び小櫃川流域ではあるが、打越岱遺跡（34）などが存在している。また、これらの遺跡眼下及び周辺

には、川原井廃寺（35）・荻の原廃寺（36）・二日市場廃寺（33）・今富廃寺（31）などの古代寺院の存在が顕著に認められる傾向があり、その関連性の上で重要な要素をもつものと考えられる。また周辺には「鎌倉街道」・「大街道」などの小字名が存在し、前述した古代官道と直結していたものと考えられていることから、古代においてはこの周辺が交通の要所に位置していたことが窺われる。(註5)

さて、今富廃寺周辺および椎津川下流域にはかつての上海上国造の支配下圏として、最もその影響下に存在した地域と考えられている。この周辺には、県下でも有数な大型前方後円墳が築かれ、その奥津城の規模は菊間国造を超えるものがある。その変遷はまず古式の様相を残し4世紀後半の築造と考えられる今富塚山古墳（120m前後）・姉崎天神古墳（125m）・5世紀前葉の釈迦山古墳（79～91m）・中葉の二子塚古墳（110m）・原1号墳（70m）・後葉の鶴窪古墳・（60m）・7世紀前葉の堰頭古墳（45m）・中葉の六孫王原古墳（45m）として捉えられており、ただ1基終末期の六孫王原古墳だけが前方後方形を呈するのも興味深いものがある。(註6)集落跡としては、毛尻・六孫王原・原・東原・宮山・上野合遺跡が調査されている。そのうち上野合遺跡を除いた台地上に存在する各遺跡は、弥生時代後期（一部中期含む）～古墳時代後期初頭における集落跡が主体をなし、特に毛尻・六孫王原遺跡においては、総数102軒の住居跡や方形周溝墓4基、木棺墓4基が検出されており、うち1基の木棺墓より鉄剣と刀子が検出されている。また、六孫王原古墳の封土中には五領式土器片が、山王山古墳の墳丘下から後期の弥生式土器などが検出される例と考え合わせれば、周辺一帯が、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての、拠点的集落跡であっただろうということが垣間見られるのである。また、前述した大型古墳のうち、二子塚・山王山・原1号・鶴窪・六孫王原古墳が、それぞれ一部を調査されており、特に二子塚古墳前方部出土とされる直弧文付石枕、銀製垂飾付耳飾り、舶載蟠虺文鏡や、山王山古墳出土の金銅製天冠、45本以上の矢を納めた胡籙、銀装環頭大刀などは秀品であると共に、被装着者の生前の権力を知る上で極めて重要な遺物でもあり、周辺地域における弥生時代～古墳時代にかけての時期は、1つの文化の中心的存在だったことが窺われるのである。

最後に北旭台遺跡周辺の、養老川右岸地帯の様相を捉えてみたい。この地域は養老川右岸に潅ぐ各小河川が形成する地域でもあり、本来ならばさらに細分される地域でもあるが、発掘調査例が極めて少ないことから、あえて一括した地域でもある。この地域において最も広範囲な調査が実施された遺跡としては、上原台遺跡があげられる。ここでは縄文時代早期炉穴群が大量に検出され、また、極一部ではあるが前期関山期の炉穴や集落跡も検出されている。古墳時代～奈良・平安時代にかけては終末期古墳や方形区画改葬墓を中心とした墳墓群を形成しており、遺跡内からは凸面布目瓦が大量に検出されるなど、極めて注目される遺跡でもある。さらに最も注目すべき遺跡として武士遺跡があげられる。ここは神崎川と養老川支流の形成する分水界の台地上に位置し、弥生時代前期前半期に比定される東海系糸条痕文系土器である樫王式土器が縄文時代晩期包含層中より検出されていることをはじめとして、弥生時代・古墳時代終末～奈良・平安時代の遺構に関しては極めて興味深いものがある。中でも須和田期に比定される再葬墓5基と住居跡1軒、後期住居跡63軒を検出し、弥生時代における一集落をほぼ完掘したものと考えられている。また付近には武士廃寺が存在し、終末期古墳から方形区画改葬墓への変遷が、先の養老川右岸地帯と同様に古代寺院（仏教）の影響下に発生するものと考えられることが指摘されようか。この他宮の代式期～古墳時代後期にかけての住居跡およそ70軒を検出した叶台遺跡、中期の方形周溝墓8基を検出した山田大宮遺跡、85軒の弥生時代後期以降の住居跡

を検出した土宇遺跡、内部施設に複室構造の横穴式石室を採用する福増古墳群、海郷に関連する「海里長」の墨書土器を検出した門脇遺跡などが特筆される。この中で、有銅銅釧を検出した北旭台遺跡と直接関係を有するわけではないが、時期的に接近する遺跡として土宇遺跡の存在が注目されよう。同遺跡は、弥生時代後期～古墳時代後期にかけての集落跡址であるが、弥生時代終末～古墳時代前期にかけての住居跡を主体とし、手焙り型土器や、布留II式期に併行し、搬入品と考えられる器台形土器などが検出されているなど、現状における養老川左岸地帯の該当期の様相を捉える上で北旭台遺跡と共に極めて重要な遺跡であろうと考えられる。また北旭台遺跡の眼下を流れる大桶川によって形成される支谷は東京湾岸から太平洋へぬける最短ルートとして交通上の要所に位置しており、このことは古墳時代後期段階でこのルート上に刑部が置かれた事実から裏付けられるものと考えられる。(註7)

以上、広範囲にわたる周囲の歴史的環境の概略を述べてきた。これらのことから、北旭台遺跡を含めた周辺地域には、縄文時代から歴史時代に及ぶ多岐・多様にわたる遺構が集中している状況がとらえられよう。内でも弥生時代後期～古墳時代前期の段階においては、全国的にみても小型青銅器が集中して検出される傾向が認められる。関東地方における一市町村の中で、鏡、鏃以外に小銅鐸3、釧29（有鉤1含む）などの出土状況はやはり多いと言っても過言ではないであろう。

註1　榊原弘二・山口典子「市原市川焼台遺跡出土の小銅鐸について」『研究連絡誌』第7・8号併号　㈶千葉県文化財センター　1984。
相京邦彦・白井久美子・金子進「川焼台遺跡出土の2号鐸について」『研究連絡誌』第15・16号併号　㈶千葉県文化財センター　1986。
相京邦彦・榊原弘二「小銅鐸の展開　川焼台一号鐸・同二号鐸をめぐって」『千葉文華』第21号　千葉県文化財保護協会　1986。
白井久美子・福田依子「千葉県市原市草刈遺跡出土の小型銅鐸」『考古学雑誌』75－2号　日本考古学会　1990。
相京邦彦「千葉県市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸」『考古学雑誌』75－2号　日本考古学会　1990。
ここでは草刈遺跡・草刈六之台遺跡・川焼台遺跡の他、千原台ニュータウン造成工事に伴う広範囲にわたる村田川北岸遺跡群の名称として使用。
第1図の2・3の対岸に位置するが、図中には所収していない。文献は青銅器関連のみ記載。

註2　木對和紀「房総における改葬系区画墓の出現期　一方形（円形）区画改葬墓の提唱一」『市原市文化財センター研究紀要1』　1987。

註3　『第2回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』　1987。
ただし国分寺台周辺地域においては、弥生時代後期～古墳時代前期を通じて、小銅鐸1、銅釧16、銅鏃4などの青銅器が集中的に各遺跡より検出されていること、及び出現期古墳とされる神門古墳群などなどが存在していることは極めて重要なことである。

註4　中村恵次『房総古墳論攻』　1978。
田中新史「煙滅しつつある中高根古墳群を悼む」『伊知波良』2　1979。

註5　小熊吉蔵「西上総における古街道と国府郡家所在地との関係」『千葉県史跡名勝天然記念物7－4』　1933。
同　「鎌倉街道」『千葉県史跡名勝天然記念物調査第十輯』　1933
須田　勉「上総国府の諸問題」『古代』61号　1976。
木對和紀『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山貝塚遺跡』1987。

註6　千葉県市原郡教育会『市原郡誌』千葉県市原郡役所　1916。
「姉崎町二子塚及大塚古墳」『史跡名勝天然記念物調査第6輯』千葉県　1929。
大場磐雄他「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』37－3号　日本考古学会　1952。
〃　『姉崎山王山古墳』市原市教育委員会　1963。
〃　「市原市山王山古墳」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会　1964。

〃　『原一号墳発掘調査概報』千葉県教育委員会　1971

亀井正道「姉ヶ崎二子塚古墳の銀装耳飾」『千葉県立上総博物館報』31号　千葉県立上総博物館　1978。

中村恵次他「前方後方墳の一考察―千葉県市原市六孫王原古墳の調査―」『古代』55号　1973。

〃　「千葉県市原市六孫王原古墳の調査」『古墳時代研究II』古墳時代研究会　1975。

〃　註4に同じ。

宮本敬一　「うなかみの王陵　姉崎古墳群」『私たちの文化財』6　㈶市原市文化財センター　1986。

木對和紀「姉崎上野合遺跡」『市原市内遺跡群発掘調査報告書』　1990。

杉山晋作他「海保大塚遺跡の測量調査」『関東地方における終末期古墳の研究』　1990。

このほか姉崎天神古墳は昭和49年明治大学によって墳丘測量調査が実施されており、鶴窪（蓮ヶ窪）古墳は昭和56年に市原市教育委員会によって測量及び確認調査が実施されている。また狭義の姉崎古墳群は二子塚古墳～六孫王原古墳に至る範囲を中心とするものであるが、ここでは今富塚山古墳を含めた広範囲にわたる地域で捉えている。

註7　前之園亮一「房総の国造と中総首長連合」『千葉県の歴史』28号　1984。

田中新史他『「王賜」銘鉄剣概報』市原市教育委員会他　1988。

## 第1表関連文献等


1　木對和紀　「北旭台遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』㈶市原市文化財センター　1988。

〃　「千葉県北旭台遺跡出土の有鉤銅釧」『考古学雑誌』75―3　1990。

2　斉木　勝他「菊間遺跡「新空塚古墳」『市原市菊間遺跡』㈶千葉県都市公社　1974。

近藤　敏　「菊間手永貝塚」『市原市文化財センター年報昭和57・58年度』㈶市原市文化財センター　1985。

3　三森俊彦他『市原市大厩遺跡』　1974。

浅利幸一　「大厩浅間様古墳」『市原市文化財センター年報昭和59年度』㈶市原文化財センター　1985。

大村　直　『大厩弁天台遺跡』㈶市原市文化財センター　1989。

4　山口直樹　「小田部新地遺跡」『市原市文化財センター年報昭和57・58年度』㈶市原市文化財センター　1985。

5　杉山晋作他『古墳時代研究Ⅰ―千葉県市原市小田部古墳の調査―』　古墳時代研究会　1972。

大村　直　「小田部向原遺跡」『昭和63年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』㈶市原市文化財センター　1989。

6　田中新史　「市原市神門四号墓の出現とその系譜」『古代』63早稲田大学考古学会　1977。

〃　「出現期古墳の理解と展望―東国神門五号墳の調査と関連して―」『古代』77　1984。

石野博信　「古墳出現期の具体相」『関西大学考古学研究室開設30周年記念考古学論叢』　1983。

橋本博文　「関東の「出現期古墳」とその背景」『古墳はなぜつくられたか』大和書房　1988。

浅利幸一　「神門古墳群―神門3号墳の調査から―」『市原市文化財センター遺跡発表会要旨』1988他。

〃　「天神台遺跡」『市原市文化財センター年報　昭和57・58年度』㈶市原市文化財センター　1985。

米田耕之助「根田遺跡」『市原市文化財センター年報昭和60年度』㈶市原市文化財センター　1986
他。
〃　他「諏訪台古墳群」『上総国分寺台発掘調査概要ＸII』市原市教育委員会　1984。
須田　勉他『諏訪台古墳群調査概要』上総国分寺台遺跡調査団　1975。
田中新史　「西谷・諏訪台・根田古墳群」「稲荷台遺跡の調査」「上総国分尼寺跡の調査」上総国分寺台遺跡調査団　1980。
滝口　宏他「加茂遺跡Ａ地点の調査」「宮前遺跡の調査」「神門４号墳の調査」「将塚古墳群の調査」『上総国分寺台調査概報』　1976。
須田　勉他「上総国分僧寺跡―寺域東南部における調査―」『上総国分寺台発掘調査概要Ⅷ』市原市教育委員会　1981。
〃　「坊作遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概要Ⅳ』　1977。
滝口　宏他『上総国分寺址調査報告』　1967。
須田　勉他「上総国分僧寺跡―寺域北辺部における調査―」『上総国分寺台発掘調査概要ＩＸ』市原市教育委員会　1982。
対島郁夫他「Ｉ加茂遺跡Ｃ地点の調査」「II台遺跡Ｂ地点の調査」『上総国分寺台発掘調査概要III』上総国分寺台遺跡調査団　1976。
田中新史他「古墳の調査」「諏訪台古墳群の調査」「長平台遺跡の調査」「西広貝塚第３次調査」「上総国分尼寺の調査」『上総国分寺台調査報概報』「上総国分寺台遺跡調査団 1982。
滝口　宏他『上総国分寺』千葉県教育委員会　1973。
宮本敬一　「上総国分尼寺の伽藍と付属諸院」『月刊歴史教育』　1981。
滝口　宏他『東間部田古墳群』上総国分寺台遺跡調査会編　1974。
〃　『南向原』上総国分寺台遺跡調査会編　1976。
〃　『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査会編　1977。
田所　真　「諏訪台古墳群」『市原市文化財センター年報昭和60年度』㈶市原市文化財センター　1986。
7　石田広美　「郡本遺跡」『市原市文化財センター年報昭和60年度』　1986。
8　近藤　敏　「山田橋表道遺跡」『市原市文化財センター年報昭和60年度』　1986。
9　田中新史他『「王賜」銘鉄剣概報』吉川弘文館　1988。
10　米田耕之助「上総山倉一号墳出土の人物埴輪」『古代』59・60併号　1976。
11　浅利幸一　「郡本大宮遺跡」『第５回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』　1990。
12　対島郁夫他『千草山遺跡』千草山遺跡調査団　1979。
田中清美　「千草山遺跡」『市原市文化財センター年報昭和60年度』㈶市原市文化財センター　1986。
13　須田　勉　「上総国府の諸問題(1)―特にその所在地をめぐって―」『古代』61号　1976。
田丸健良　『房総志料続編』
鴇田恵吉　「上総国府の研究」『市原地方史研究』第４号　市原市教育委員会　1968。
小沢治郎左衛門『上総町郷誌』

16　木對和紀　「唐沢遺跡」『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山貝塚遺跡』㈶市原市文化財センター　1987。
17　昭和61年度市原市文化財センター調査
18　木對和紀　「山貝塚遺跡」『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山貝塚遺跡』㈶市原市文化財センター　1987。
19　昭和62年度市原市文化財センター調査
20　寺島　博　『片又木遺跡』　㈶市原市文化財センター　1984。
21　平岡和夫他『毛尻遺跡』毛尻遺跡調査会　1983。
木對和紀　「六孫王原遺跡」『第4回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』㈶市原市文化財センター　1989。
〃　「六孫王原遺跡」『昭和63年度千葉県遺跡発表会要旨』千葉県文化財法人連絡協議会　1988。
中村恵次他「千葉県市原市六孫王原古墳の調査」『古墳時代研究II』古墳時代研究会　1975。
〃　「前方後方墳の一考察一千葉県市原市六孫王原古墳調査一」『古代』第55号　1973。
中村恵次　「市原市六孫王原古墳」『房総古墳論考』　1978。
22　越川敏夫他『原遺跡』原遺跡調査会　1984。
石井則孝他『原一号墳発掘調査概報』千葉県教育委員会　1970。
23　昭和63年度㈶市原市文化財センター調査
24　大村　直　「姉崎宮山遺跡」『第2回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』㈶市原市文化財センター　1987。
25　木對和紀　「姉崎上野合遺跡」『平成元年市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会　1990。
26　未調査
27　杉山晋作他「海保大塚の測量調査」『関東地方における終末期古墳の研究』国立歴史民俗博物館　1990。
28　近藤　敏　「新生荻原野遺跡（A地区）」、『第5回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』㈶市原市文化財センター　1990。
29　昭和62年度・平成2年度㈶市原市文化財センター調査
30　木對和紀　「外迎山遺跡」『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』市原市文化財センター　1987。
31　福間　元他『今富地区遺跡発掘調査報告書』市原市今富地区遺跡発掘調査会　1982。
32　小熊吉蔵　「西上総に於ける古街道と国府郡家所在地との関係」『史蹟名勝天然記念物』7－4　1933。
今泉　潔他『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡』㈶千葉県文化財センター　1989。
33　郷堀英司他『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』千葉県教育委員会　1984。
須田　勉　「房総の古瓦に関する覚書(1)」『古代64号』　1978。
34　野口行雄他『打越岱遺跡』㈶君津郡市文化財センター　1989。
35　須田　勉　「川原井廃寺と古代東海道」『南総郷土文化研究誌』11号　1978。
〃　「房総の古瓦に関する覚書(2)一川原井廃寺一」『古代』第65号　1979。
36　寺門義範他『千葉県萩ノ原遺跡発掘調査報告書』日本文化財研究所　1977。

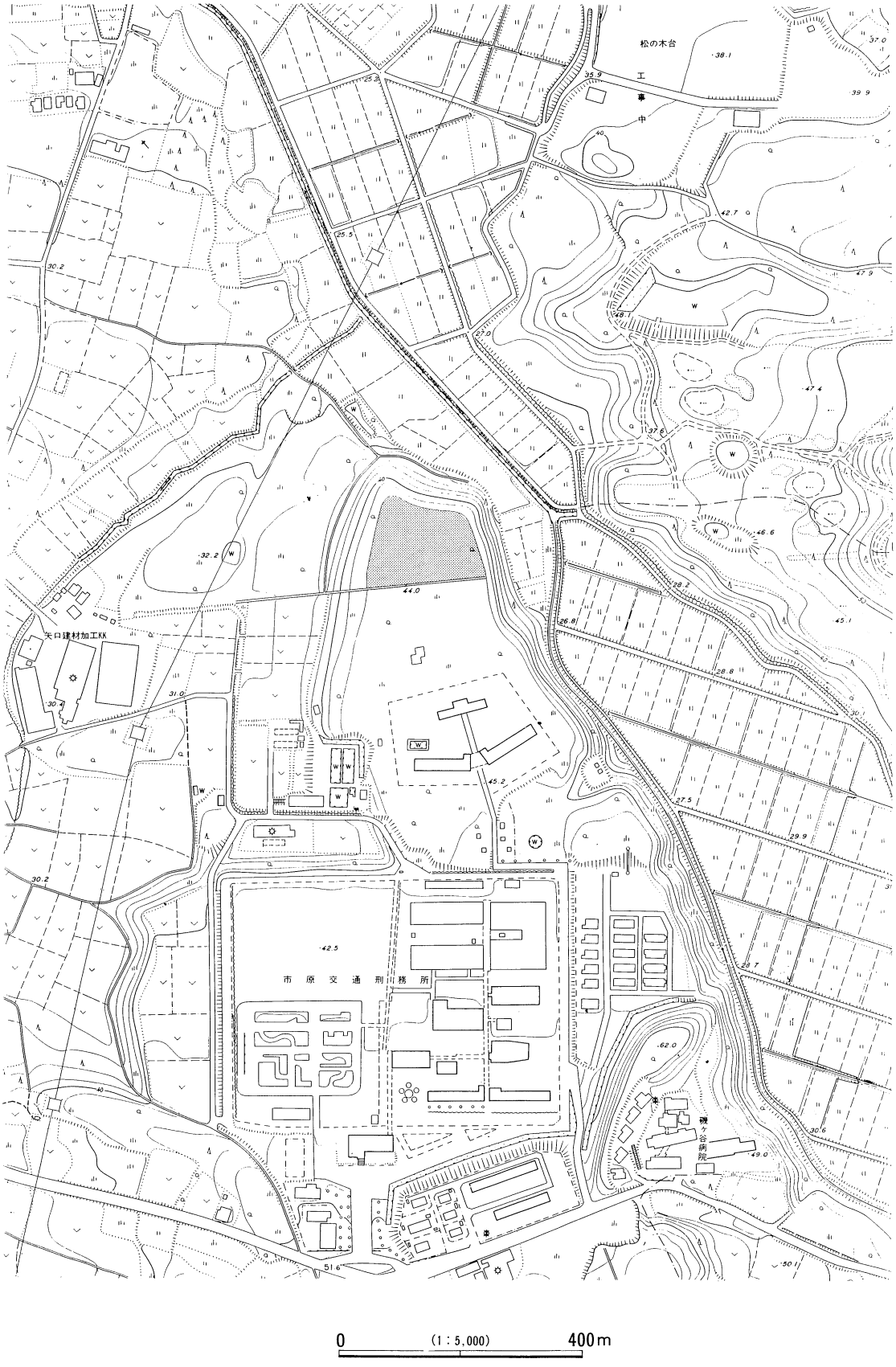
37　木對和紀　「上原台遺跡」『第３回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』㈶市原市文化財センター　1988。
須田　勉他『武市遺跡』武市遺跡発掘調査団　1976
38　「武市遺跡」『千葉県文化財センター年報№13』㈶千葉県文化財センター　1987。
「市原市武市遺跡」『千葉県文化財センター年報№14』㈶千葉県文化財センター　1989。
「市原市武市遺跡」『千葉県遺跡調査研究発表会要旨』千葉県文化財法人連絡会　1988。
39　大村　直　「新堀叶台遺跡」『第５回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』㈶市原市文化財センター　1990。
40　姉沼修平他『土宇遺跡』日本文化財研究所　1979。
41　米田耕之助『山田大宮遺跡』㈶市原市文化財センター　1986。
42　中村恵次　「市原市福増古墳群」『房総古墳論攻』　1978。
田所　真　「福増遺跡」『池ノ谷遺跡・福増遺跡』㈶市原市文化財センター　1985。
43　田所　真　「池ノ谷遺跡」『池ノ谷遺跡・福増遺跡』㈶市原市文化財センター　1985。
44　小林清隆他『門脇遺跡』㈶千葉県文化財センター　1985。
45　須田　勉他『武市遺跡』武市遺跡調査団　1976。

## III. 遺跡の概要

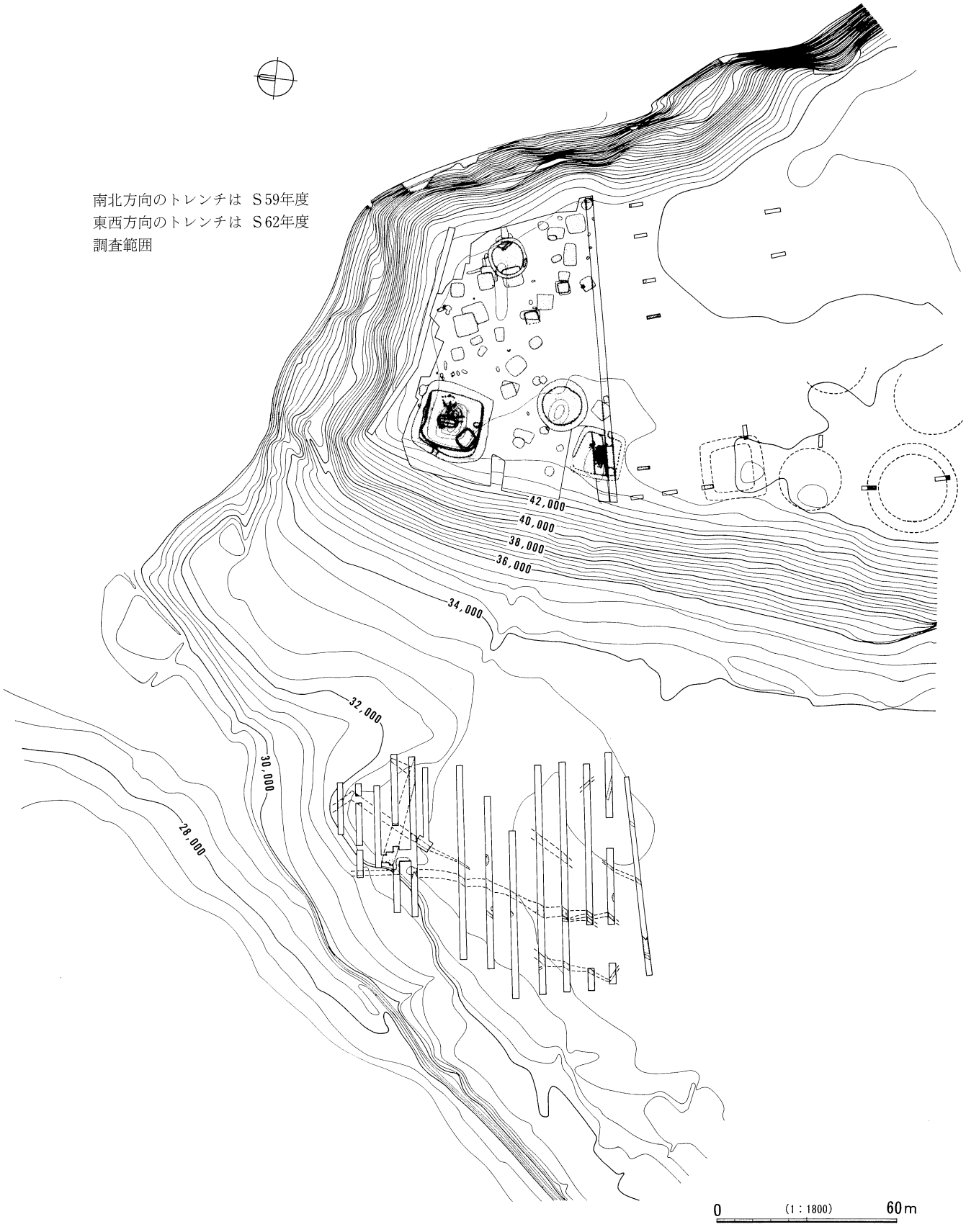
北旭台遺跡の調査は、昭和59年度・62年度と今回の調査を加え、合計３回行なわれている。このうち今回調査区域の南側、市原交通刑務所内に位置する南北方向のトレンチは昭和59年度、今回の調査区域の一部を含む東西方向にのびる長いトレンチが昭和62年度の遺構確認調査時のものであり、遺跡は盛土保存によって保護されている。今回の調査対象地は、舌状台地先端部の3,500㎡の範囲であり、縄文時代～歴史時代に及ぶ以下の多種・多岐の遺構が検出された。

縄文時代　住居跡14、竪穴状遺構１、炉穴５、集石２、落し穴４、土坑24
弥生時代　住居跡６、方形周溝墓２、土坑１
古墳時代　住居跡11、土坑２、方墳２、円墳２
歴史時代　方型区画改葬墓（改葬系区画墓）４
時期不明　土坑11

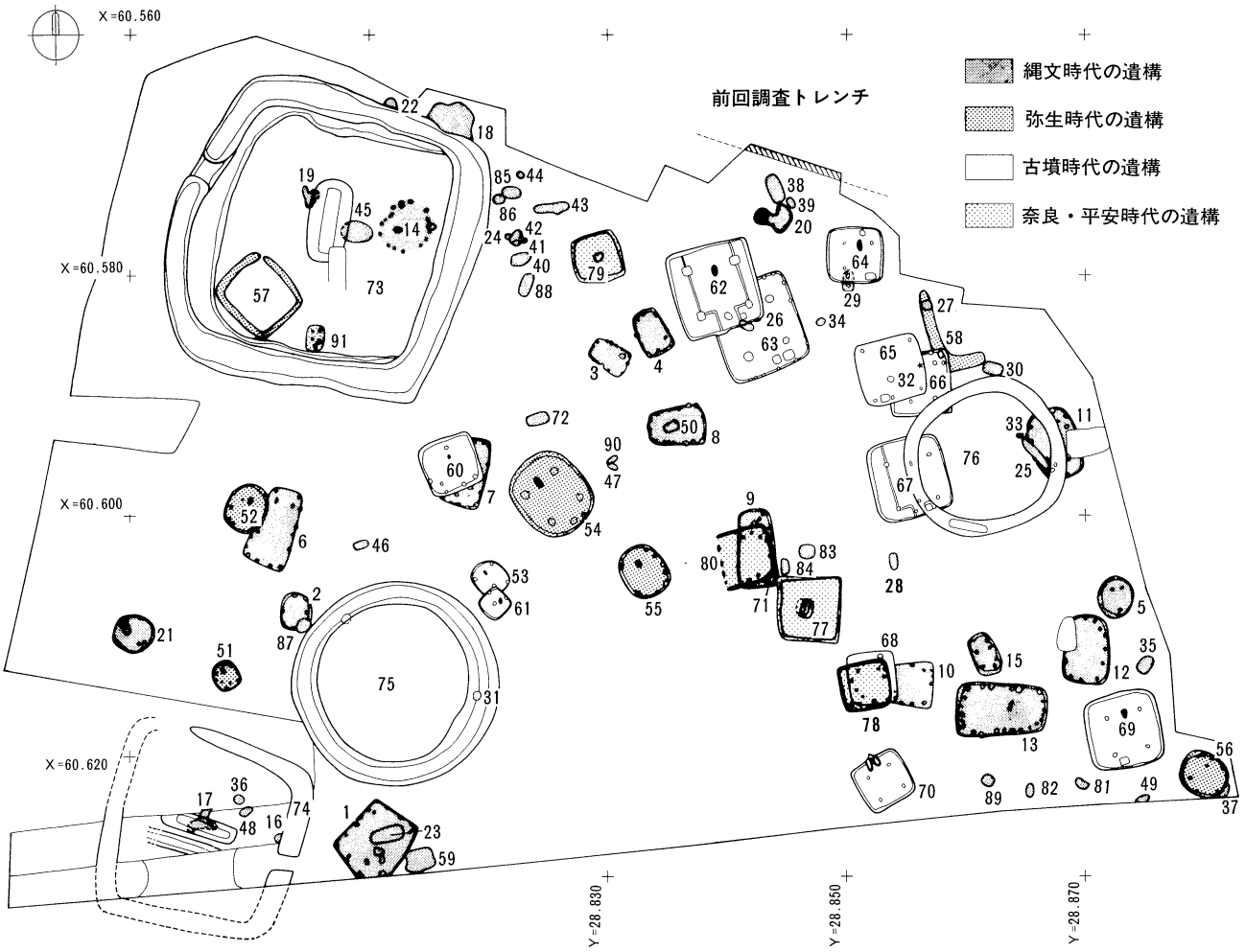
検出された遺物は、整理作業の過程において、総数把握に努めた結果、6,907点の土器片と、4,479点の礫・石器を検出した。土器総数のうち4,580点が縄文土器であり、早期末～前期にかけての遺物が主体を占めている。この他弥生土器は167点、土師器は2,160点検出されている。また礫・石器のうち3,227点が自然石、焼礫は867点であり、主に集石遺構より検出されたものが主体を占めている。この他剝片85点、石器は300点検出されており、石器の大半は磨石、凹石、敲き石等であり、古墳墳丘下の遺物包含層中より大量に検出されたものが主体を占めている。




**第2図**　北旭台遺跡周辺地形図




**第3図**　北旭台遺跡全体図




**第4図**　北旭台遺跡遺構配置図（1：600）

## 第2表　検出遺構一覧表

| 遺構番号 | 調査時遺構番号 | 時期 | 性格 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 7 a | 早期末～前期初頭 | 住居跡 | 62市内遺跡群調査時No. 7 号遺構 |
| 2 | 13 a | 〃 | 〃 | 条痕文系 |
| 3 | 46 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 4 | 29 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 5 | 37 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 6 | 15 | 前期初頭 | 〃 | 早末～前期初頭 |
| 7 | 17 b | 〃 | 〃 | 〃 |
| 8 | 30 a | 〃 | 〃 | 〃 |
| 9 | 32 b | 〃 | 〃 | 〃 |
| 10 | 36 c | 〃 | 〃 | 〃 |
| 11 | 38 f | 〃 | 〃 | 〃 |
| 12 | 41 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 13 | 43 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 14 | 53 | 前期後半 | 〃 | 興津式73号墳の下層より検出 |
| 15 | 63 | 早期末 | 竪穴状遺構 | 条痕文系 |
| 16 | 8 b | 早期末～前期前半 | 炉穴 | |
| 17 | 55 | 早期末～前期前半 | 〃 | |
| 18 | 52 | 前期前半 | 〃 | |
| 19 | 54 | 前期後半 | 〃 | 興津 |
| 20 | 59 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 21 | 10 | 早期末～前期初頭 | 集石 | 条痕文系主体 |
| 22 | 49 | 〃 | 〃 | |
| 23 | 7 b | 縄文時代 | おとし穴 | 1号住居を切る |

| 遺構番号 | 調査時遺構番号 | 時期 | 性格 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 24 | 23 c | 縄文時代 | おとし穴 | 41・42号土坑によって切られる |
| 25 | 38 g | 〃 | 〃 | 11号遺構を切る |
| 26 | 34 c | 〃 | 〃 | 62・63号遺構に切られる |
| 27 | 38 h | 〃 | 土坑 | 58号に切られる |
| 28 | 35 | 〃 | 〃 | |
| 29 | 44 b | 〃 | 〃 | 64号に切られる |
| 30 | 40 | 〃 | 〃 | |
| 31 | 9 c | 〃 | 〃 | 75号に切られる |
| 32 | 67 | 〃 | 〃 | 65・66号に切られる |
| 33 | 65 | 〃 | 〃 | |
| 34 | 66 | 〃 | 〃 | |
| 35 | 62 | 〃 | 〃 | |
| 36 | 56 | 〃 | 〃 | |
| 37 | 1 b | 〃 | 〃 | 56号に切られる |
| 38 | 57 | 〃 | 〃 | |
| 39 | 58 | 〃 | 〃 | |
| 40 | 22 | 〃 | 〃 | |
| 41 | 23 a | 〃 | 〃 | 42号を切る |
| 42 | 23 b | 〃 | 〃 | 粘土ブロック検出 |
| 43 | 24 | 〃 | 〃 | 2基の土坑が重複している |
| 44 | 27 | 〃 | 〃 | |
| 45 | 16 c | 〃 | 〃 | 73号墳の下層より検出 |
| 46 | 47 | 〃 | 〃 | |
| 47 | 48 b | 〃 | 〃 | 92号に切られる |
| 48 | 50 | 〃 | 〃 | 74号墳の下層より検出 |
| 49 | 2 | 〃 | 〃 | 62年2号 |
| 50 | 30 b | 〃 | 〃 | 8号を切る |
| 51 | 11 | 弥生時代 | 住居跡 | |
| 52 | 14 | 〃 | 〃 | 6号を切る |
| 53 | 18 b | 〃 | 〃 | 61号に切られる |
| 54 | 19 | 〃 | 〃 | 板状柱痕跡検出 |
| 55 | 31 | 〃 | 〃 | |
| 56 | 1 a | 〃 | 〃 | |
| 56 | 16 b | 〃 | 方形周溝墓 | 73号墳丘下 |
| 58 | 38 e | 〃 | 〃 | 66号に切られる |
| 59 | 6 | 〃 | 土坑墳？ | |
| 60 | 17 a | 古墳時代 | 住居跡 | 7号を切る |
| 61 | 18 a | 〃 | 〃 | 53号を切る |
| 62 | 34 a | 〃 | 〃 | 63号を切る、ベッド状遺構 |
| 63 | 34 b | 〃 | 〃 | 覆土中に多量のロームを検出、ベッド状遺構 |
| 64 | 44 a | 〃 | 〃 | |
| 65 | 38 d | 〃 | 〃 | 有鉤銅釧出土、66号を切る |
| 66 | 38 c | 〃 | 〃 | 65号によって切られる |
| 67 | 38 b | 〃 | 〃 | ミニチュア土器出土、ベッド状遺構 |
| 68 | 36 b | 〃 | 〃 | |
| 69 | 42 | 〃 | 〃 | 火災住居 |
| 70 | 5 | 〃 | 〃 | 古墳時代後期62年5号 |
| 71 | 32 c | 〃 | 土坑 | |
| 72 | 20 | 〃 | 〃 | |
| 73 | 16 a | 〃 | 方墳 | |
| 74 | 8 a | 〃 | 〃 | 鉄鉾、刀子検出 |
| 75 | 9 a | 〃 | 円墳 | |
| 76 | 38 a | 〃 | 〃 | 11、66、67号を切る |
| 77 | 33 | 奈良・平安時代 | 方形区画改葬墓 | 主体部あり |
| 78 | 36 a | 〃 | 〃 | |
| 79 | 28 | 〃 | 〃 | 主体部あり |
| 80 | 32 a | 〃 | 〃 | |
| 81 | 3 | 時期不明 | 土坑 | |
| 82 | 4 | 〃 | 〃 | |
| 83 | 60 | 〃 | 〃 | 炭化物含む |
| 84 | 61 | 〃 | 〃 | 炭化物含む |
| 85 | 25 | 〃 | 〃 | |
| 86 | 26 | 〃 | 〃 | |
| 87 | 13 b | 〃 | 〃 | |
| 88 | 21 | 〃 | 〃 | |
| 89 | 64 | 〃 | 〃 | |
| 90 | 48 a | 〃 | 〃 | |
| 91 | 51 | 〃 | 〃 | |
| 欠番 | 45 | | | 調査の結果、遺構ではなく新番号を付さない |

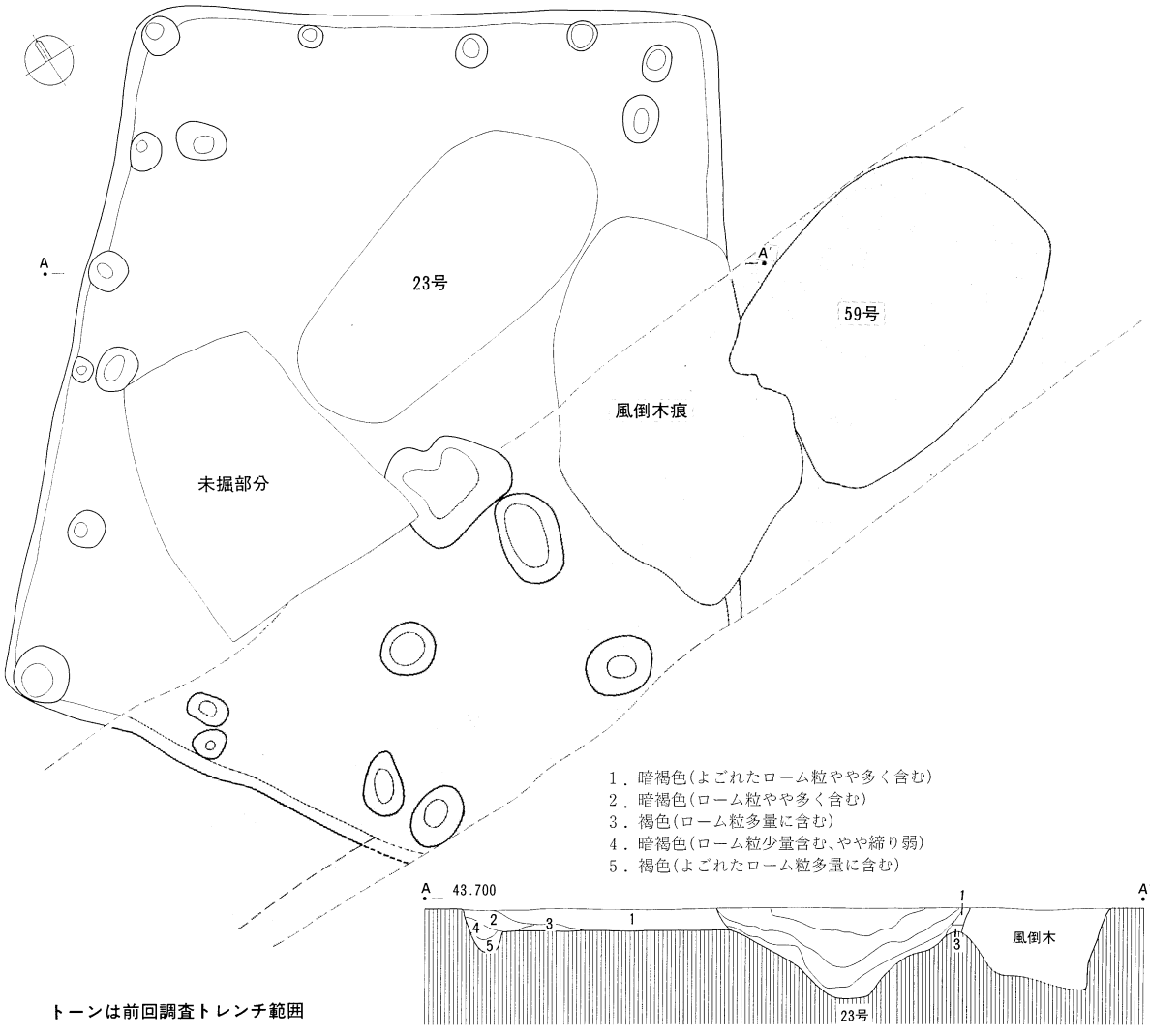
# II. 遺 構 と 遺 物

## 1. 縄 文 時 代

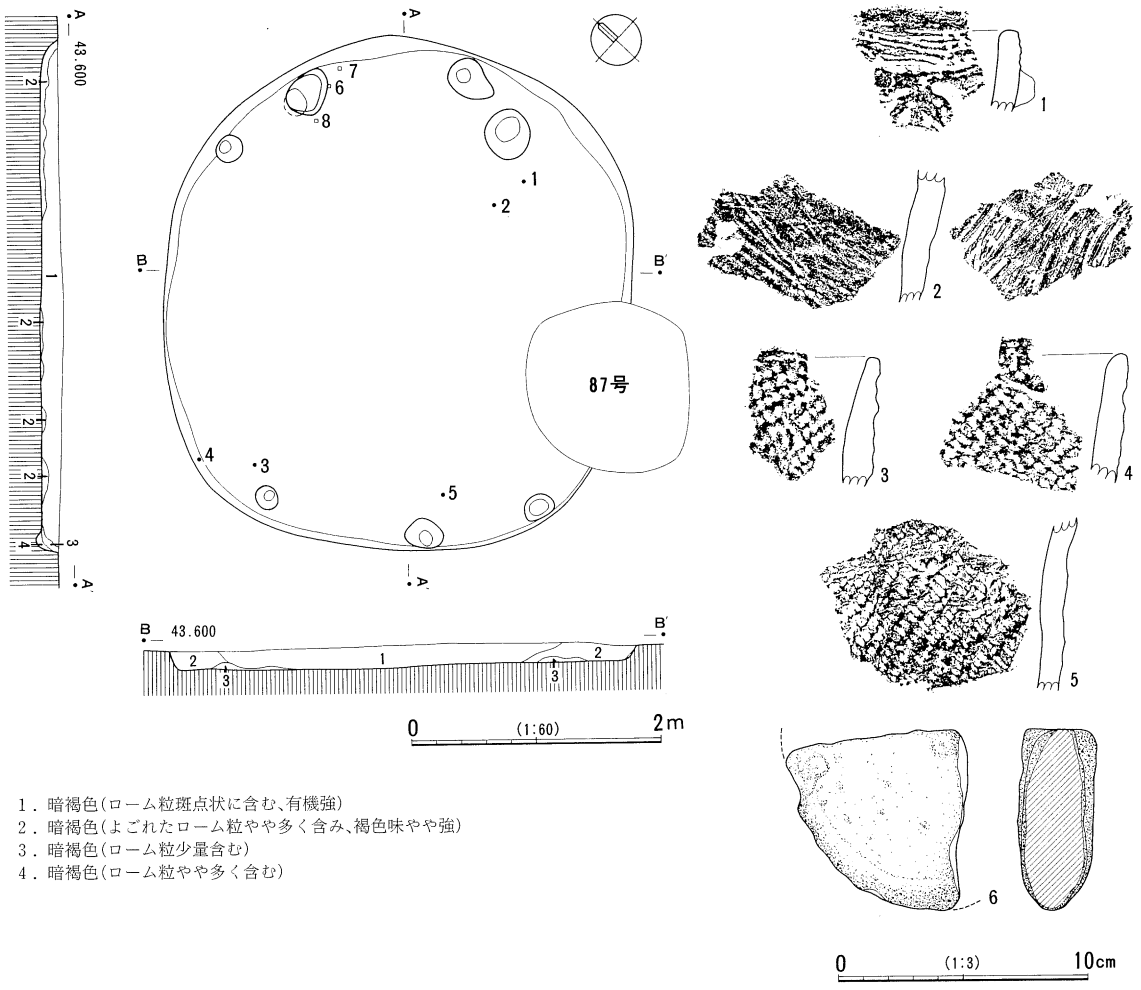
### 1 住 居 跡

**1号遺構**（第5図、図版3）

62年度にその一部を調査した遺構である。一部が調査区域外に存在するものの、形状は不整な長台形を呈するものと考えられる。長軸6.9m、短軸5.4m前後を計るものと推定され、長軸方位はN－33°－Eを示す。未掘部分や他の遺構等により削平を受けている箇所が多く、全体的な遺存状況は不良である。確認面からの掘り込みは20cm前後を測り、床面はソフトローム層中に存在するものの全体的に軟弱である。Pitは前回調査時のものも含めて合計21本検出され、壁際に存在するものが多く、床面からの深さはそれぞれ20cm前後を測る。壁は急激に立ち上っており、覆土は自然堆積の状況を示す。（前回調査時に上部にIIb層が覆っていることが確認されている。）




**第5図** 1号遺構実測図



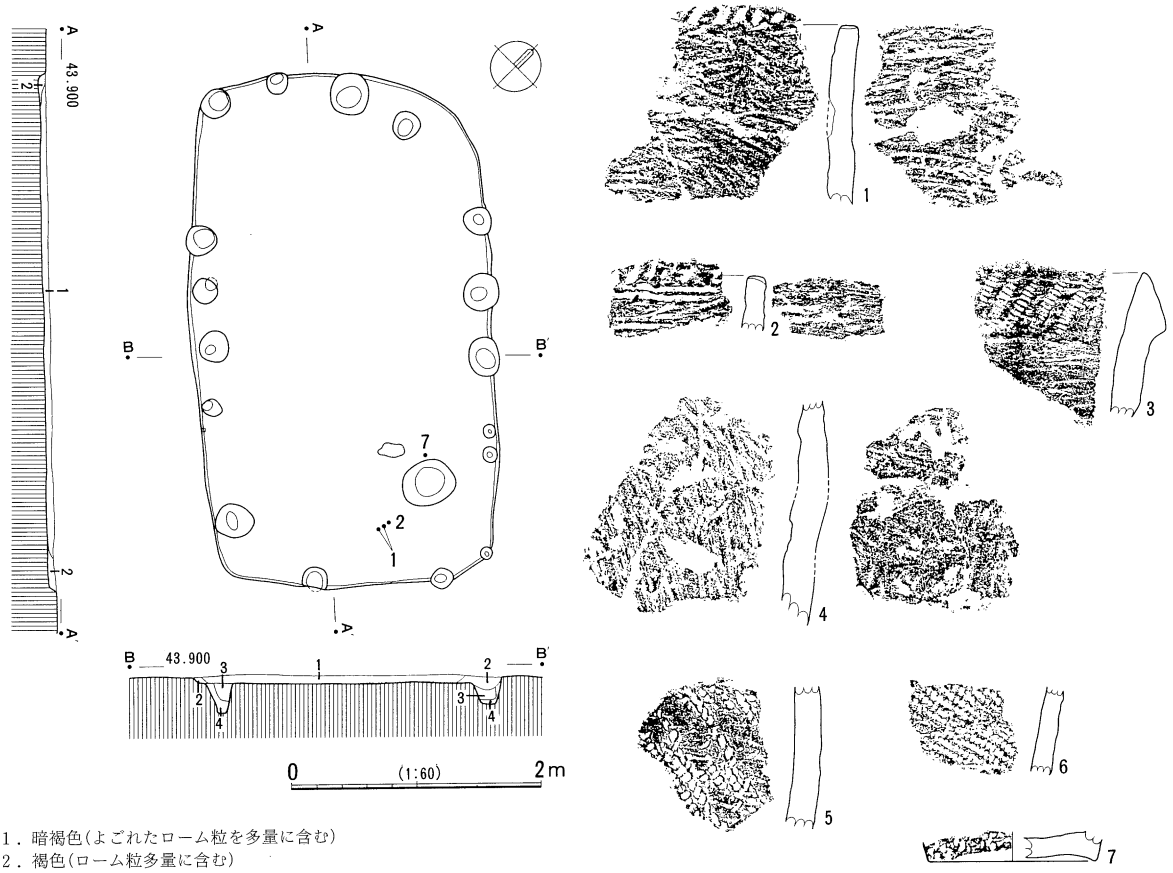

**第6図**　2号遺構実測図，出土遺物実測図

**遺物**　前回調査時に比べ細片が多く、一括して取り上げたものビニール袋に入れておいたが、カラスが持ち去ってしまい、今回図示に至るものはない。前回資料を参照してほしい。

**2号遺構**（第6図、図版2）

平面形は円形状を呈する。長軸4.1m、短軸3.7m前後を測り、長軸方位はN－48°－Eを示す。確認面からの掘り込みは20cm前後を測り、床面はソフトローム層中に存在するものの全体的に軟弱であり炉跡及び焼土は認められない。Pitは7本検出され、いずれも壁際に検出されている。深さは40～20cm前後を測り東側のものが深い。壁は急激に立ち上り、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　総数18点の遺物が検出されている。内訳は条痕文系土器片4、前期前半の土器片7、無文土器片2点と、石皿1、凹石2、焼石2、自然石1点である。このうち8点を図示した。(凹石2点は遺物包含層中遺物にまぎれ込んでしまった7－No.12と8－No.14である）これらの遺物のうち石器は北側Pit、周辺の床面上に集中して分布する傾向が認められたが、土器片に関しては床面より5～10cm程度浮いた状況で散布しており、本遺構に直接伴うかどうかは微妙であるものの、早期末～前期前半期に比定される遺物が大部分を占めている状況が窺われる。




1．暗褐色(よごれたローム粒を多量に含む)
2．褐色(ローム粒多量に含む)
3．暗褐色(よごれたローム粒少量含む)
4．褐色(よごれたローム粒多量に含み、締りやや弱)

**第7図**　3号遺構実測図，出土遺物実測図

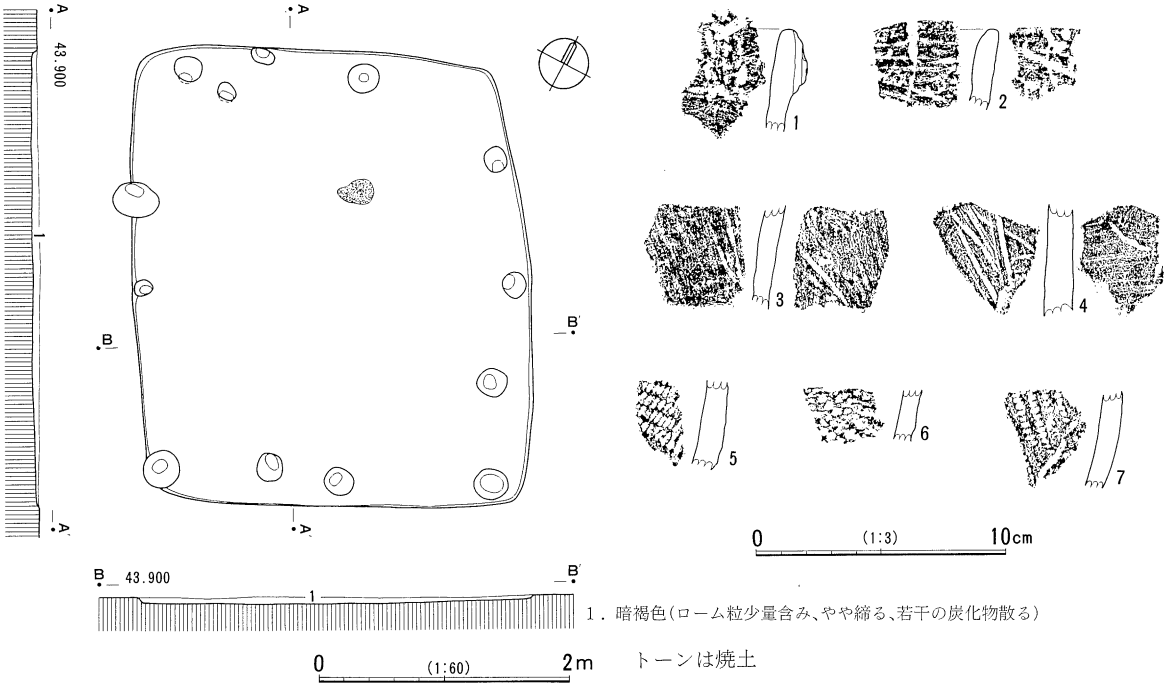
**3号遺構**（第7図、図版3）

平面形は不整な長台形を呈している。長軸4.1m、短軸2.4m前後を測り、長軸方位はN－47°－Wを示す。確認面からの掘り込みは6cm前後と非常に浅く、遺存状況は不良である。床面はソフトローム層中に存在し、全体的に軟弱であり、炉及び焼土の分布は認められない。Pitは合計18本検出され、それぞれ20～40cm前後の深さを測り、壁際に多く検出されている。

**遺物**　総数18点の遺物が検出されている。内訳は条痕文系土器片8、前期前半土器片5、細片1点と自然石3、焼礫1点である。このうち7点を図示した。1・2・4は早期条痕文系の土器である。いずれも内外面に条痕が施され、胎土には繊維を含んでいる。また口縁部には連続刺突文が施されている。3・5～7は、外面に縄文が施され、胎土には繊維を含んでいる。前期前半の土器群である。この他に平面図中に示した漬物石状の自然石がある。これらの遺物は床面直上及び密着の状況で検出されているが、条痕文系土器の方が床密着の状況で検出されている割合が多い。

**4号遺構**（第8図、図版3）

平面形は南北方向にやや長い不整な方形を呈している。長軸3.6m、短軸3.18m前後を測り、長軸方位はN－29.5－W°を示す。確認面からの掘り込みは6cm前後と非常に浅く、遺存状況は不良である。床面はソフトローム層中に存在し、全体的に軟弱である。この床面中央部よりやや北側に炉址と考え




**第8図**　4号遺構実測図,出土遺物実測図

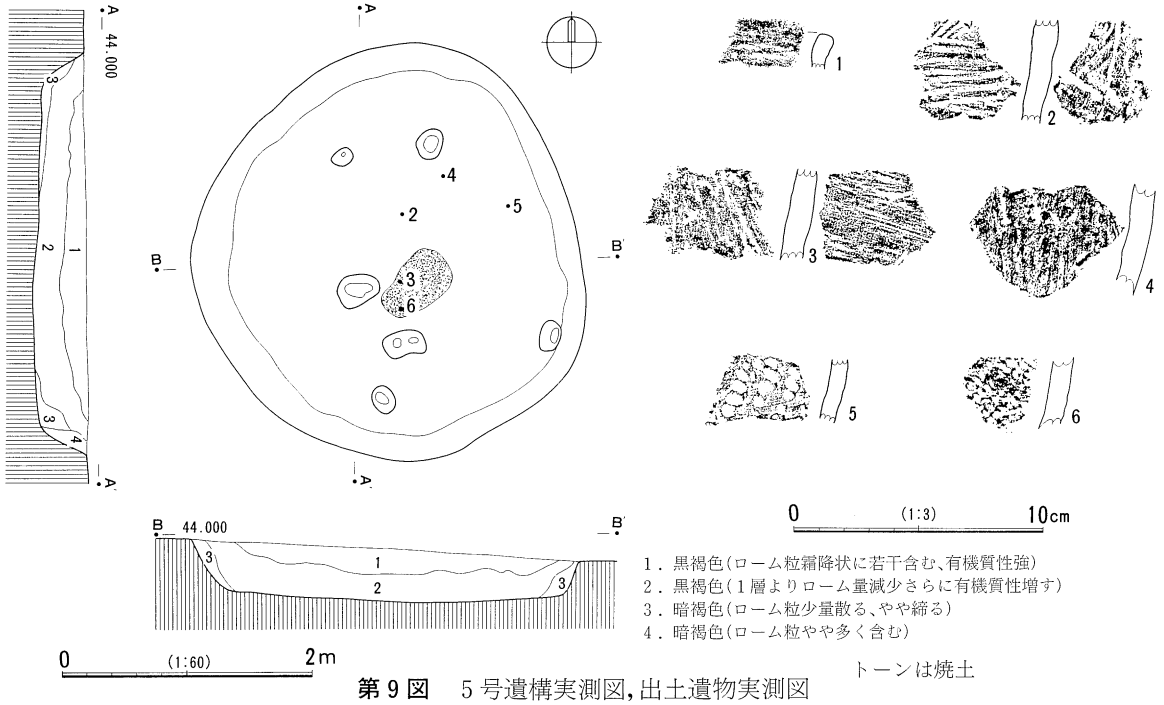
られる焼土面を検出しているが、よく焼けてはいない。Pitは合計13本検出され、壁に接するものが多い。また壁に接するものの方がいく分内側に入り込むものより深く掘り込まれている傾向が認められた。深さは壁際に接するものが70～45cm、やや内側に入り込むものが35～25cm前後を測る。

**遺物**　総数29点の遺物が検出された。内訳は条痕文系土器片14、前期前半土器片3、時期不明細片3、土師器片1点と磨石1、剝片2、焼礫2、自然石3点である。このうち7点を図示した。1～4は早期条痕文系の土器群であり、内外面に条痕が施され、胎土には繊維を含んでいる。5～7は前期前半期に比定される土器群であり、外面に縄文が施され、胎土には繊維を含んでいる。また磨石は時間との関係で実測を断念せざるを得なかった。これらの遺物は床面密着の状況で検出されているものであり、条痕文系土器が主体をなしている。

**5号遺構**（第9図、図版3）

平面形は南北方向にやや長い不整な円形を呈している。長軸3.24m、短軸3.15mを測り、長軸方位はN－10°－Eを示す。立地が遺跡東側の傾斜変換面にあるため、確認面からの掘り込みは一定ではなく、西側42cm、東側30cm前後を測る。床面はハードローム層中に存在し、下端周辺を除けば全体的に引き締まっている。床面はほぼ平坦であり、中央やや南側寄りに炉址と思われる焼土の堆積が厚さ2～3cmにわたって認められたが、明瞭な火床面を伴ってはおらず、床面が少々焼けている程度である。Pitは合計6本検出され、深さは25～30cm前後を測る。壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　総数15点の遺物が検出された。内訳は、条痕文系土器片6、前期前半土器片4、細片2点及び、焼礫1、自然礫1点である。このうち6点を図示した。1～4は早期条痕文系の土器片であり、




**第9図**　5号遺構実測図,出土遺物実測図

5・6は前期前半土器群に比定される。これらの遺物のうち4は床直上で、5は床より5cm程浮いた状況で検出された以外は、いずれも覆土上層中から検出されたものであり、本遺構に直接伴うものとは考えられない。

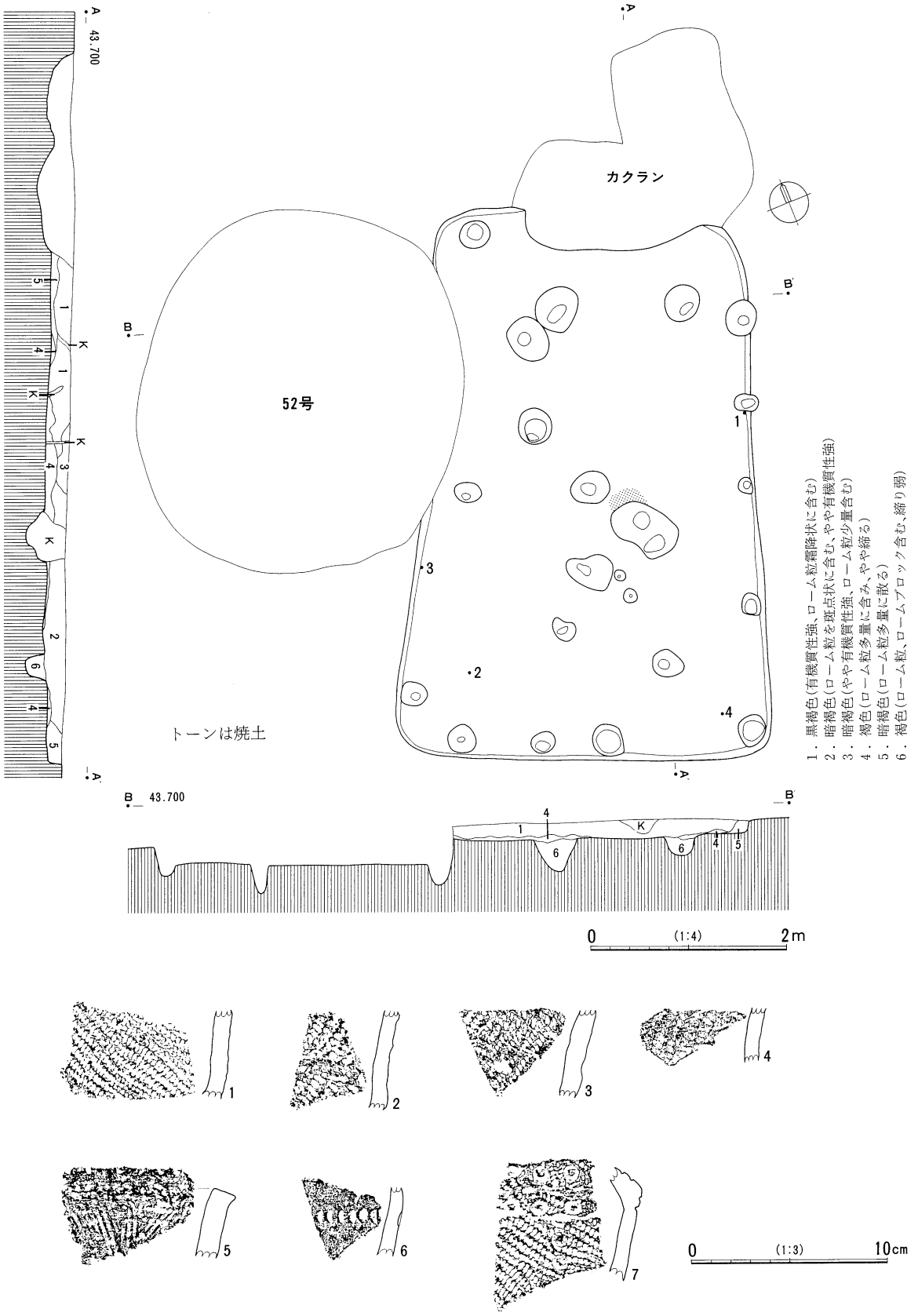
**6号遺構**（第10図、図版3）

平面形は南北に長い長台形を呈している。北側は撹乱によって、西側は52号遺構によって削平されており、長軸・短軸は推定の枠を出ないもののそれぞれ9.6m、3.4m前後を測り、長軸方位はH－23°－Wを示すものと考えられる。確認面からの掘り込みは24cm～18cm前後を測り、床面はソフトローム層中に掘り込まれるものの、全体的に軟弱でありやや平坦さを欠く。中央やや東よりに焼土がわずかに散布するが明瞭な火床面を有していない。またこの焼土は撹乱によって一部削平されてしまっている。Pitはこの撹乱を除いて合計21本検出されており、深さは、それぞれ48～25cm前後を測り、壁際に多く検出されている。また径の大きいものほど深く、小さなものほど浅い傾向が認められた。残存した壁は明瞭に検出され、立ち上りは急激であり、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　総数21点の遺物が検出された。内訳は条痕文系土器片4、前期前半土器片8、阿玉台式土器1、諸磯系土器1点及び自然礫4、焼礫3点である。これらの遺物のうち7点を図示した。1～4は胎土に繊維を含み床面上から検出したものであり、直接本遺構に伴うものと考えられる。残る3点は、52号遺構壁際覆土上層中からの検出であり、6は雲母を含み阿玉台式に、7は諸磯系の土器と考えられることから、直接本遺構に伴うものではないと考えられる。

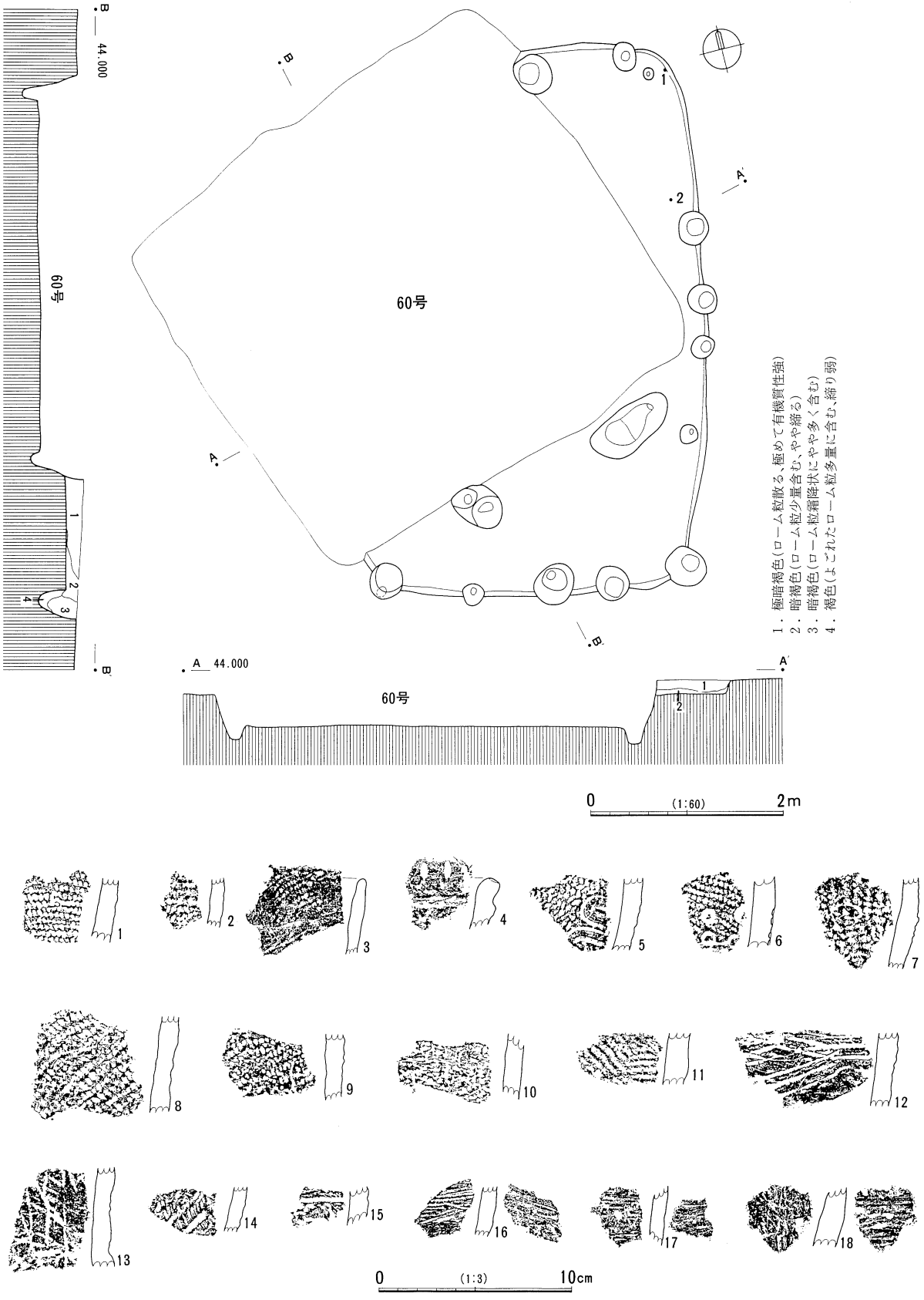
**7号遺構**（第11図、図版3）

平面形は南北に長い長台形を呈するものと考えられる。遺構の大部分は60号遺構によってすでに削平されており、遺存状況は不良である。南・東側に残存した壁より、長軸（5.6m）、短軸（3.2m）前



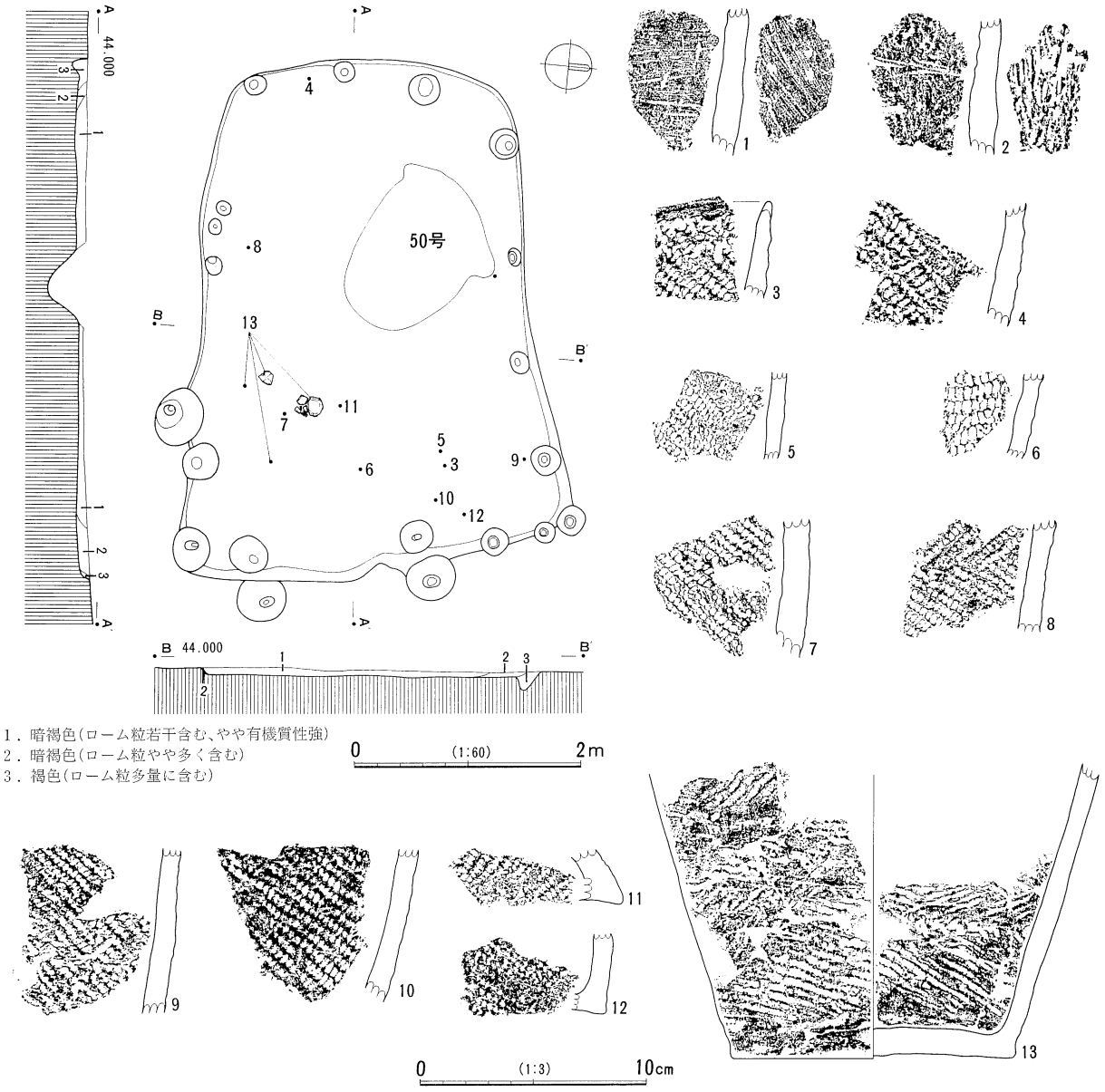

**第10図**　6号遺構実測図,出土遺物実測図

後を測るものと推定され、長軸方位は、N－17°－Eを示すものと考えられる。確認面からの掘り込みは16cm前後を測り、床面はソフトローム中に存在するものの全体的に軟弱である。炉及び焼土の検出




**第11図**　7号遺構実測図，出土遺物実測図

は認められず、壁際を主に合計14本のPitが検出された。深さは48～15cmを測り、径の大きいものほど深く掘り込まれる傾向が認められるものの、壁際に検出Pitの大部分は、深さ25～35cm前後を呈してい



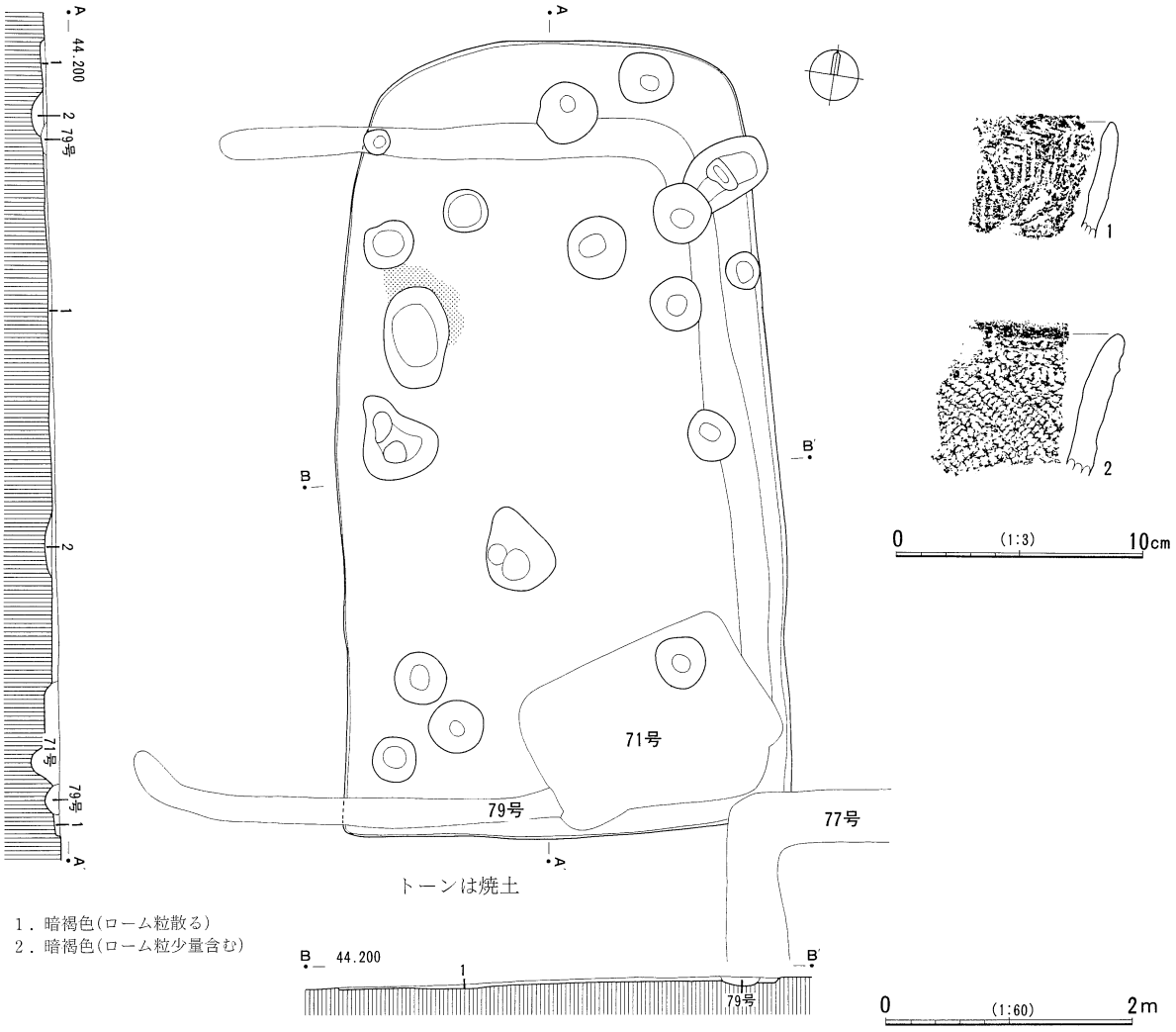

**第12図**　8号遺構実測図,出土遺物実測図

る。残存した部分の壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　遺構内より検出した遺物は5点であり、前期前半土器片3点と自然礫2点である。このうち2点と、(第11図1・2)60号住居跡検出縄文土器のうち7号遺構壁際付近より検出された遺物(3～18)を参考までに図示した。また1は床直上での検出であるが、2は床面より5cm程浮いた状況で検出されている。また本跡もカラスの襲撃を受け、土柱及び袋づめにした遺物の大半(20数点)を損失したことを申し加えておく。

**8号遺構**(第12図、図版3・20)

平面形は東西に長い長台形を呈している。長軸4.44m、短軸2.85m前後を測り、短軸方位はN－5°－Wを示す。確認面からの掘り込みは12cm前後を測り、ソフトローム層中に床面が存在する。遺構内に存在する50号遺構に床面に一部を切られており遺存状況はいささか不良である。遺物がやや多く散布



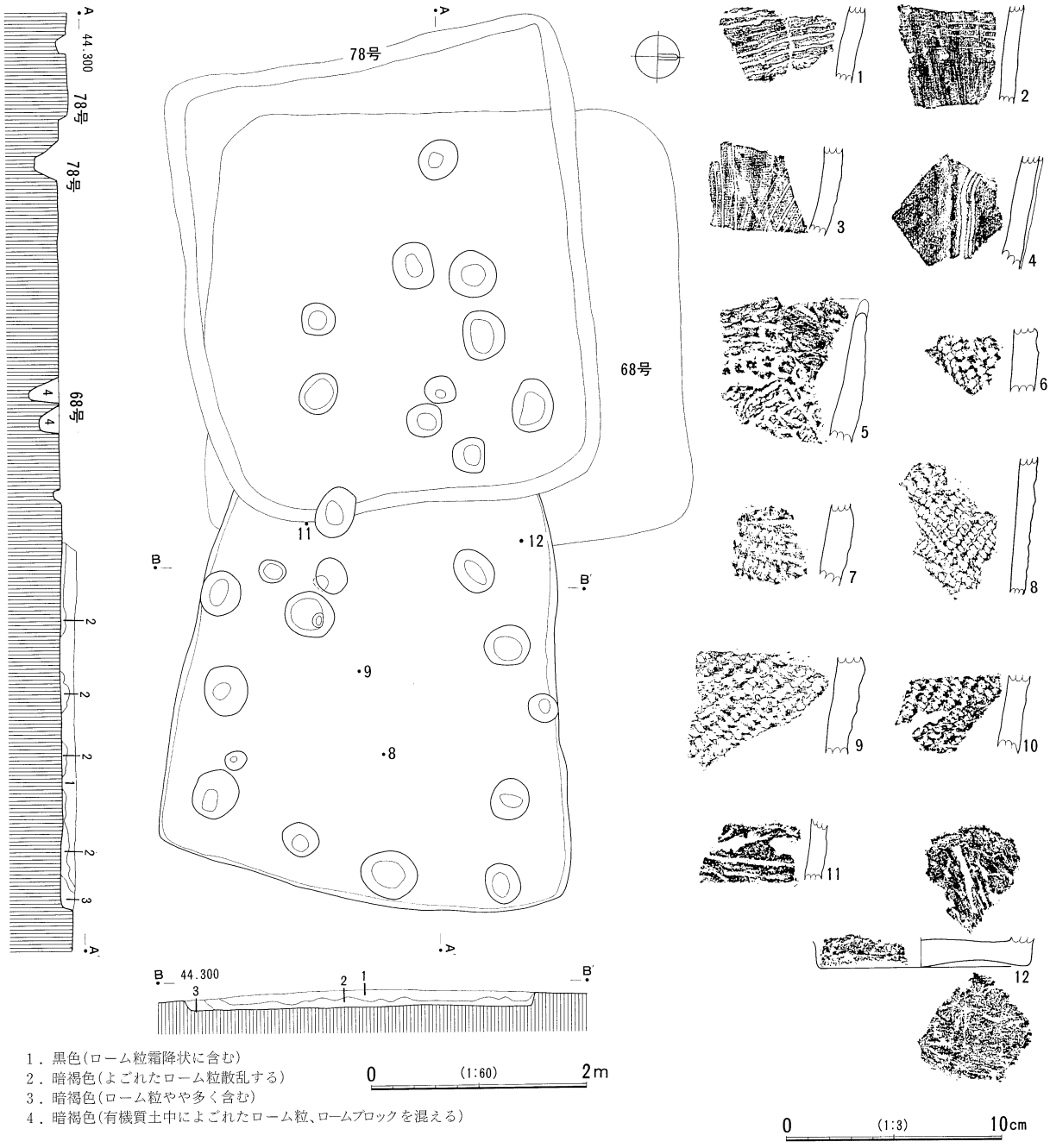

**第13図**　9号遺構実測図,出土遺物実測図

した東側床面は、やや硬化している状況が観察されるものの炉址及び焼土の検出を認めることができなかった。Pit は壁際に接して合計20本検出されており、深さは22～54cm前後を測る。径が大きく、また壁に接するものが50cm前後の深さを呈するのに対して、径が小さく、壁より離れるものが25cm前後の深さを測る傾向が認められた。

**遺物**　合計52点の遺物が検出された。内訳は条痕文系土器片10、前期前半土器片28、不明４点と自然石７、焼礫３点である。これらの遺物のうち13点を図示した。また検出されている遺物のほとんどが床面密着の状況で検出されており、中でも前期前半期に比定される個体数が多いことから、当期に比定される遺構と考えられる。

**９号遺構**（第13図、図版３）

平面形は南北に長い長台形を呈する。長軸7.44m、短軸3.48m前後を測り、長軸方位はＮ－10°－Ｗを示す。確認面からの掘り込みは３～５cm前後を測り、さらに71、77、79号遺構に各所を切られており、遺存状況は極めて悪い。床面はほぼ平坦であり、部分的ではあるが硬く引き締まった面も検出されている。中央やや北西よりに厚さ２～３cm程の焼土が存在し、床面まで焼けていた。Pit は合計17本



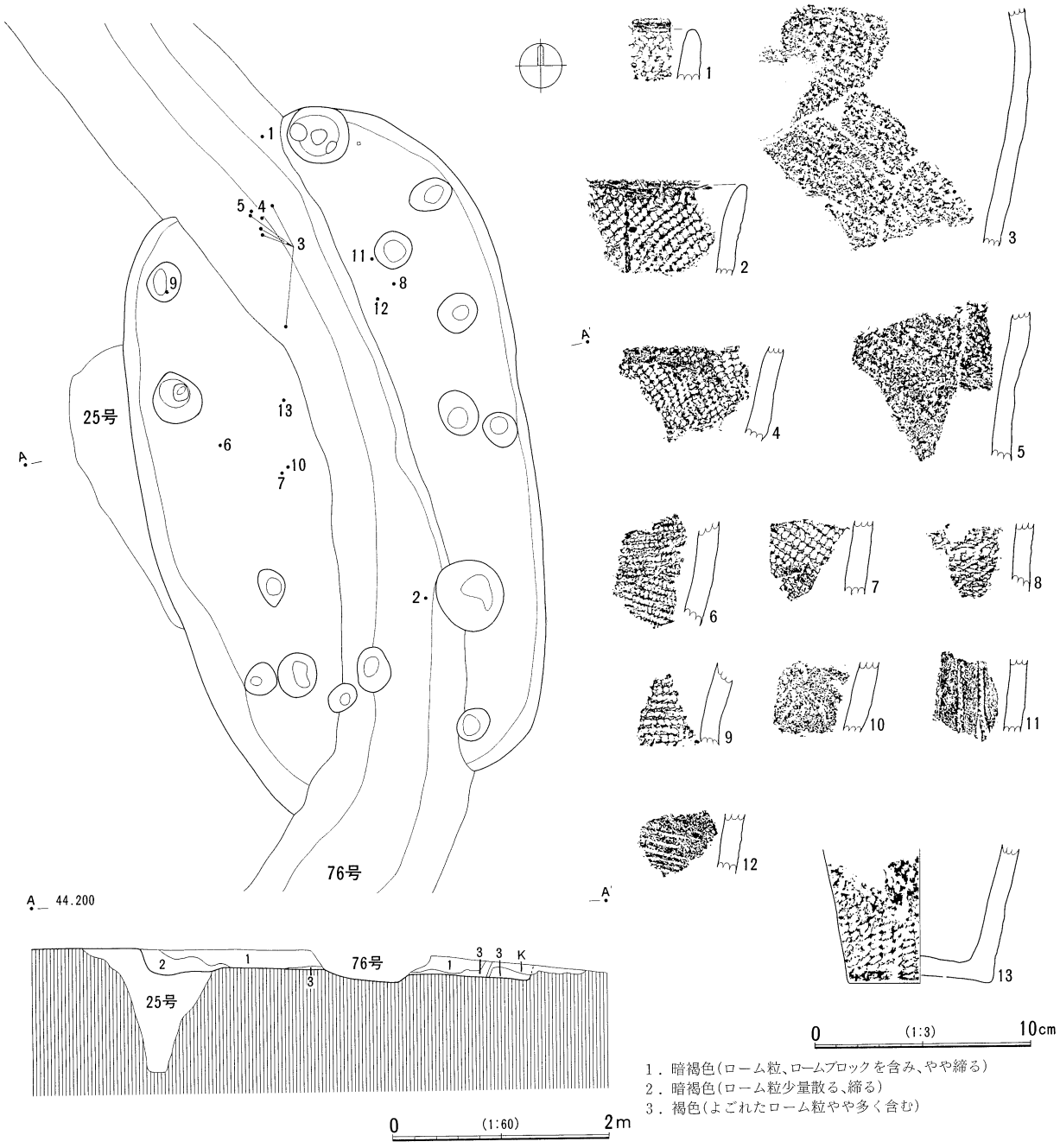

**第14図**　10号遺構実測図，出土遺物実測図

検出され、深さはそれぞれ54cm～22cm前後を測り、径の小さいものほど浅い傾向が認められた。

**遺物**　覆土がほとんど存在しなかったので検出された遺物も少なく、総数５点の遺物がすべて床密着の状況で検出されている。内訳は条痕文系土器片１、前期前半土器片１、時期不明２、自然石１点である。このうち２点を図示した。１は条痕文系の土器である。裏面は器面剝離が激しくあえて拓本を図示しない。２は、胎土に繊維を含むことから、前期前半の土器に比定される。

**10号遺構**（第14図、図版４）

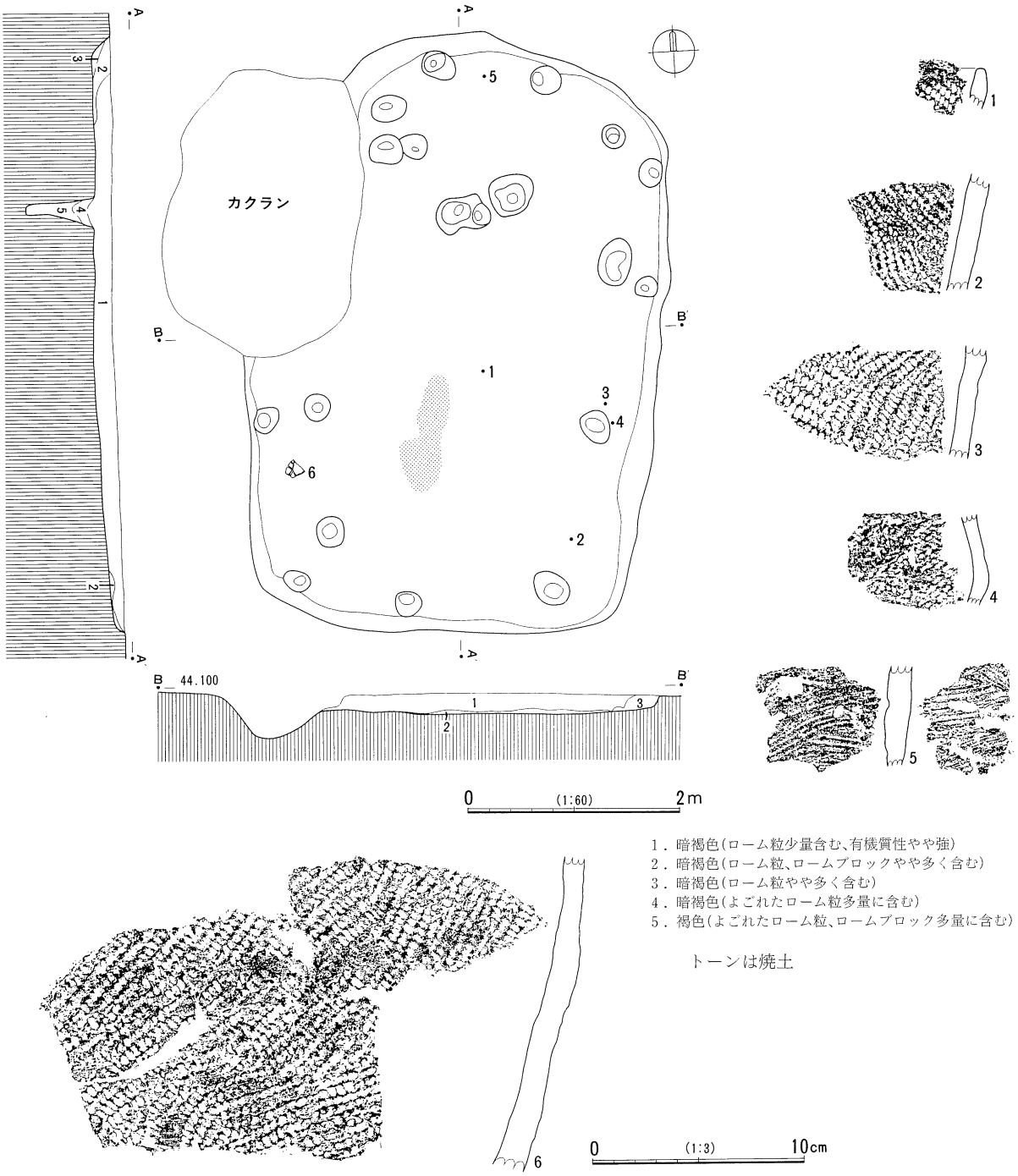
68号遺構及び78号遺構によって西側のほとんどを削平されており、詳細は不明ながら、東西方向に長い長台形を呈するものと考えられる。確認面よりの掘り込みの深さは18cm前後を測り、床面はソフ




**第15図**　11号遺構実測図及び出土遺物実測図

トローム層中に存在するものの全体的に軟弱であり、焼土、炉址等は検出されない。Pit は合計25本検出されたが、本遺跡の他例より壁際に検出される Pit が多いことから、最も西側に位置する１本を除くことによって遺構の推定ラインが見えてこよう。深さは20～50cm前後を測り、このうち35cm前後のものが12本と最も多く検出されている。

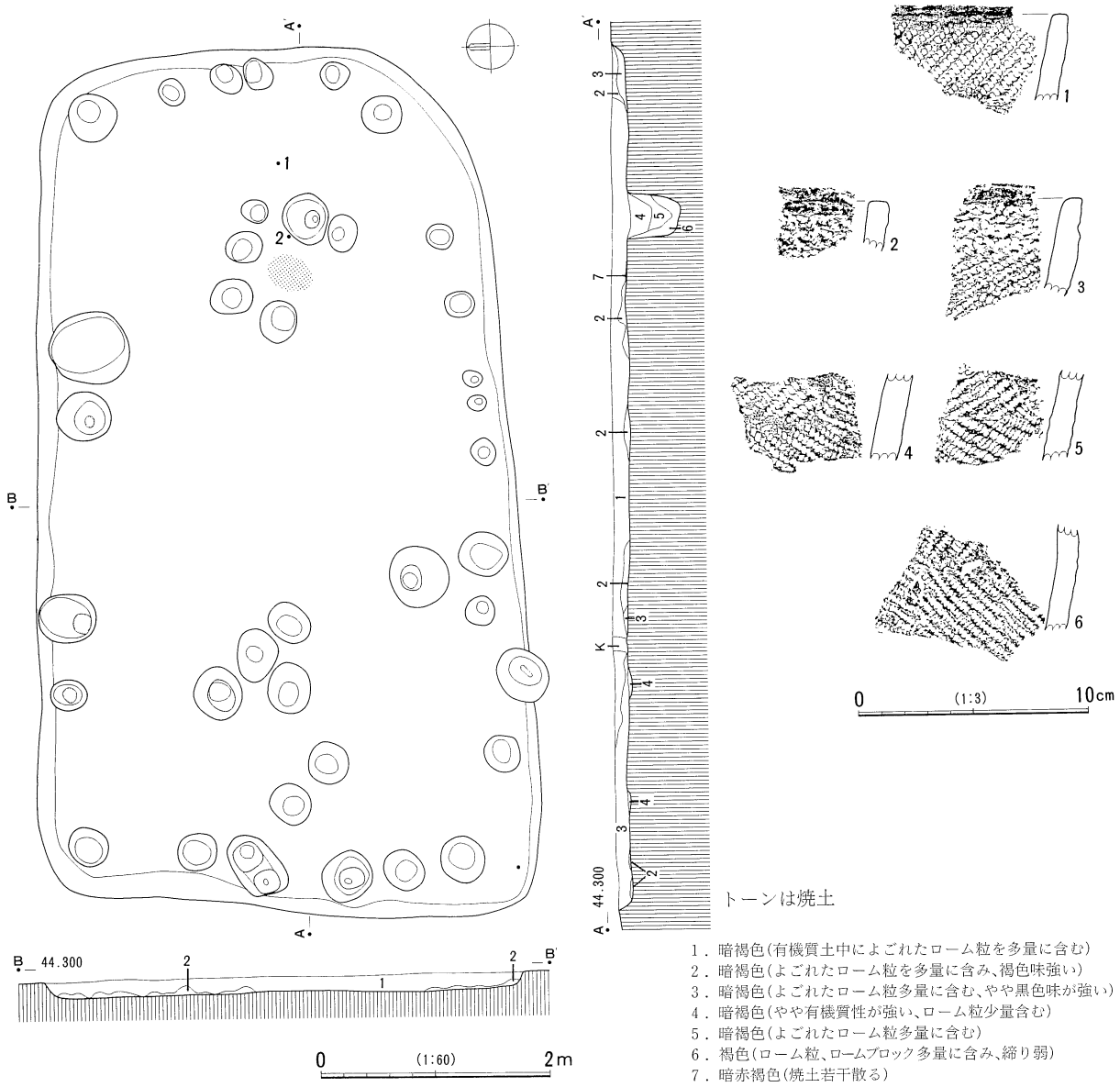
**遺物**　壁の残存した東側部分において、合計20点の遺物が検出された。内訳は土器片13点と自然石７点である。このうち12点を図示する。８～10はいずれも床面よりやや浮いた状況で検出された以外はすべて覆土土中に散在的に検出されたものであり、本遺構に直接伴うものとの断言はさけたい。




**第16図**　12号遺構実測図,出土遺物実測図

**11号遺構**（第15図、図版４・13）

中央部を76号遺構に分断され、西側の覆土上層部の一部を重機により削平されており、遺存状況はいささか不良である。平面形は長楕円を呈するものと考えられる。長軸7.1m、短軸3.6m前後を測るものと推定され、長軸方位はN—10°—Wを示す。傾斜変換面に位置する為、確認面からの掘り込みは一定ではないがソフトローム中に掘り込まれている。床面はほぼ平坦であるものの全体的に軟弱であり、焼土及び炉址は認められない。Pit は15本検出され、深さは75～25cm前後を測り、径の大きいものほど深い傾向が認められた。



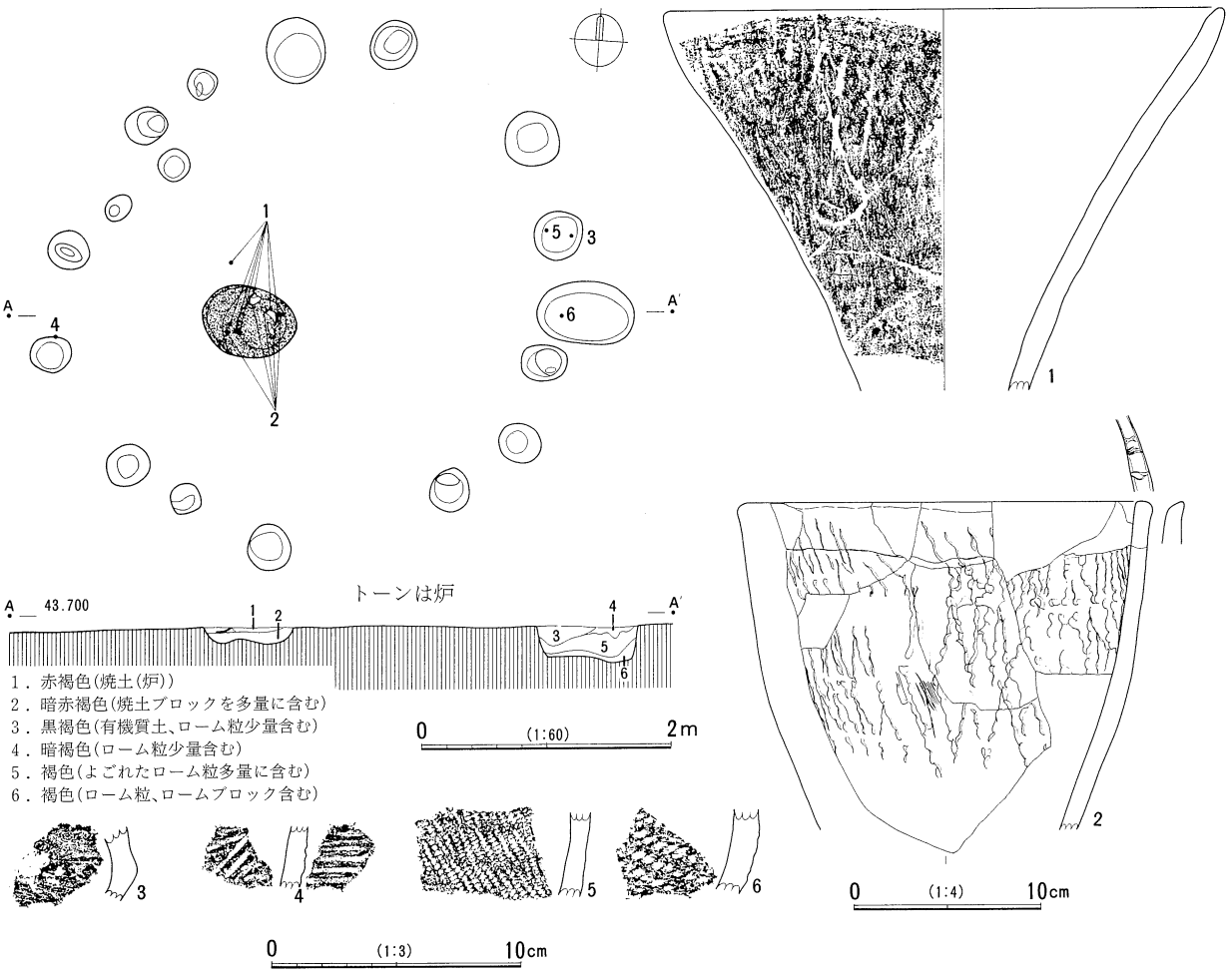

**第17図**　13号遺構実測図,出土遺物実測図

**遺物**　遺構内より総数33点の遺物が検出された。大部分が前期前半期に比定される土器片であり、この他に4点の自然礫を検出している。また2～5は、76号周溝底及び側面に密着の状況で検出されており、直接本遺構に伴うものではないが、床面とのレベルが近似しており、あるいは、76号周溝壁崩落の際に覆土中から移動している可能性も考えられることから、参考までに図示しておく。

**12号遺構**（第16図、図版3）

東側の一部をハードローム層に達する重機の削平を受けるものの、平面形は南北に長い長楕円を呈するものと考えられる。確認面よりの掘り込みは20cm前後を測り、ソフトローム層中に床面が存在する。床面は全体的に軟弱であり、中央南側に厚さ1cm前後の焼土の堆積が認められた。Pitは18本検出され、中央北側に位置する2本が床面より60～70cm前後と深く、他はいずれも30cm前後を測り均一的である。

**遺物**　総数26点の遺物が検出された。内訳は、条痕文系土器片8、前期前半土器片11点、自然礫6、焼礫1点である。このうち6点を図示した。これらの遺物のうち1・2が床直上において検出された




**第18図**　14号遺構実測図，出土遺物実測図

以外は、すべて床面より10～20cm程度浮いた状況での検出である。

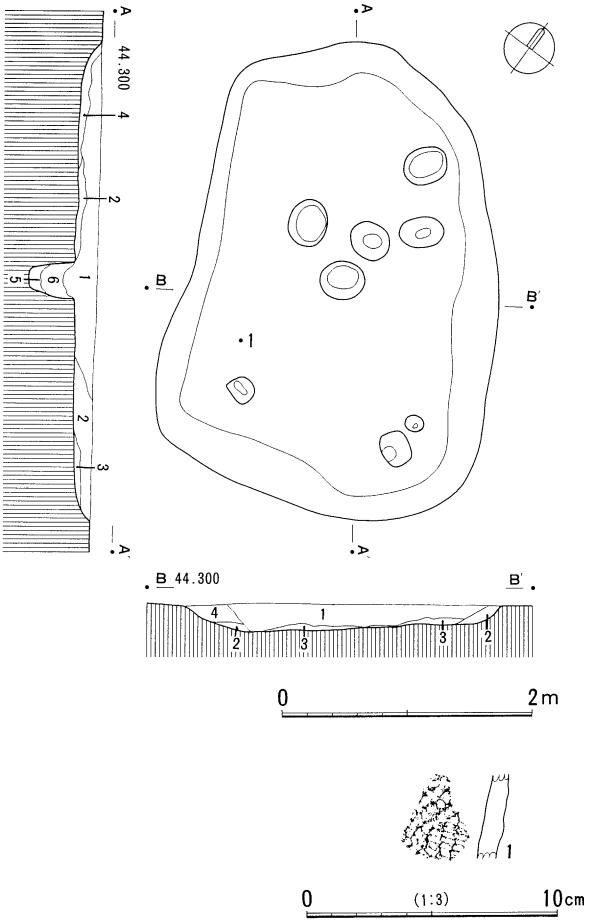
**13号遺構**（第17図、図版４・20）

平面形は東西方向に長い長台形を呈している。長軸7.44m、短軸4.14m前後を測り、短軸方位はN－1°－Wを示す。確認面よりの掘り込みは17cm前後を測り、ソフトローム層中に床面が存在するものの全体的に軟弱である。東側中央部の床面上に厚さ１cm程焼土が散在している状況が認められた。Pitは合計39本検出され、北側の３本及び南側の１本に明瞭な柱痕跡が残存しており、深さは50cm前後と均一的である。他のPit は、深さ70～15cm前後を測るが、南壁際中央やや北側の極小 Pit ２本のみ15cm前後の深さである以外は、すべて50～70cm前後の深さを測る。

**遺物**　総数40点の遺物が検出されている。内訳は、条痕文系土器片４、前期前半土器片24、無文１、自然石10、焼礫１点である。このうち６点を図示した。これらの遺物は、覆土中に散在して検出されたものであり、床密着及び直上での検出は認められなかった。

**14号遺構**（第18図、図版４・20）

73号遺構墳丘下ソフトローム上面からの検出である。調査を急ぐあまり、墳丘下の旧表土を一気に掘り下げてしまった為、Pit 及び炉址だけの検出であるが、残存していたPit より長径4.8m前後の規




1．暗褐色(有機質性やや強、ローム粒少量含む)　4．暗褐色(ローム粒少量含む、有機質性もやや強)
2．暗褐色(ローム粒やや多く含む)　5．褐色(ローム粒多量に含む)
3．暗褐色(ローム粒多量に含み、褐色味強い)　6．暗褐色(よごれたローム粒やや多く含む、やや締りなし)

**第19図**　15号遺構実測図

模をもって、円形を呈するものと考えられる。炉及び一つだけ例外的に円形プランからはみ出す大形 Pit の中央を結ぶラインを主軸とすれば、主軸方位はN—95°—Wを示している。Pit は17本検出され、36～30cm前後を測る。炉は中央やや西よりに検出され、明瞭なる火床面を有している。

**遺物**　炉及び Pit 内より合計20点の遺物を検出しているが、炉址より検出された2点以外は、いずれも Pit 内からの検出であり、直接本遺構に伴うものとは考えられない。1は口径22.6cmを呈する。色調は外面黒～茶褐色、内面暗褐色を呈し、胎土は微砂粒を含んでおり、焼成は良好である。2は口径22.2cmを測り、貝殻腹縁文が施されている。焼成は良好で胎土は微砂粒を含み、色調は外面茶褐色、内面暗褐色を呈している。浮島II式に比定される。

## 2　竪穴状遺構

**15号遺構**（第19図、図版4）

平面形は南北に長い長台形を呈する。長軸3.72m、短軸2.4mを測り、長軸方位はN—27°—Wを示す。確認面からの掘り込みは20cm前後を測り、底面は鍋底状を呈している。Pit は7本検出され、深さは20～45cm前後を測り、中央部に集中するものが深い傾向が認められた。壁はなだらかに立ち上っており、覆土は自然堆積の状況を示している。

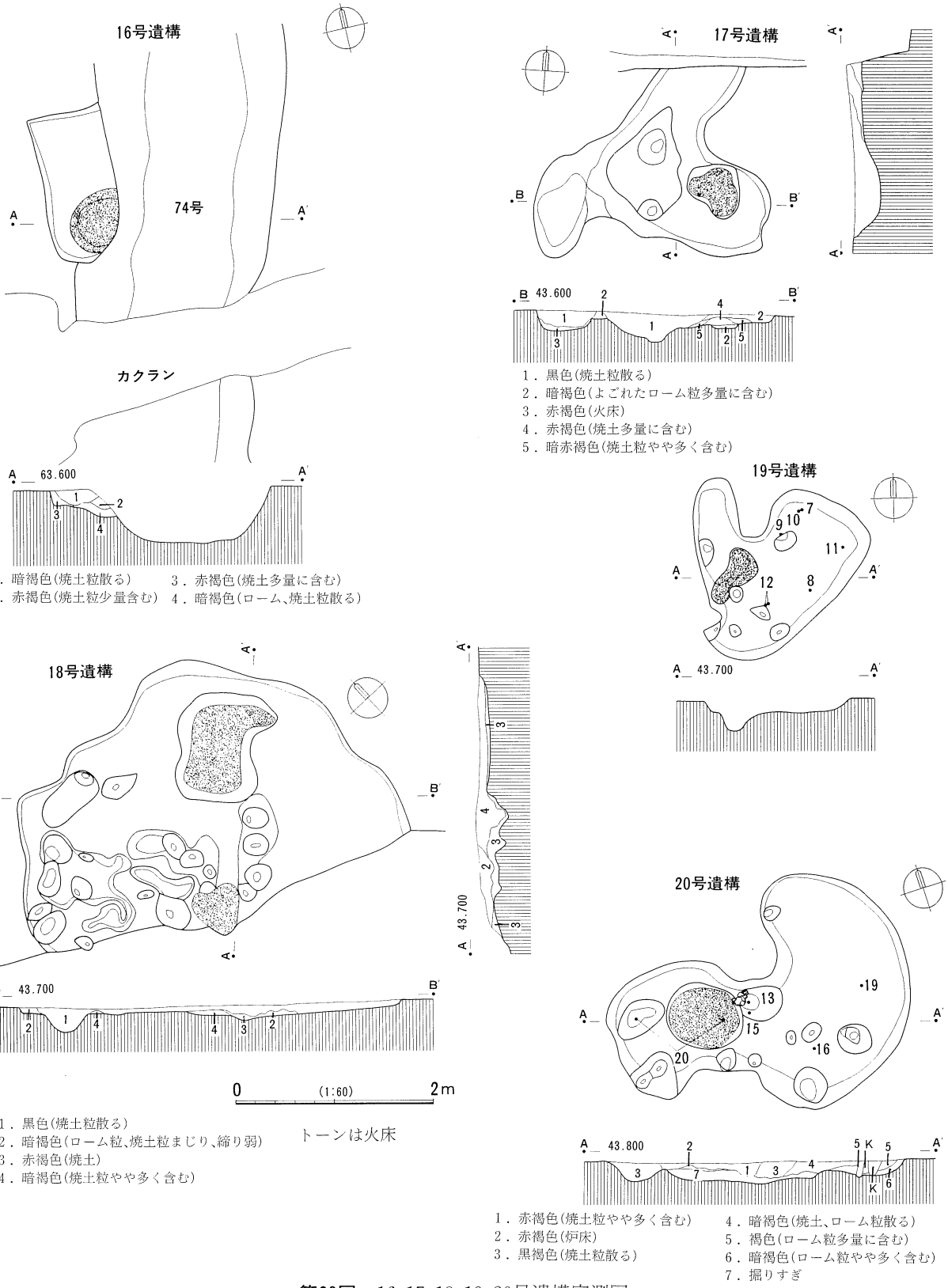
**遺物**　合計4点の遺物が検出され、すべてが前期前半期に比定される土器片であるものの細片が多い。このうち1点を図示した。これらの遺物は覆土中より散在的に検出されたものである。

## 3　炉　穴

**16号遺構**（第20図）

74号墳丘下に存在し、62年度調査時にその一部を確認した遺構である。当初2～3基程度の炉穴が切り合っているものと思われたが、南側は重機によって、東側は74号遺構によってそれぞれ大幅に削平されており、遺存状況は極めて不良である。残存した平面形は長方形を呈し火床は半分以上が失なわれているものと考えられる。確認面からの掘り込みは最大27cmを測り覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　本遺構からは合計103点の土器片が検出され、条痕文系土器が主体をなしている。




**第20図**　16・17・18・19・20号遺構実測図

### 17号遺構（第20図）

74号墳丘下に存在し、北側の一部を重機によって削平されている遺構である。残存平面形は「人」の字状を呈し、東側突端部に火床が存在する。確認面からの掘り込みは最大36cmを測り、床面は凹凸が激しい。

**遺物**　28点の縄文土器と５点の焼礫が検出されており、条痕文系土器と前期前半期土器が主体を占める。

**18号遺構**（第20図、図版４）

73号遺構に南側を削平されて存在する遺構である。残存した平面形は長径3.9mを測る半円状を呈しており、底部に２ヶ所の火床面が認められた。確認面からの掘り込みは、火床面の存在する所で12cm前後を測り、床面には Pit 状の凹面が多量に検出されている。

**遺物**　合計43点検出されており、縄文土器片20点と焼礫23点である。

**19号遺構**（第20図、図版４）

73号遺構墳丘下からの検出である。平面形は「Ｖ」の字形を呈し、火床面は１ヶ所に検出されている。火床面を通る長径1.86m、短軸1.5m前後を測り、火床長軸方位はＮ―40°―Ｅを示す。確認面からの掘り込みは、最大30cm、平均18cm前後を測る。

**遺物**　合計16点検出され、沈線文を施す土器片が９点と主体をなす。

**20号遺構**（第20図、図版４）

平面形は不整な「て」の字形を呈している。平面形から２基程度の遺構が切り合っているものと考えられる。火床は１ヶ所に検出されており、火床面を通る長径3.06m、短径1.08mを測り、火床長軸方位はＮ―33°―Ｗを示す。確認面からの掘り込みは浅く、火床面で７cm前後を測る。

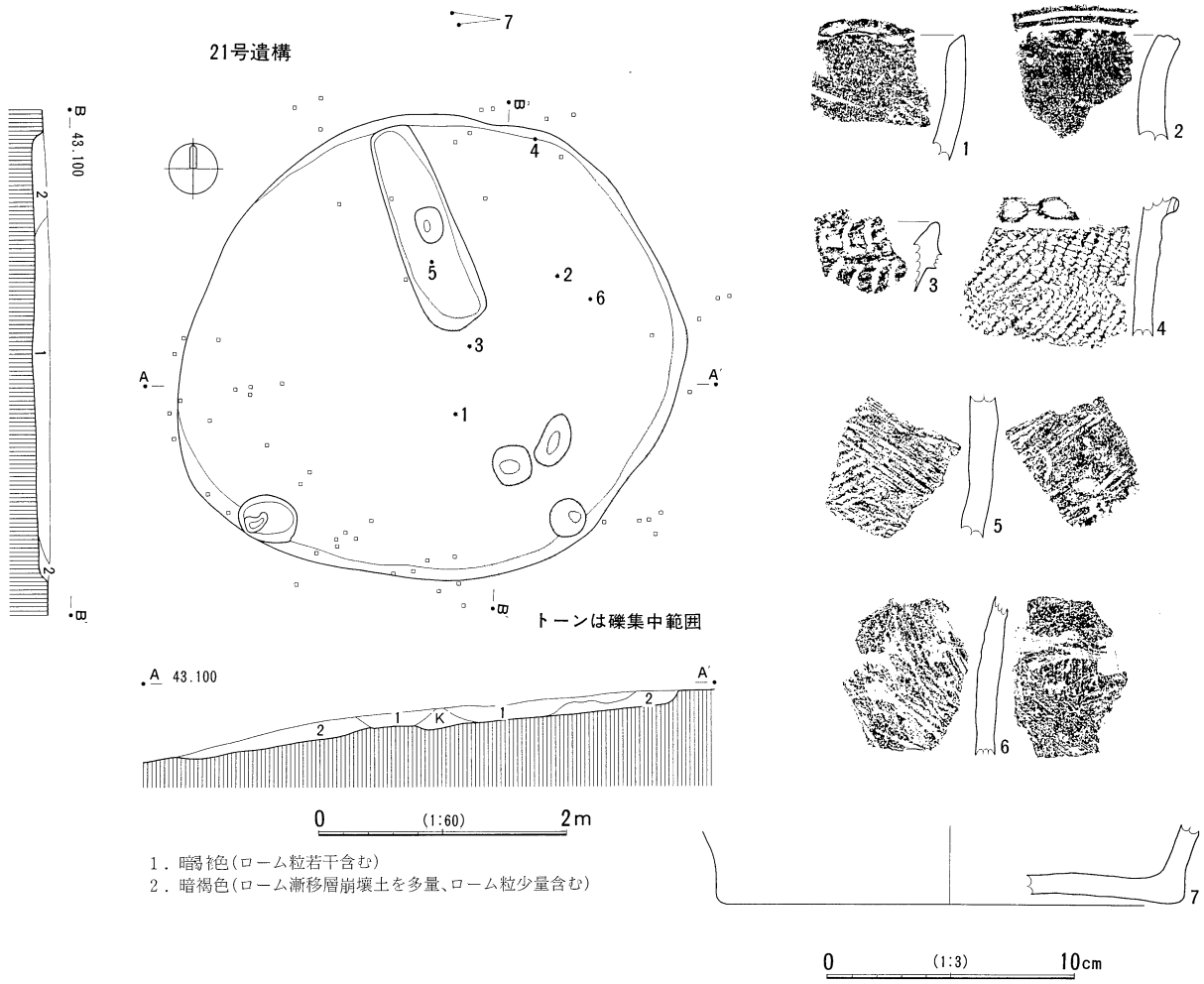
**遺物**　合計37点検出されており、浮島期に比定される13が、火床面端に密着状況で検出されている。

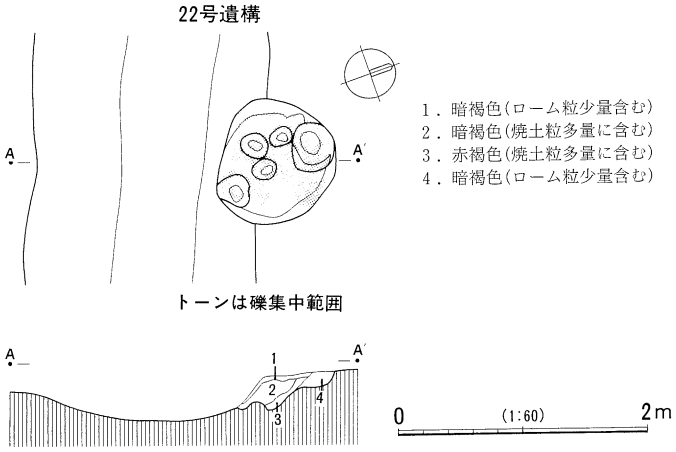
## ４．集　石

**21号遺構**（第21図、図版５）

平面形は不整円形を呈しており、長軸4.17m、短軸3.72mを測り、短軸方位はＮ―23°―Ｗを示している。立地は東側傾斜変換面に位置しており、確認面からの掘り込みは13cm前後と一定ながら、底面は平坦ではなく、東側に大きく傾いた状況で検出されている。底面は全体的に軟弱であり、南側に４本の Pit と北側に土坑状の落ち込みが検出されている。Pit は、深さ20cm前後で、４本ともほぼ一定の深さである。土壙状の落ち込みは、長軸2.01m、短軸48cmを測り、長軸方位はＨ―23°―Ｗを示し、集石掘り方と同じ傾き方位を示し、墓壙である可能性もある。深さは、東側底面より20cm前後を測り、底面はほぼ平坦であり、中央に深さ20cm前後を測る Pit １本が検出されている。

**遺物**　合計866点の遺物が検出されている。内訳は24点の縄文土器と842点の礫である。礫のうち651点は２次加熱を受けた焼礫であり、内８点にタールが付着していた。自然石は189点検出されており、これはいわゆる２次加熱痕のない礫である。この他に２点の磨石の破片が認められた。これらの検出された遺物を％で表現すれば、75％が焼礫、22％が自然石、３％が土器片という結果が得られた。このうち７点の土器片を図示するが、底面より検出された土器片は５、６の条痕文系土器である以外は、覆土中に礫群と混在して検出されたものである。




**第21図**　21・22号遺構実測図,出土遺物実測図

**22号遺構**（第21図、図版５）

73号遺構に覆土の一部を削平されて存在する。平面形はおよそ円形を呈するものと考えられ、長軸96cm、短軸90cm前後を測り、短軸方位はN—20°—Eを示す。確認面からの掘り込みは平坦面で23cm前後を測る。底面は凹凸が激しく、５本のPit状の落ち込みが検出されており、深さは平坦面より22cm前後を測る。

**遺物**　合計74点の遺物はすべて礫であり、内訳は焼礫20、自然礫54点である。

## 5　土　坑

**23号遺構**（第22図、図版５）

１号遺構を切って存在する。平面形が長楕円形を呈し、長軸3.54m、短軸1.32mを測り、短軸方位はＮ―11°―Ｗを示す。確認面からの掘り込みは72cmを測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面・側壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**24号遺構**（第22・26図、図版５）

41・42号遺構に覆土の一部を切られて存在する。平面形は長楕円形を呈し、長軸2.04m、短軸1.86mを測り、短軸方位はＮ―23°―Ｅを示す。確認面からの掘り込みは1.8mを測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面、側壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　覆土中より条痕文系土器１、自然石１点を検出しており内１点を図示した。（第26図―61）

**25号遺構**（第22図、図版５）

11号遺構に覆土の一部を切られて存在する。平面形は長楕円形を呈し、長軸3.06m、短軸90cmを測り、長軸方位はＮ―30°―Ｗを示す。確認面からの掘り込みは、1.15mを測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面、側壁は明瞭に検出され、底面には８ヶ所のPitが検出され、深さはそれぞれ底面より10～12cm前後を測り、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**26号遺構**（第22図、図版５）

62・63号遺構に切られて存在する。平面形は不整な長方形を呈するものと考えられる。残存した長軸は1.26m、短軸63cmを測り、長軸方位はＮ―66°―Ｗを示す。確認面からの掘り込みは深い所で84cmを測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面、側壁は明瞭に検出され、底面には２ヶ所のPitが認められた。深さはそれぞれ底面より５～10cmを測り、南側の方が若干深い。

**遺物**　まったく検出されなかった。

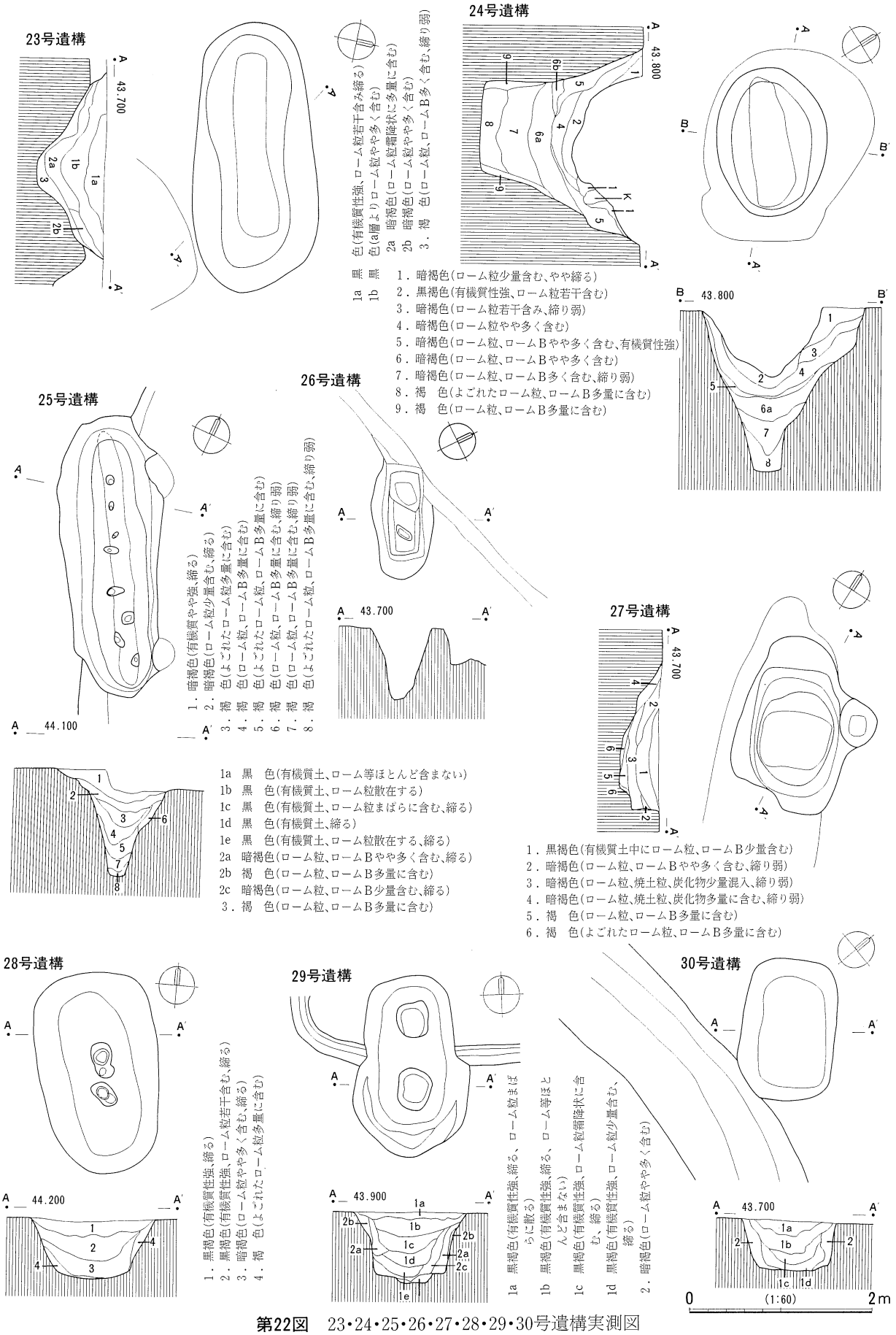
**27号遺構**（第22図、図版９）

58号遺構に覆土の一部を切られて存在する。平面形は不整長方形を呈し、長軸1.92m、短軸1.47mを測り、長軸方位はＮ―27°―Ｗを示している。確認面からの掘り込みは46cmを測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面、側壁は明瞭に検出され、底面はほぼ平坦である。東側にPit状の落ち込みが認められたが、直接伴うものではないと考えられる。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**28号遺構**（第22・26図、図版５）

平面形は長楕円形を呈し、長軸２．18m、短軸1.32mを測り、長軸方位はＮ―16°―Ｗを示す。確認面からの掘り込みは66cm前後を測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、




**第22図**　23・24・25・26・27・28・29・30号遺構実測図

3ヶ所にPitが検出されている。深さは北側より30・20・32cmを測る。底面、側壁とも明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　覆土中より4点の縄文土器が検出されており、内2点を図示した。(第26図62・63)

**29号遺構**（第22図、図版5・6）

64号遺構に覆土の大部分を切られて存在する。平面形は、長楕円形を呈し残存部での長軸1.98m、短軸1.26mを測り、長軸方位はほぼ真北を示す。確認面からの掘り込みは72cm前後を測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面には2ヶ所にPitが認められ、底面よりの深さはそれぞれ7～4cmを測り、北側の方が若干深い。底面・側壁とも明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**30号遺構**（第22図、図版6）

76号遺構に南側の一部を若干切られて存在する。平面形は長方形を呈し、長軸1.55m、短軸1m前後を測り、長軸方位はN—38°—Wを示す。確認面からの掘り込みは54cm前後を測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、側壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　覆土中より2点の縄文土器細片を検出したが、図示に到らなかった。

**31号遺構**（第23図、図版6）

75号遺構に覆土上層を削平されて存在する。平面径は直径1.14m前後の円形を呈し、検出面からの深さは西壁側で90cm前後を測る。ハードローム層中に掘り込まれており、底面はほぼ平坦であり覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**32号遺構**（第28図、図版6）

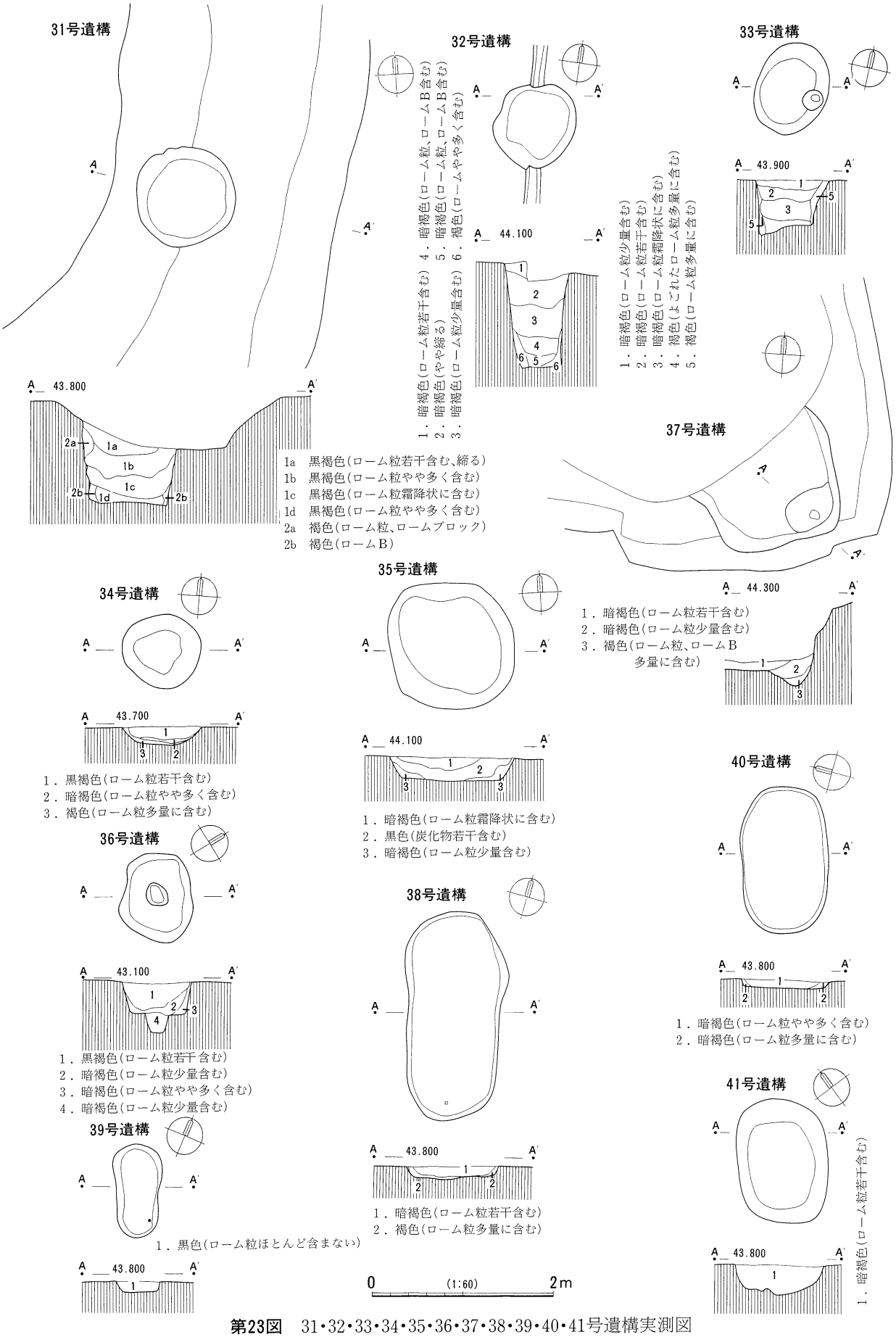
65・66号遺構に覆土上層を削平されて存在する。平面形は直径90cm前後の円形を呈し、検出面からの深さは西壁側で1.17mを測る。ハードローム層中に掘り込まれており、底面はほぼ平坦であり、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　合計13点の遺物を検出している。内訳は条痕文系土器3、自然石5点の他は、縄文土器細片であり、図示に到るものはなかった。

**33号遺構**（第23図、図版6）

平面形は南北方向にやや長い楕円形を呈する。長軸1.02m、短軸78cm前後を測り、長軸方位はN—7°—Eを示す。ハードローム層中に掘り込まれ、底面は西側がやや下っている。深さは確認面より最大60cm前後を測り、側壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　底面より縄文土器1点を検出したが、図示に到らなかった。




**第23図**　31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41号遺構実測図

**34号遺構**（第23図、図版６）

平面形は東西にやや長い楕円形を呈している。長軸85cm、短軸81cm、深さは20cm前後を測り、短軸方位はＮ－５°－Ｗを示している。ハードローム層中に掘り込まれ、底面、側壁とも明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　覆土中より条痕文系土器３点を検出したが、いずれも細片であり図示に到るものはなかった。

**35号遺構**（第23図）

平面形は長軸1.38m前後を測る不整円形を呈している。深さは確認面より25cm前後を測り、底面はほぼ平坦である。ハードローム層中に掘り込まれ、側壁は明瞭に検出されており、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　覆土中より３点の縄文土器片と５点の土師器片が検出されたが、総じて土師器片は覆土上層中からの検出であり、底部付近より縄文土器片が検出されているものの、図中の１点を除けばすべての細片である。また土師器、縄文土器とも少破片が多く、図示に到るものはなかった。

**36号遺構**（第23図、図版６）

覆土の大半を重機によって削平されて存在する。平面形は不整長方形を呈し、長軸96cm、短軸75cm、深さ35cmを測り、長軸方位はＮ－58°－Ｗを示す。底面、側壁とも明瞭に検出され、底面中央に幅24cm、深さ24cmを測る Pit １本が検出されており、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　覆土中より５点の遺物が検出されている。内訳は縄文土器片４、自然石１点である。また底面付近検出のものは条痕文系土器片２点である。しかしながらいずれも少破片が多く、図示に到るものはなかった。

**37号遺構**（第23図、図版８）

56号遺構に切られて存在し、平面形は不明である。残存径は最大1.62m、深さは平坦面で12cm前後を測り、東南コーナー部に径54cm、深さは18cmの Pit １本が伴っており、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　合計８点の遺物が検出され、いずれも胎土に雲母を含み、阿玉台式土器の特徴を顕著に示すものである。このうち底面密着の状況で検出された３点を図示しようと思ったが、図中から洩れてしまったことを申し加えておく。

**38号遺構**（第23図、図版６）

平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。長軸2.28m、短軸96cmを測り、長軸方位はＮ－13°－Ｗを示す。確認面からの掘り込みは15cm前後を測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、側壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　合計10点の遺物が検出されている。内訳は縄文土器片８、磨石１、石鏃１点であるが、このうち石鏃１点は第32図－38で図示されたものの、それ以外の遺物は図中から洩れてしまったことを申し加えておく。

**39号遺構**（第23図、図版６）

平面形は南北方向に長い楕円形を呈している。長軸1.02m、短軸45cmを測り、長軸方位はＮ―26°―Ｗを示す。確認面からの掘り込みは12cm前後を測り、底面はほぼ平坦である。側壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　合計５点の遺物が検出された。内訳は条痕文系土器片４と自然石１点である。このうち１点を図示した（第26図―64）。

**40号遺構**（第23図、図版７）

平面形は東西方向に長い楕円形を呈している。長軸1.32m、短軸96cmを測り、短軸方位はＮ―21°―Ｗを示す。確認面からの掘り込みは10cm前後を測り、底面はほぼ平坦である。側壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　覆土中より縄文土器細片を２点検出したが図示に到るものはなかった。

**41号遺構**（第23図、図版７）

平面形は南北方向に長い楕円形を呈している、長軸1.38m、短軸１ｍを測り、長軸方位はＮ―32°―Ｅを示す。確認面からの掘り込みは34cmを測り、覆土は単純な層序であり、あるいは42号遺構との関連が考えられる遺構である。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**42号遺構**（第24図、図版７）

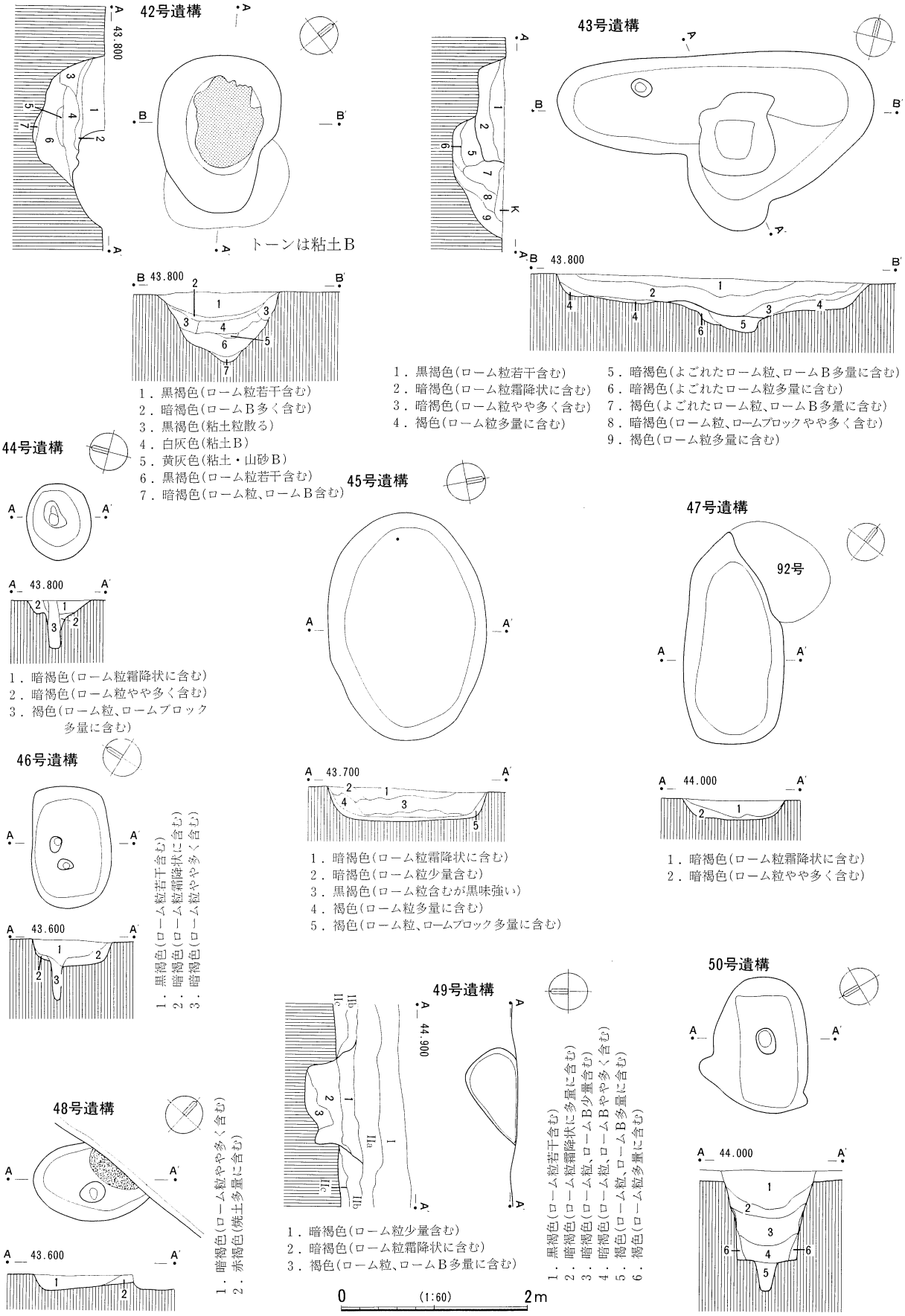
覆土の一部を41号遺構に切られて存在する。また本遺構は24号遺構の陥没痕を再利用して構築されたものと考えられる。平面形は楕円形を呈するものと考えられる。残存する長軸1.68m、短軸1.2mを測り、長軸方位はＮ―53°―Ｗを示す。確認面からの掘り込みは75cmを測り、覆土中に、山砂、粘土をブロック状に含んでおり、明らかに人為的痕跡を有するものである。粘土ブロックは長径１m、短径72cm、厚さ12cm前後に渡って検出されており、41号遺構によって一部をカットされている。あるいは41号遺構は、42号遺構粘土採取の際に構築された可能性も考えられる。いずれにせよ本遺構は粘土貯蔵土坑と考えられ、24号遺構が完全に埋没する以前に使用されたものと考えられる。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**43号遺構**（第24図、図版７）

土層断面により、本遺構は２基の土坑が切り合っている遺構であることが判明している。１～４層で表わされた土坑は、長径3.39m、短径1.02m、深さは30cm前後を測り、下層遺構に比べ新しい時期の土坑である。5～9層で表わされる土坑はこれより古く、深さは54cm前後を測る。新しい時期の土坑は、東西方向に長い楕円形を呈するものと考えられるが、下層土坑の平面形は不明である。

**遺物**　新しい時期の土坑覆土中より自然礫３点、古い時期の土坑覆土中より、縄文土器細片７点（条痕文系３、不明４）を検出したが、図示に到るものはない。




**第24図**　42・43・44・45・46・47・48・49・50号遺構実測図

**44号遺構**（第24図、図版７）

平面形は東西方向にやや長い楕円形を呈している。長軸81cm、短軸70cmを測り、長軸方位はＮ－52°－Ｅを示している。中央部に木根が存在し遺存状況は不良である。

**遺物**　規模の割には極めて多量の遺物が検出されている。内訳は、条痕文系土器６、前期前半土器13、不明14点と自然礫４点である。しかしながら細片が多く、図示に到るものはなかった。

**45号遺構**（第24図、図版７）

73号遺構墳丘下において検出されている。平面形は東西方向に長い楕円形を呈し、長軸2.4m、短軸1.68mを測り、短軸方位はＮ－10°－Ｅを示す。確認面からの深さは36cm前後を測り、底面はほぼ平坦である。側壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　合計23点の遺物が検出されている。内訳は前期前半土器片７、胎土に雲母を含むことから阿玉台式土器に比定されるもの６、自然石４、焼礫１点である。しかしながら細片が多く図示に到るものはなかった。

**46号遺構**（第24図、図版７）

平面形は南北方向にやや長い隅丸長方形を呈している。長軸1.32m、短軸84cm、長軸方位はＮ－57°－Ｅを示す。確認面からの掘り込みは31cm前後を測り、底面はほぼ平坦であるものの西側に２本のPitを検出し、深さはそれぞれ36cm前後を測る。壁は明瞭に検出され、覆土は自然堆積の状況を示す。

**遺物**　合計５点の遺物が検出されている。内訳は条痕文系土器片２、時期不明２、自然石１点であるものの細片が多く、図示に到るものはない。

**47号遺構**（第24図、図版７）

92号遺構に切られて存在する。平面形は南北方向に長い楕円形を呈し、長軸2.22m、短軸1.08mを測り、長軸方位はＮ－39°－Ｗを示す。確認面からの掘り込みは20cm前後を測り、側壁は明瞭に検出されており、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　覆土中より合計12点の遺物を検出している。内訳は条痕文系土器３、前期前半土器片５、時期不明１点と焼礫３点であるが、細片が多く図示に到るものはない。

**48号遺構**（第24図、図版７）

74号遺構墳丘下に存在し、重機によって北側の一部を削平されて存在する。ソフトローム層中に掘り込まれ、深さは最大18cmを測る。北側に火床状（極一部しか残っておらずやや不明）によく焼けた面を検出していることから、あるいは炉穴かとも思われるが、遺存状態が極めて不良であり、ここでは土坑として報告しておく。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**49号遺構**（第24図、図版７）

遺構の半分は調査区域外に存在しており、昭和62年の確認調査時にその存在が認められた遺構であ

る。確認面からの掘り込みは36cm前後を測り、基本土層II b層を切って存在する。平面形はいささか不明ながら、長方形を呈するものと考えられる。

**遺物**　覆土中より3点の黒曜石剝片を検出したが図示に到らなかった。

**50号遺構**（第24図、図版3・8）

8号遺構を切って存在する。平面形は南北方向にやや長い不整長方形であり、長軸1.44m、短軸1.02mを測り、短軸方位はN－18°－Eを示す。確認面からの掘り込みは96cm前後を測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、中央に径21×27cm、深さ32cmのPit 1本が検出されている。

**遺物**　まったく検出されなかった。

## 6　炉穴及び土坑出土遺物

炉穴及び土坑より出土した遺物を第25・26図にまとめた。ここに掲載するこれらの資料は、炉穴及び土坑出土遺物の内でも極一部のものであり、前述した37号、38号の遺物も本来ならばこの図中に掲載されるはずのものであったが、報告書作成を急ぐあまりに図中から洩れてしまったことを申し加えておく。

**16号遺構**　本遺構から検出された土器は合計103点を数え、内訳は早期条痕文系土器60、前期前半土器18、不明24点である。このうち29点を図示した。（1～29）、9、10は外面に刺突文が認められ、13・14・16は、結節が認められており、胎土に繊維を含んでいない。これ以外は内外面に条痕が施されたり、外面に縄文が施されたりするものの、胎土には繊維を含んでいる。

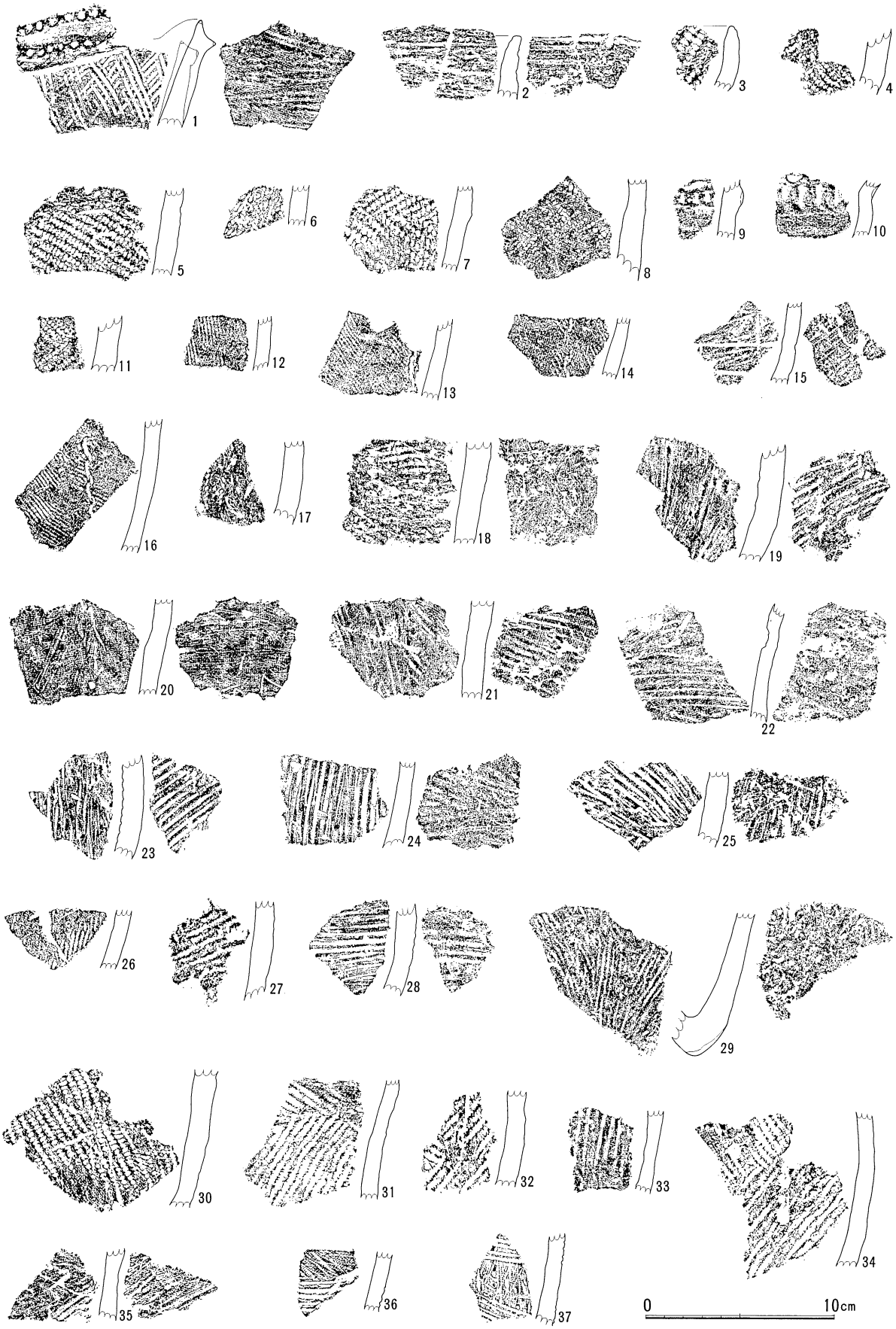
**17号遺構**　総数28点検出した土器の内訳は、早期条痕文系土器9、前期前半系土器7、不明12点である。このうち7点を図示した。（30～37）30～32・34・35は、胎土に繊維を含んでいる。33・36・37は、沈線文を主体とし、胎土に繊維を含んでいない。

**18号遺構**　総数20点の土器片が検出された。内訳は早期条痕文系1、前期前半系土器5、不明14点である。このうち6点(38～43)を図示した。37は三角文が認められ、あるいは浮島系の土器かも知れない。40・41・43は、胎土に繊維を含んでいる。39・42は沈線文が認められ胎土には繊維を含んでいない。

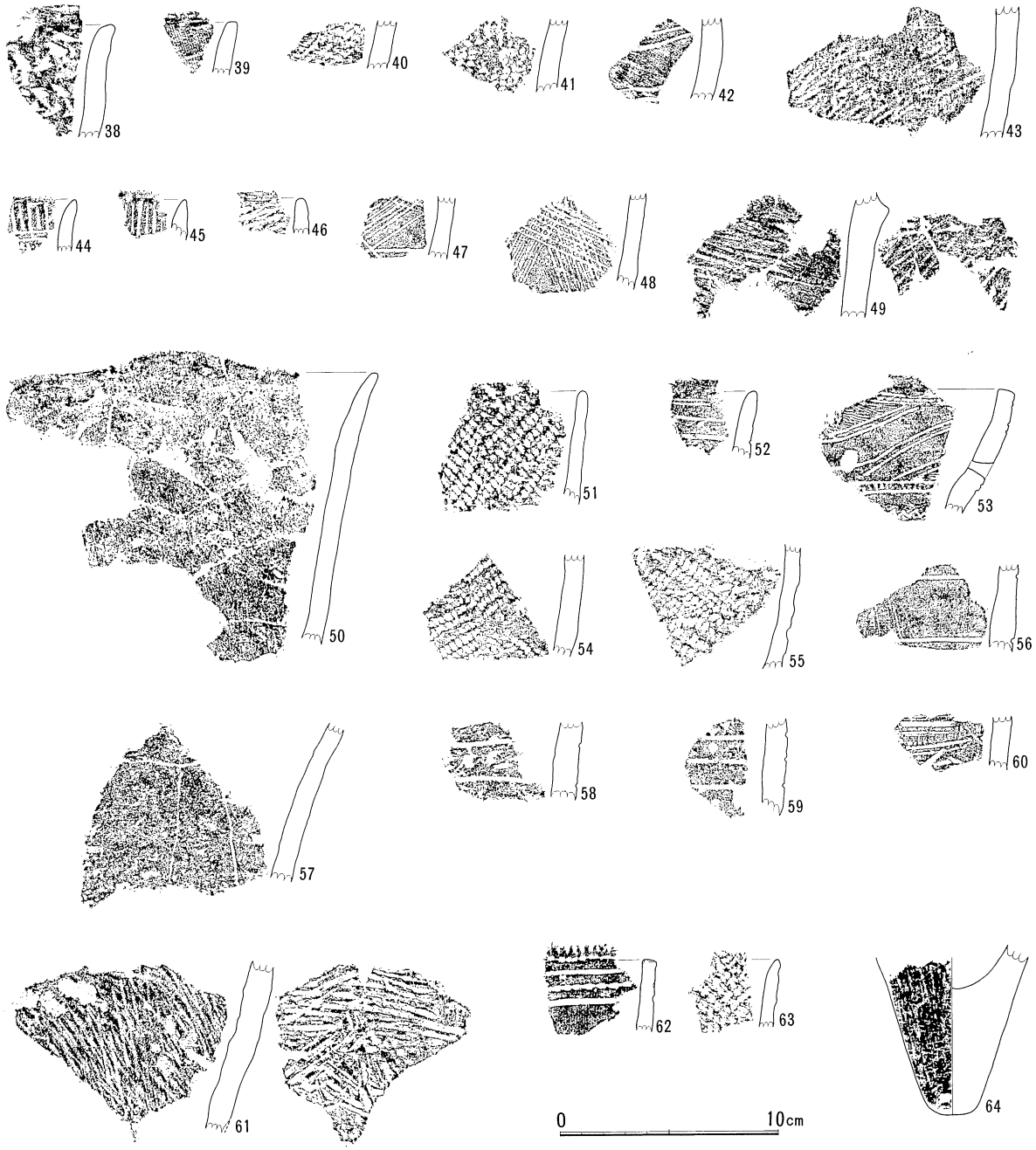
**19号遺構**　総数13点の土器が認められた。内訳は早期条痕文系2、沈線文系9、不明2点である。このうち44～49の6点を図示した。49は早期条痕文系の土器である。これ以外は沈線文を主体とし、胎土に繊維を含んでいない。具体的形状を知る大型品はなく、浮島・興津・諸磯系のいずれかに相当するものと思われる。

**20号遺構**　総数22点の土器が認められた。内訳は早期条痕文系1、沈線文系8、不明13点である。このうち50～60までの11点を図示した。50は、火床付近より検出されており、本遺構に直接伴うものと考えられる以外は、数種類の土器が混在している状況が窺われる。

61～64は、それぞれ、24号・28号・39号遺構検出の土器である。61は早期条痕文系土器に、62・64は、早期沈線文系の土器に、63は、前期前半系土器に比定される。また、これらの遺物は、これに関する遺構から検出されているが、すべてが直接遺構に伴うものばかりではなく、各遺構中より出土した遺物のバラエティである。




**第25図**　16・17号遺構出土遺物実測図



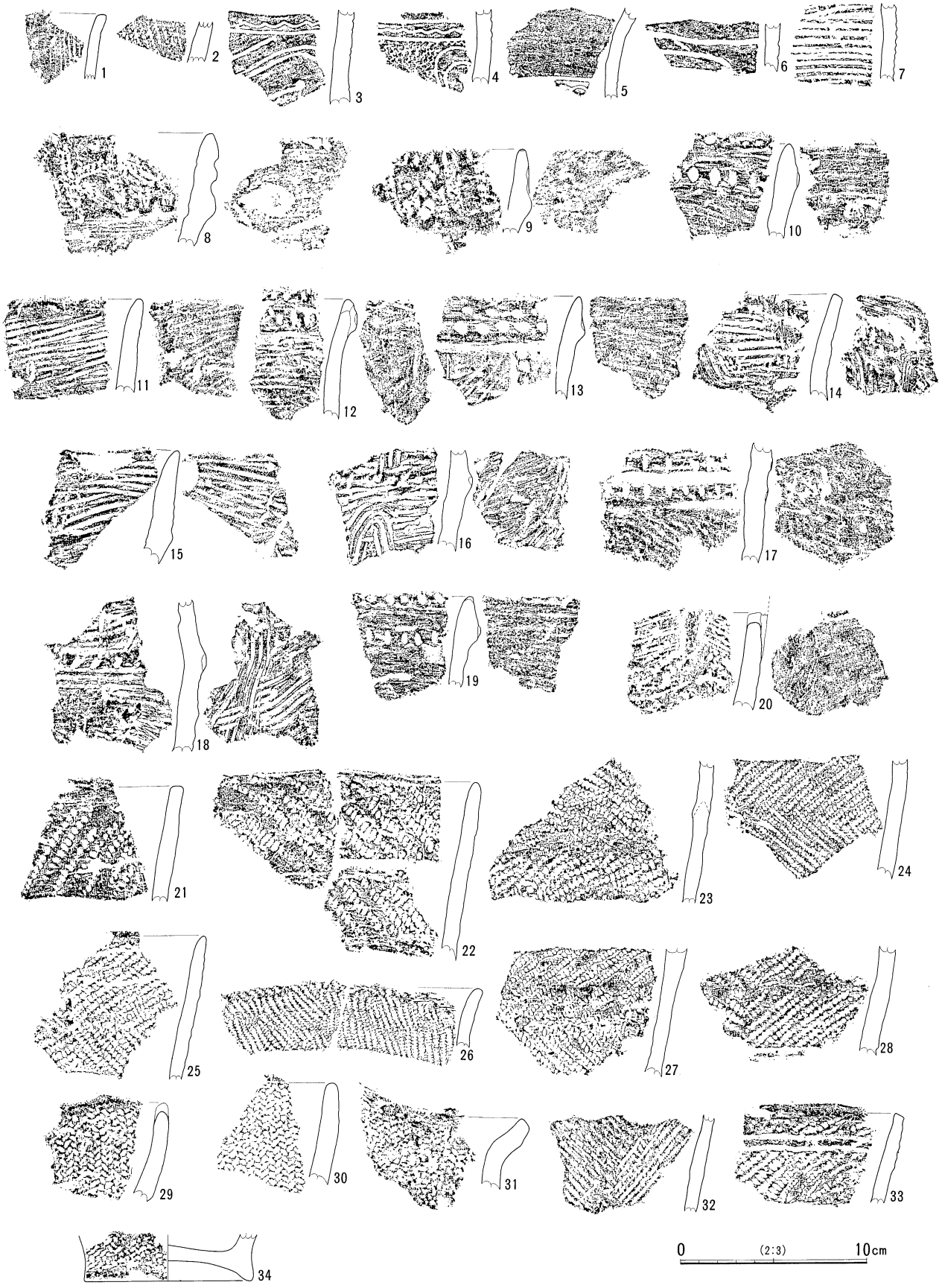

**第26図**　炉穴及び土坑出土遺物

## 7　遺物包含層及び遺構外出土遺物（第27～32図）

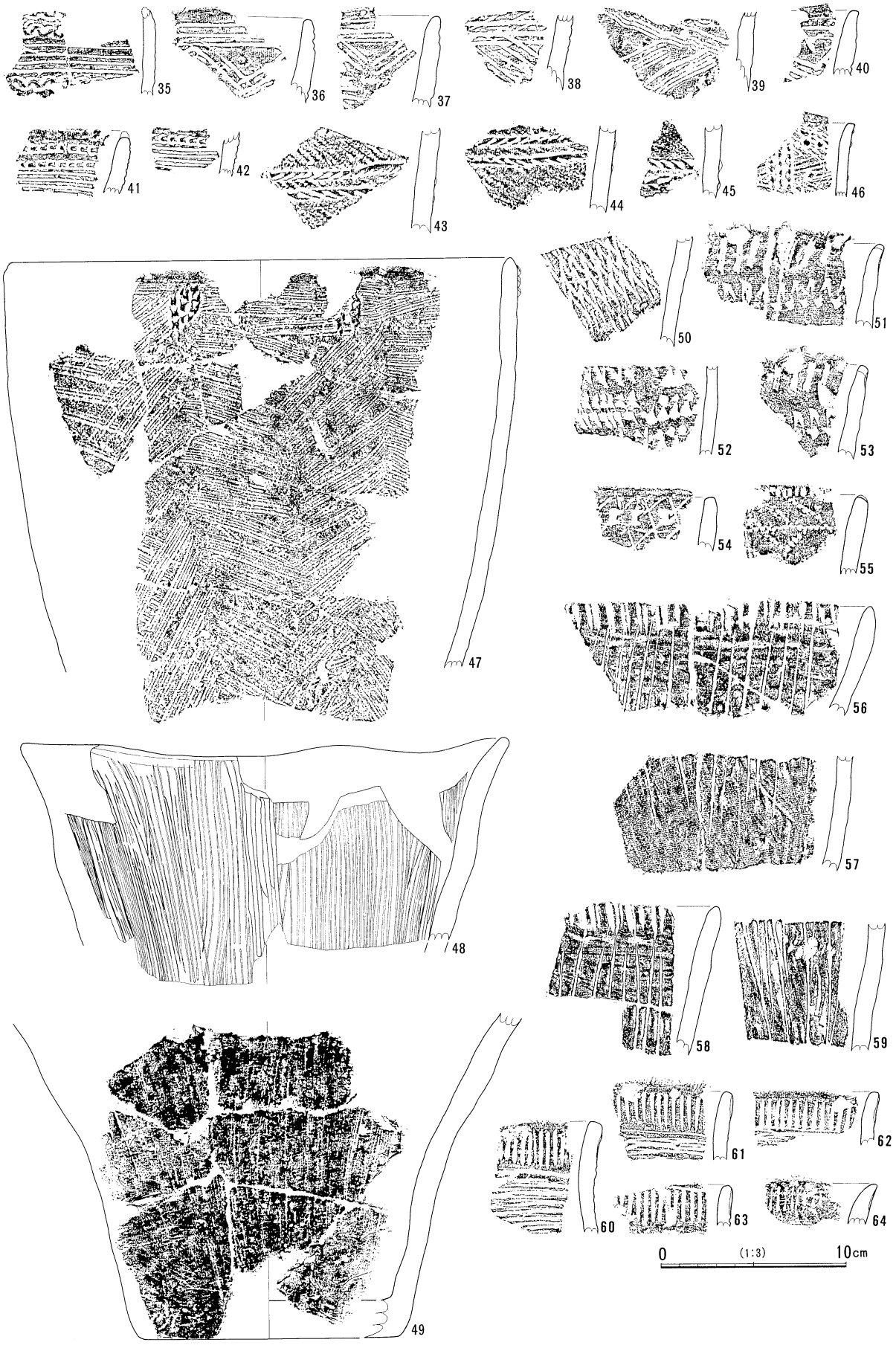
本遺跡遺物包含層として報告する以下の資料は、基本的には、盛土によって基本土層が保護されていた73・74号遺構下層に存在した遺物包含層の資料である。また遺構外出土遺物とは、表採、あるいは、各遺構覆土中より検出された遺物のうちでも、基本的時期の異なるものの資料である。

**縄文土器**（第27・28・29・30図、図版29）

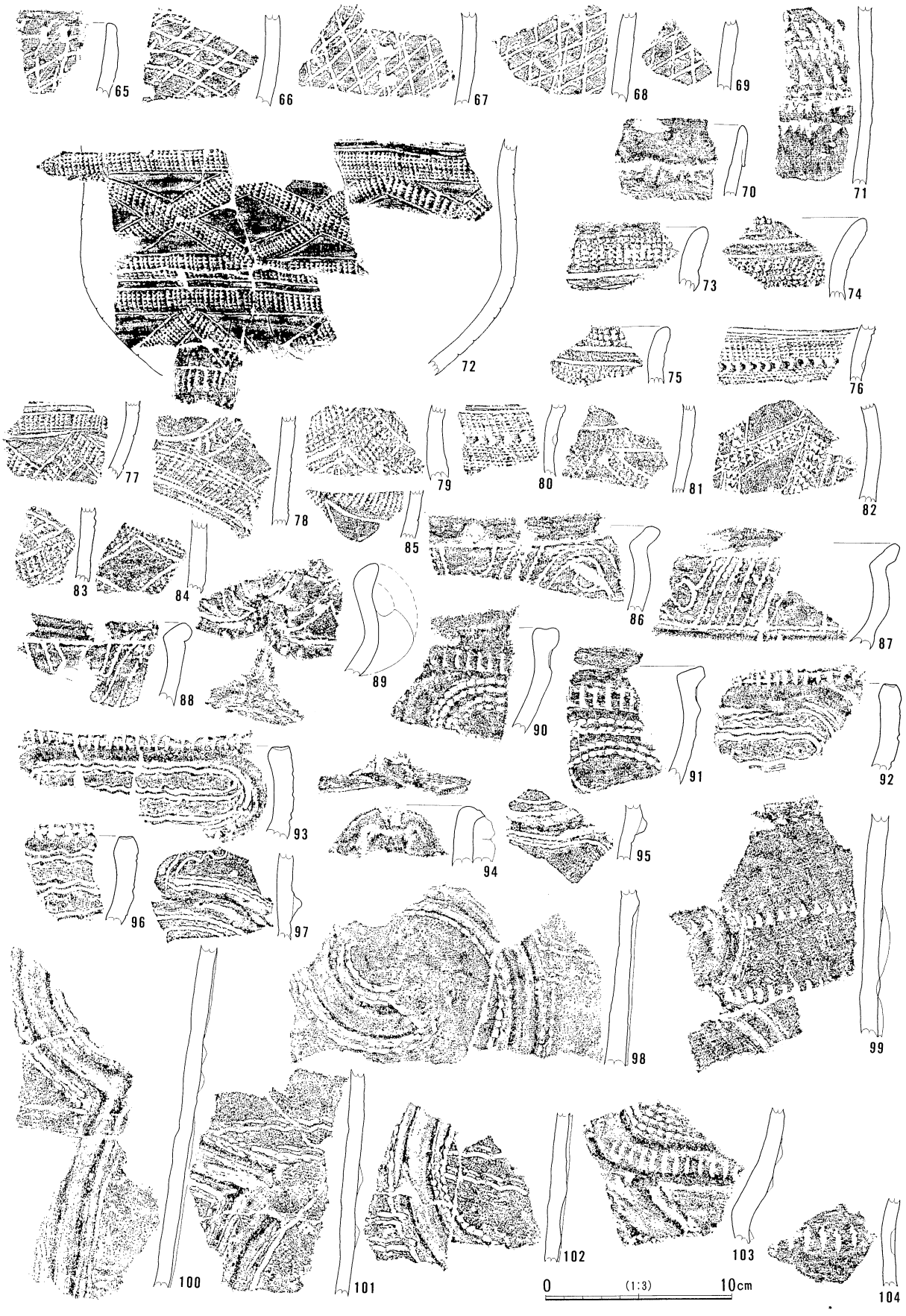
1・2は、早期撚糸文系の土器である。口唇部の形態から浮島式に比定される。3～7は早期沈線



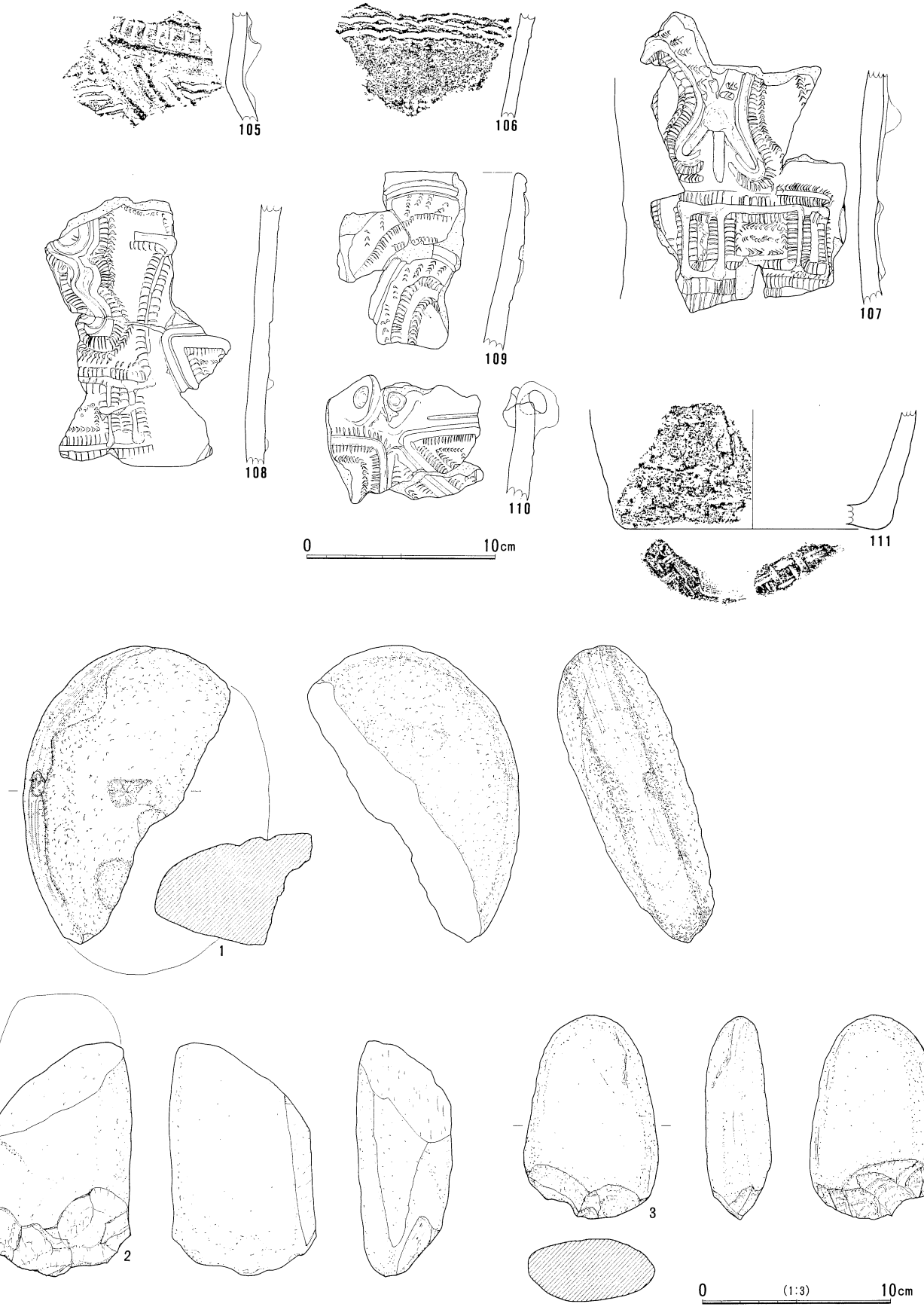

**第27図**　遺物包含層及び遺構外出土遺物実測図



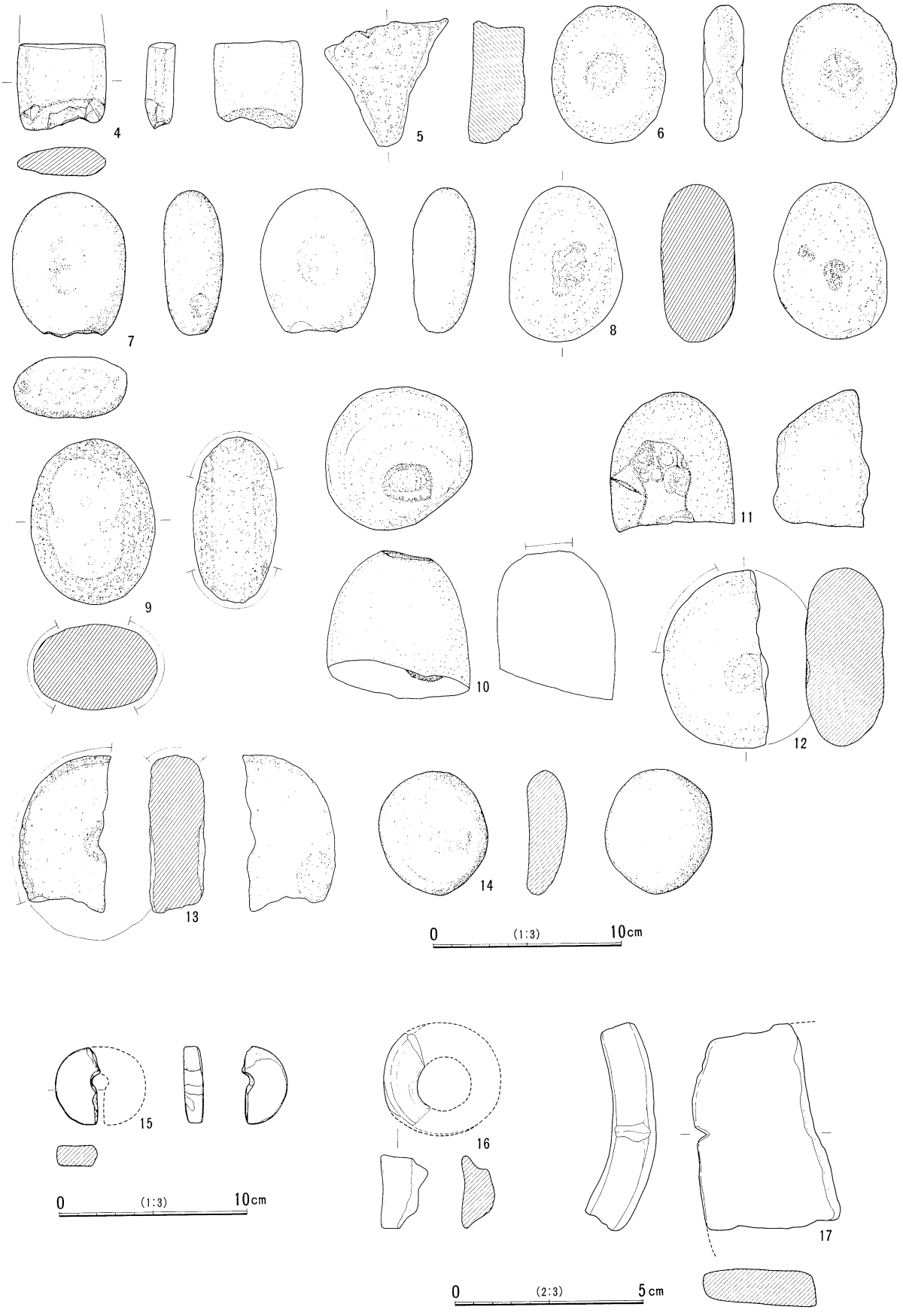

**第28図**　遺物包含層及び遺構外出遺物実測図




**第29図**　遺物包含層及び遺構外出土遺物実測図




**第30図**　遺物包含層及び遺構外出土遺物実測図




**第31図**　遺物包含層及び遺構外出土遺物実測図




**第32図**　遺物包含層及び遺構外出土遺物実測図

文系の土器である。3～5は条線間に鋸歯状の沈線が施されるものであり、三戸式土器に比定される。8～20は早期条痕文系の土器である。いずれも胎土に繊維を含み、広義の茅山系の土器である。21～34は、前期前半系の土器である。胎土にはいずれも繊維を含み、羽状縄文が認められるものが多く黒浜式土器を主体とする。35～85は前期前半系の土器群である。このうち35～67は諸磯式土器に比定される。48～84は、浮島・興津式に比定される。86～106は胎土に雲母を含み中期阿玉台式土器に比定される。107～110は、連続爪形文を主体とするモチーフを有し、中期勝坂式土器に比定される。

これらの縄文土器は、すべて73号遺構下層の基本土層IIc層～IIdd層中から検出されたものである。

**石器**（第30・31・32図、図版29）

本遺跡出土の石器の二部を第30図以下にまとめた。1・6～8・12～14は、凹石である。1は表裏に敲打痕があり、台石として使用されている。またトーン部分には、黒灰色のタールの付着が認められる。6・13には二次加熱を受けた痕跡が認められる。2・3は礫斧片である。2は片側、3は両面調整が施されている。4は再生調整途中の磨製石斧である。5は多孔質安山岩製の石皿である。中央に向かって緩い傾斜を有する様であるが、全体的な器形を知るほど残存していない。9は二次加熱を受けた痕跡を有する磨石状の敲き石である。側面に敲打痕を有している。10・11は頭頂部に敲打痕を有する敲き石である。11は二次加熱をうけた痕跡が認められる。

18・26は尖頭器である。19～21は剝片石器である。73・74は玦状耳飾である。これ以外はすべて石鏃であり、29は鋸状を呈している。32は、石鏃未製品と考えられる。

これらの石器は、12・14が2号遺構、20が32号遺構、37が38号遺構、18・23が54号遺構、27・36が67号遺構、8・10・11が75号遺構覆土中からの検出である。このほか22・28・31は表採によって検出されている。また7・9・13は、74号遺構下層包含中からの検出であり、これ以外はすべて73号遺構下包含層中からの検出である。また2号遺構出土のものは、本来ならば2号遺構出土として報告すべき遺物であることは、前述しておいた。

**土製品**（第31図・図版29）

本遺跡検出の土製品を第31図にまとめた。15は玦状耳飾りであり、½が欠存している。16は耳栓である。⅔が欠存している。17は縄文土器口縁部利用の土錘である。これらの遺物は、すべて74号遺構下の包含層中からの検出である。

# 2．弥　生　時　代

## 1　住居跡

**51号遺構**（第33図、図版８）

遺跡西側の傾斜変換面に位置し、北側の一部を重機によって削平されるものの平面形は径3.12m前後の円形を呈するものと考えられる。炉主軸方位はＮ－28°－Ｗを示し、確認面からの掘り込みは、深いところで18cm前後を測る。ソフトローム層中に掘り込まれ、床面はほぼ平坦であり、炉周辺が硬く踏み固められている。炉は中央やや北側に存在し、全体的によく焼けている。Pit は９本検出され、深さはそれぞれ25～15cm前後を測る。壁際の床面上に焼土が散乱している状況が認められたが、周溝は存在しない。残存する側壁は明瞭に検出され、比較的緩らかに立ち上っており、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　床面上に甕形土器破片が４点まとまって検出されたが、接合に到らず、図示できるものは１点のみである。

**52号遺構**（第34図、図版８）

遺構西側の傾斜変換面に存在し、東側の一部が６号遺構と重複している。平面形は、南北方向にやや長い楕円形を呈しており、長軸3.72m、短軸3.27mを測り、主軸方位はＮ－40°－Ｅを示している。確認面からの掘り込みは、深い所で36cm前後を測り、ハードローム層中に掘り込まれている。床面はほぼ平坦であり、周溝内側は全面的に硬化しており、よく踏み固められている。炉は中央やや北側に位置し、よく焼けている。Pit は床面及び周溝内より、合計８本検出され、深さはそれぞれ20～30cm前後を測る。壁は明瞭に検出され、急激に立ち上っており、覆土は自然堆積の状況を示す。

**遺物**　覆土中より合計７点の弥生土器片を検出したが、細片が多く図示に到るものはない。

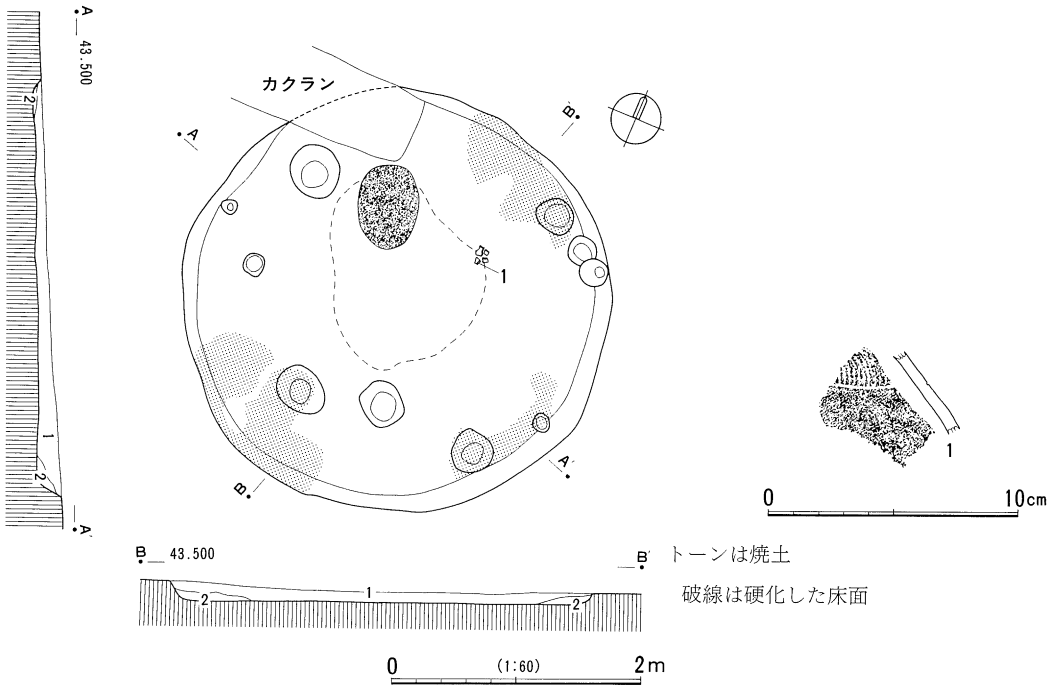
**53号遺構**（第35図、図版８・20）

南側の一部が61号遺構と重複し、覆土の一部を重機キャタピラ痕によって削平されて存在する。平面形はやや不整な隅丸方形を呈し、長軸3.21m、短軸3.0mを測り、主軸方位はＮ－17°－Ｗを示す。確認面からの掘り込みは、12cm前後を測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。床面はほぼ平坦であり、炉の周辺が硬化しており、よく踏み固められている。炉は中央やや北側に存在し、よく焼けており、北側の床面上には炭化物が集中的に検出されている。Pit は計５本検出され、各コーナー部における４本は34～30cm前後を測り、ほぼ均一的であるが、南側の１本は、15cm前後でやや浅い。壁はやや緩やかに立ち上っており、覆土は自然堆積の状況を示す。

**遺物**　３点の図示可能な遺物が検出されている。これらの遺物は、いずれも床密着の状況で検出されており、本遺跡に直接伴うものと考えられる。

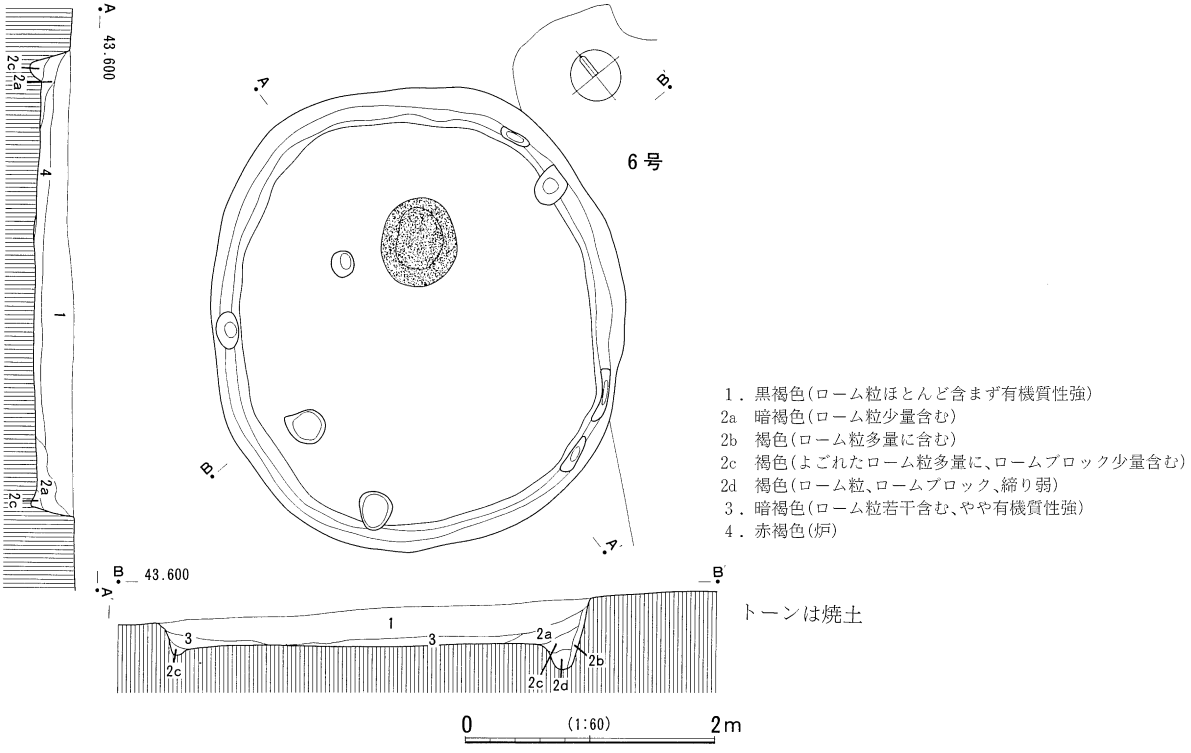
**54号遺構**（第36図、図版８）

平面形は、隅丸長方形を呈し、長軸6.9m、短軸5.82mを測り、主軸方位はＮ－62°－Ｗを示す。確認面からの掘り込みは36cm前後を測り、ハードローム層中に掘り込まれている。床面はほぼ平坦であり、




1．暗褐色(ローム粒若干含む)
2．赤褐色(焼土粒多量に含む)

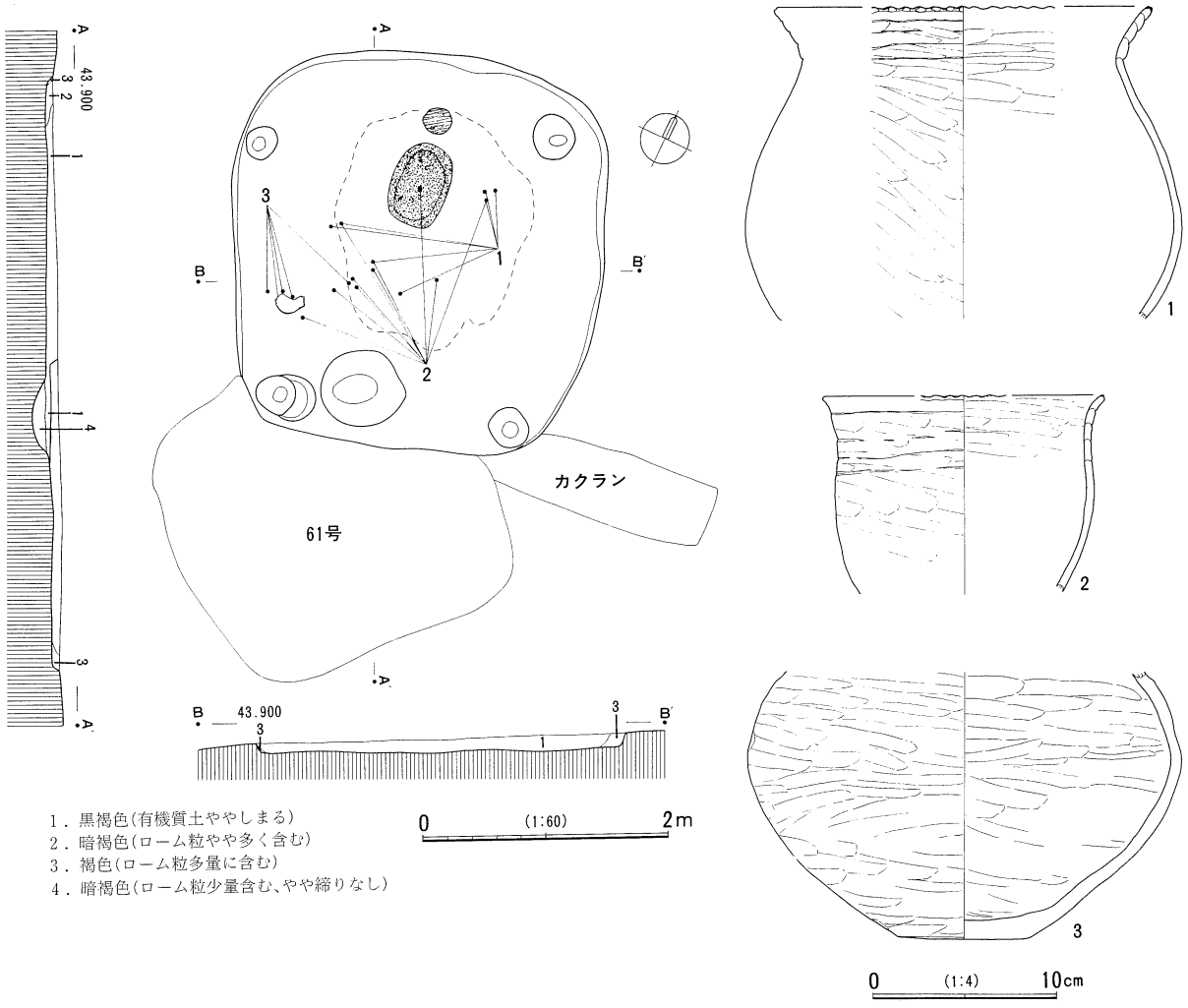
**第33図**　51号遺構実測図,出土遺物実測図




1．黒褐色(ローム粒ほとんど含まず有機質性強)
2a　暗褐色(ローム粒少量含む)
2b　褐色(ローム粒多量に含む)
2c　褐色(よごれたローム粒多量に、ロームブロック少量含む)
2d　褐色(ローム粒、ロームブロック、締り弱)
3．暗褐色(ローム粒若干含む、やや有機質性強)
4．赤褐色(炉)

トーンは焼土

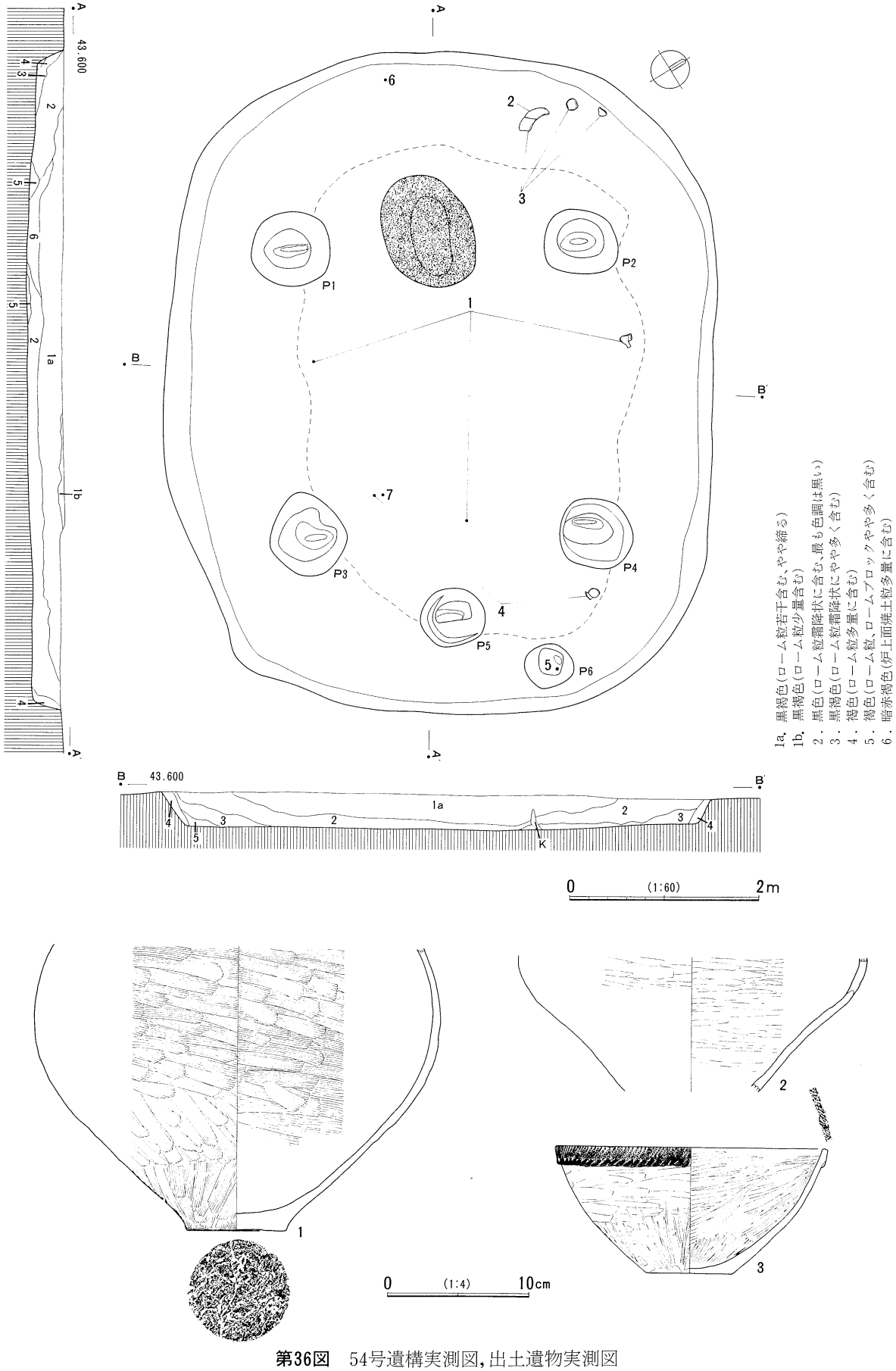
**第34図**　52号遺構実測図



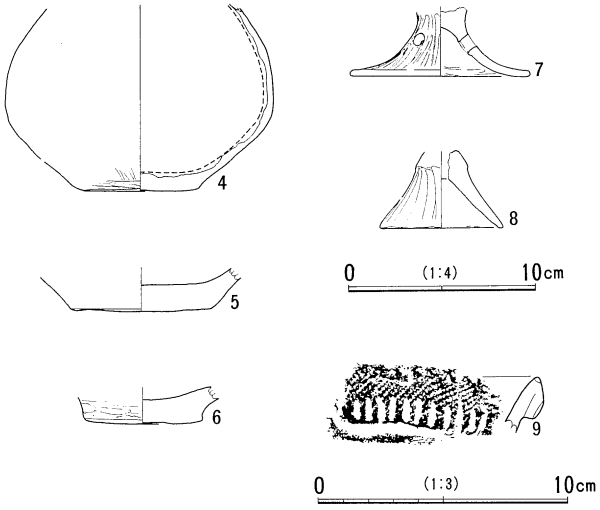

**第35図**　53号遺構実測図，出土遺物実測図

炉及び主柱穴と考えられるPit内側にかけて、よく踏み固められている。炉は中央やや西側に検出され、よく焼けている。Pitは6本検出され、$P_1$～$P_4$は主柱穴と考えられる。深さはそれぞれ60～70cm前後を測り、板状柱痕跡を有している。$P_5$は本来ならば入口施設と考えられるものであるが、ここでも板状の柱痕跡を検出し、深さも$P_1$～$P_4$とあまり変わらぬ55cm前後を呈することから、様子状施設を支える柱の存在が考えられる。$P_6$は深さ25cmとやや浅いが底部より2の甕形土器底部と考えられる5（接合には致らなかったが色調、胎土、焼成が非常によく似ている。）が検出されている為、あるいは貯蔵穴的なものかも知れない。壁は明瞭に検出され、比較的緩やかに立ち上っている。周溝は検出されず、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　9点の図示可能な遺物が検出されている。2・3・5・6はそれぞれ床密着、あるいは床直上からの検出であり、本遺構に伴うものと考えられる。1・4・7は、床面より10～15cm程浮いた状況で検出され、8・9は覆土中より検出した一括資料である。

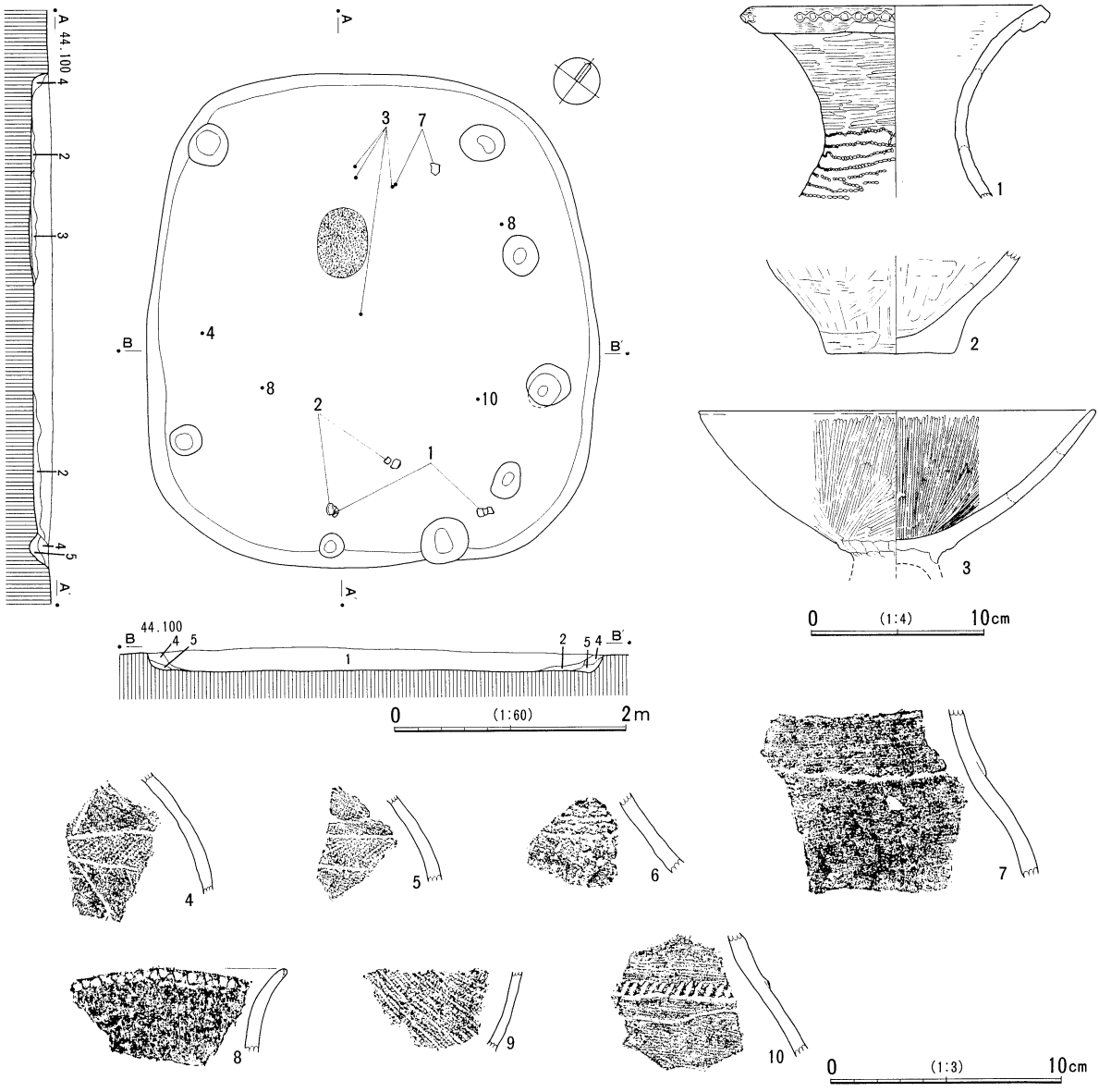



**第36図**　54号遺構実測図,出土遺物実測図

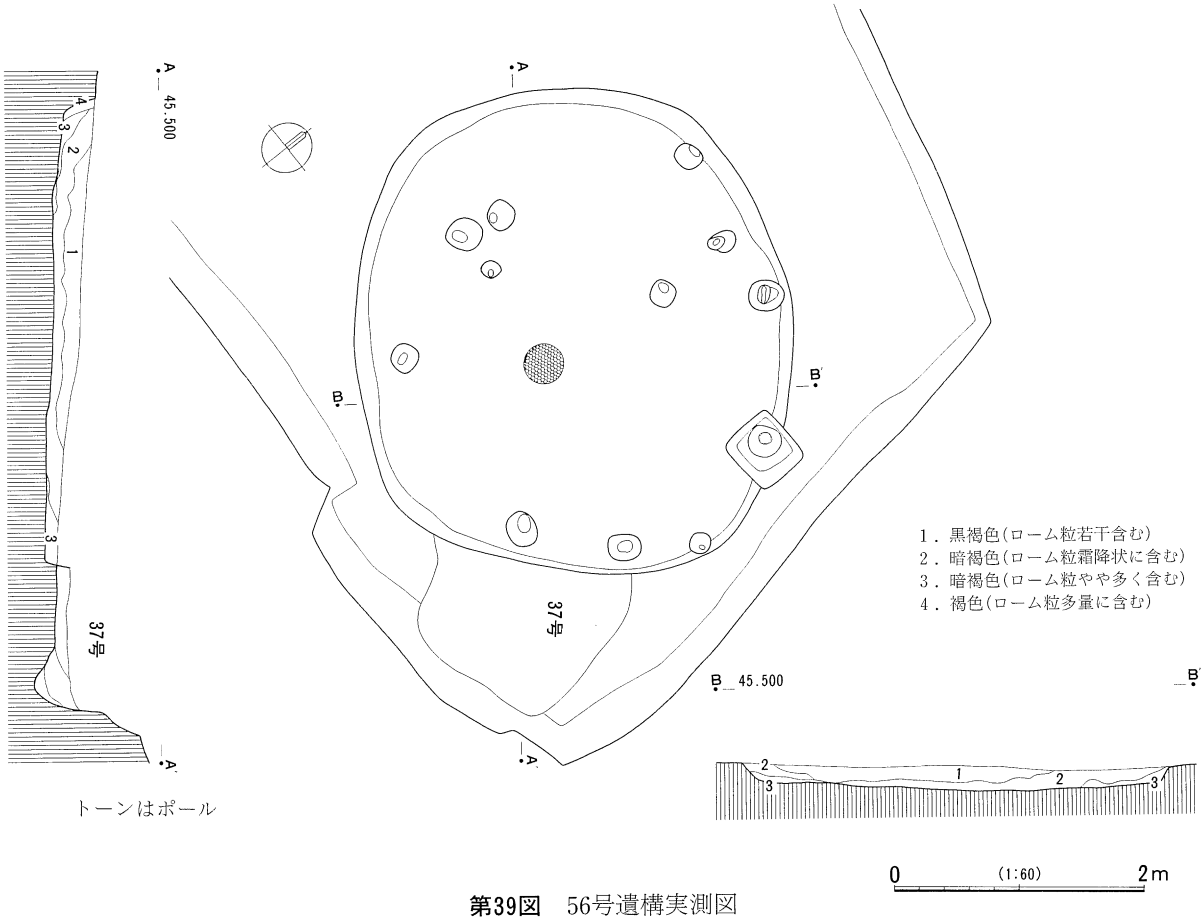



1．黒褐色(ローム粒まばらに含む)
2．暗褐色(ローム粒やや多く含む)
3．赤褐色(炉)
4．暗褐色(ローム粒多く含む)
5．褐色(ローム粒多量に含む)

**第37図**　54号遺構出土遺物実測図




**第38図**　55号遺構実測図,出土遺物実測図




**第39図**　56号遺構実測図

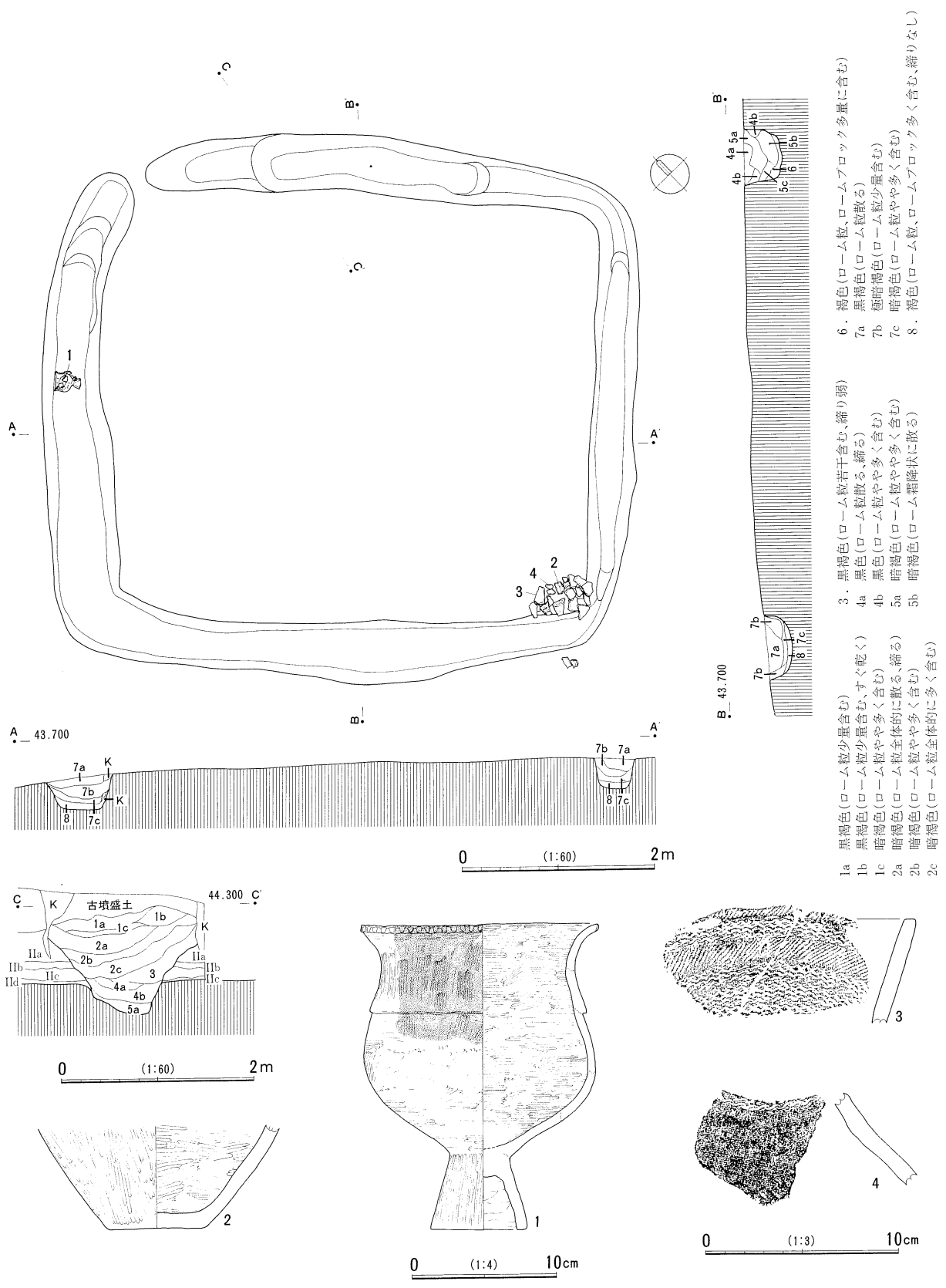
**55号遺構**（第38図、図版８・21）

平面形は南北方向にやや長い隅丸長方形を呈している。長軸4.2m、短軸3.84mを測り、主軸方位はN—38°—Wを示す。確認面からの掘り込みは20cm前後を測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。床面はほぼ平坦であるものの全体的に軟弱である。中央やや北よりに炉が検出され、よく焼けている。Pitは計８本検出されるが、いずれが主柱穴になるのかはよくわからない。深さはそれぞれ30～25cm前後を測り、柱痕跡は検出されなかった。壁は比較的急激に立ち上るものの周溝は検出されず、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　10点の図示可能遺物を検出している。これらの遺物のうち１・２は、床直上において検出される以外は、いずれも５～15cm前後浮いた状況で炉の周辺から多く検出されている。また一括して取り上げてしまったものも多く、いずれが本遺構に直接伴うかどうかは不明である。

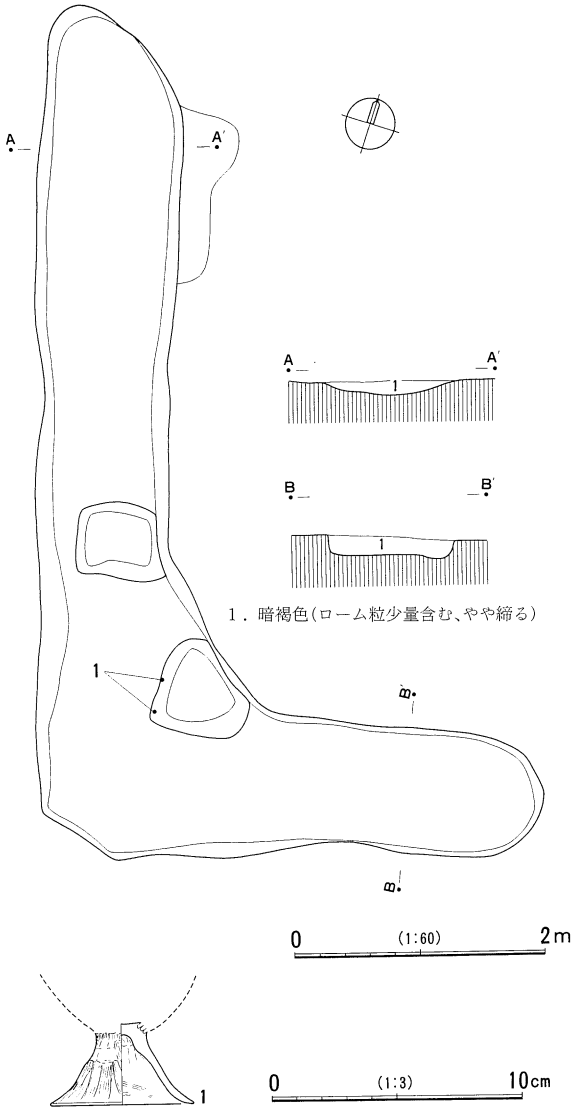
**56号遺構**（第39図、図版８）

調査区域東端の傾斜変換面に検出され、昭和62年の確認調査時に、その存在が認められていた遺構である。平面形は南北方向にやや長い楕円形を呈している。長軸3.84m、短軸3.58mを測り、長軸方位はN—53°—Wを示す。確認面からの掘り込みは深い所で24cm前後を測り、ハードローム層中に掘り込まれている。床面はほぼ平坦であるものの全体的に軟弱であり、ポール周辺に若干硬化した床面及び焼土が検出されたにすぎず、炉址の存在は認められなかった。Pitは12本検出されるものの、東側の




**第40図**　57号遺構実測図及び出土遺物実測図

四角い掘り方を有するものは、深さ62cmを測り、明瞭な柱痕跡を有している。これ以外は、深さ20～35cm前後を測るものの柱痕跡を認めることはできなかった。壁は比較的緩やかに立ち上っており、周溝は検出されず、覆土は自然堆積の状況を示している。




**第41図**　58号遺構実測図及び出土遺物実測図

**遺物**　Pit 及び覆土中より４片の弥生土器細片を検出したにすぎず、図示に到るものはない。

## 2　方形周溝墓

**57号遺構**（第40図、図版９・21）

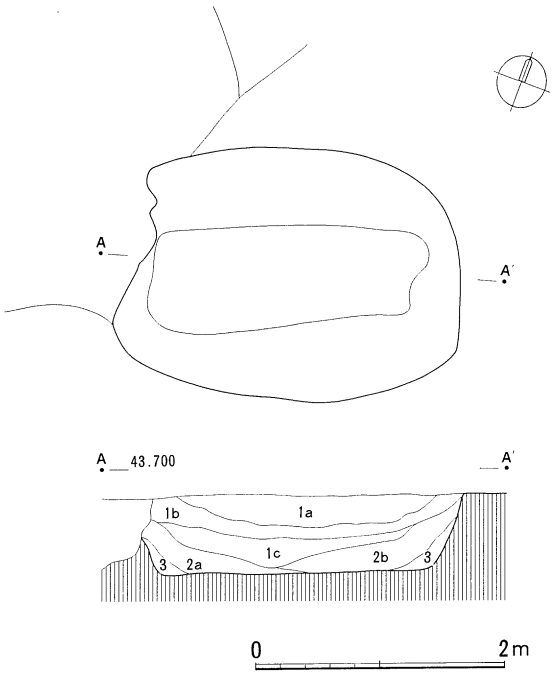
73号遺構墳丘下の傾斜変換面より検出されている。確認面における平面形は北隅の一端が切れる隅丸方形を呈している。A～A′・B～B′における外縁径及び内縁径の規模は、それぞれ、6.12•4.86m、5.64・4.41mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合の主軸方位は、N—41°—Eを示している。周溝は30～72cmの幅で巡り、溝底は、北及び東側周溝の一部を除けば深さ30cm前後を測り、ほぼ平坦である。北側周溝及び東側周溝の中央部は、他と比較しても明瞭に一段下がっており、深さは溝底より北側で20cm、東側で10cm前後を測る。また北側周溝の一部は、本遺構検出の際残存していた73号遺構墳丘下基本土層中を掘り込んで構築されている様相が捉えられたが、残存部分が少なく、本遺構に盛土が存在したかどうかまでは不明であった。しかしながら、土層断面における深込の深さは１m前後を測ることが観察され、構築時には相当の規模を有していたことが窺われ、北隅の一端が確実に切れていたかどうかは疑わしい。

**遺物**　南コーナー部及び西側周溝中央部より検出されている。いずれも確認面より浮いた状況で検出されているものの、前述したごとく周溝掘り込み面がかなり高い位置に復原されることから、いずれも本遺構に直接伴うものと考えられる。２～４は、南コーナー部からまとまって検出されており、接合関係に到らなかったものの、胎土・焼成が近似し、赤彩を有するなどの共通性が認められることから、同一個体と考えられる。

**58号遺構**（第41図、図版９）

遺跡東端の傾斜変換面に位置する。覆土の一部を66号遺構に切られて存在し、現存する遺構部分以外は、すでに流出してしまったものと考えられる。

現存する平面形は「L」字形を呈する。A～A′、B～B′間における周溝の幅及び深さは、それぞれ１m、12cm前後を測る。溝底は皿状を呈し、壁立ち上りは緩であり、コーナー付近に２ヶ所の Pit 状の落ち込みが認められるが、いずれも底面よりも６cm程下がっている程度であり、明瞭な Pit ではなく底面が若干窪む程度のものである。




1a　黒色(ローム粒少量散る)
1b　黒色(ローム粒霜降状に含む)
1c　黒色(ローム粒霜降状にやや多く含む)
2a　暗褐色(ローム粒霜降状に全体的に散る、ローム量やや多い)
2b　暗褐色(ローム粒霜降状に全体的に散る、ローム量やや少い)
3．暗褐色(ローム粒多量に含む、締り弱)

**第42図**　59号遺構実測図

**遺物**　覆土中一括も含めて総数31点の土師器細片が検出されているが、図示に到ったものは南側Pit状の落ち込み中より検出された1の小型高坏脚部のみである。

### 3　土　坑

**59号遺構**（第42図、図版9）

昭和62年の確認調査時に、その存在が認められた遺構である。ただし、この時点では、7号遺構東側に検出された撹乱と共に、いわゆる風倒木痕を形成しているものと考えていた。

西側の一部を撹乱によって削平されるものの、平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈するものと考えられる。残存する長軸2.67m、短軸2.01mを測り、短軸方位はN—22°—Wを示す。確認面からの掘り込みは65cm前後を測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、覆土は極めて有機質性の強い黒色土である。壁はやや急激に立ち上っている。

**遺物**　本遺構からは何の遺物も出されていない。しかしながら、市原市諏訪台遺跡等においては、本遺構に類似する弥生時代の土壙墓が多数検出されている例などから、ここでは土壙墓的な性格のものとして捉えておきたい。

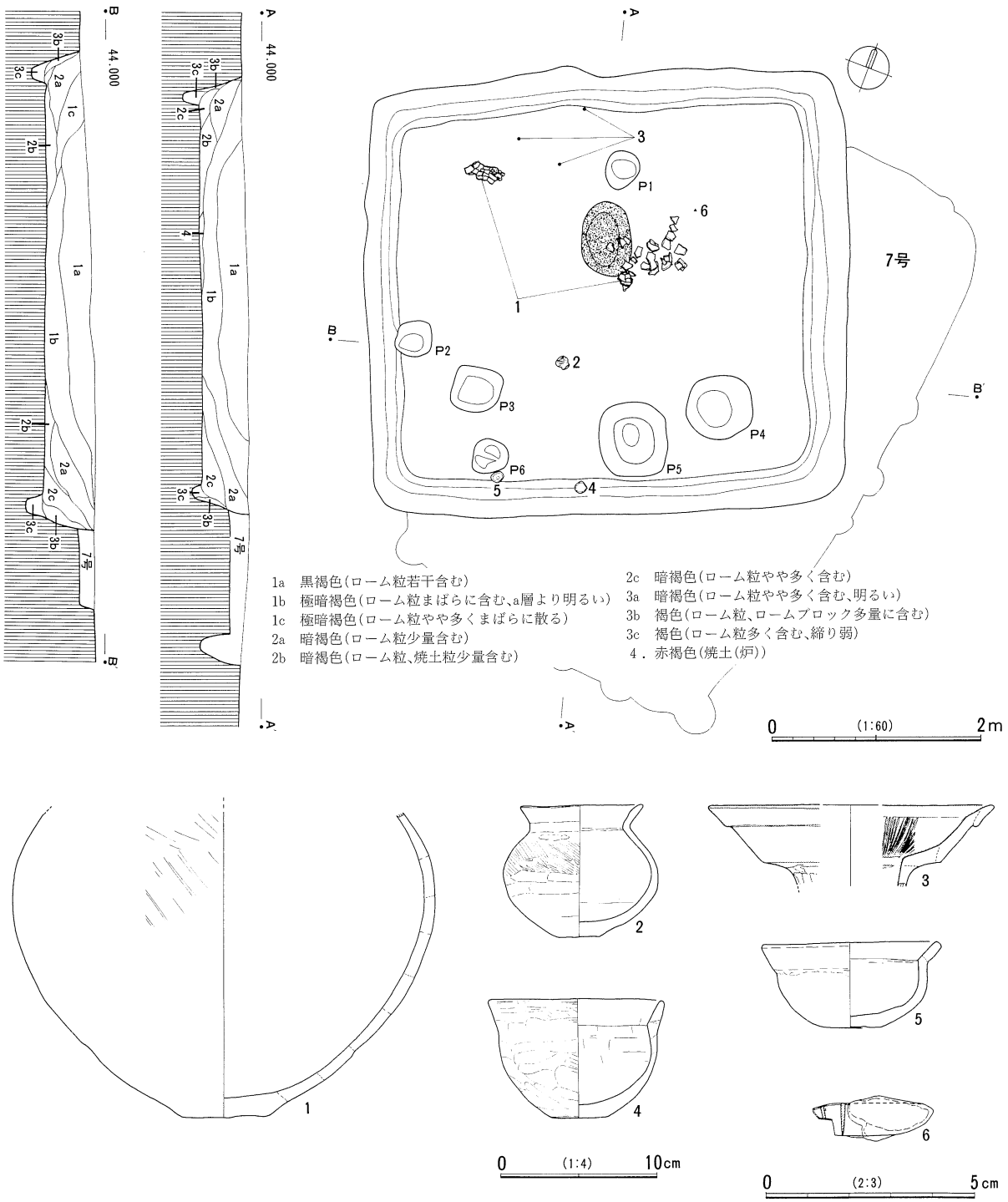
## 3．古　墳　時　代

### 1　住居跡

**60号遺構**（第43図、図版3・10・21）

平面形は方形を呈する。長軸4.62m、短軸4.14mを測り、短軸方位はN—23°—Wを示す。確認面からの掘り込みは46cm前後を測り、ハードローム層中に掘り込まれている。床面はほぼ平坦であるものの全体的に軟弱であり、中央北側に炉が存在する。Pitは計6本検出されるが、明瞭な主柱穴は検出されなかった。$P_5$は入口施設と考えられ、深さは床面より50cmを測る。これ以外はすべて20～22cm前後の深さを測り、明瞭な柱痕跡等は検出されなかった。周溝は全周し、深さは18～12cm前後を測る。壁は明瞭に検出され、立ち上りは急激であり、覆土は自然堆積の状況を示している。

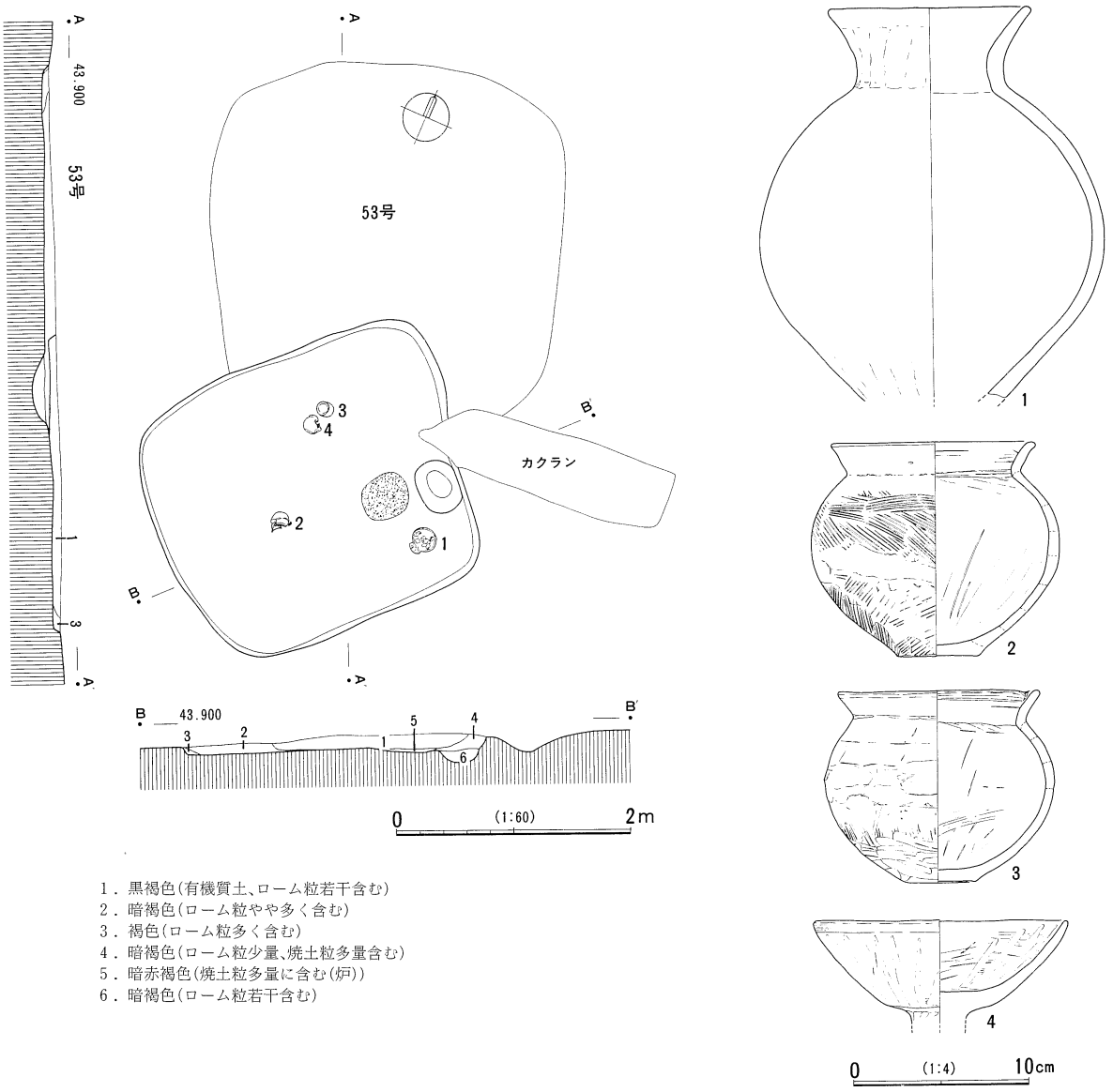
**遺物**　合計6点の図示可能な遺物が検出されている。このうち4は、床面より30cm程浮いた状況で検出された以外は、すべて床密着及び床直上で検出されており、本遺構に直接伴うものと考えられる。6は先端部の錆膨れがひどく、全体的な器形はやや不明瞭であるが、片関を有し、刃が存在することが認められることから、あるいは刀子かと考えられる。残存長3.6cm、身部長32cm重量は3.5gを量る。




**第43図**　60号遺構実測図,出土遺物実測図

**61号遺構**（第44図、図版10・22）

東側の一部を重機によって削平されているものの、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。長軸2.67m、短軸2.34mを測り、短軸方位はN－45°－Wを示している。確認面からの掘り込みは12cm前後を測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。床面はほぼ平坦であるものの全体的に軟弱であり、中央東側よりに炉が存在する。Pitは炉東側壁面に接して１本検出されており、深さは床面より12cmを測り、やや浅い感がある。周溝は存在せず壁は急激に立ち上り、覆土は自然堆積の状況を示して



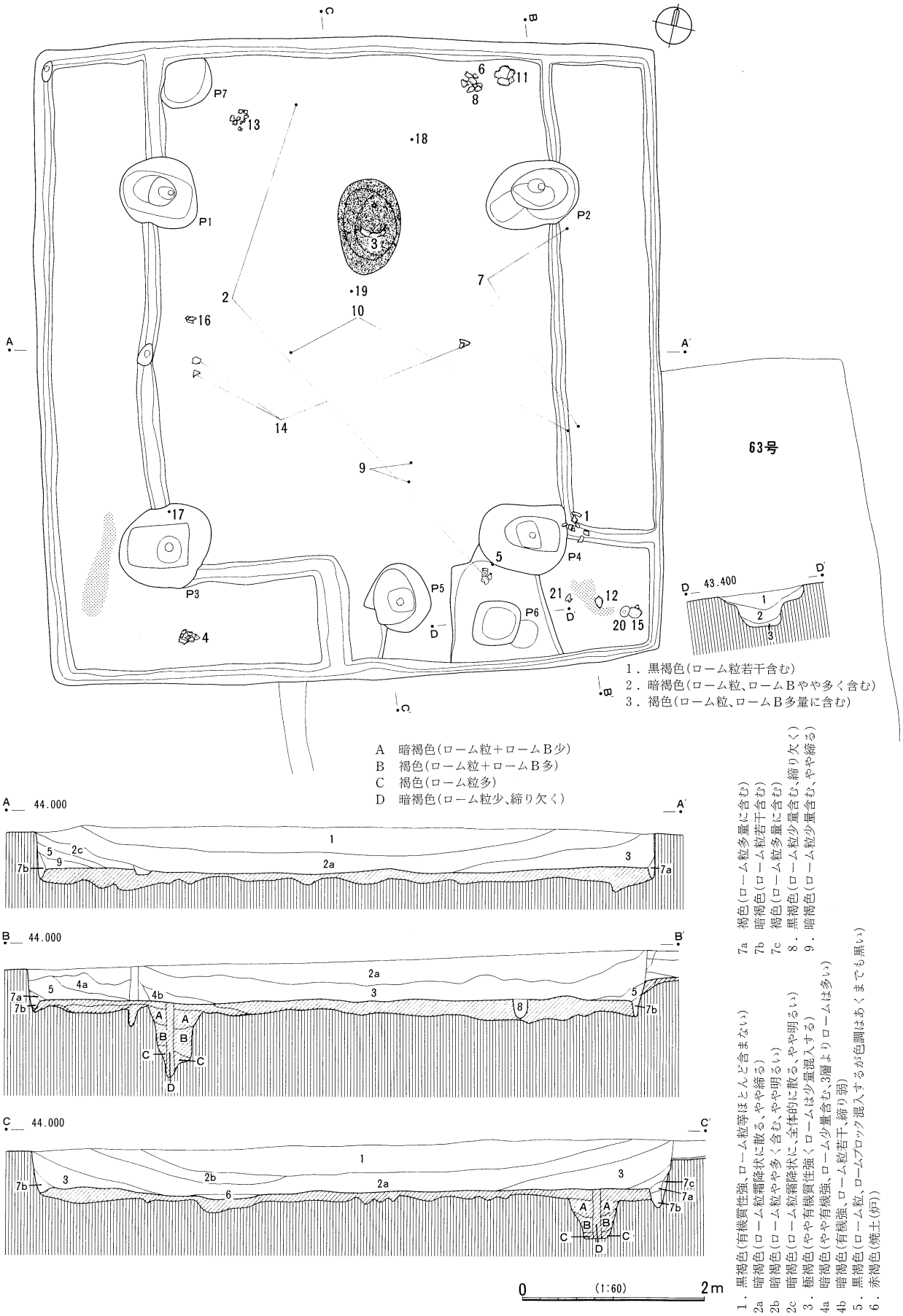

**第44図**　61号遺構実測図，出土遺物実測図

いる。

**遺物**　合計4点の図示可能な遺物が検出された。これらの遺物はいずれも床密着の状況で検出されており、本遺構に直接伴うものと考えられる。なお1・2は、調査時に完形で検出されたものであるが、カラスの襲撃にあい、その一部を紛失してしまったことを申し加えておく。

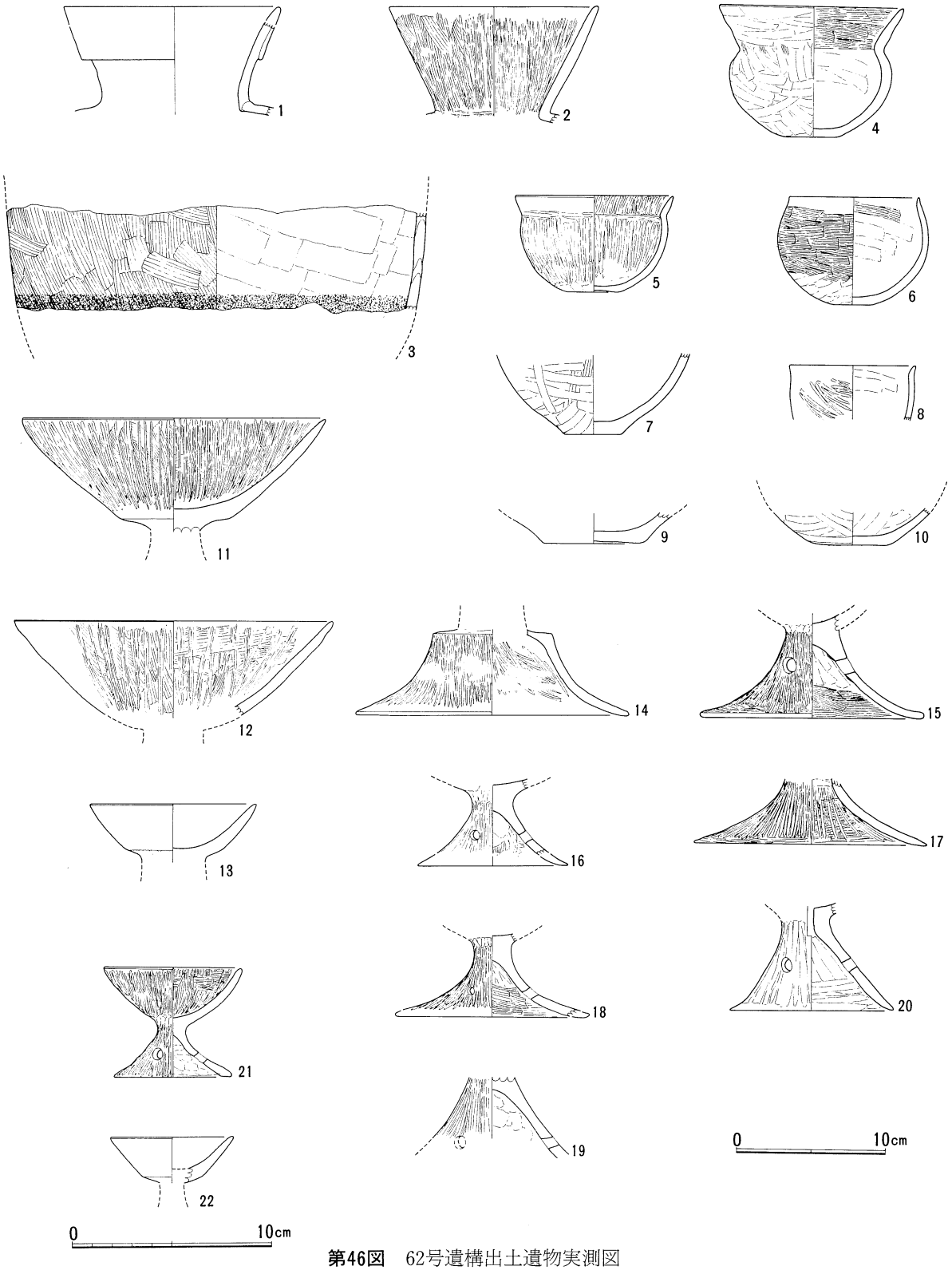
**62号遺構**（第45図、図版10・22・23）

63号遺構を切って存在し、平面形は方形を呈している。長軸6.96m、短軸6.81mを測り、主軸方位はN—12°—Wを示す。確認面からの掘り込みは54cm前後を測り、ハードローム層中に掘り込まれている。床は貼床であり、全体的に硬く踏み固められている。間仕切り溝によって仕切られた西・東側の周縁部は、炉の存在する中央部よりも7～10cm程高くなっており、いわゆるベッド状を呈している。主柱穴は4本検出され、深さはそれぞれ$P_1$が94cm、$P_2$が81cm、$P_3$が109cm、$P_4$が94cmを測り、底部に明瞭な柱痕跡を有している。$P_5$は入口施設と考えられ、深さは60cmを測り、柱痕跡を有することか




1．黒褐色(有機質性強、ローム粒等ほとんど含まない)
2a 暗褐色(ローム粒霜降状に散る、やや締る)
2b 暗褐色(ローム粒やや多く含む、やや明るい)
2c 暗褐色(ローム粒霜降状に、全体的に散る、やや明るい)
3．極褐色(やや有機質性強くロームは少量混入する)
4a 暗褐色(やや有機質強、ローム少量含む、3層よりロームは多い)
4b 暗褐色(有機強、ローム粒若干、締り弱)
5．黒褐色(ローム粒、ロームブロック混入するが色調はあくまでも黒い)
6．赤褐色(焼土(炉))
7a 褐色(ローム粒多量に含む)
7b 暗褐色(ローム粒若干含む)
7c 褐色(ローム粒多量に含む)
8．黒褐色(ローム粒少量含む、締り欠く)
9．暗褐色(ローム粒少量含む、やや締る)

**第45図**　62号遺構実測図




**第46図**　62号遺構出土遺物実測図

ら、この上に何らかの入口施設に伴う設備があったものと考えられる。$P_6$は貯蔵穴と考えられ、Pitの存在する付近のみ床面が15cm程方形を呈して下っており、あるいは板材等の蓋が存在した可能性が考えられる。深さは41cmを測り、堀り込み面の一部に厚さ最大15cmに及ぶ粘土ブロックが検出されている。$P_7$は、深さ15cmを測り、底面はほぼ平坦である。炉は$P_1$・$P_2$のほぼ中央に検出され、よく焼け

ている。周溝は全周し、深さは５～15cm前後を測る。壁は明瞭に検出され、立ち上りは急激であり、覆土は自然堆積の状況を示している。

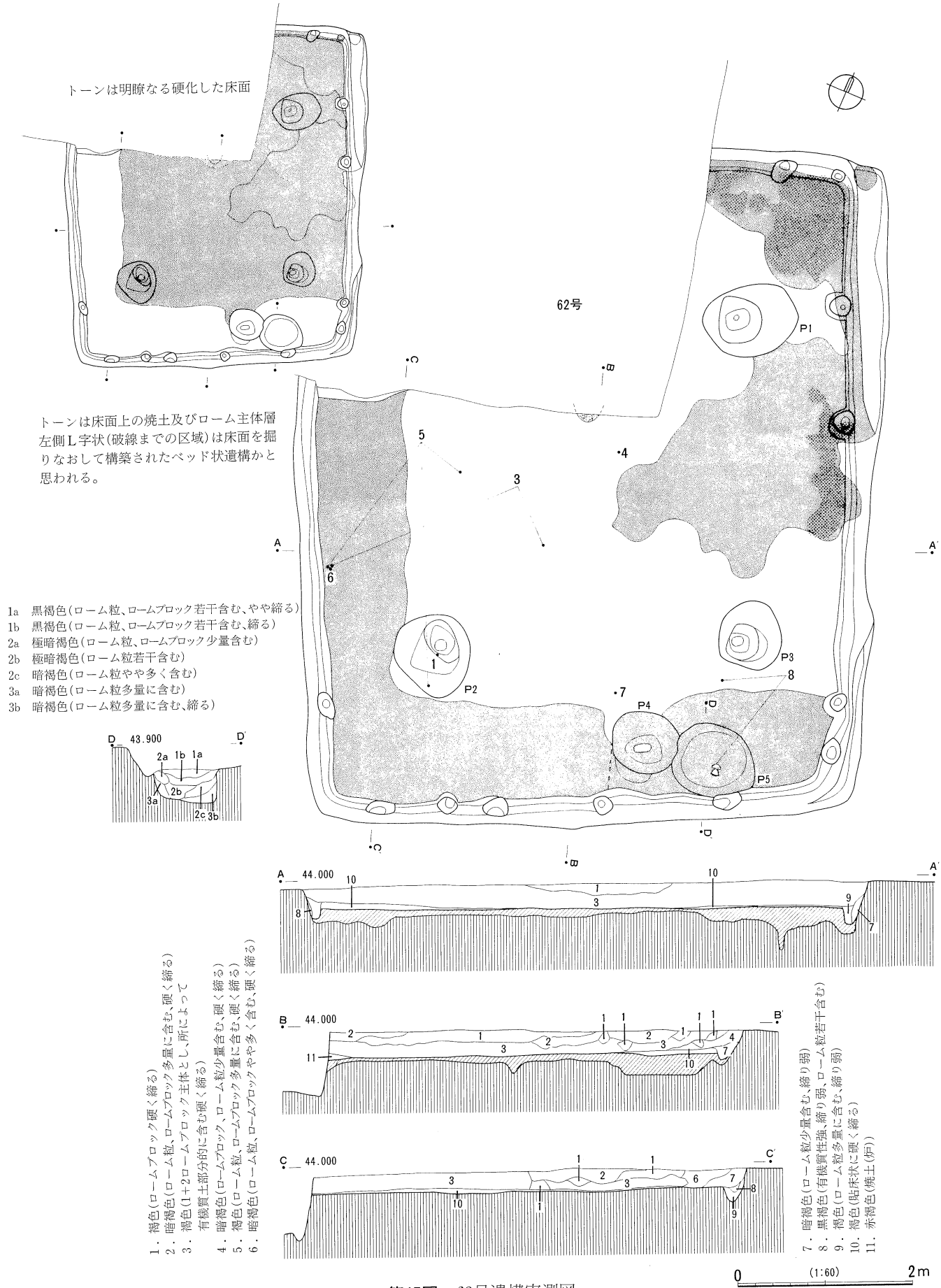
**遺物**　総数22点の図示可能性遺物が検出されている。これらの遺物のほとんどが床直上、あるいは密着の状況を検出されており、本遺構に直接伴うものと考えられる。このうち３は、甕形土器片の２次利用品であり炉内に下端の一部を埋没させて検出されていることから、五徳的用途として使用されたものかと考えられる。また14は坏部かとも考えられたが、内外面端部がいわゆる坏部状に丁寧な調整が施されていないことから、脚部として実測を行った。また21・22はミニチュアの高坏であり、特に21は丁寧に仕上げられている。また２と５は、貯蔵穴上面からの検出であるが、21と同じレベルで中ば埋没した状況で検出されていることから、$P_6$上面には、蓋状のものが存在していたものと推定された。

**63号遺構**　（47・48図,図版10・23）

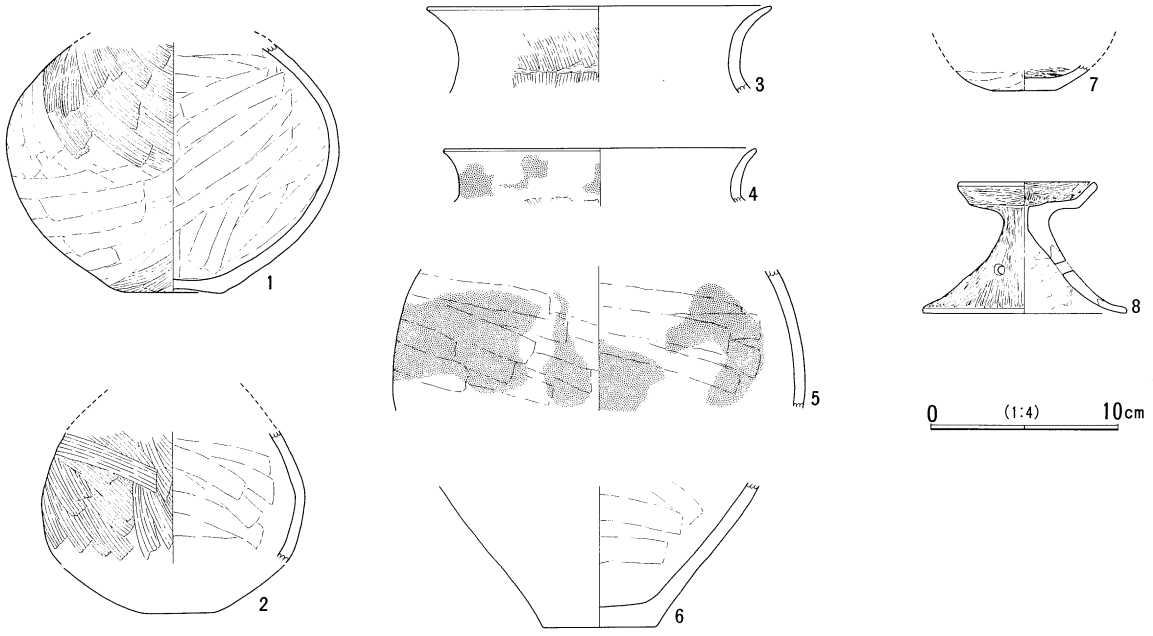
63号遺構に北側の一部を削平されて存在する。平面形は南北方向にやや長い長方形を呈するものと考えられ、残存した東壁・南壁はそれぞれ一辺7.26m・6.06mを測り、東壁方位はN—23°—Wを示している。確認面からの堀り込みは30cm前後を測り、ハードローム層中に堀り込まれている。床は貼床であり、第47図左上のトーンで示した範囲が、全体的に硬く踏み固まっている。西・南側の周縁部はＬ字形を呈し、ロームブロックを主体とする土が一段高くなって検出されており、やや締っている。当初ベッド状遺構かと思われたが、入口施設と考えられる$P_4$及び貯蔵穴と考えられる$P_5$の上を覆っていることから、いささか腑におちない。しかしながら、$P_4$南側付近でやや硬度が軟弱に変わることから、$P_4$より西側のみが、ベッド状遺構であろうと考えられた。北及び東側の床面上には焼土が厚い所で18cmに渡って検出されており、床面まで焼けている。また、この焼土の上にローム粒・ロームブロックを主体とする土が、厚い所で30cmに渡って覆っていた。また土層断面によれば、遺構全域に渡って覆土中にローム粒・ロームブロックが少なからず検出されており、この傾向は、特に壁周囲2.4m前後に渡ってほぼ全面的に観察されており、人為的な埋めもどしの可能性が考えられる。また貼り床をはがしてみた所、ベッド状遺構と思われた箇所や、焼土やその上を覆うロームブロックを主体とする層が検出された範囲のみ一段深く堀り下る傾向が認められた。

主柱穴は３本検出され、深さはそれぞれ$P_1$が64cm、$P_2$が65cm、$P_3$が69cmを測り、いずれも底部に明瞭な柱痕跡を有している。$P_4$は入口施設に伴うものと考えられ、深さは55cmを測り、柱痕跡を有することから、この上に何らかの入口施設に伴う設備があったものと考えられる。$P_5$は貯蔵穴と考えられ、底面は平坦であり、深さは42cmを測る。炉は中央やや北側にほんの少しだけ検出されるものの、よく焼けている。壁は、東壁部分のみが明瞭ではなく周溝外側が、ダラダラと立ち上っている。周溝は全周していたものと考えられ、深さは10～15cm前後を測る。また62号遺構$P_5$は、位置的に63号遺構主柱穴としても不思議ではなく、あるいは柱穴を堀りなおした再利用が考えられる。

**遺物**　総数８点の図示可能遺物が検出されている。このうち１と８を除けば、いずれも床面より10～15cm程浮いた状況で検出されている。１は$P_2$覆土内に一部埋没した状況で検出されている。また８は、$P_5$内からの検出であり、底面より約15cm程浮いた状況で検出されている。




**第47図**　63号遺構実測図




**第48図**　63号遺構出土遺物実測図

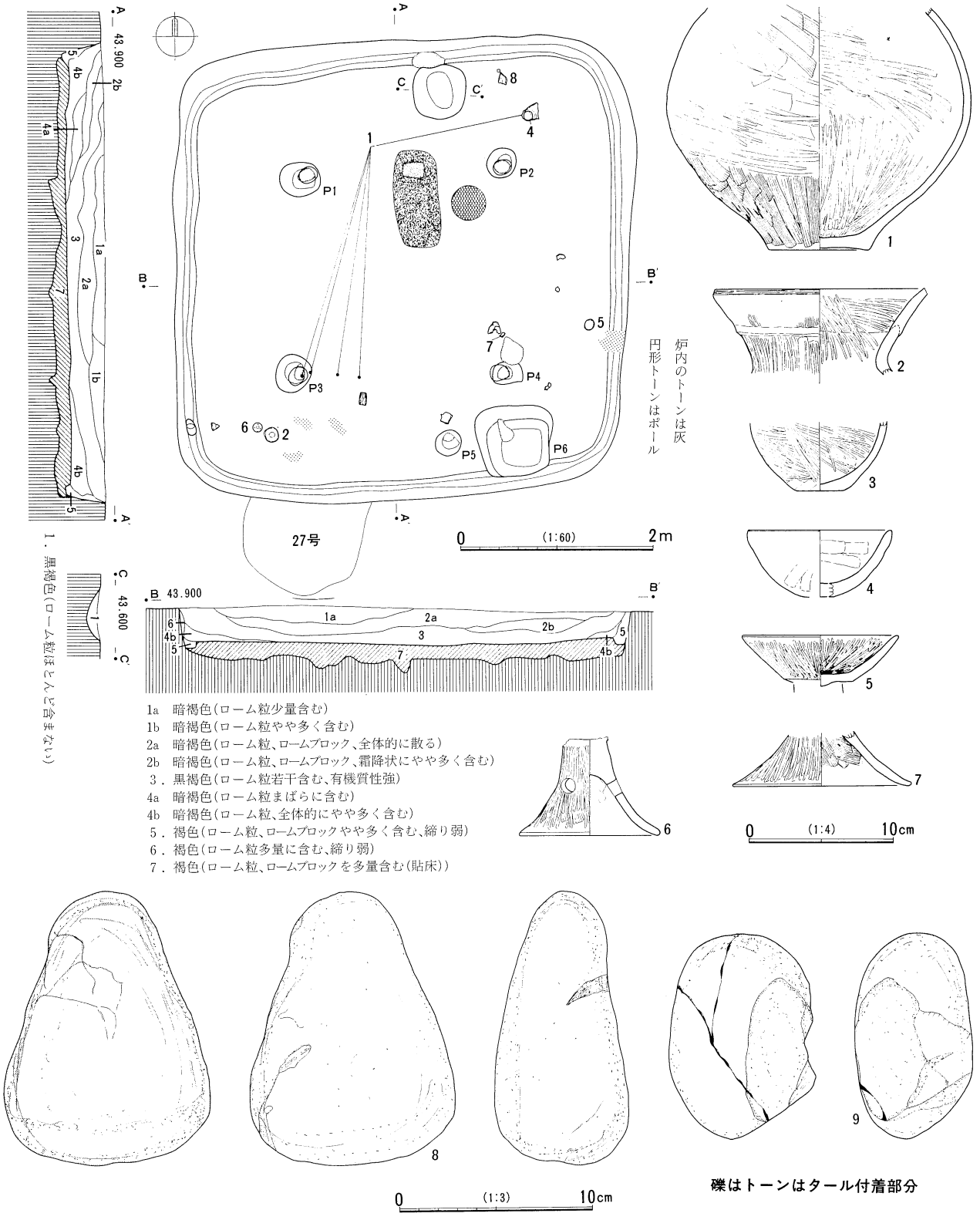
**64号遺構**（第49図・図版11・23）

遺構内にポールが存在するものの、比較的に遺存状況は良好である。平面形は隅丸方形を呈しており、長軸4.76m、短軸4.70mを測り、長軸方位はN－1°－Eを示している。確認面からの堀り込みは床面で37cm前後を測り、ハードローム層中に堀り込まれている。床は貼床であり、全面的に硬く踏み固められている。主柱穴は4本検出され、深さはそれぞれ$P_1$が54cm、$P_2$が53cm、$P_3$が46cm、$P_4$が46cmを測り、底部に明瞭な柱痕跡を有している。$P_5$は入口施設と考えられ、深さは30cmを測り、斜めに柱状痕跡を有している。$P_6$は貯蔵穴と考えられ、深さは36cmを測る。またこの周囲のみ、床面より10cm程下がって検出されていることから、蓋に相当する施設が存在した可能性が考えられる。またPitコーナー部～底部にかけて、粘土ブロックが厚さ5～10cmに渡って検出されている。北側に位置するPitは性格不明なものであるが、深さは18cmを測り底面は緩かに立ち上っている。北側に粘土ブロックが周溝を埋めつくす様に検出された。またこの他$P_4$北側にも厚さ10cmに渡って粘土ブロックが検出されている。炉は中央北側に存在し、よく焼けている。火床の上面に灰が厚さ7cmに渡って検出された。この他南壁及び東壁付近の床面上に、焼土・炭化物が散在している状況が観察された。周溝は深さ10～12cm前後に渡って全周しており、壁立ち上りは急激であり、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　総数9点図示可能遺物が検出されている。これらの遺物のうち8・9を除けばいずれも床直上、あるいは床密着の状況で検出されたものであり、直接本遺構に伴うものと考えられる。4は、1の甕形土器破片上に、伏せた状況で検出されている。また8・9は覆土下層中から検出され、一括して取り上げてしまったものであるが、特別な加工痕は認められないものの、かなり広範囲に渡ってタールの付着が認められたものである。

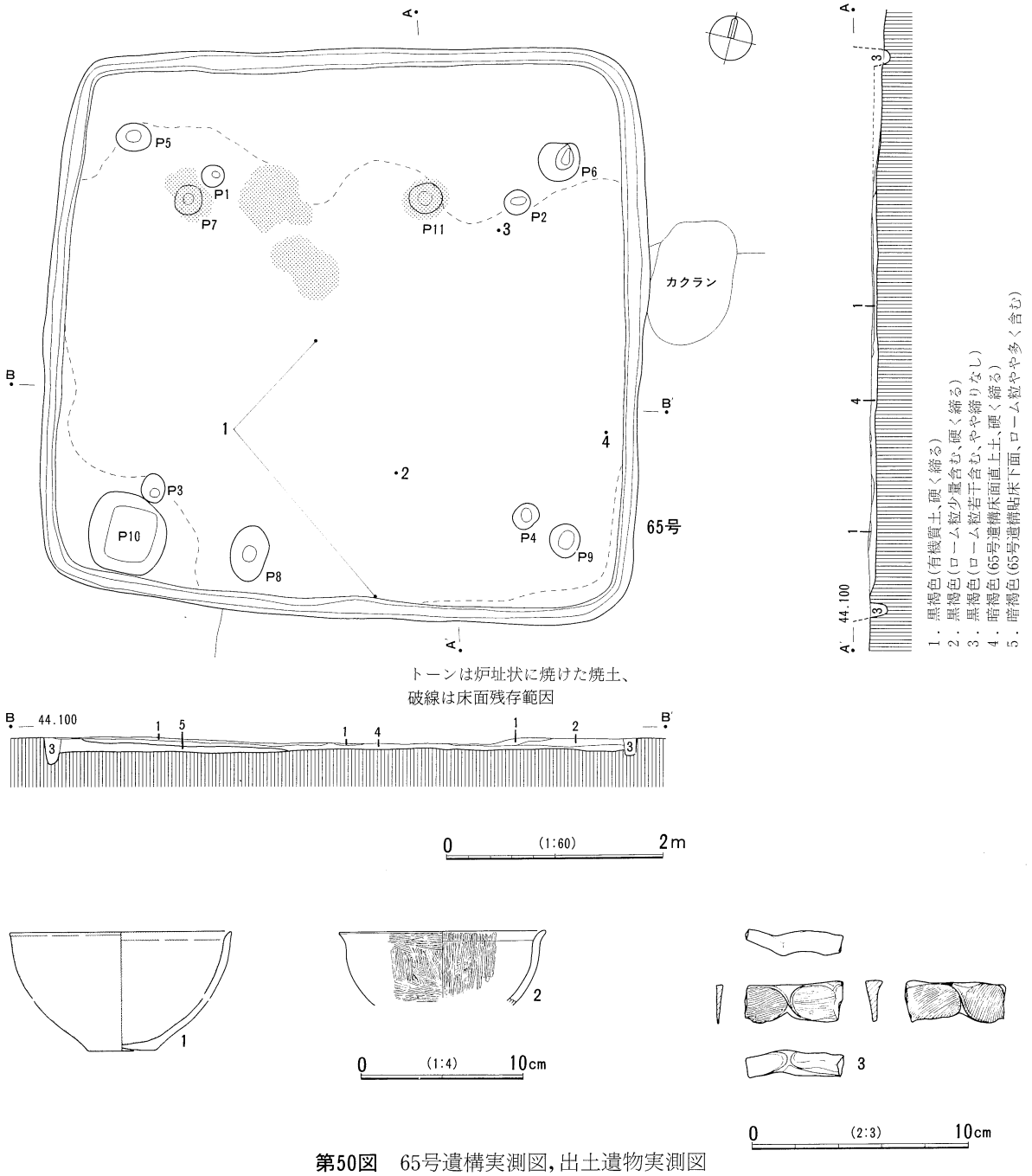
**65号遺構**（第50図・図版11・23）

遺構覆土の大半及び北側の一部は、床面以下に達する重機の削平を受けて存在する。平面形は東西



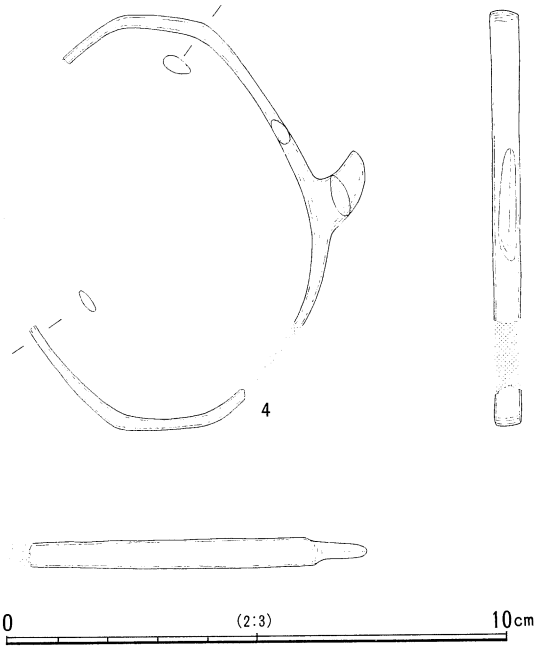

**第49図**　64号遺構実測図,出土遺物実測図

方向にやや長い、隅丸方形を呈している。長軸5.56m、短軸5.26mを測り、短軸方位はN—12°—Wを示している。確認面から床面までの堀り込みの深さは、最も遺存状況の良好な箇所でも6cm弱を測り、一部はすでに床面が露出してしまっている。66号遺構覆土内及びローム漸移層中に堀り込まれており、




**第50図**　65号遺構実測図,出土遺物実測図

残存した床面は比較的よく踏み固められている。床は貼床であり、Pitは貼床除去以前は9本検出されているが、いずれも明瞭な柱痕跡を有しておらず、一部は貯蔵穴、あるいはわずかな床の切れ間からのぞく66号遺構覆土を誤認して堀り込んでしまったものも含まれるものと考えられ、床面残存状況下でのすべて調査終了時に貼床除去を行い再確認を行なった結果、$P_1$～$P_4$を主柱穴と捉えることが妥当と考えられた。深さはそれぞれ床面より$P_1$22cm、$P_2$21cm、$P_3$22cm、$P_4$23cm、$P_5$26cm、$P_6$12cm、$P_7$15cm、$P_8$59cm、$P_9$21cm、$P_{10}$58cm、$P_{11}$25cmを測る。このうち$P_1$及び$P_{11}$は、炉址火床状によく焼けた床面の下より貼床除去後に検出されたものである。$P_8$は66号遺構壁面に添って検出されており、66号遺構覆土を誤認して堀り込んでしまった可能性が考えられる。$P_{10}$は、当初柱穴状に掘ってしまったが、図示のごとく方形を呈しており、貯蔵穴であるものと考えられる。焼土は4箇所に検出された。



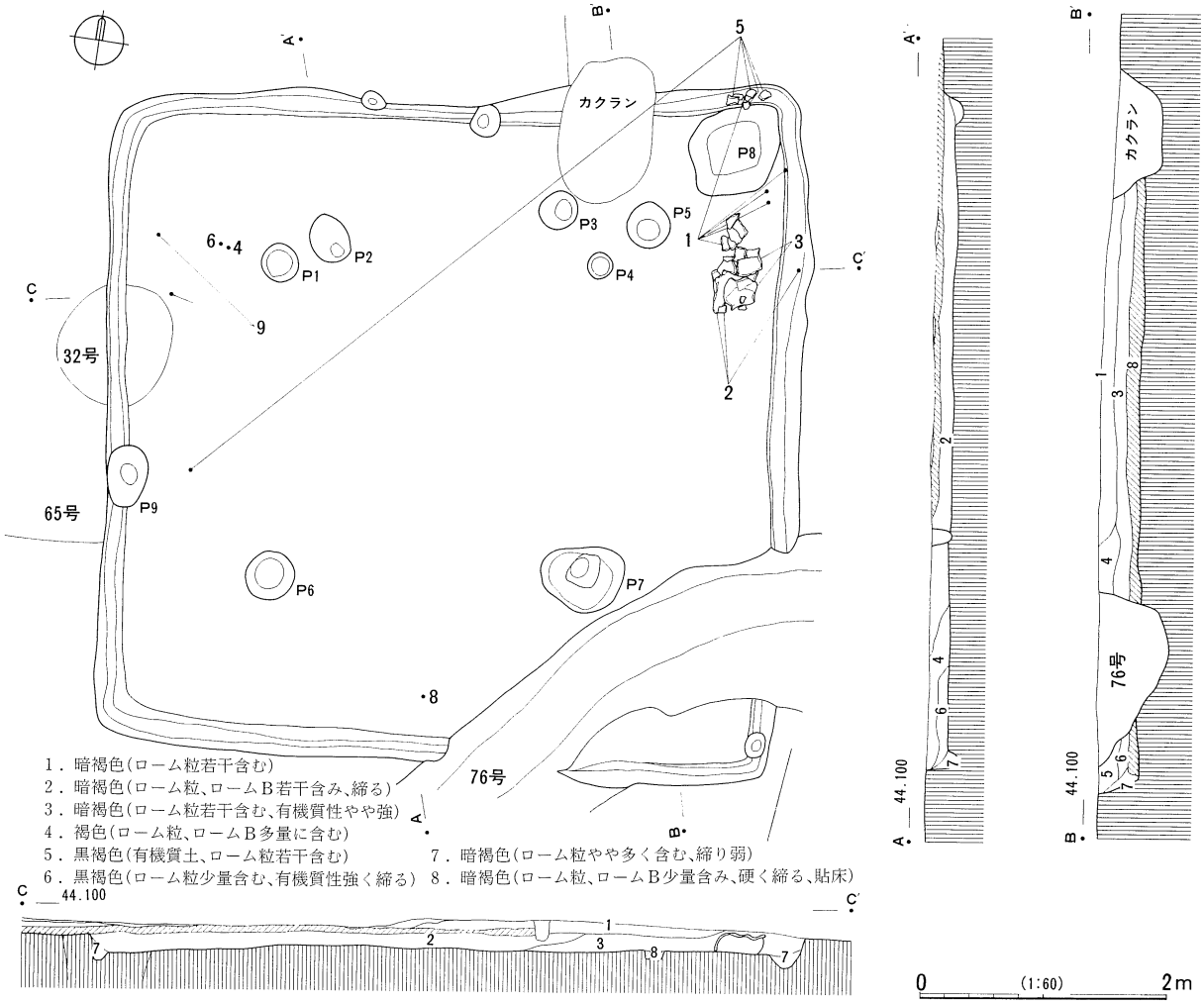

**第51図**　65号遺構出土遺物実測図

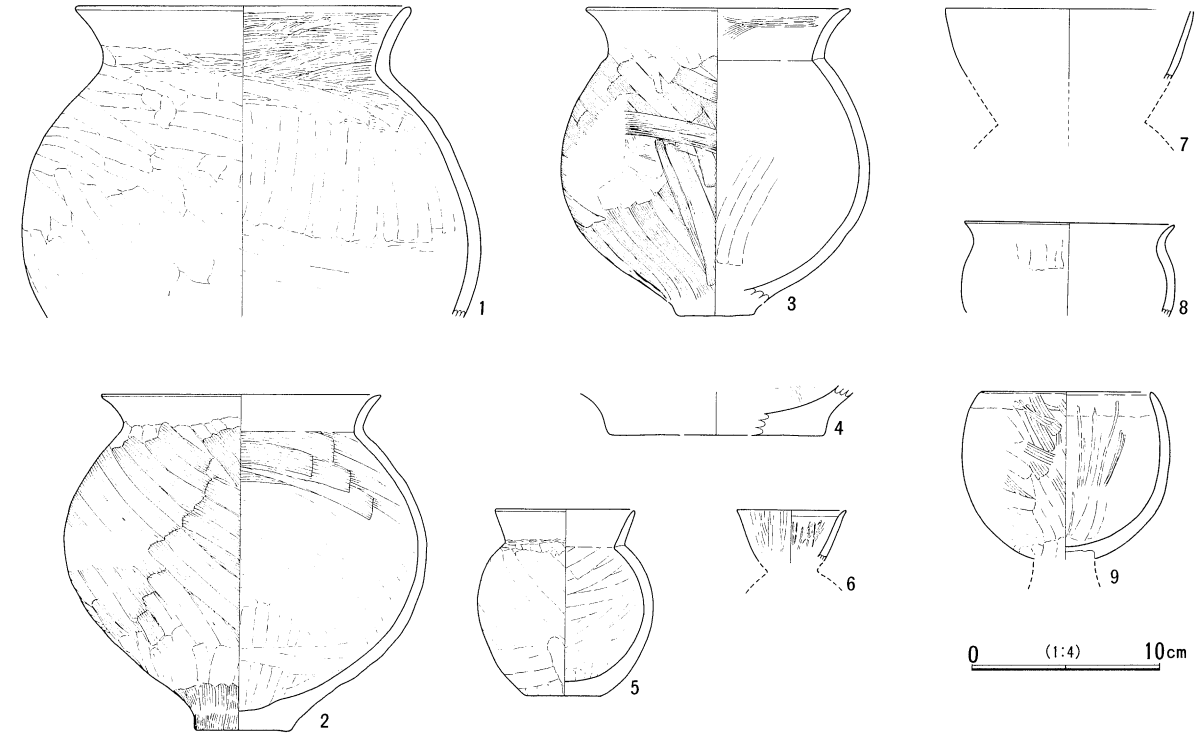
いずれも炉址火床のごとく、よく焼けていることから、いずれが炉なのかよくわからない。あるいはすべてが炉なのかも知れない。いずれにせよ66号遺構覆土上面上の貼床部にまで及んでいることから、本遺構の方が66号遺構より新しい時期の遺構であることは明白である。また本遺構は火災住居跡ではないと考えられることから、火に関わる儀式的なことが行なわれたのかも知れない。

**遺物**　前述のごとく、覆土の大半がすでに失なわれており、検出された遺物も少ない。1は接合関係に致らなかったが、内外面に赤彩が施こされており、胎土・焼成とも近似することから、同一個体であるものと考えられる。3は指によって捩じられたまま焼成されており、表裏に明瞭な指紋を残している。両端部は欠存しており、いかなる形状になるのかは不明であるが、仮に両端部のRがそのままで内傾する器形のものであれば、釧状の製品になるのかも知れない。4は東側周溝付近より検出された青銅製の「有鉤銅釧」である。調査時に移植ゴテに触れてしまい、左側の大部分を破損させてしまったが、細々になった破片の断面を観察しても銅の腐蝕が最大限まで進み、いわゆる芯あるいは核となる部分が存在しておらず、指で触れてもボロボロになる状態であった。また鉤の部分を中心とすれば、大きく3点に折れた形で検出されており、有鉤部分と上位の破片は接合することが出来たが、木根によって破損されたと考えられる下位の部分は接合に到らなかった。また有鉤部分を除いた上下の2点は、移植ゴテの衝撃で若干動いているものと考えられ、少なくとも細々になった破片のそれぞれ上端・下端まで下げて（下端部分の小破片と有鉤部より下位破片の左端は接合している）復元しなければならなかった。したがって法量はあくまでも推定の域を出ないが、長外径（8.2）cm、短外径（6.5）cm（有銅部付根部分）、内孔長径（7.7）cm、内孔短径（5.0）cm前後に復元することが可能である。また幅は5㎜前後、厚さは1.5～3㎜前後であり、鉤の部分は本体よりも1cm程突起しており、幅8.5㎜、厚さ3㎜を呈し、重量は8.8ｇを量る。

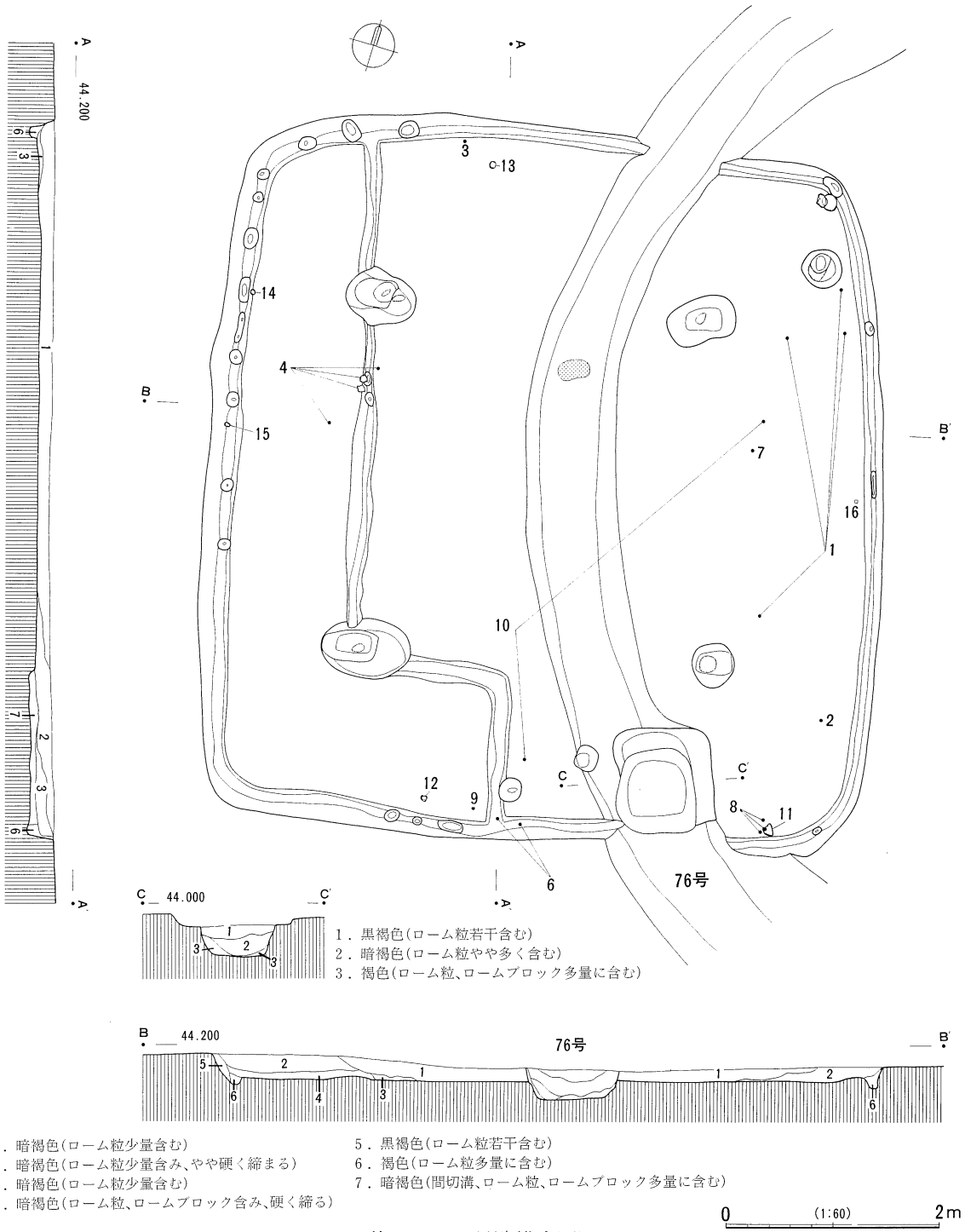
**66号遺構**（第51図、図版12・24）

65号遺構及び76号遺構に覆土の一部を切られて存在する。平面形は東西方向に長い方形を呈しており、長軸5.52m・短軸5.22mを測り、短軸方位はN－7°－Wを示している。確認面から床面までの堀り込みは、遺存状況の良好な所で22cmを測り、ハードローム層中に堀り込まれている。床は貼床であるが、全体的に軟弱である。Pitは床面に9本、周溝内に4本検出され、深さはそれぞれ$P_1$53cm、$P_2$53cm、$P_3$39cm、$P_4$44cm、$P_5$44cm、$P_6$37cm、$P_7$63cm、$P_8$42cmを測り、周溝内に検出されるもののうち、$P_9$を除けばいずれも小Pitである。主柱穴は$P_1$、$P_4$、$P_6$、$P_7$によって形成されているものと考えられ、$P_8$は貯蔵穴であると考えられる。また$P_9$は65号遺構検出$P_8$と同じであり、いずれに帰属す



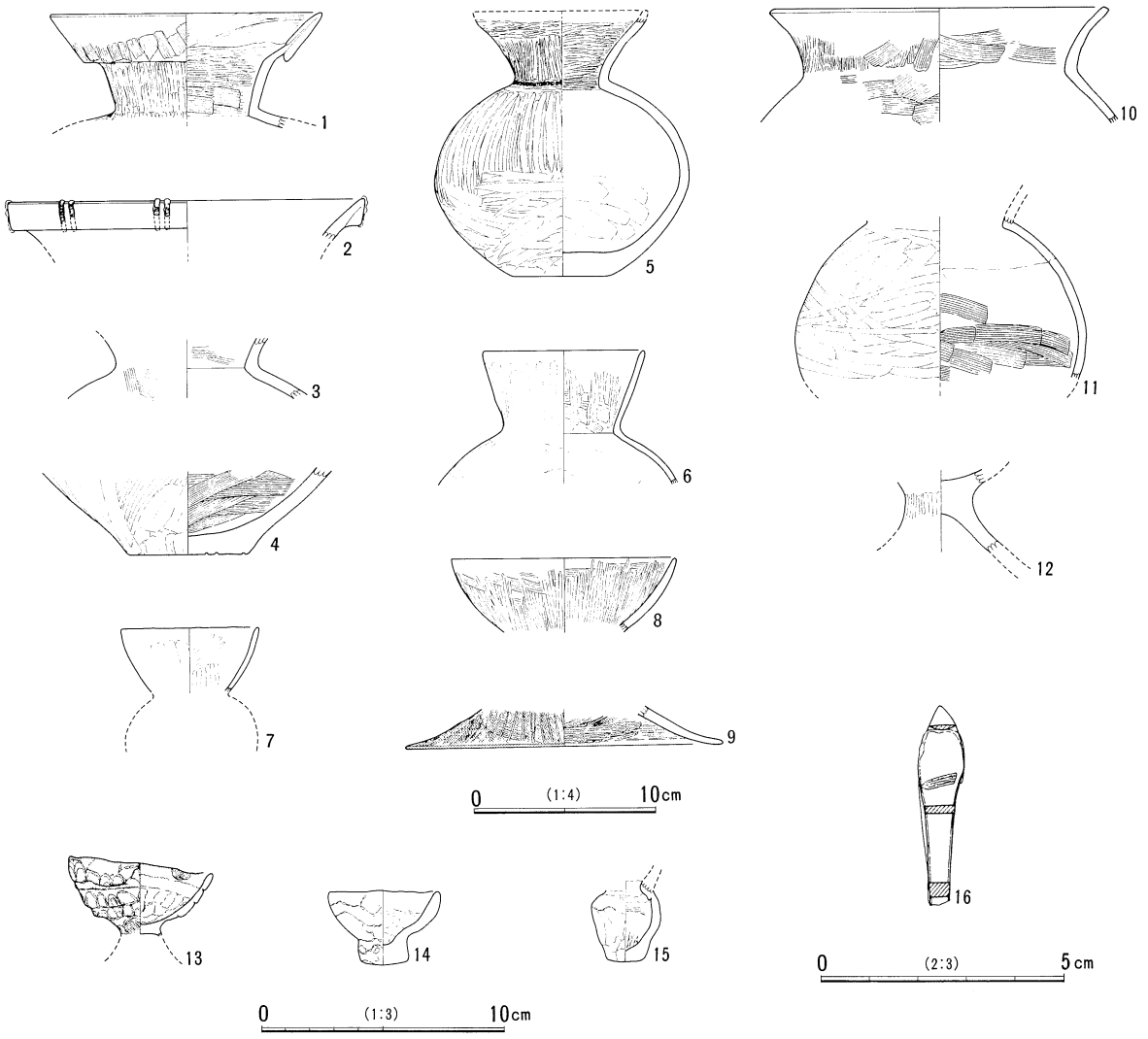

**第52図**　66号遺構実測図,出土遺物実測図




**第53図**　67号遺構実測図

るのかよくわからない。炉は存在せず、上面に検出された65号遺構とは対照的な存在である。周溝は全周するものと考えられ、壁立ち上りは比較的急激である。覆土は、南側一帯にローム粒・ロームブロックを主体とする褐色土層が検出されることから、あるいは人為的埋土の可能性が考えられる。

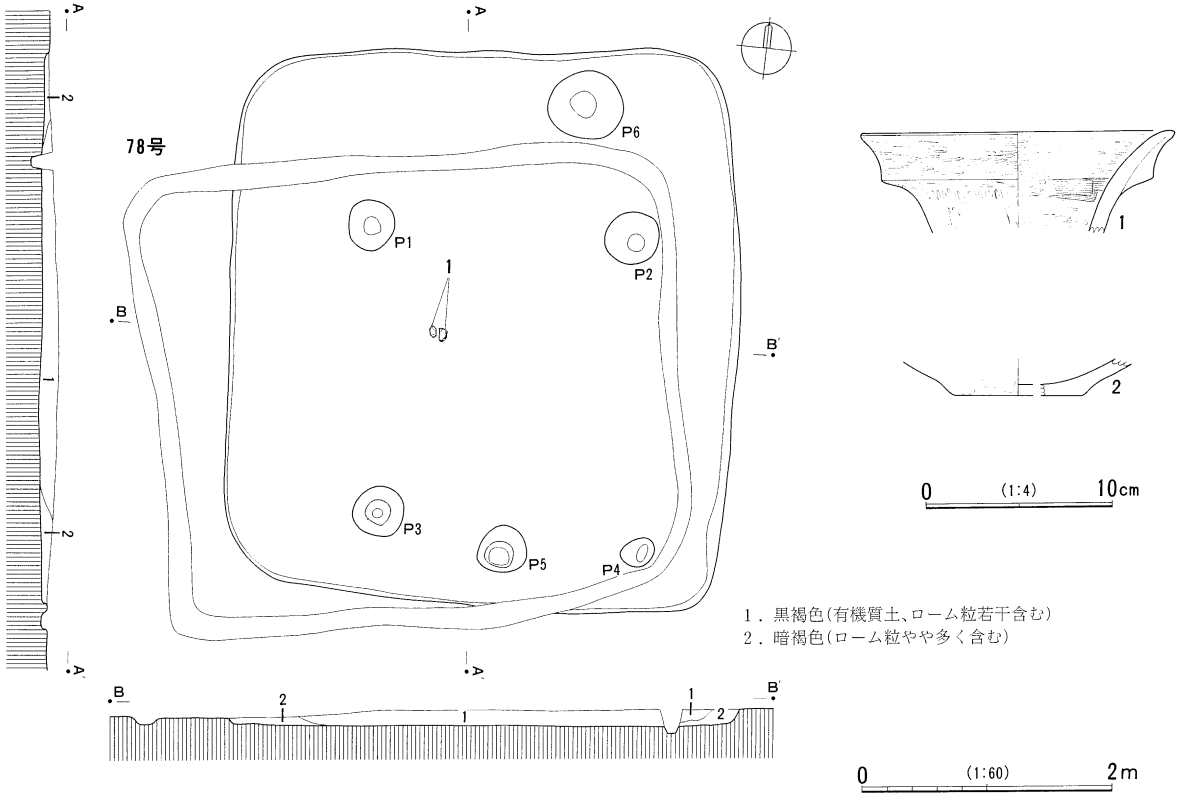
**遺物**　合計9点の図示可能遺物が検出された。1～3は、貯蔵穴と考えられる$P_8$周辺の床面に重なり合った状況で検出されている。5は北東コーナー周溝内よりまとまった状況で検出されており、一部西側の床面上から検出された1点と接合関係を有している。これ以外の遺物は、いずれも床面より10～15cm程浮いた状況で検出されている。




**第54図**　67号遺構出土遺物実測図

**67号遺構**（第53図・図版12・24・25）

74号遺構に中央部を削平されて存在し、平面形は南北方向に長い隅丸方形を呈している。長軸6.66m、短軸6.34mを測り、長軸方位はN—16°—Wを示している。確認面からの堀り込みは20cm前後を測り、ソフトローム層中に堀り込まれており、床は全体的に硬く踏み固められている。Pitは計8本検出され、$P_1$～$P_4$は主柱穴であるものと考えられる。深さはそれぞれ$P_1$56cm、$P_2$63cm、$P_3$66cm、$P_4$78cmを測り、明瞭な柱痕跡がそれぞれに検出されている。また$P_1$・$P_3$はそれぞれ底面より30cm程高い位置にテラス部分を有しており、P1からは柱痕跡が認められたことから、あるいは拡張が行なわれたものと考えられる。$P_5$は76号遺構周溝底面からの検出であるが、貯蔵穴と考えられ、深さは検出面より40cmを測り、底面はほぼ平坦である。周囲が15cm程一段下っていることから、蓋に相当する板状のものが存在していた可能性が考えられる。$P_6$は深さ49cmを測り、底面より20cm高い位置にテラス部分を有しており、柱痕跡を有している。このほか、南側の$P_5$付近に2本のPitが検出され、深さはそれぞれ40cm前後を測ることから、梯子状施設の存在が考えられる。間仕切溝によって仕切られた西側周縁は、床面よりも10cm程高くなっており、いわゆるベット状を呈している。明瞭なる炉は検出されなか



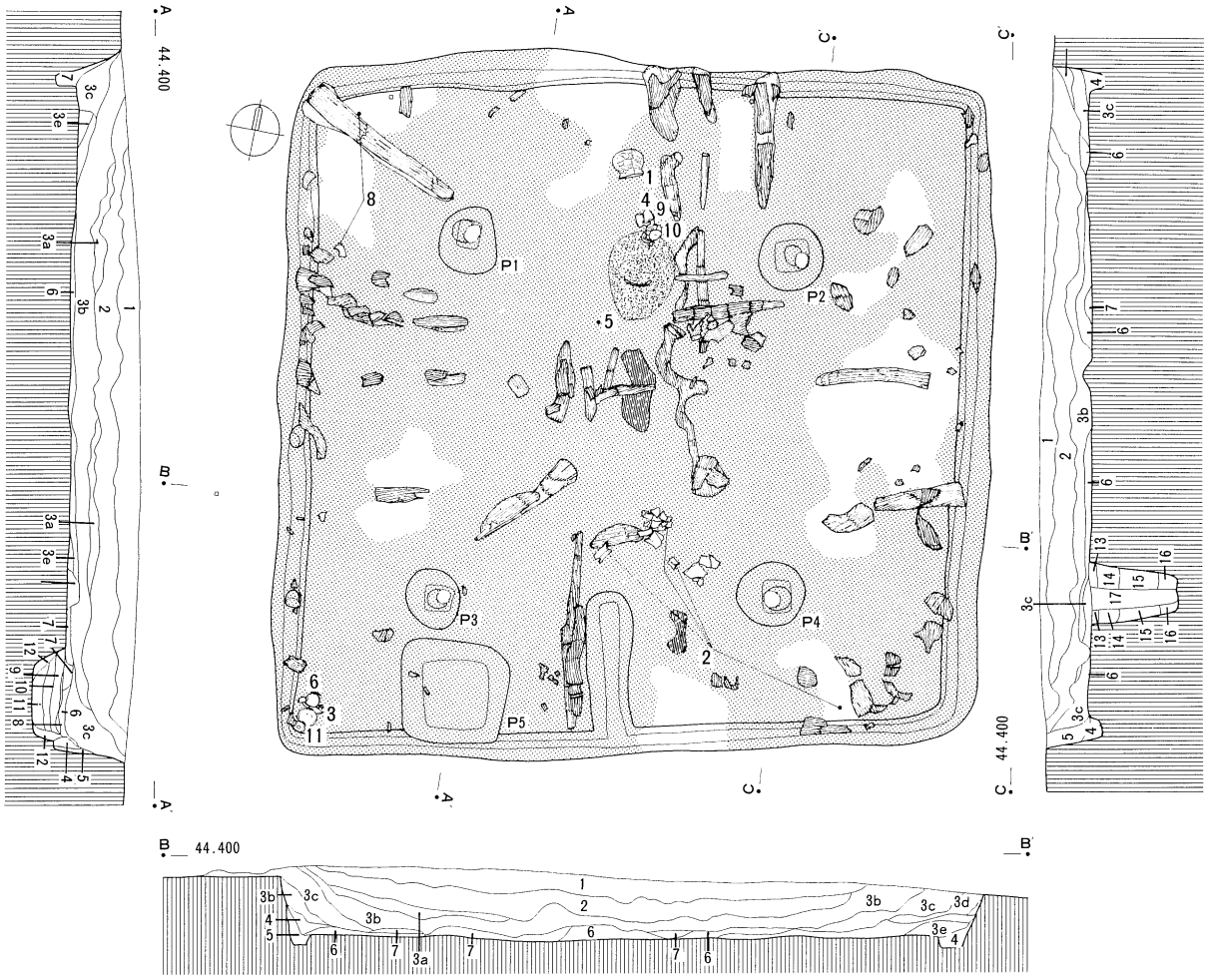

**第55図**　68号遺構実測図,出土遺物実測図

ったが、中央やや北側の76号遺構底面に、火床残存痕跡が認められることから、本遺構に伴う炉址であろうと考えられる。壁は急激に立ち上り、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　16点の図示可能遺物が検出された。これらの遺物は、いずれも周縁の壁際より検出される傾向が認められ、遺構中央付近で検出されるものは、図示に到らぬ小破片ばかりであり点数も少なく、やや異質な分布を示していると言える。また、床面よりも多少浮いて存在するものが多いが、図示したものに限れば、いずれも床面から５cm前後浮いた状況での検出であり、本遺構に直接伴うものと考えられる。４は図示できなかったが、底部に木葉痕を有している。５は頸部に竹管による連続刺突が認められる。13～15は、ミニチュア手捏土器でありそれぞれ高坏・坩・壺を表わしているものと考えられる。16は片丸無関鑿箭式の鉄鏃と考えられ、残存長4.1cmを呈している。刃長1.55cm、刃幅0.74cm、刃厚0.11cm、篦被幅0.42cmを測り、重量は2.0ｇを呈しており、刃部に若干の木質の付着が認められた。

**68号遺構**（第55図・図版12・25）

覆土の一部を78号遺構に削平されて存在する。平面形は南北方向にやや長い隅丸方形を呈し、長軸4.45m、短軸4.02mを測り、長軸方位はＮ－７°－Ｗを示す。確認面からの堀り込みは12cm前後を測りソフトローム層中に堀り込まれている。床面は全体的に軟弱であり、Pitは計６本検出されている。$P_1$～$P_4$は主柱穴と考えられ、深さはそれぞれ、$P_1$56cm、$P_2$50cm、$P_3$52cm、$P_4$41cmを測る。$P_5$は入口施設に伴うものと考えられ、深さは42cmを測る。$P_6$はいわゆる貯蔵穴と考えられ、底面は擂鉢状を呈しており、深さは22cmを測る。炉及び周溝は検出されなかった。壁は急激に立ち上り、覆土は自然堆




1．黒褐色(ローム粒少量含む)
2．暗褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む)
3a　黒褐色(ローム粒若干含む)
3b　暗褐色(焼土粒、炭化物多量に含む)
3c　黒褐色(ローム粒若干含む、最も色調黒い)
3d　暗褐色(ローム粒少量含む、ややしまりなし)
3e　黒褐色(炭化粒、焼土粒多量に含む)
4．暗褐色(ローム粒、ロームブロック少量含む)
5．褐色(ローム粒多量に含む)
6．赤褐色(焼土)
7．黒色(炭化物)
8．暗褐色(焼土、炭化物)
9．赤褐色(焼土)
10．暗褐色(炭化物、焼土)
11．暗褐色(ローム粒やや多く含む)
12．暗褐色(ローム粒多量に含む)
13．赤褐色(焼けた住居床面)
14．暗褐色(ローム粒、ロームやや多く含み、締る)
15．褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む)
16．暗褐色(有機質土とローム混合土)
17．暗褐色(締り弱、有機質土)

0　2m

トーンは焼土

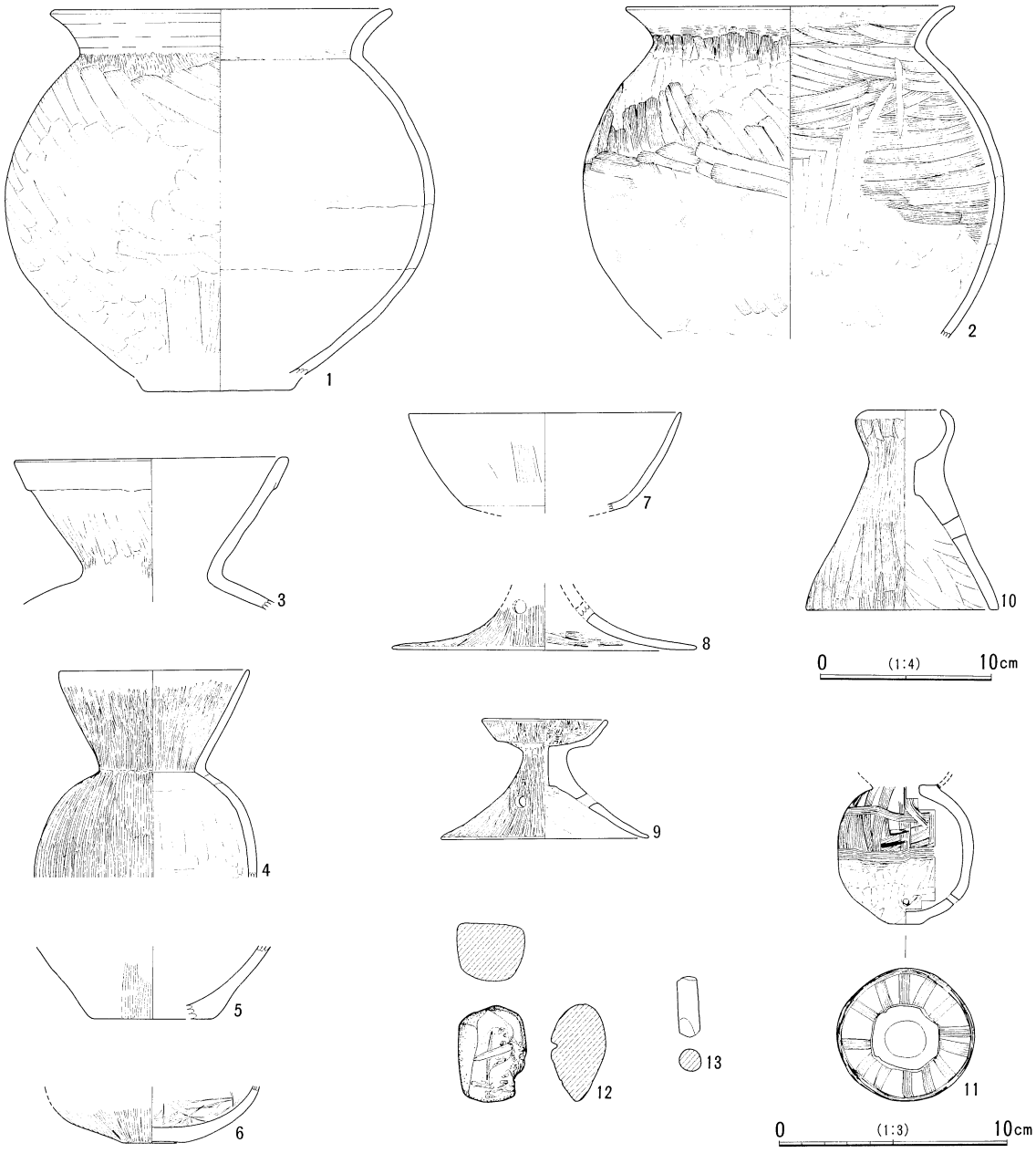
**第56図**　69号遺構実測図

積の状況を示している。

**遺物**　覆土中から合計77点の土師器片を散在的に検出した。これらはいずれもハケ整形を施された甕形土器の破片であったが、接合関係に到らず、図示できたのはわずか２点にすぎない。１は復合口縁の甕形土器であり、床面より５cm程浮いた状況で検出されている。２は甕形土器底部であるが、覆土一括で取り上げてしまったものである。

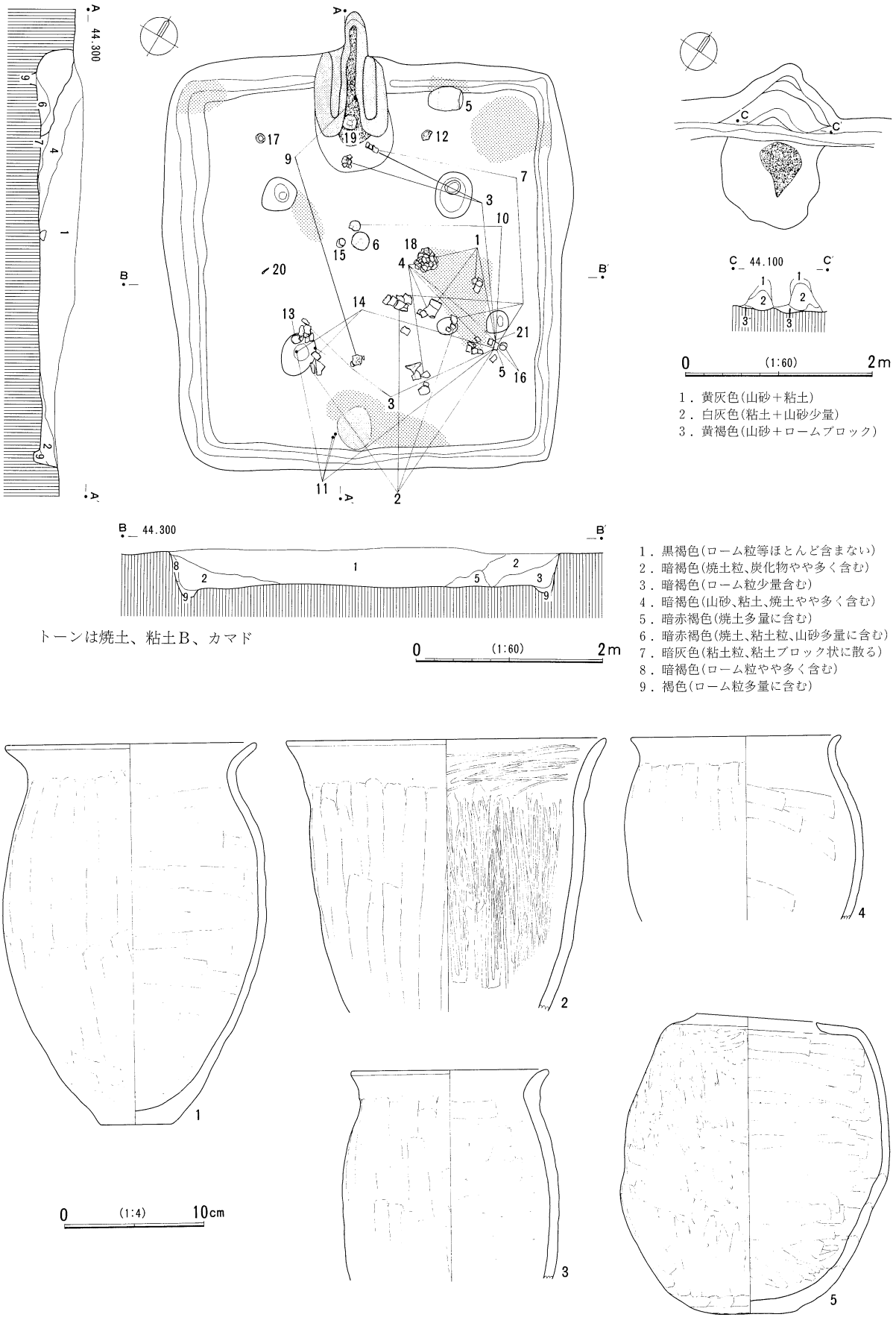
**69号遺構**（第56図・図版12・25・26）

調査区域東端部に検出された火災住居跡である。平面形は東西方向にやや長い方形を呈している。長軸5.68cm、短軸5.49cmを測り、短軸方位はN－7°－Wを示している。確認面からの堀り込みは54cm前後を測り、ハードローム層中に堀り込まれている。床は貼床であり、Pit柱軸跡及び周溝を除いて全体的に硬く踏み固まっているが、二次加熱を受けてボロボロになっている。Pitは計５本検出され、$P_1$

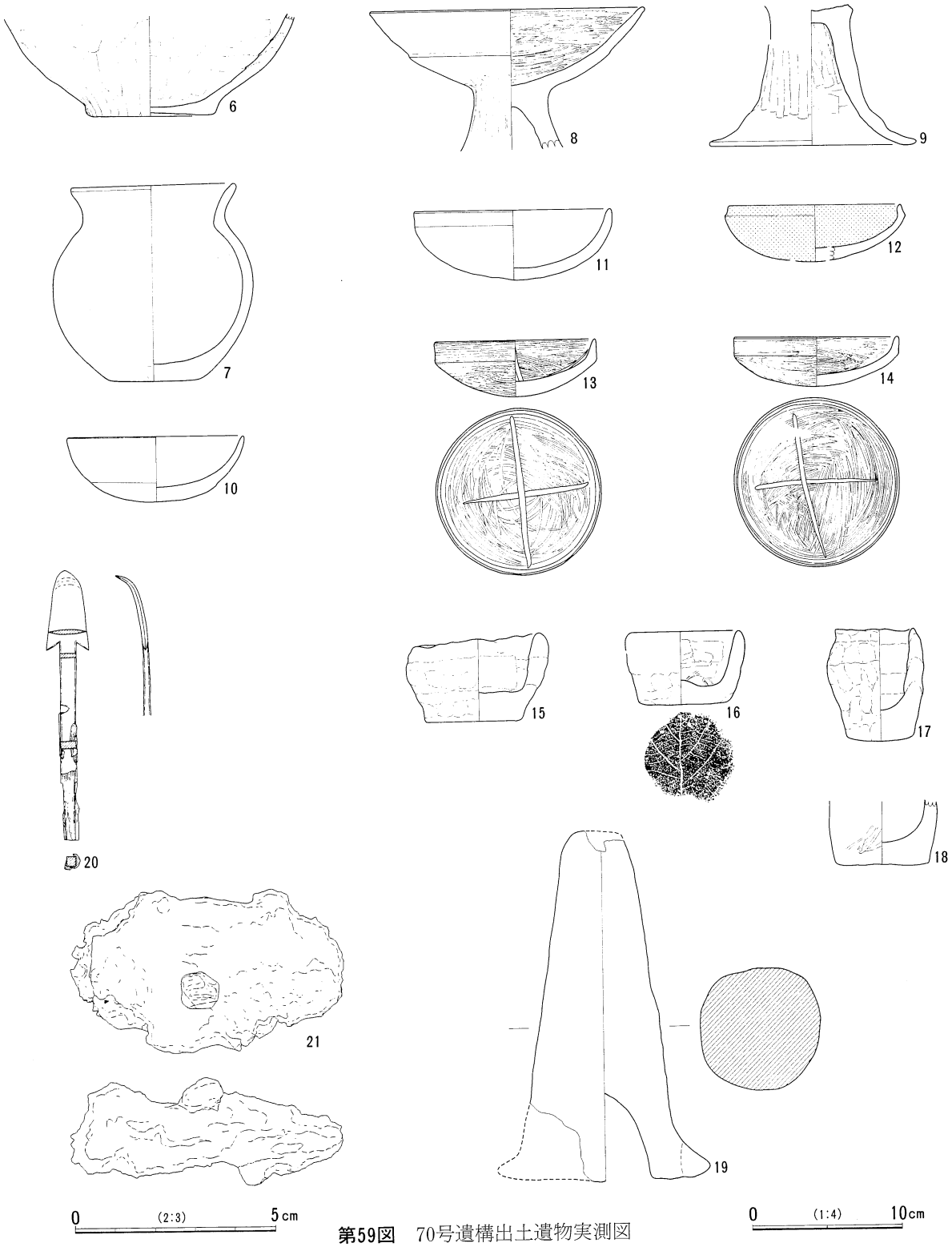



**第57図**　69号遺構出土遺物実測図

～$P_4$は主柱穴であるものと考えられる。それぞれの深さは$P_1$69cm、$P_2$69cm、$P_3$68cm、$P_4$68cmを測り、ほぼ均一な状況を呈している。焼け残りの炭化柱痕跡を期待したが検出することはできなかった。しかしながら、いずれのPitからも明瞭な柱痕跡が認められている。$P_5$は貯蔵穴と考えられ、底面はほぼ平坦であり、深さは35cmを測る。炉は中央やや北側に検出され、よく焼けている。焼土、炭化物は、ほぼ床面全域を覆い尽くす状況で検出されており、火災住居であることは明白である。また床面中央及び南側の一部にトーンで示したものは、屋根葺に使用したと考えられる萱状の炭化物である。この他に入口施設に伴うものと考えられる間仕切状の溝が南側中央部に検出されている。周溝は全周し、壁は急激に立ち上っており、覆土は焼土・炭化物を多量に含むものの自然堆積の状況を示しているものと考えられる。

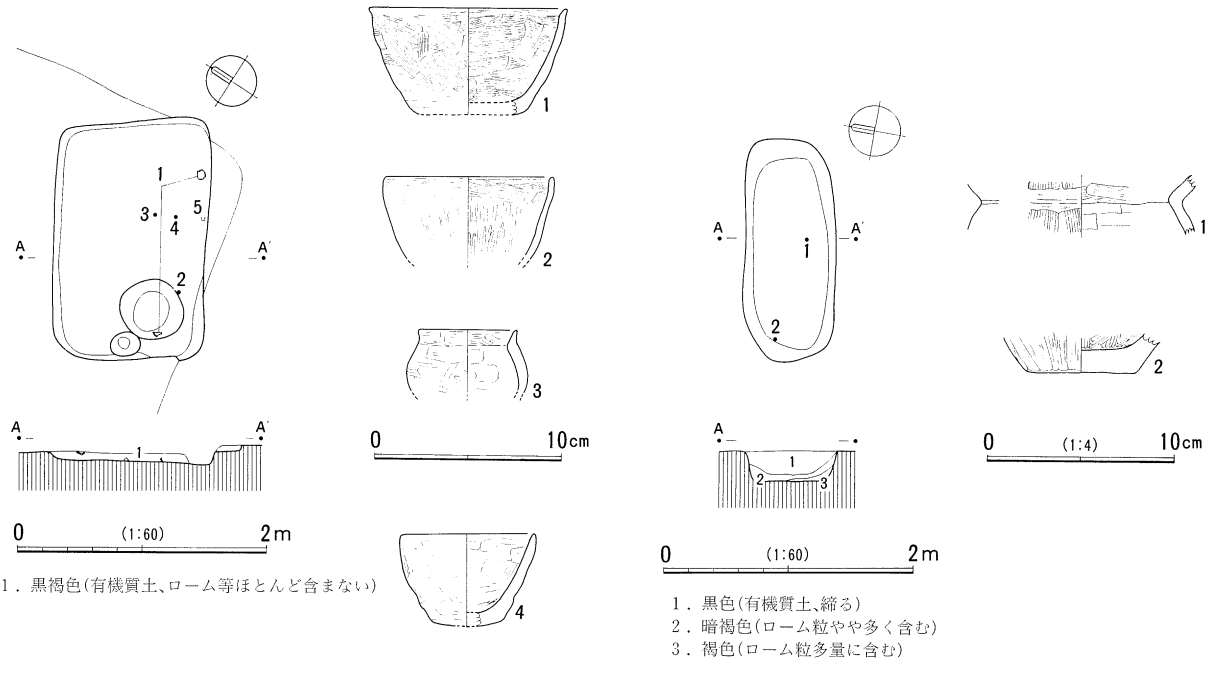


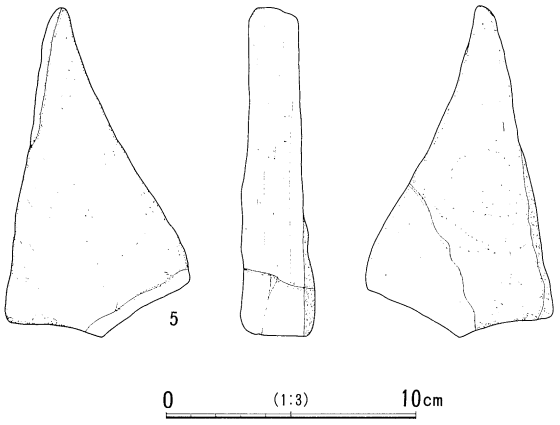

**第58図**　70号遺構実測図,出土遺物実測図




**第59図**　70号遺構出土遺物実測図

**遺物**　いずれも床密着の状況で検出され、本遺構に直接伴うものと考えられる。4・9・10は炉周辺にまとまって検出されており、この他実測に到らなかったが、62号3と同じ出土状況を呈する甕形土器二次利用片が、炉内に突刺さって検出されており、底部を失った坩形土器などを含め、いずれも五徳的使用可能遺物が、炉の周辺に集中している。この他3、6、11が、南西コーナー部の床面上に並べた状況で検出されており、相互に何らかの関係がありそうである。6は、胎土、焼成、外面、色




**第60図**　71・72号遺構実測図,出土遺物実測図

調・整形方法までが4と近似しており、あるいは同一固体と考えられるものである。また3は、胴部以下を検出することが出来なかった。11は、胴部下位に、直径3㎜程の小孔を有する瓢形土器であり、内外面とも黒色を呈している。また3・6も内面は黒色を呈し、いずれも土器としての本来の機能を失っていることを考えあわせれば、3の口縁内面に6を坏状に重ね合せ、11の器台的役割を果していた可能性も考えられる。また12は軽石製の浮きであり、中央に断面V字状の刻みが施されている。13は用途不明の土棒状製品であり、共に南側間仕切溝覆土内一括で取り上げられたものである。

**70号遺構**（第59図・図版13・26・27・28）

昭和62年の確認調査時に、5号遺構としてその存在が認められた遺構であり、南側は確認時トレンチによって一部削平されるものの、遺存状況は良好である。平面形は一辺4.2m前後の方形を呈しており、カマド煙道部及び両袖の中心線を通る軸は、N—30°—Wを示している。確認面からの堀り込みは42cm前後を測り、ハードローム層中に堀り込まれている。床は周溝部分を除いて全面的に踏み固まっており、Pitは計5本検出されている。深さはそれぞれ$P_1$39cm、$P_2$45cm、$P_3$39cm、$P_4$39cm、$P_5$22cmを測り、$P_1$～$P_4$が主柱穴であるものと考えられる。床面・壁際には焼土が集中しており、火災住居跡であろうと考えられる。またカマド正面の南壁に接して、一部焼けた黄白色粘土ブロックが厚さ20cm

前後に渡って検出されておるが、これ以外には入口施設と考えられるPitも存在しないことから、この粘土ブロックがあるいは入口施設に伴うものかも知れない。

カマドは北壁に接して構築されており、粘土、山砂を多量に使用し、遺存状況も良好である。煙道部は壁より40cm程突出し、火床面からの立ち上りは階段状を呈しながらも緩らかに立ち上っている。火床面はよく焼けており、焚口部分は緩やかな傾斜を有している。周溝は全周し、壁立ち上りは急激であり、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　21点の図示可能遺物が検出された。このうち2・4・8・9・17が床より10～20cm浮いた状況で検出された以外は、床直上及び密着の状況で検出されており、本遺構に直接伴うものと考えられる。5は異形壺形土器であり、カマド右脇の床面上から検出されている。9は15cm程床面から浮いた状況で脚部の大部分が検出されたが、カマド内より検出された破片1点と接合関係を有している。13・14は、床密着の状況で検出されており、内外面とも丁寧なヘラミガキが施されたのち、共に十文字の暗文が施されている。15～17は手捏土器である。16には底部に木葉痕が認められた。19は土製支脚であり、カマド焚口部付近において直立したまま検出されている。20は腸快長三角形鉄鏃であるが、刃部先端は2次変形によって反り返っており、茎下端を欠存している。残存長は刃部反り返り状態で、8.96cmを測る。刃部は2.70cm、篦被4.74cm、茎1.85cmを呈し、重量は6.20ｇを量る。21は鍛冶滓と思われるものである。重量は163.2ｇを量り、鉄錆の付着が全面に認められるものの磁石反応をまったく示さない。外面中央部付近に小石かと思われる錆塊状の突起が認められる。

## 2　土　坑

**71号遺構**（第60図・図版13）

79号遺構によって覆土の大部分を削平されて存在し，9号遺構調査時に初めてその存在を確認した遺構である。平面状は長方形を呈し、長軸1.87m、短軸1.20mを測り、長軸方位はN—57°—Eを示している。確認面からの堀り込みは6cm前後を測り、ローム漸移層中に堀り込まれている。底面はほぼ平坦であり、Pitが2箇所に検出され、深さはそれぞれ18・14cmを測り、径の大きい方が、4cm深い状況が窺われた。

**遺物**　5点の遺物が検出されている。1～4は、いずれも径の小さいものであり、特に3・4はミニチュア土器と考えられる。5は砥石である。これらの遺物はいずれも底面密着の状況で検出されており、本遺構に直接伴うものと考えられる。遺物の性格から墓壙、あるいは祭址的な要素が強いものと考えられる。

**72号遺構**（第60図）

平面形は長方形を呈し、長軸1.75m、短軸0.72mを測り、短軸方位はN—10°—Wを示している。確認面からの堀り込みは25cmを測り、ソフトローム層中に堀り込まれている。底面はほぼ平坦であり、壁立ち上りは急激である。

**遺物**　2点の図示可能遺物が検出された。いずれも底面直上からの検出であるが、小破片であり、直接本遺構に伴うものかどうかはよくわからない。両者共甕型土器の破片であることは認められるが、同一個体かどうかは不明である。

## 3．古　墳

**73遺構**（第61・62図　図版13・14・15・28）

**現況**　台地北西突端部に位置し、墳丘の一部及び周囲全域に渡って削平されて存在し、表土除去を行わずとも周溝プランは明瞭に観察され、調査以前に方墳であることが推定された。現状における西側からの見かけの墳丘は高さ2.0m以上で、台地下から見上げると、さらに大きく見えるものの遺存状況は極めて悪い。

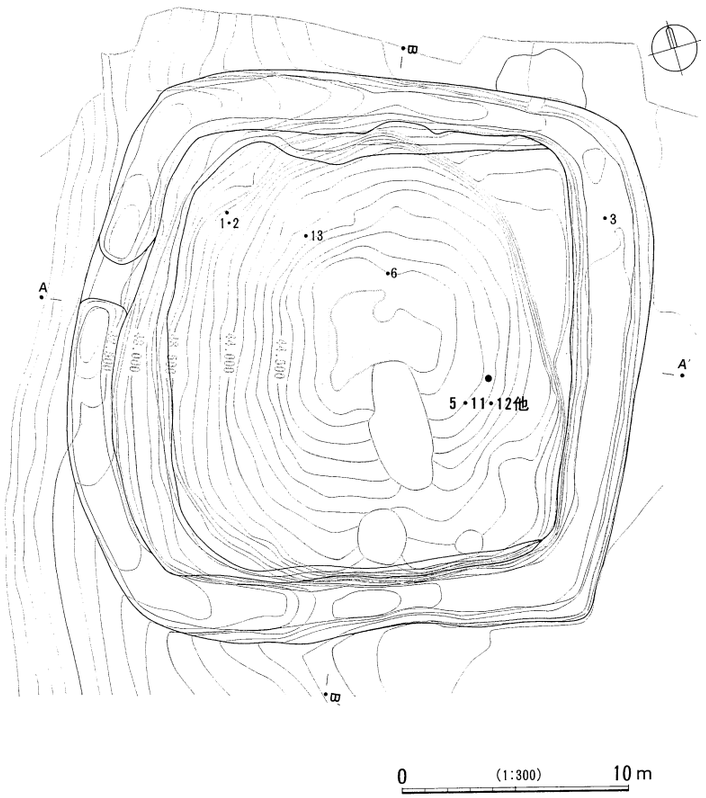
**墳丘と周溝**　墳丘は旧表土である黒色自然堆積有機物土層（IIａ層）の上面に直接盛土によって構築されている。封土は、内部施設が存在した下面をロームブロックを主体とする層で充填した後、ローム主体層と有機質土主体層を交互に積み上げている。だだし、墳頂部より封土が主体部の墓壙掘削によって切られていることから、主体部の構築形態は墳頂部掘込墓壙を採用しているものと考えられる。墳丘と周溝の間は、旧表土の削平も観察され、この部分は構築時にテラス部分を有していたことが窺える。ただし、土層断面作成時まで、そのことに気付かず、また調査を急ぐあまり主体部の調査終了後に一気にソフトローム層上面まで掘り下げてしまった為、平面図に図示できたのは、ソフトローム層上面に対して僅かに残存した南北西側部分の範囲であり、東側部分は、断面図においてのみ図示されたにすぎない。周溝は全周するものの、西側中央部やや北側が一段と高くなって検出されており、いわゆるブリッジ状を呈している。A～A′、B～B′における外縁径•内縁径の規模は、それぞれ、24.8m・19.0m、24.8m・19.9mを測り、平面プランは各外縁辺が弧状に張り出す隅丸方形を呈している。土層断面における各周溝上端幅は、A～A′・B～B′においてそれぞれ2.38m、3.83m、3.27m、1.95mを測り、概ねB～B′を中心として東側はソフトローム層中に、西側はハードローム層中に掘り込まれており、底面は緩やかな傾斜を有しながらも全周している。断面は緩やかな逆梯形を呈しており、深さは30～50cm前後を測り、覆土は自然堆積の状況を示している。

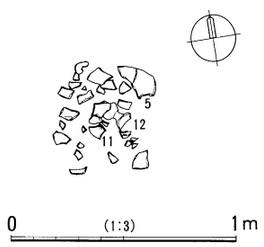
**内部施設**

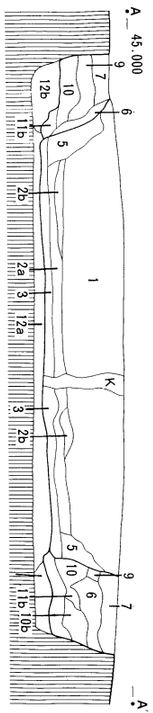
**墓壙**　墳丘のほぼ中央に位置する。重機による削平によって南側の一部を喪失するものの、平面形は隅丸方長方形を呈するものと考えられる。長軸5.26m、短軸2.66m、深さは検出面より70cm前後を測り、長軸方位はN—12°—Eを示している。底面は墳丘構築時に意識的に充填されたと考えられるロームブロックを主体とする層で、特に硬く突き固められており、この上にさらに木棺固定用と考えられるやや硬く引き締まったローム粒、ロームブロックをやや多く含んだ暗褐色土が覆っている。埋土はローム主体層と、有機質土中にロームを混じえる混合土によって構成されており、最上層を除けば全体的に締まっている。

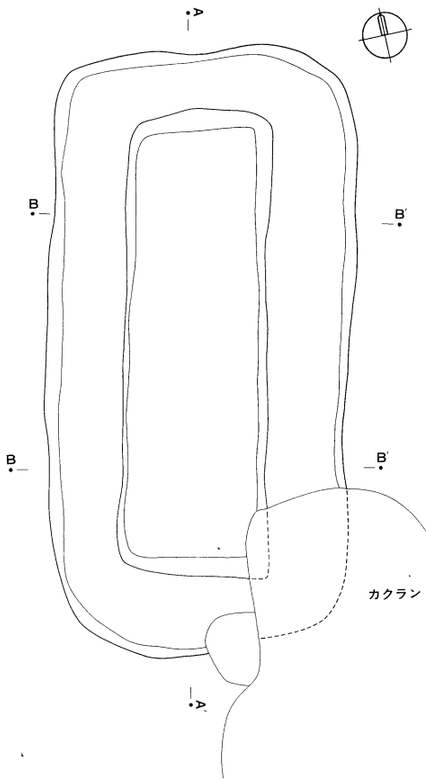
**木棺痕**　墓壙埋土をおよそ10cm程掘り下げた所で、中央に締まりが弱くやや有機質性の強い暗褐色土が検出された。明らかに木棺の影響を受けた土層と推察され慎重に精査を行った所、ローム粒等をほとんど含まない黒色有機質土が検出され明らかに木棺痕と推察された。土層断面によれば底面は舟底形を呈し、長軸両端部は、木棺崩壊の際に流入したと考えられるやや褐色味の強い土層によって不明瞭であるものの、木棺固定用と考えられるやや硬く引き締まった暗褐色土が流入面の先まで及んでいることから、長さ3.7m、幅1.2m、厚さ８～12cm、深さ54cm以上の底面舟底形を呈する組合せ式木棺が使用されていたものと考えられる。

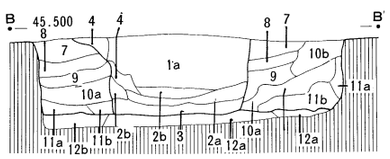
**遺物**　慎重に精査を行ったにもかかわらず、主体部内からの遺物検出を認めることは出来なかった。

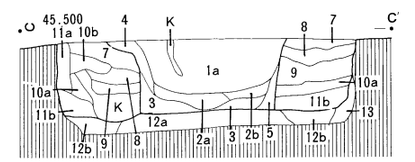


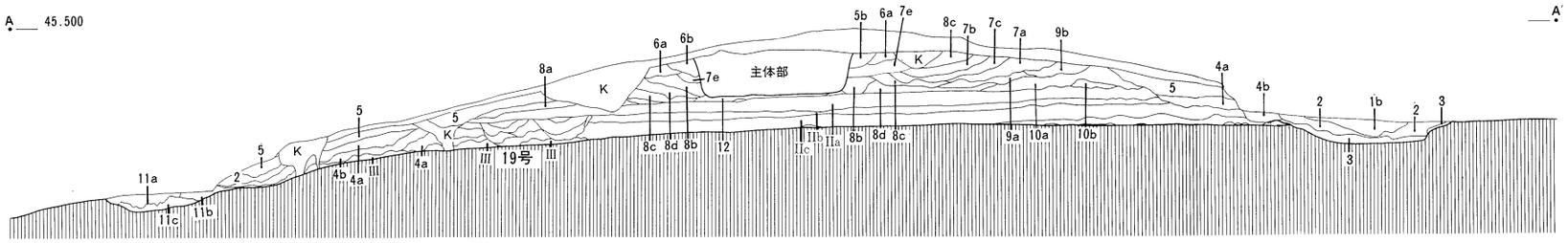



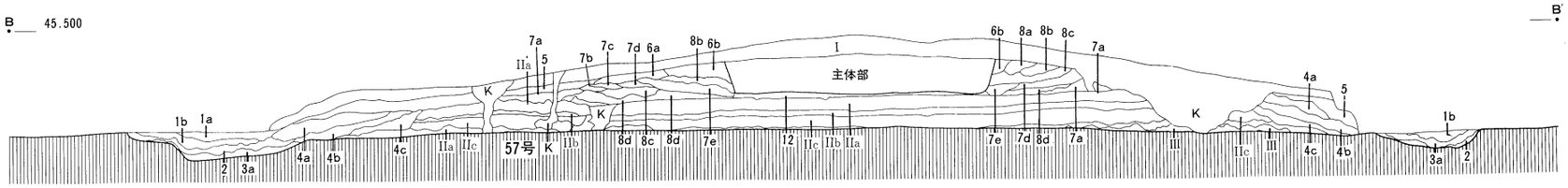




0 (1:120) 4m

1a 黒色(極めて有機質性強、ローム粒若干含む)
1b 暗褐色(有機質性強、ローム粒少量含む)
2．暗褐色(やや有機質性張、ローム粒霜降状に含む)
3．暗褐色(ローム粒やや多く含み、褐色味増す)
4a 暗褐色(ローム粒若干含む)
4b 黒褐色(有機質性強、ローム粒若干含む)
4c 暗褐色(ローム粒、ロームブロックやや多く含む)
5．暗褐色(ローム粒やや多く混入する、流れ込み土)
6a 暗褐色(ローム粒混入、有機質土)
6b 暗褐色(ローム粒少量含む、有機質土)
7a 暗褐色(ローム粒、有機質土、褐色味強い)
7b 暗褐色(ローム＋有機質土、黒色味強い)
7c 暗褐色(ローム＋有機質土、やや黒色味強い)
7d 暗褐色(ローム＋有機質土、やや褐色味強い)
7e 暗褐色(ローム＋有機質土)
8a 褐色(ローム粒多量に含む)
8b 褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む、やや締る)
8c 褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む、締る)
8d 褐色(ロームブロック多量に含み、締る)
9a 黒色(ローム粒若干含む、有機質土)
9b 黒褐色(ローム粒少量含む、有機質土)
10a 褐色(ロームブロック主体)
10b 褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む)
11a 褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む、締り弱)
11b 褐色(ローム粒、ロームブロックに黒色土混じえる)
11c 褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む、やや締り弱)
12．褐色(ロームブロック主体かたし引き締る)

1．暗褐色(ローム粒、ロームブロックを少量含む、やや有機質性強く締り弱い)
2a 黒褐色(有機質性極めて強く、ローム粒をほとんど含まず硬く締る)
2b 黒褐色(有機質性強、ローム粒を少量混じえる、締る)
3．暗褐色(ローム粒、ロームブロックを多く含む、硬く締る)
4．暗褐色(ローム粒、ロームブロックやや多く含む、締り弱い)
5．暗褐色(ローム粒多、ロームブロック少量含む、やや黄味強)
6．暗褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む)
7．暗褐色(ローム粒少量含む、締り弱)
8．暗褐色(ローム粒若干含む、やや有機質性強)
9．褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む)
10a 黒褐色(ローム粒少量含む)
10b 暗褐色(ローム粒、ロームブロック少量含む、締りなし)
11a 暗褐色(ローム粒、ロームブロックをやや多く含み、黄味やや強い)
11b 褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む)
12a 褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含み、硬く締る)
12b 褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む、やや黒味がかる)
13．褐色(ローム粒、ロームブロック多量に含む、盛土8b層)

**第61図**　73号遺構実測図

**墳丘下出土遺物実測図**

やや下のレベルで検出されており、胎土は57号出土台付甕と近似することから、本遺構に直接伴うものではないと考えられる。また旧表土上面より一括集中的に検出された遺物のうち、4・5・12等は全体的には古相の様相を示すものの、墳丘内より検出された6及び周溝内検出の3は、やや新しい時期の所産かと考えられることから、墳丘構築年代はかならずしも明瞭ではない。しかしながら墳丘盛土内より検出された6の高坏型土器前後の年代感をもって捉えておくことが、現状では最も妥当かと考えられる。

**74号遺構**（第63図、図版巻頭・15・16）

**現況**　昭和62年度の調査時においては、明瞭なマウンドを有し、遺構状況も良好であったが、前回確認トレンチ以外にも重機における削平が大幅に行われており、遺存状況は極めて不良である。

**墳丘と周溝**　方墳である。墳丘は旧表土である黒色の自然堆積有機質土層（II a 層）の上面に直接盛土によって構築されている。封土は前述した削平の為、大半はすでに喪失しているものの、ローム主体層と、有機質土中にロームを混じえる混合土によって構築されている。周溝は全体の½強を検出し、コーナー部分の一部が明瞭に検出されたことから平面形は周溝外縁径17m、内縁径12m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。A～A′間のIII層上面における周溝上端幅は、それぞれ2.20m前後を測ることから、全体的に均一な規模で全周していたものと考えられる。ハードローム層中に掘り込まれ、深さは、確認面より最大1.16m前後を測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦であり、覆土は自然堆積の状態を示している。

**遺物**　周溝内より3点の遺物が検出された。4は東側周溝底面よりそれぞれ20～40cm程度浮いた状況で検出されている。また5は、南西コーナー部付近の周溝底に一片を、残りはポール埋設撹乱穴内に転がって検出されており接合関係を有する高坏である。これらの遺物は、いずれも同時期の所産と考えられることから、本遺構に直接伴うものと考えられる。

**内部施設**

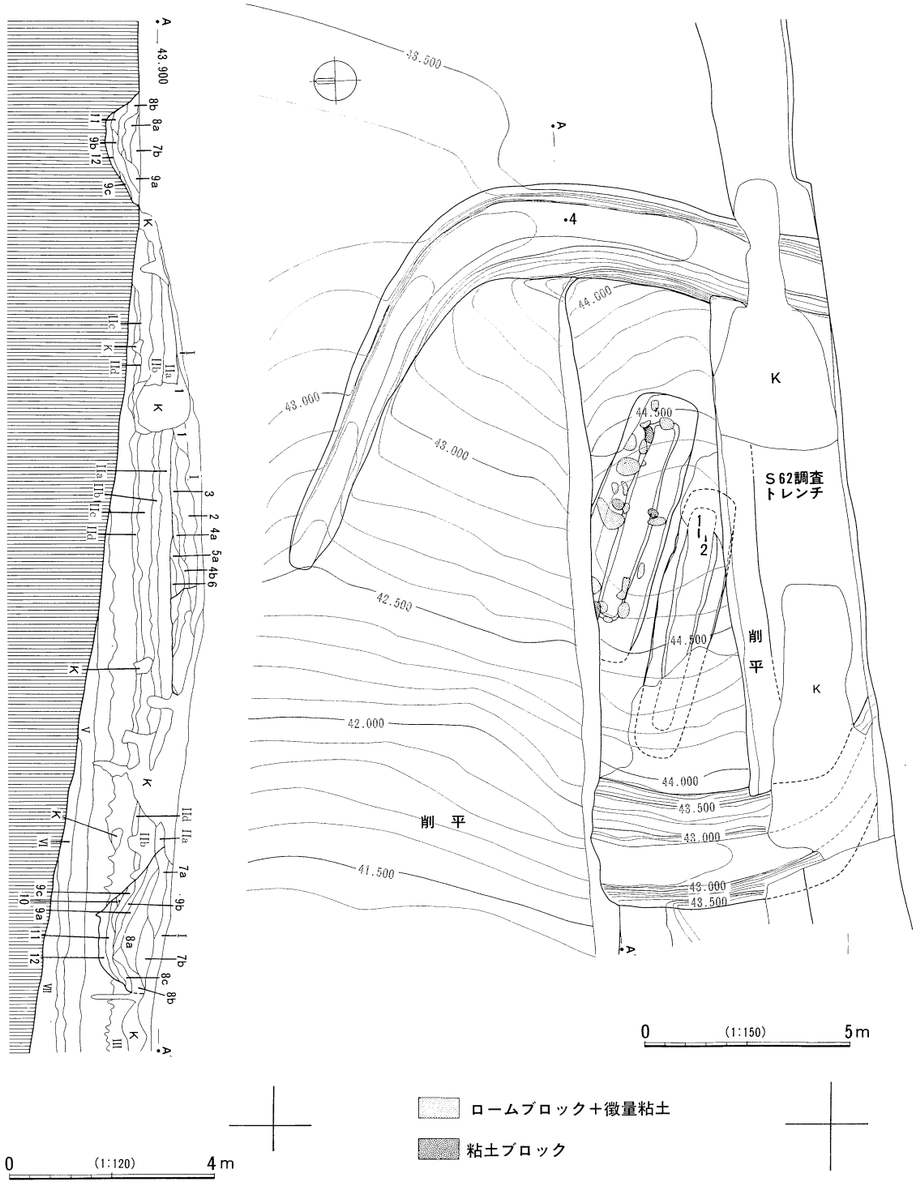
本墳では2基の主体部を検出した。1つは削平された土層断面に粘土ブロックを露呈し、早くからその存在に気づいていた第1主体部と墳丘除去中にはじめてその存在を確認した第2主体部である。

**第1主体部**

**墓壙**　墳丘のほぼ中央に位置する。重機による削平と崩壊による撹乱によって⅛程喪失するものの残存部より推定される墓壙の平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN－109°－Wを示すものと考えられ、現存する墳頂部から掘り込まれている。底面は旧表土であるII a の層上面である。埋土はローム主体土と有機質土中にロームを混じえる混合土、及び木棺設置に使用されたと考えられる粘土ブロックと粘土混入ロームブロック土である。

**木棺痕**　東西両小口及び周囲に散布する粘土及び粘土混入ロームブロックによって、木棺は墓壙中央に東枕安置されたことが察知される。長軸5.0m、短軸75cm、深さは検出面より最大28cmを測る。割竹型木棺であろうと推定され、断面は舟底形を呈し、棺底と思われる範囲には粘土粒、粘土ブロックを混える暗褐色土がほぼ全面に渡って検出されている。覆土はローム粒を少量混入する暗褐色有機質土で、締まりも弱い。

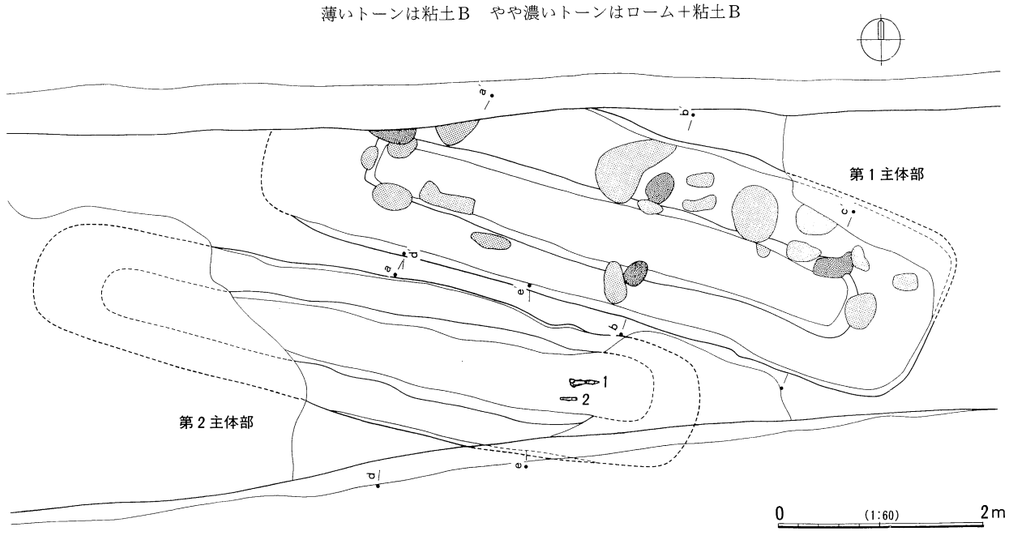
**遺物**　慎重に精査を行ったにも関わらず、墓壙内からの遺物はまったく検出されなかった。

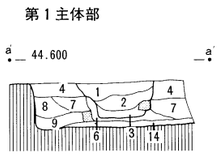


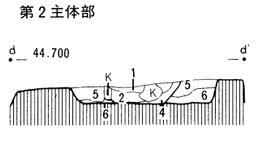

1．褐色(粒大きいロームB(5～10cm)多量に含む)
2．褐色(ローム粒、ロームB(2～5cm大)多量に含む)
3．暗褐色(ローム粒、ロームB(2～3cm大)＋黒色有機質土
4a　褐色(ロームB多量に含む。6層よりやや有機質土混じる)
5a　暗褐色(ロームB、ローム粒多量有機質土少量混入、6層はややローム量多い)
6．褐色(ローム粒、ロームBを多量に含み硬く締まる)
7a　暗褐色土(ローム粒、ロームB多量、有機質土少量含む、やや締まり欠く。6層よりさらにローム量多く締り欠く)
8a　黒褐色(有機質性強、ローム粒若干含む)
8b　黒褐色(有機質性強、ローム粒ほとんど含まない)
9a　暗褐色(ローム粒若干含む)
9b　暗褐色(ローム粒若干含む、a層よりロームやや多い)
9c　暗褐色(ローム粒少量含む)
10．褐色(ローム粒多量に含む)
11．暗褐色(ローム粒、ロームBやや多く含む締り弱)
12．褐色(ローム粒、ロームB多く含み締り弱)

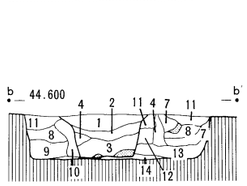
第1主体部
1．暗褐色(ローム粒少量含む、やや有機質性強)
2．暗褐色(ローム粒少量含む、有機質性やや強、締りやや弱)
3．暗褐色(粘土粒、粘土Bを少量含む)
4．褐色(ローム粒、ロームB多量に含む、若干の粘土Bを含む)
5．灰色(粘土B、図中トーン)
6．暗褐色(粘土粒やや多く含む、締る)
7．褐色(ローム粒、ロームB多量に含む、粘土粒散る)
8．暗褐色(ローム粒若干含む、やや有機質)
9．暗褐色(ローム粒、ロームB少量含む、粘土粒、粘土B散る)
10．暗褐色(ローム粒、ロームBやや多く含む)
11暗褐色(ローム粒若干含む、やや締り欠く)
12．暗褐色(ローム粒、ロームB少量含む、やや締る)
13．暗褐色(ローム粒、ロームB、粘土粒少量含む)
14．褐色(ローム粒、ロームB主体、締る)

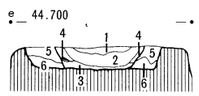
薄いトーンは粘土B　やや濃いトーンはローム＋粘土B

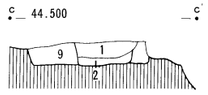


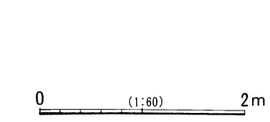



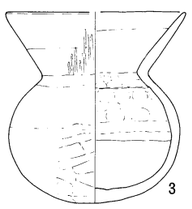



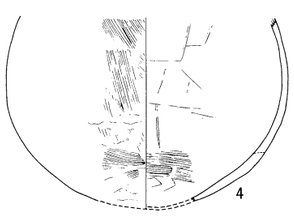



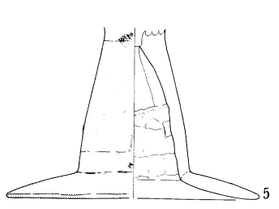



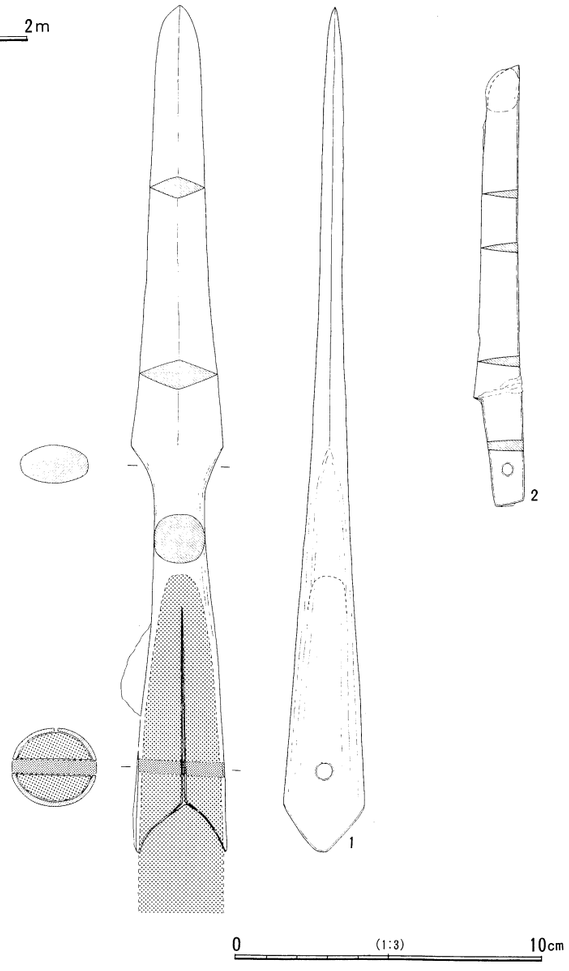




第2主体部
1．暗褐色(ローム粒多量に含む、締り弱)
2．暗褐色(非常に細かいローム粒多量含む、締り弱)
3．黒褐色(有機質性強、ローム粒若干含む、やや締る)
4．暗褐色(有機質性強、ローム粒少量含む)
5．暗褐色(ローム粒、ロームBやや多く含む、締る)
6．暗褐色(ローム粒やや多く含む、締る)




**第63図**　74号遺構実測図，出土遺物実測図

**第2主体部**

**墓壙**　第1主体部の南へ20cm、西へ1m程ずれてほぼ平行に存在する。残存した東西両端部は重機による削平後の2次客土であり、すでに墓壙の½近くは失われている。残存規模は長径3.8m、短径1.5mを測り、長軸方位はN—103°—Eを示すものと考えられる。現存する墳頂部より掘り込れており、底面は旧表土であるIIa層上面である。埋土はローム主体層と、有機質土中にロームを混じえる混合土である。

**木棺痕**　当初はその存在にまったく気付かなかったが、東側の2次客土部分をラフに掘り下げた所1の鉄鉾先端を検出し、あわてて精査に及んだ所、墓壙中央に細かいローム粒を多量に含み、やや締まりを欠く土層が検出された。色調における埋土との区別は明瞭ではないが、この締まりを欠いた土層を精査した所、図示の様な状況で検出することができた。残存長径3.7m、短径80～75cm、深さは最大21cmを測り、断面は舟底形を呈する。鉄鉾を検出することから、第1主体部木棺痕と類似する規模を有していた割竹型木棺が使用されていたものと考えられる。

**遺物**　棺底部より、前述の鉄鉾と刀子1点を検出した。1は全長27.4cmを測る鉄鉾である。身部長14.4cmを測り、断面は菱形を呈している。関は両側にあり、身～袋部への中実部分は楕円～円形を呈している。袋は全長9.0cm、厚さ1.5mmを測る。山形抉円筒形を呈し、端部より2.4cmほどの所に径5mm呈の目釘孔が貫通する。重量は167.4gを量り、地金の遺存は良好である。石突部は検出されなかった。2は全長14.2cmの刀子である。身部長10.7cm、身幅1.1～1.16cm、棟幅2.3～3.8mm測り、関は片側に切り込まれる。茎は尻に向かって幅を減じ、茎長3.45cm、幅は目釘孔付近で3.9～2.9mmを測り、棟側の方がやや厚い。目釘孔の径は上4.3～下3.2mmを測り、断面逆梯形を呈している。重量は17.5gを量る。

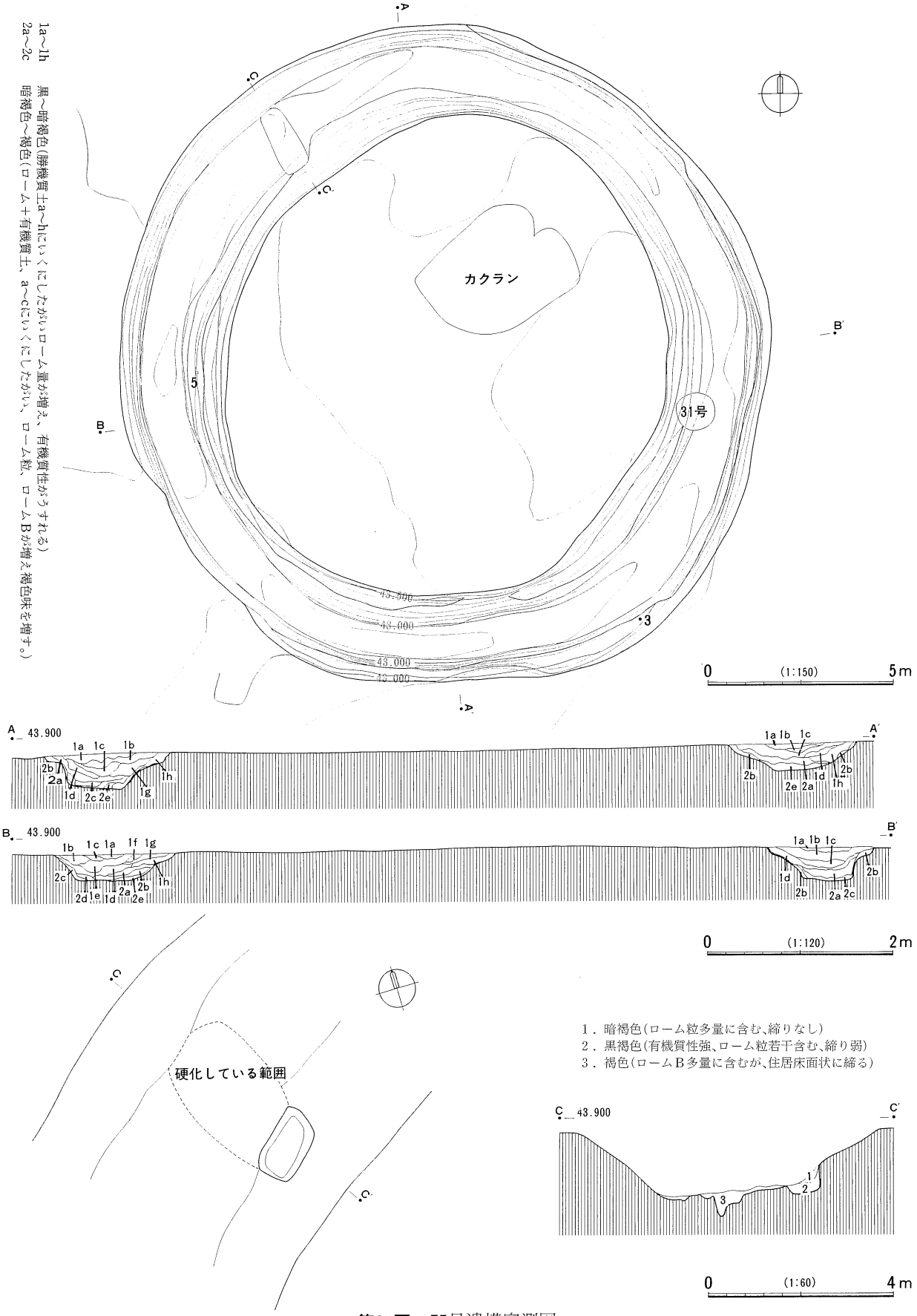
**75号遺構**（第64・65図、図版17・巻頭）

**現況**　遺構北に隣接し、昭和62年度の調査時には、そのマウンドの存在が認められた古墳であるものの、今回の調査時にはすでにマウンドが消滅しており、遺存状況は極めて不良である。

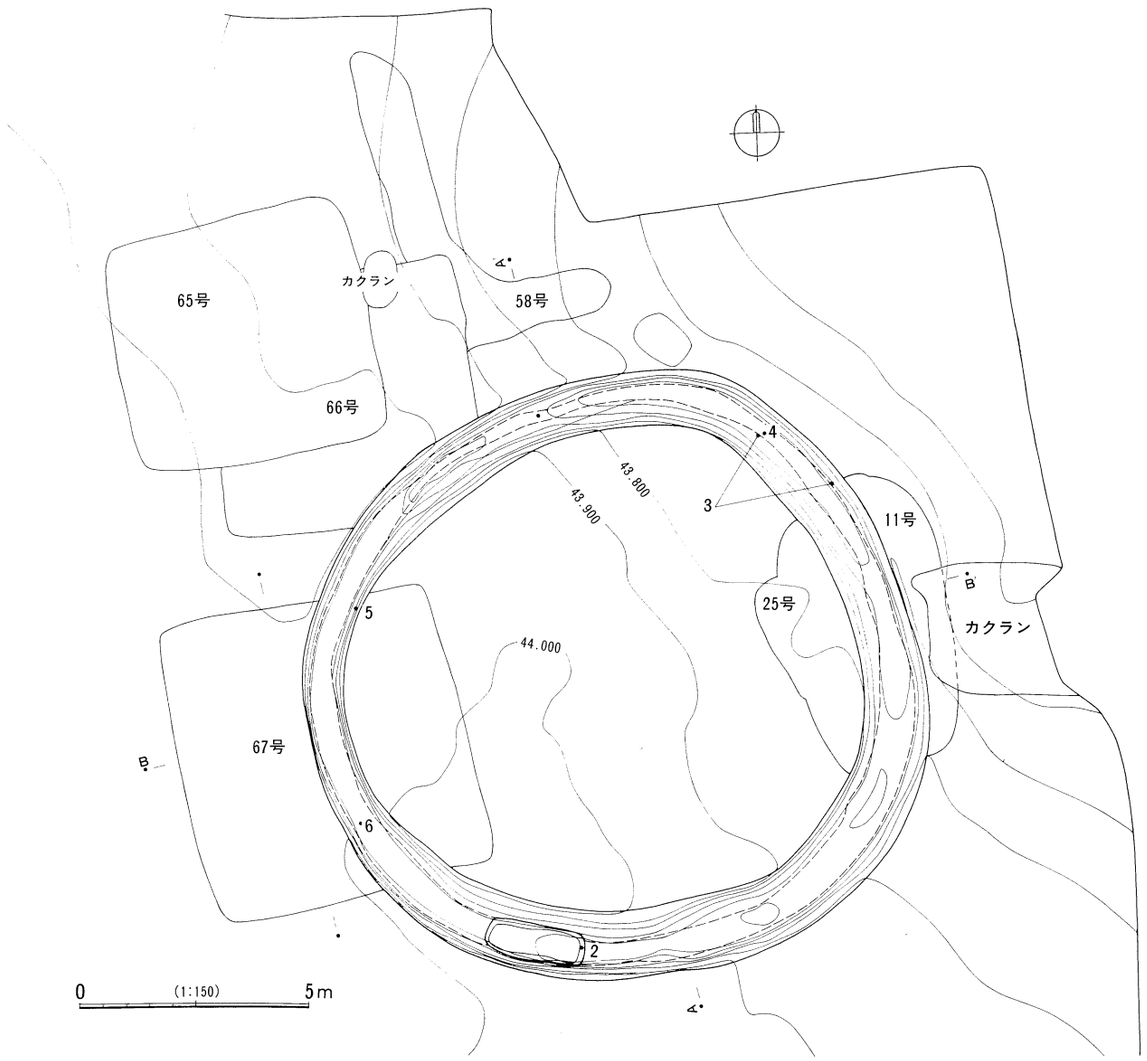
**墳丘と周溝**　墳丘は前述のごとくすべて削平されてしまっているものの、残存する周溝部によって長内外縁径12.9m・17.7m、短内外縁径11.34m・17.3mを測る円墳であることが窺われる。A～A′・B～B′間における周溝上端幅は、それぞれ2.62m、2.31m・2.7m、2.75mを測り、大幅に削平を受けた南西側付近がやや低い数値を示すものの、全周している。断面は逆梯形を呈しており、深さは確認面より57～75cmを測り、ハードローム層中に掘り込まれている。覆土は全体的に均一な自然堆積の状況を示している。

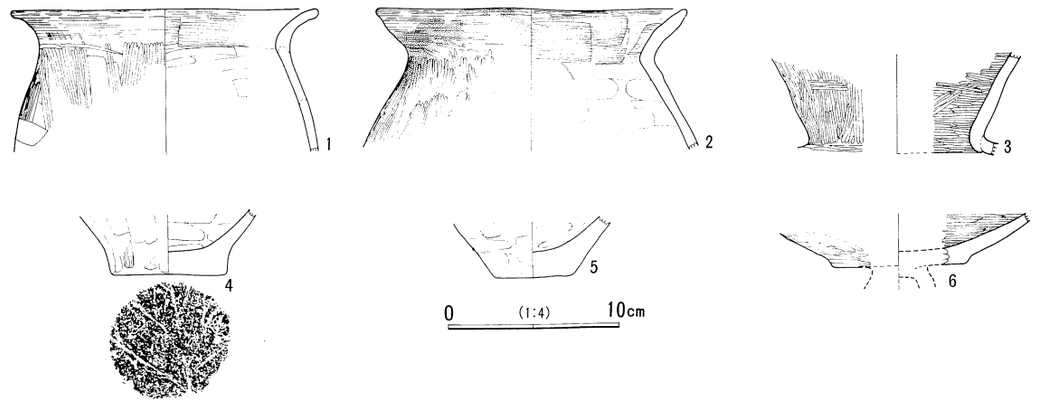
**内部施設**　円台部中央北側に、ロームブロックを主体とする落ち込みが検出され、精査を行った所、バックホウの爪痕とキャピタラ痕が検出され、最近の撹乱であることが観察された。しかしながら意識的にこの周辺のみ一段深く削平を受けていることから、この近辺に内部施設が存在していた可能性が考えられる。

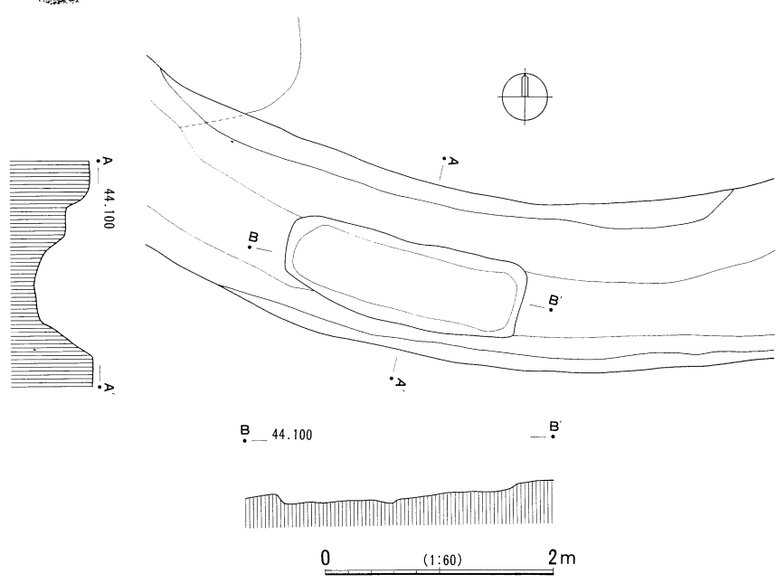
**周溝内土壙**　北側周溝内の一部を掘り込んで検出されている。また溝底の一部が、この範囲のみ硬化しており、直接本遺構に伴うものと考えられる。長径75cm、短径43cm、深さは最大36cmを測り、底面はほぼ平坦である。覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土と、黒色有機質土主体層によって構成されており、共にやや締りを欠くことから人為的埋土と考えられる。

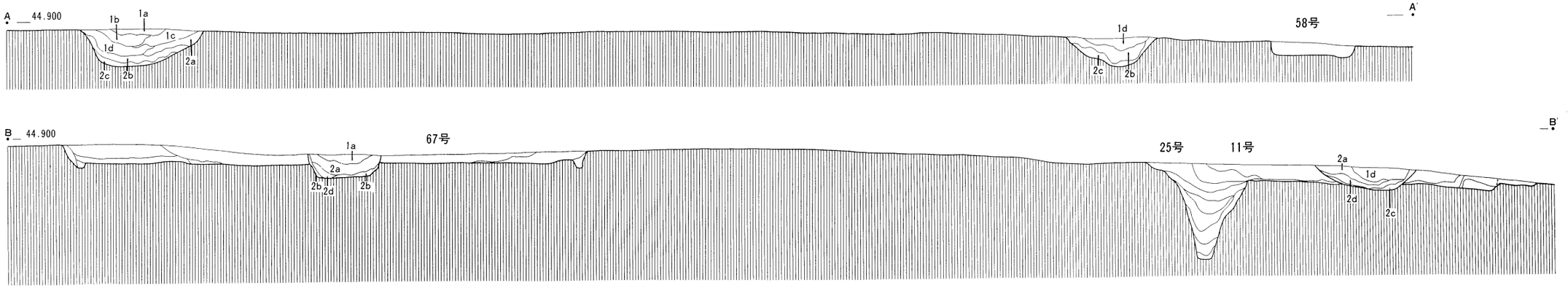



**第64図**　75号遺構実測図



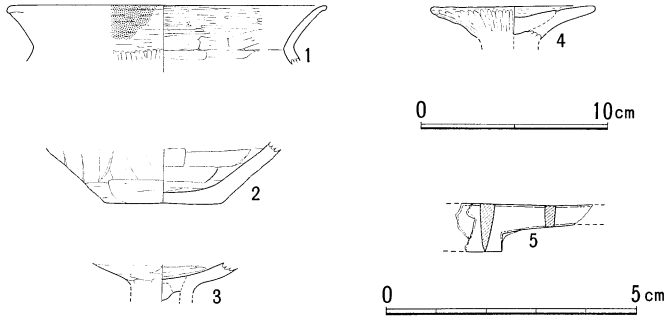




1a～d　黒褐色(有機質土a～d層にいくにしたがい、ローム粒量が増し、有機質性がうすれる)
2a　暗褐色(ローム粒霜降状に含む)
2b　暗褐色(ローム粒霜降状に含む、a層よりローム量多い)
2c　褐色(ローム粒多量に含む、締りやや弱)
2d　暗褐色(B～B′間のみ認められる、住居跡覆土の流入土)

**第65図**　76号遺構実測図,出土遺物実測図




**第66図**　75号遺構出土遺物実測図

**遺物**　周溝より５点の本遺構に伴うものと考えられる遺物を検出した。このうち３・５を除けばいずれも覆土中でもかなり浮いた状況で検出され、一括して取り上げた遺物である。４は南側周溝外縁側のテラス部分より検出されており、脚状あるいは摘み状の突出部を持つものと考えられるが、類似する高坏等が見あたらないことから、あるいは蓋型土器なのかも知れない。５は西側周溝テラス部下より密着して検出された刀子であるが、身・茎の大半を欠存する。関は身側に切り込まれ、身幅1.2cm棟幅0.4cm前後を測り、茎は尻に向かって幅を減ずるものとと考えられ、残存長3.7cmを呈し、重量は2.6ｇを量る。

**76号遺構**（第66図、図版17・18・28）

**現況**　マウンドは完全に削平されておるものの、第３図におけるコンターの高まりから、付近に古墳の存在が予測されていた。

**墳丘と周溝**　前述のごとく墳丘は完全に削平されているものの、残存する周溝によって円墳であることが窺われる。Ａ～Ａ′・Ｂ～Ｂ′間における外縁径・内縁径の規模はそれぞれ13.3m、10.4m・13.32m、11.0mを測り、周溝上端幅は、それぞれ1.1m、1.47m・0.8m、1.23mを測る。断面は逆梯形を呈しており、深さは26～45cmを測る。ハードローム層中に掘り込まれており、覆土は自然堆積の状況を示している。

**内部施設**　円台部内には、何の施設も検出されなかったものの、南側周溝底面より、土壙１基を検出している。周溝内覆土を完全に除去した後、初めてその存在を確認したものであり、本遺構に直接伴うものと考えられる。平面形は長方形を呈し、長軸2.12m、短軸72cm深さは溝底より４～７cmを測る。北側テラス部分より掘り込まれているものと考えられることから、本来の掘り込みの深さは30cm前後を呈するものと考えられる。底面はほぼ平坦であり、木棺痕が検出されないことから、土壙墓であろうと考えられる。覆土はロームブロックを主体とする層で人為的埋土と考えられる。

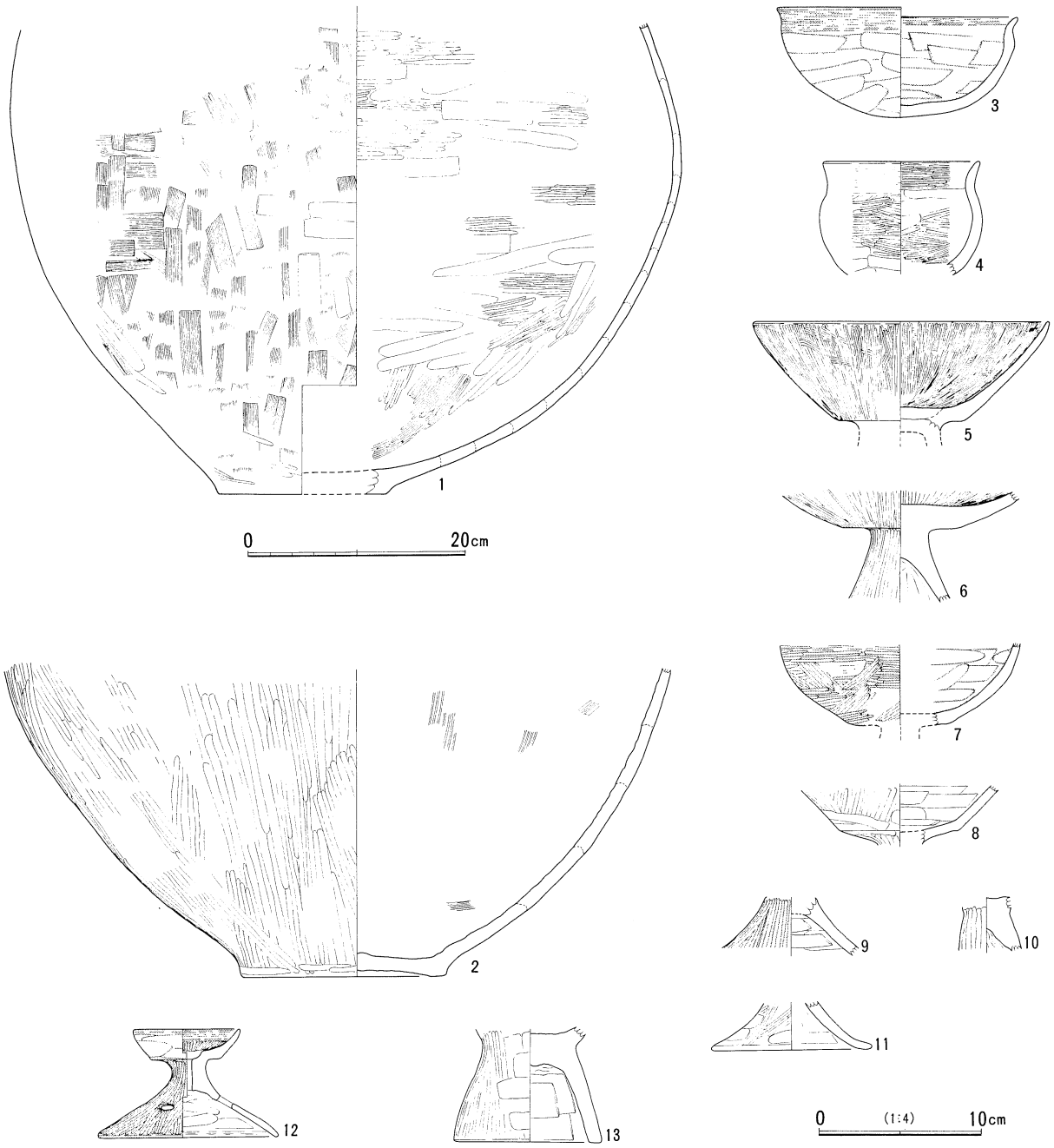
**遺物**　周溝内より計６点の図示可能な遺物が検出された。また周溝内土壙付近に２つの甕形土器と同一個体と思われる土師器細片がまとまって検出されたものの、接合関係に到らなかった。またこれ以外は、周溝内より散在的に検出されており、本遺構によって削平された住居址跡等の遺物の混入も含まれているものと考えられる。

## ４．奈良・平安時代

### １　方形区画改葬墓

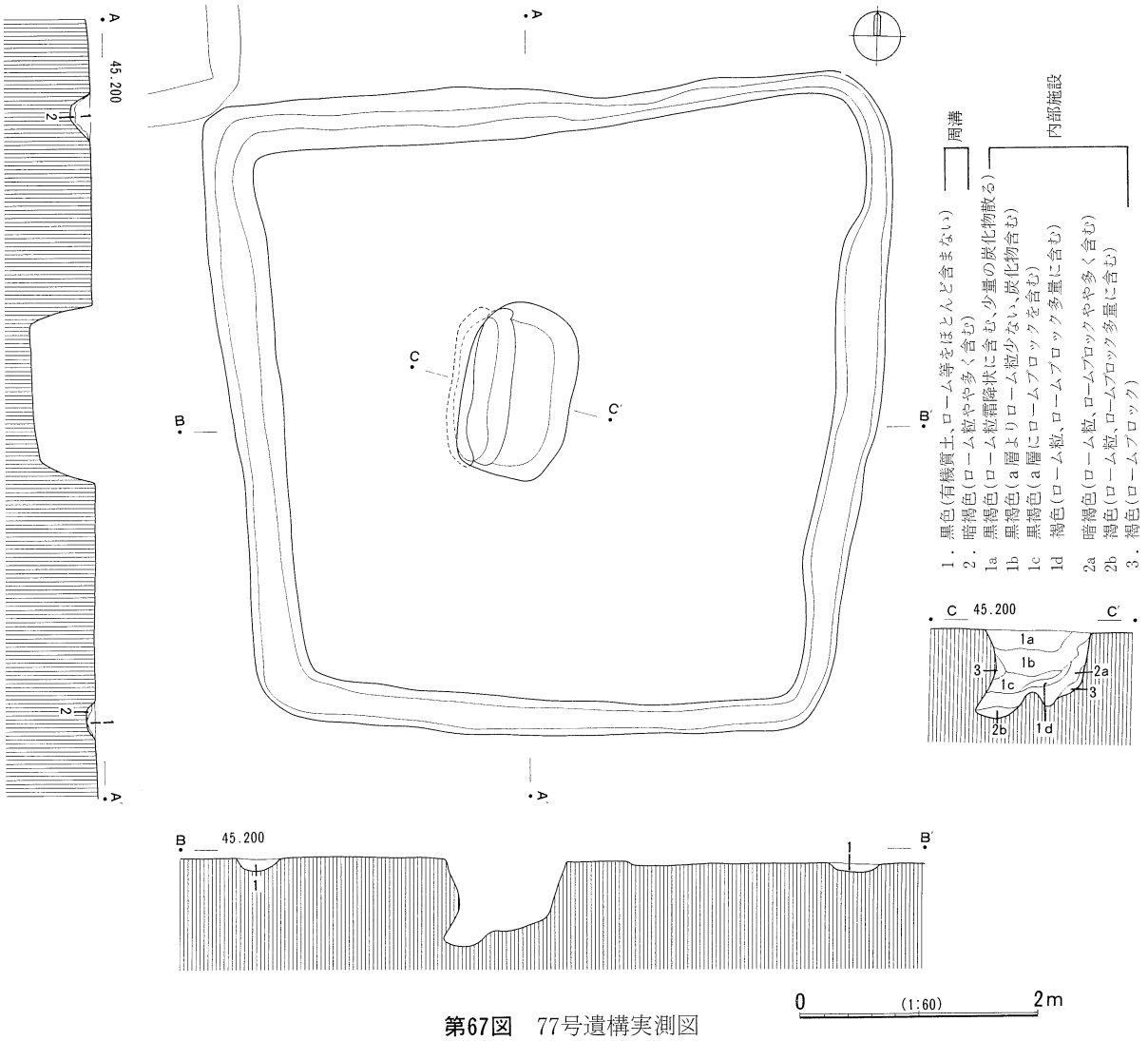
**77号遺構**（第66図、図版18）

周溝及び方台部の平面形は、北側及び東側周溝がやや長い不整な方形を呈する。方台部南北辺及びこれに対応する東西辺中心線を基準とする外縁径、内縁径の規模はそれぞれ5.47m・4.78m、5.52m・




**第62図**　73号遺構出土遺物実測図

しかしながら、墳丘と周溝及び旧表土面において計13点の該当期遺物が検出された。1・2は北西コーナー部において、表土除去の際検出された大甕である。2の甕形土器の上に1の甕形土器を逆さに覆せ合わせた状況で検出されたことから、土器棺であるものと考えられ、本遺構に間接的に伴うものと考えられる。また両者とも口縁部～胴部中位にかけて検出されなかったことから、意識的に打ち欠いて使用されたものと推定される。また2は図示に到らなかったが、底部に木葉痕が認められた。3は北東コーナー部付近で検出された坏である。周溝底面よりおよそ20cm程浮いた状況で検出されている。6は盛土内より検出された高坏である。4・5・7・8・9・11・12は、旧表土上面の一箇所より他の接合に到らぬ破片と共に集中的に検出されている。10は旧表土上面より、13は旧表土上面より

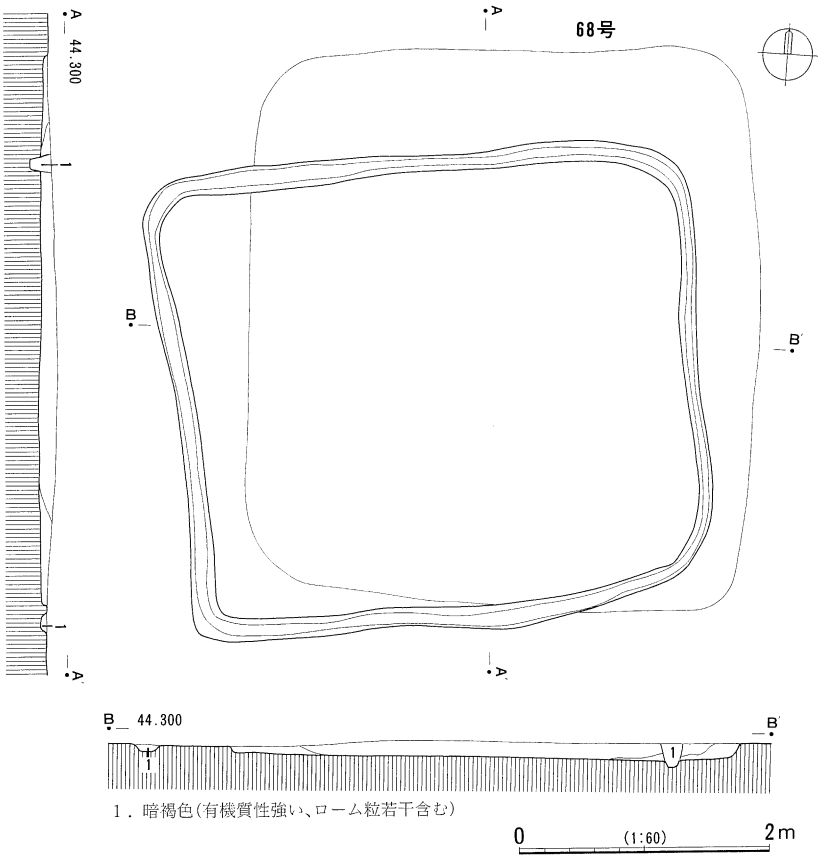



**第67図**　77号遺構実測図

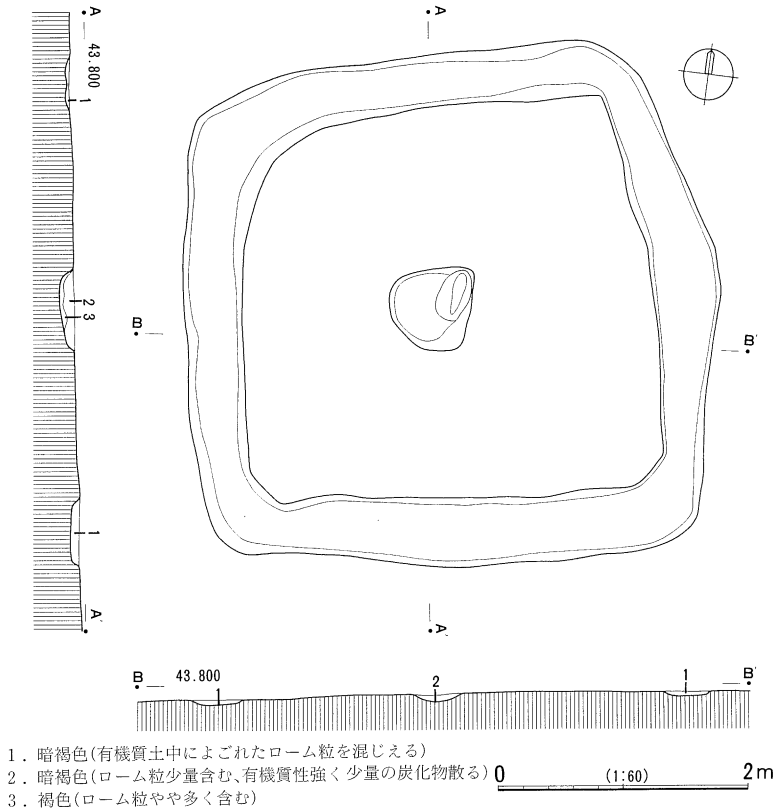
4.65mを測り、主軸方位N－4°—Wを示す。周溝は幅18～50cm、深さ3～21cmで全周するが、全体的に確認面に対する掘り込みは浅く、特に北東コーナー部付近の遺存状況は不良である。断面は浅いU字型を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。ローム漸移層及びソフトローム層中に掘り込まれており、遺存状況の不良な箇所の側壁・底面はやや不明瞭である。方台部内はほぼ平坦であり、中央部より内部施設と考えられる地下式土壙墓1基を検出している。

**内部施設**　方台部ほぼ中央、ローム漸移層面において検出されている。平面形は半地下式の隅丸長方形を呈している。長軸1.5m、短軸1.01m、確認面からの深さはテラス部分で57cm、さらに一段下った半地下面で65cmを測る。長軸方位はN—10°—Eを示し、ハードローム層中に掘り込まれている。底面は、側壁とも明瞭に観察され、西側壁はオーバーハングして立ち上がっている。覆土は有機質土中にローム粒、ロームブロックを多量に含んでおり、明らかに人為的埋土である。また一段掘り下がる下端の長軸・短軸は、それぞれ1.21m、0.29mを測り、墓壙すべての範囲で捉えても成人埋葬（屈葬）にはいささか無理な感がある。小児、あるいは火葬を含む改葬骨が埋葬されたものと考えられる。

**遺物**　火葬骨等の遺物の検出を期待したが、墓壙及び周溝内からの遺物はまったく検出されなかった。しかしながら墓壙覆土に炭化物を含むことから、火葬を含む改葬骨が埋葬されていた可能性が考えられる。




**第68図**　78号遺構実測図




**第69図**　79号遺構実測図

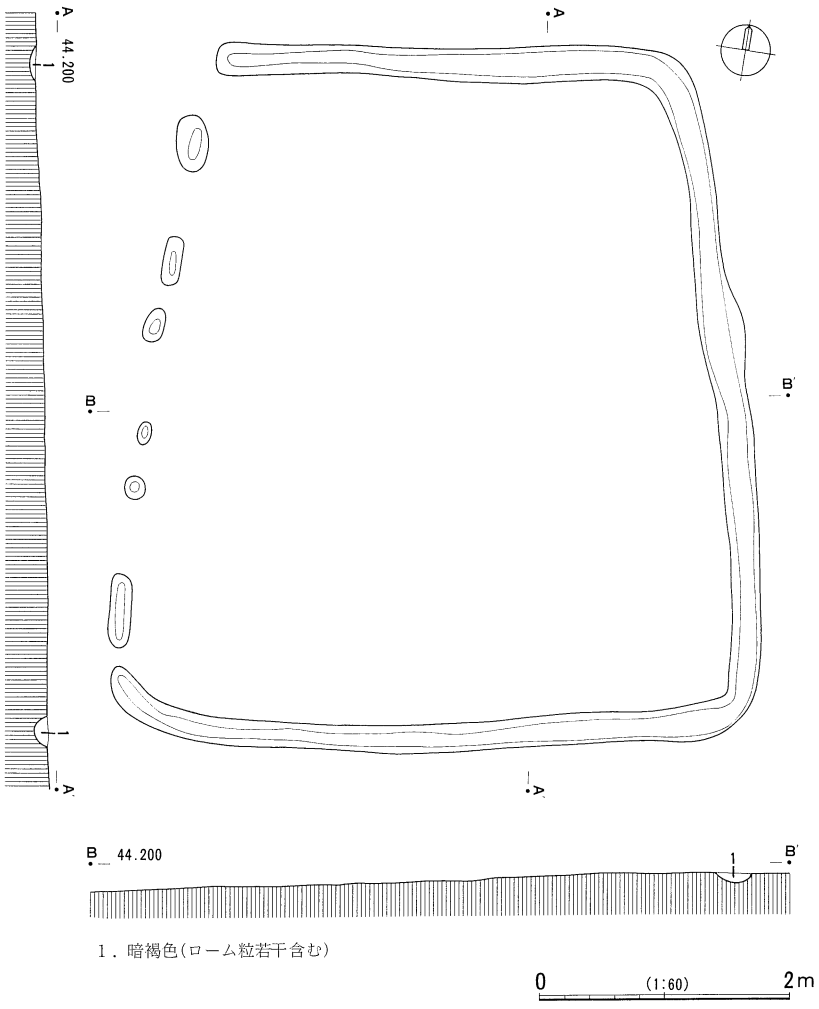
**78号遺構**(第68図、図版12)

77号遺構の南に約2m離れて存在する。周溝及び方台部の平面形は、東西方向にやや長い方形を呈している。方向部南北辺及びこれに対応する東西辺中心線を基準とする外縁径・内縁径の規模は、それぞれ3.72m・3.42m、4.28m・4.02mを測り、短軸方位はN—8°—Wを示している。周溝は幅18.6～9cm、深さ6～20cmで全周するものの遺存状況は極めて不良である。断面は逆梯形を呈し、覆土は68号遺構と明瞭に区別される黒色有機質土層である。当初、周溝部があまりにも細い為、住居跡周溝部かと思われたが、68号覆土を完全に削平しており、底面はほぼ平坦でPit状の落ち込みもなく、遺物もまったく検出されず、加えて本遺跡における他の同種遺構の周溝幅が概して広くないなどの共通点が多いことから、本遺構の範疇で捉えてよいものと考えられる。方台部内は平坦であり、何の施設も検出されなかった。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**79号遺跡**(第69図、図版19)

周溝及び方台部の平面形は、ややいびつにな方形を呈している。方台部南北辺及びこれに対応する東西辺中心線を基準とする外縁




**第70図**　80号遺構実測図

径・内縁径の規模は、それぞれ4.05m、3.08m・4.25m、3.26mを測り、短軸方位N—10°—Wを呈している。周溝は幅30cm～50cm、深さは4～6cmを測り全周しているが、全体的に確認面に対する掘り込みは浅く遺存状況は不良である。断面は浅いU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。ローム漸移層～ソフトローム層上面に掘り込まれており、側壁・底面ともやや不明瞭である。方台部内はほぼ平坦であり、中央部より内部施設と考えられる土壙1基を検出している。

**内部施設**　方台部内ほぼ中央、ローム漸移層面において検出されている。平面形はいびつな方形状を呈しており、径は70cm前後を測る。確認面からの深さは最大23cmを測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。覆土は有機質性の強い黒色土中に、ローム粒、炭化物を少量混じえて暗褐色を呈する人為的埋土である。底面はほぼ平坦であり、東側にPit状の落ち込みが検出されており、この範囲の覆土内には炭化物は認められなかった。壁は浅いながらも炭化物の切れ目によって明瞭に検出することができ、比較的緩やかに立ち上がっている。

**遺物**　周溝覆土中より若干の縄文土器片を検出したのみであり、本遺構に直接伴うものはない。

**80号遺構**（第70図、図版19）

77号遺構の北に隣接し9号、71号遺構を切って存在する。確認面に対する遺構掘り込みは浅く、遺構状況は不良である。西側の周溝は分断され全周していないが、構築時においては不整な方形を呈しながらも全周していたものと思われる。方台部南北中心線を基準とする外縁径・内縁径の規模は、それぞれ5.58m・5.06mを測り主軸方位はN—9°—Wを示している。残存する周溝は幅25～35cm、深さ4～6cm前後を測り、全体的にほぼ均一の状況を呈している。断面は浅いU字形を呈しており、周溝幅はやや狭い。ローム漸移層～ソフトローム層中及び9号・71号覆土内に掘り込まれている。

**遺物**　まったく検出されなかった。

# 5．その他時期不明

## 1　土　壙

**81号遺構**（第71図、図版19）

昭和62年度の調査時に、その存在が確認された遺構である。平面形は不整楕円形を呈している。長径1.2m、短径0.9m、深さ最大18cmを測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。中央部に木根による撹乱が認められる。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ち上がっている。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**82号遺構**（第71図、図版19）

昭和62年度の調査時に、その存在が確認された遺構である。平面形は長楕円形を呈し、長径1.24m、短径65cm、深さは21cmを測り、ソフトローム中層に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ち上がっている。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**83号遺構**（第71図、図版19）

77号遺構の北、79号遺構の東に存在する。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.33m、短径1.16m、深さは24cmを測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。覆土中に焼土・炭化物を含み、人為的埋土と考えられる。付近に方形区画改葬墓が存在することから、何らかの関連があるものと推定されるが確証はない。底面から壁にかけて緩やかに立ち上がっている。

**遺物**　焼土・炭化物以外は、まったく検出されなかった。

**84号遺構**（第71図）

83号遺構の西に隣接し、77号・79号遺構付近に存在する。平面形は不整長方形を呈し、長径1.45m、短径0.75m、深さは確認面より８cmを測り、ローム漸移層尾及び一部ソフトローム層中に掘り込まれている。覆土中に炭化物を含み、人為的埋土と考えられる。付近の方形区画改葬墓との関連が考えられるが、確証はない。底面から壁にかけて緩やかに立ち上がっている。

**遺物**　まったく検出されなかった。

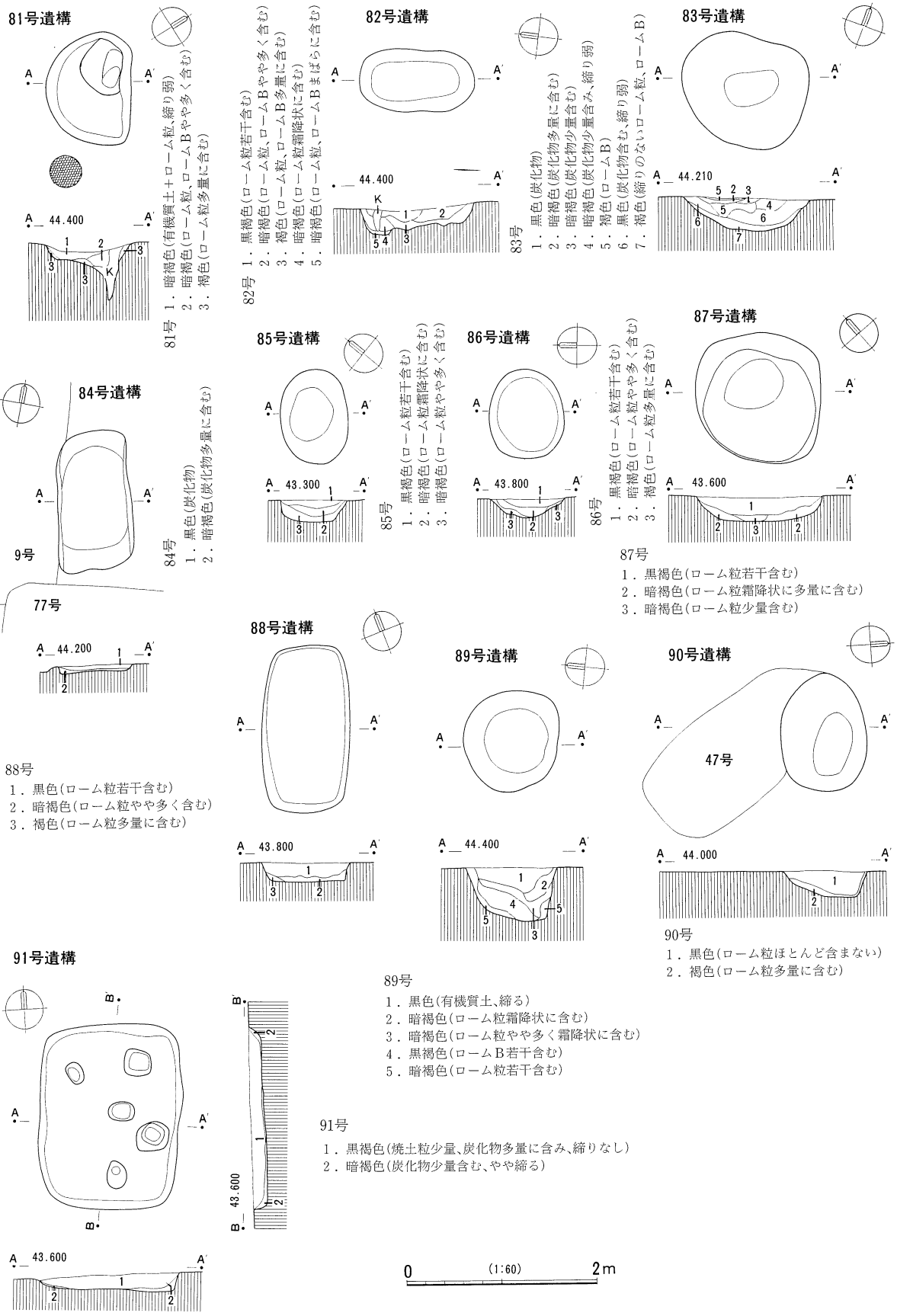
**85号遺構**（第71図、図版19）

73号遺構東側に存在する。平面形は不整な長方形を呈し、長径1.0m、短径0.7m、深さは24cmを測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、壁は急激な立ち上がり、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**86号遺構**（第71図）

85号遺構西側に隣接して存在する。平面形は不整円形を呈し、長径90cm、短径78cm、深さは20cmを測




**第71図**　81・82・83・84・85・86・87・88・89・90・91号遺構実測図

り、ソフトローム層中に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、壁は比較的緩やかに立ち上がっている。覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**87号遺構**（第71図、図版19）

2号遺構覆土中を掘り込んで存在する。平面形は不整円形を呈し、長径1.31m、短径1.25m、深さは25cmを測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**88号遺構**（第71図、図版19）

73号遺構東側に存在する。平面形は長方形を呈し、長径1.73cm、短径93cm、深さは20cmを測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、壁は急激に立ち上がり、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**89号遺構**（第71図）

82号遺構の西側に存在する。平面形は円形を呈し、長径1.0m、短径96m、深さは55cmを測り、ハードローム層中に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、壁は急激に立ち上がり、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**90号遺構**（第71図、図版7）

47号遺構に一部を削平されて存在する。平面形は長楕円形を呈し、長径1.32m、短径85cm、深さは30cmを測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。底面から壁にかけて比較的緩やかに立ち上がりており、覆土は自然堆積の状況を示している。

**遺物**　まったく検出されなかった。

**91号遺構**（第71図）

73号遺構盛土を掘り込んで存在する。覆土上層の土に重機2次客土によるローム土が覆っており、墳丘盛土除去に至るまで、まったくその存在に気付かなかった。平面形は長方形を呈し、、長径1.95m、短径1.45cm、深さは確認面より20cmを測り、ソフトローム層中に掘り込まれている。覆土中に炭化物を多量に含むものの焼土粒等は非常に少なく、調査中は炭窯かと思われたがいささか違うようである。底面はほぼ平坦であり、5本のPitが検出された。深さはそれぞれ底面より20～35cmを測り、径の大きい最も東寄りのPitが35cmと最も深い他は、均一的な深さを呈している。壁は明瞭に検出され、立ち上がりは比較的急激である。

**遺物**　多量の炭化物以外に少量の焼土粒を検出した以外は何も認められなかった。

# 第3表　53～76号遺構出土遺物観察表

53号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm 口径 | 底径 | 器高 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 1/8 | (20.6) | — | — | 不良 | 淡暗褐色 | 微砂粒多 | 外　ヘラナデ<br>内　ヘラナデ<br>頸部外面に4段の輪積痕、口唇部は両側からの押圧 | |
| 2 | 甕　胴部上半ほぼ全周 | (15.4) | — | — | 不良 | 明褐色 | 微砂粒多含 | 外　ヘラナデ<br>内　ヘラナデ<br>頸部外面に4段の輪積痕、口唇部からの押圧 | 部分的にスス付着 |
| 3 | 甕　胴部下半 1/3周<br>底部完存 | — | 7.2 | — | 不良 | 暗褐色 | 微砂粒多含 | 外　ヘラナデ<br>内　ヘラナデ | 最大径部にスス付着 |

54号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm 口径 | 底径 | 器高 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕<br>底部完存<br>体部1/3 | — | 7.1 | — | 良好 | 明褐色～褐色 | 赤色酸化粒多 | 内外面ハケ | 脚部最大径部にスス付着<br>底部に木葉痕 |
| 2 | 甕<br>体部下半2/3周 | — | — | — | 良 | 茶褐色 | 大小砂粒多 | 外　ヘラナデ後一部ミガキ<br>内　ヘラナデ後一部ミガキ？ | |
| 3 | 底部完存<br>体部1/4周 | (19.4) | 6.1 | 8.7 | 良好 | 赤褐色 | 微砂粒多 | 外　ヘラナデ後粗いタテ方向のミガキ、底部付近はケズリ後ミガキ<br>内　ミガキ<br>口縁部、縄文を施し、その下端部に縄文原体による押圧を加える。口唇部にも縄文施す。 | 赤彩は認められない。 |
| 4 | 坩<br>底部完存<br>体部1/3周 | — | 6.5 | — | 不良 | 褐色 | 大小砂粒多 | 底部付近の一部にミガキ痕跡が確認される。 | 内外面とも器面の剝離激しい。 |
| 5 | 甕<br>底部のみ | — | 7.6 | — | 良 | 明褐色 | 微砂粒多 | 内外面ヘラナデ | 内面　炭化物付着 |
| 6 | 甕<br>底部のみ | — | 6.4 | — | 良 | 明茶褐色 | 微砂粒多 | 外　ヘラナデ<br>内　ヘラナデ | |
| 7 | 高坏<br>脚柱部全周<br>脚裾部1/6 | — | 9.7 | — | 良 | 明褐色 | 微砂粒多 | 外　細かいケズリ後一部ミガキ<br>内　ヘラナデ | 脚　3方に有孔 |
| 8 | ？<br>脚部1/3 | — | 6.6 | — | 良 | 明赤褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ<br>内　ヘラナデ | 器台脚部か？ |

55号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm 口径 | 底径 | 器高 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺<br>口～頸部1/3 | (16.8) | — | — | 不良 | 暗茶褐色（一部暗褐色、淡褐色） | 黄白色粒多 | 外　口唇部　横方向の押圧（やや不明瞭）、頸部S字結節文、無文部はヘラミガキ<br>内　剝離激しく不明 | 折り返し口縁 |
| 2 | 甕？<br>底部周囲のみ | — | 7.4 | — | 良 | 外　黒～暗褐色<br>内　淡褐色 | 黄白色粒多 | 外　ヘラケズリ後、指ナデ<br>内　ヘラナデ後指ナデ | |
| 3 | 高坏<br>坏部　1/6 | (23.0) cm | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　ケズリ後ミガキ<br>内　ヘラミガキ | 内面赤彩 |
| 4～10 | | | | | | | | | 4・5は同一個体の壺、6は1と同一個体、9は不明、7・8・10は別個体の甕 |

57号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm 口径 | 底径 | 器高 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 台付甕<br>口縁～脚部2/3 | 16.5 | 6.7 | 21.2 | 良 | 暗～淡褐色 | 黄白色粒多 | 内外面ヘラナデ後ミガキ　口唇部押圧痕、胴～頸部にかけて一段の輪積痕が明瞭に残る。 | |
| 2 | 壺<br>底部周囲のみ | — | 6.2 | — | 良 | 暗赤褐色 | 微砂粒多含 | 内外面ヘラミガキ、赤彩 | 3・4と同一個体 |

58号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm 口径 | 底径 | 器高 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 高坏脚部1/4強 | — | (7.6) | — | 良好 | 茶褐色 | 茶褐色、淡褐色粒やや多く含 | 外 ハケ後 若干横ナデ<br>内 ハケ後ナデ | 坏部欠く、小ぶりでやや丁寧 |

60号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm 口径 | 底径 | 器高 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕<br>胴～底部のみ | — | 5.2 | | 良好 | 暗～淡褐色 | 砂粒密 | 外 ヘラケズリ後ヘラナデ<br>内 ヘラナデ | 最大径部にスス付着 |
| 2 | 坩 完形 | 7.8 | 2.6 | 8.4 | 良 | 淡褐色 | 砂粒若干 | 外 口縁部～頸部 横ナデ、胴中位、粗く雑なハケ、胴下位ヘラケズリ後ヘラナデ内 ハケ後ヘラナデ一部にミガキ | 内面は黒色 |
| 3 | 壺<br>口縁 | 18.2 | — | | 良好 | 赤茶褐色 | 密 | 外 横ミガキ、頸部の一部ケズリ<br>内 ヘラミガキ | 内外面赤彩 |
| 4 | 坩 完形 | 10.9 | 3.7 | 7.6 | 良 | 黒～暗褐色 | 密 | 外 口縁～頸部横ナデ、胴ヘラケズリ後ヘラナデ<br>内 口～頸部 横ナデ、胴ヘラナデ | |
| 5 | 坩 完形 | 10.8 | 2.7 | 5.4 | 良好 | 茶褐色 | 細砂粒多 | 外 口縁～頸部横ナデ、胴ヘラナデ(不明瞭)<br>内 雑なナデ | |

61号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm 口径 | 底径 | 器高 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺<br>底部全面欠く | 11.4 | — | | 不良 | 橙白色 | 微砂粒多 | 外 ヘラケズリの痕跡を若干残す以外は、ほとんど不明瞭 | 検出時は完形 |
| 2 | 小型甕<br>口縁～頸部1/2欠 | (11.5) | 4.7 | 12.0 | 良好 | 暗～黒褐色 | 密 | 外 口縁～頸部横ナデ、胴部ハケ後一部にヘラナデ<br>内 ヘラナデ | 検出時は完形 |
| 3 | 小型甕 完形 | 11.5 | 3.8 | 11.0 | 良好 | 黒～暗褐色 | 微砂粒やや多 | 外 口縁～頸部横ナデ、胴部、ハケ後ナデ、一部ヘラケズリ | 胴部中位に粘土を覆い、若干のナデが施されている。 |
| 4 | 高坏<br>口縁の1/3<br>脚の全面欠く | 14.5 | — | | 良 | 淡暗褐色 | 微砂粒若干 | 外 ヘラミガキ<br>内 ハケ後ヘラミガキ | |

62号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm 口径 | 底径 | 器高 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺<br>口縁 1/4 | (14.7) | — | — | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ミガキ<br>内 ハケ後、ナデ | 複合口縁 |
| 2 | 坩<br>口縁1/2弱 | (14.0) | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外 口唇ナデ後ハケ後ミガキ<br>内 ナデ後ヘラミガキ | 丁寧に作られる。 |
| 3 | 甕<br>胴の一部のみ | 最大径<br>(28.0) | — | — | 良好 | 暗～茶褐色 | 密 | 外 ハケ、下部焼けている。<br>内 ヘラナデ、下部焼けている。 | トーンの範囲は、炉内より検出されており二次加熱を受けている。 |
| 4 | 坩 ほぼ完 | 12.3 | 3.4 | 8.7 | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ハケ後ミガキに近いヘラナデ<br>内 ハケ後ヘラミガキ状のナデ | |
| 5 | 埦1/2強 | (10.5) | 3.5 | 6.4 | 良好 | 茶褐色 | 密 | 内外 丁寧なミガキ、内外面の一部タール付着、内面一部剝離 | |
| 6 | 埦<br>口縁～胴部3/4 | (8.7) | 2.5 | 7.2 | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ハケ後、胴部下位ヘラナデ気味のケズリ<br>内 ハケ後ヘラナデ | 内面の剝離激しい。 |
| 7 | 小型甕<br>底部1/3強 | — | 3.8 | — | 良好 | 暗褐色 | 微砂粒多含 | 外 ケズリ<br>内 ナデ | 剝離激しい。 |
| 8 | 埦<br>口縁1/8 | (8.5) | — | — | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ミガキ（やや雑）<br>内 ヘラナデ | |
| 9 | 甕<br>底部 1/2強 | — | 6.7 | — | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ケズリ<br>内 ヘラナデ（やや雑） | |
| 10 | 小型甕<br>底部3/4残 | — | 4.2 | — | 良好 | 外 淡褐色<br>内 黒褐色 | 密 | 外 やや雑なケズリ<br>内 ヘラナデ | |
| 11 | 高坏<br>脚部欠 | 20.3 | — | — | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ハケ後ミガキ<br>内 ハケ後ミガキ | |
| 12 | 高坏<br>口辺1/4残 | (21.4) | — | — | 良好 | 淡茶褐色 | 密 | 外 ハケ後ミガキ<br>内 ハケ後ミガキ | |
| 13 | 高坏<br>坏部1/3 | 11.2 | — | — | 良好 | 淡褐色 | 2㎜大の小石若干含 | 外 ヘラミガキ<br>内 ナデ後ミガキ | 内外面共器面の剝離激しい |

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 14 | 高坏<br>脚部1/2強残 | — | 18.2 | — | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ミガキ<br>内 ミガキ（外面程丁寧でない） | |
| 15 | 高坏<br>坏部欠 | 14.8 | — | — | 良好 | 淡～暗褐色 | 密 | 外 ミガキ<br>内 やや雑なハケ | 脚部3方に有孔 |
| 16 | 高坏<br>脚部2/3残 | — | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外 ケズリ後ミガキ<br>内 ヘラナデ（一部にハケ目残る） | 脚部3方に有孔<br>（外面赤彩） |
| 17 | 高坏<br>脚部1/4残 | — | (15.6) | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外 ミガキ<br>内 ミガキ | （外面赤彩） |
| 18 | 高坏<br>脚部1/3弱 | — | — | — | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ミガキ<br>内 ナデ後ハケ | 脚部3方に有孔の痕跡あり。 |
| 19 | 高坏<br>脚部1/3残 | — | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外 ミガキ<br>内 ヘラナデ | 脚部3方に有孔の痕跡あり。 |
| 20 | 器台<br>坏部欠 | — | 11.0 | — | 良好 | 茶～暗褐色 | 密 | 外 ヘラケズリ後ヘラミガキ、裾横ナデ<br>内 ヘラナデ | 脚部3方に有孔 |
| 21 | 高坏<br>完 | 6.9 | 5.9 | 5.5 | 良好 | 赤茶褐色 | 密 | 外 坏部ミガキ、脚部ケズリ後ミガキ<br>内 坏部ハケ後ミガキ脚部ヘラナデ | 脚部3方に有孔、非常に丁寧に作られたミニチュア土器（赤彩） |
| 22 | 高坏<br>口縁1/2弱 | (6.2)2 | — | — | 良好 | 暗褐色 | 密 | 外 ケズリ後ナデ<br>内 ヘラナデ | |

63号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 甕<br>胴部1/2強 | — | 5.3 | — | 良好 | 淡茶褐色 | 茶褐色微砂粒多含む。 | 外 胴上部ハケ、下部ヘラナデ<br>内 ヘラナデ | 口縁欠<br>底部に木葉痕 |
| 2 | 坩<br>胴部1/6弱 | — | — | — | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ハケ<br>内 ヘラナデ | |
| 3 | 甕<br>口縁1/5 | (18.4) | — | — | 良好 | 暗褐色 | 密 | 外 ナデハケ<br>内 ナデ | |
| 4 | 甕<br>口縁1/8 | (16.6) | — | — | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ナデハケ目若干残る。<br>内 ナデ | 外面に煤付着 |
| 5 | 甕<br>胴部1/2弱 | — | — | — | 良好 | 暗褐色 | 密 | 外 ハケ後ヘラナデ<br>内 ヘラナデ | 内外面煤付着 |
| 6 | 甕<br>底部1/2残 | — | 6.0 | — | 良好 | 外 淡褐色<br>内 暗褐色 | 微砂粒やや多く含 | 外 ヘラケズリ？<br>内 ヘラナデ | 外面磨耗 |
| 7 | 坩<br>底部のみ | — | 3.4 | — | 良好 | 外 暗褐色<br>外 茶褐色 | 密 | 外 ケズリ<br>内 ミガキ | 内面（赤彩） |
| 8 | 器台<br>完 | 7.3 | 10.8 | 7.0 | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外 ミガキ<br>内 坏部 ミガキ<br>脚部 ヘラナデ | （赤彩）<br>脚3方に有孔 |

64号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 甕<br>胴～底1/3弱 | — | 7 | 16.7 | 良好 | 淡暗褐色 | 白色微砂粒多 | 外 ハケ後ヘラナデ、後ミガキ、一部にハケ整形残る。<br>内 ヘラミガキ | |
| 2 | 甕<br>口～頸部 | 14.6 | — | — | 良好 | 淡茶褐色 | 白色微砂粒多 | 内外面とも、ハケ後ヘラナデ後ヘラミガキ | 内面一部にタール付着 |
| 3 | 坩<br>胴～底の1/3 | — | (3.4) | — | 良好 | 淡褐色 | 茶褐色粒やや多含 | 外 ケズリ後、ヘラミガキ<br>内 ヘラナデ後、ヘラミガキ | |
| 4 | 坏<br>1/4弱残 | 10 | — | — | 不良 | 淡褐色 | 7～8㎜大の小石多 | 内外面とも雑なヘラナデ | |
| 5 | 高坏<br>坏部のみ | 10.8 | — | — | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外 ヘラミガキ<br>内 ハケ後ヘラミガキ | |
| 6 | 高坏<br>脚部のみ | — | 9.8 | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外 ハケ後ヘラミガキ<br>内 ヘラナデ | 脚の3方に有孔 |
| 7 | 高坏<br>脚部のみ | — | 12.5 | — | 良好 | 淡褐色 | 茶褐色粒（1～5㎜大）多く含 | 外 ヘラミガキ<br>内 ハケ横ナデ | |

65号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 坏<br>口縁1/8 | (13.4) | — | (7.0) | 良 | 茶褐色 | 密 | 内外面共器面の剥離激しい。口縁部は横位ナデ | 赤彩を施すが殆ど剥離している。<br>二次加熱を受ける。（赤彩） |
| 2 | 坏<br>口縁1/10 | (12.8) | — | — | 良好 | 茶褐色 | 淡褐色微砂粒やや多く含 | 外　ヘラミガキ（光沢が表れている）<br>内　ヘラミガキ | 赤彩<br>全体的に丁寧に作られている。 |
| 3 | 不明 | — | — | — | 良 | 黒褐色 | 微砂粒含む | 指紋が明瞭に残る。若干ねじれている。 | |

66号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 甕<br>胴部中位以下全面欠 | 17.8 | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密、茶褐色微砂粒含 | 外　粗いヘラケズリで、ケズリ端に粘土移動に依るケズリ残しが明瞭。<br>内　ヘラナデ後ミガキ、ヘラナデの圧痕内にヘラミガキ施こす。特に口縁周辺丁寧。 | 外　下から上へのケズリ残しである。 |
| 2 | 甕<br>ほぼ完 | 15.0 | 5.5 | 17.7 | 良好 | 暗褐色 | 2㎜大の茶褐色粒及び乳白色粒やや多く含 | 外　ハケ状工具に依る整形後若干のナデ<br>内　頸部～肩ハケ目、胴中位ヘラナデ斜め方向、胴下位ヘラナデ縦方向。 | 外　基本的には下から上へのハケ、実測図は下から上への端部の表現である。 |
| 3 | 甕<br>胴～底部一部欠 | 14.1 | — | — | 良好 | 外　暗褐色<br>内　暗茶褐色 | 白色微砂粒含 | 外　ハケ整形一部ナデ<br>内　ヘラナデ一部ハケ目残る。<br>口辺部横ナデ | 外　基本的には下から上のハケ実測図は下から上への端部の表現である。 |
| 4 | 甕<br>底部1/8弱 | — | 11.4 | — | 良好 | 淡褐色 | 茶褐色微砂粒を含 | 外　ヘラケズリ後若干ナデ<br>内　ハケ目残る。 | 底部に木葉痕 |
| 5 | 坩<br>2/3 | 7.5 | 4.0 | 19.9 | 良好 | 淡暗褐色 | 密 | 外　ヘラゲスリ後若干ミガキ<br>内　ヘラナデ、全体に丁寧に作られている。 | 76号検出遺物と接合 |
| 6 | 坩<br>口縁1/8 | (5.8) | — | — | 良好 | 暗褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ<br>内　ヘラミガキ | |
| 7 | 坩<br>口縁1/8 | (13.2) | — | — | 良好 | 茶褐色 | 茶褐色粒（2㎜大）をやや多く含 | 外　ヘラミガキ<br>内　ヘラミガキ<br>口辺部横位のナデ | |
| 8 | 小型甕<br>口縁1/8 | (11.2) | — | — | 良好 | 茶褐色 | 微砂粒含 | 外　口辺部横位のナデ、体部ヘラケズリ後、ミガキ<br>内　口辺部横位のナデ、体部ナデ | 76号検出遺物と接合 |
| 9 | 高坏<br>坏部2/3脚部全欠 | 9.1 | — | — | 良好 | 淡褐色 | 茶褐色粒（2㎜大）をやや多く含 | 外　口唇部横位のナデ、ハケ後ケズリ<br>内　口唇部横位のナデ、ヘラナデ後若干のヘラ状工具に依るケズリに近いミガキ？ | |

67号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 壺<br>胴部全欠く | 15.0 | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　口辺部ナデ後、ハケ頸部ミガキ<br>内ハケ後ナデ～横ミガキ、内外面共光沢が表われる程よく磨かれている。 | |
| 2 | 壺<br>口縁1/3 | (19.8) | — | — | 良好 | 淡褐色 | 密 | 内外ミガキ | 折り返し口辺部に棒状浮紋 |
| 3 | 甕<br>頸部1/4 | — | — | — | 良 | 淡茶褐色 | 微砂粒多量に含 | 外　頸部より上横ナデ、胴ハケ。磨耗激しい。<br>内　口辺部ハケ、胴ヘラナデ | |
| 4 | 甕<br>底部2/3 | — | 6.7 | — | 良好 | 暗褐色 | 密<br>微砂粒含 | 外　ヘラケズリ、大小の（広・細）ヘラ使いわける。<br>内　ハケ、やや器面の剥離が激しい。 | 底部に木葉痕 |
| 5 | 坩<br>口縁一部欠 | — | 5.3 | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　ヘラミガキ<br>内　ヘラナデ。口縁～頸部ヘラミガキ、頸部に円形竹管に依る連続刺突紋 | |
| 6 | 坩<br>胴部以下1/4欠 | 8.8 | — | — | 良好 | 淡褐色 | 2～3㎜大の茶褐色及び白色粒含 | 外　口辺部横ナデ、ハケ後ミガキ（あまりはっきりしない）。<br>内　口辺部横ナデ、ハケ後ミガキ～ヘラナデ | 内外面共器面全体にわたり剥離<br>非常に軽く、薄い。 |
| 7 | 坩<br>口縁1/5 | (5.7) | — | — | 良 | 暗褐～茶褐色 | 密 | 外　粗いヘラケズリ後、指ナデ<br>内　ヘラナデ、口唇部のみ指ナデ | ミニチュア |
| 8 | 坏<br>1/4 | (12.4) | — | — | 良好 | 外　茶褐色<br>内　淡褐色 | | 茶褐色粒をやや多く含（3～5㎜） | 外　ハケ後、ミガキ<br>内　ハケ後ミガキ |
| 9 | 高坏<br>脚部1/3 | — | (17.5) | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　ハケ後ミガキ（ハケ目残る）<br>内　ハケ | （赤彩） |

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 10 | 甕<br>口縁1/4 | 18.4 | — | — | 良好 | 暗褐色 | 密 | 外　ハケ<br>内　ハケ<br>胴部　ヘラナデ | 口縁76号、頸部66号と接合 |
| 11 | 坩<br>胴部上位1/4 | — | — | — | 良好 | 暗～茶褐色 | 密 | 外　ハケ後ヘラミガキ、一部ミガキの下に残る。<br>内　ヘラナデ後、一部ハケ調整 | |
| 12 | 高坏<br>脚部のみ | — | — | — | 良好 | 黒～暗褐色 | 密 | 外　ミガキ<br>内　ミガキ～ヘラナデ | 内外面剝離激しい、やや小形 |
| 13 | 高坏<br>手捏ね<br>脚部欠 | 6.0 | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 内外部共輪積痕明瞭、時に外面は意識的に輪積を残したと思われる程調整がない。内面は若干の指ナデ（粘土ひもはりつけ輪積）各所に指紋が残る。 | （赤彩）<br>ミニチュア |
| 14 | 坏？<br>手捏ね<br>完 | 4.6 | 2.0 | 3.0 | 良 | 茶～暗褐色 | 茶褐色粒をやや多く含（2～3㎜） | 内外　指ナデ | やや不安定<br>ミニチュア |
| 15 | （壺）？<br>手捏ね<br>口縁欠 | — | 1.4 | — | 良好 | 暗褐色 | 密 | 外　指ナデ<br>内　細いヘラ状工具に依る掻き取り、中位に三条単位のハケ目<br>頸部～口辺部は輪積 | ミニチュア |

68号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 壺<br>口縁の1/2残 | 16.8 | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　ヘラミガキ<br>内　ハケ後ヘラミガキ | 赤彩、丁寧につくられる。 |
| 2 | 甕<br>底部1/4残 | — | (7.0) | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ<br>内　器面の剝離激しく不明 | |

69号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 甕　2/3 | 19.7 | (8.7) | (21.1) | 良好 | 淡茶褐色 | 微砂粒やや多く含む | 外　口辺部横位ナデ<br>体部雑なヘラケズリ、肩及び底部付近にハケ目、底部の単位は大きい。<br>内　口辺部横位ナデ、頸部付近ハケ調整。肩部～中位にかけ単位の大きいハケ調整、頸部稜線より下及び底部付近ヘラミガキ | 底部全面欠く<br>肩部以上のハケ単位は下から上への終了点を示す。 |
| 2 | 甕<br>1/2 | 19.2 | — | — | 良好 | 外　暗褐色<br>内　淡褐色 | 微砂粒含む | 外　ハケ、頸部下ハケ状工具で整形後ヘラケズリ、胴部中位以下ハケ状工具整形後ヘラナデ<br>内　ハケ状工具に依る整形後ヘラナデ、中位より上はハケ整形 | 底部全面欠く　全体的に丁寧<br>ハケ方向は下から上、端部はハケ整形の終了を示す |
| 3 | 壺<br>胴部欠 | 16.0 | — | — | 良好 | 内外黒～暗褐色 | 密 | 外　口辺部横ナデ、ヘラケズリ後横位ナデ、頸部上～口辺の下にかけてのみヘラケズリ痕残る。<br>内　ヘラナデ | 全体的に作り丁寧 |
| 4 | 坩<br>胴下部全欠 | 10.5 | — | — | 良好 | 外　茶褐色<br>内　口辺部茶～暗褐色胴部淡褐色 | 密 | 外　口辺部横ナデ～ミガキ<br>内　口辺部横ナデ～ミガキ、頸部～胴部ナデ | 全体的に丁寧<br>光沢が表われる程よく磨かれている。 |
| 5 | 甕<br>底部1/4 | — | 7.8 | — | 良好 | 暗褐色 | 密 | 外　ハケ<br>内　ナデ | |
| 6 | 坩<br>底部のみ | — | 3.6 | — | 良好 | 外　茶淡褐色<br>内　黒褐色 | 密 | 外　ヘラミガキ、若干風化<br>内　ヘラナデ、ヘラ状工具に依る掻き取り痕残る | 丁寧に作られる。<br>4と同一個体 |
| 7 | 高坏<br>坏部1/8弱 | (16.0) | — | — | 良好 | 茶褐色 | 白色微砂粒少量含む | 外　ハケ後、ナデ<br>内　2次加熱に依り、器面の剝離激しい。 | |
| 8 | 高坏<br>脚部1/2 | — | 17.8 | — | 良好 | 淡褐色 | 微砂粒多含 | 外　ケズリ後ミガキ<br>内　ハケ | 脚の3方に有孔<br>内側やや磨耗 |
| 9 | 器台<br>脚部2/3欠 | 7.4 | 7.0 | 6.9 | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　口辺部横ナデ後ミガキ、脚部ケズリ後ミガキ<br>内　口辺部ミガキ、脚部ヘラナデ | 丁寧に作られる。<br>脚の3方に有孔 |
| 10 | 器台<br>2/3強 | 5.9 | 11.4 | 11.5 | 良好 | 茶褐色 | 微砂粒多含 | 外　ハケ後ミガキ、裾部ハケ<br>内　ナデ～ハケ | 脚の一方に有孔<br>孔1.2cm |

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 11 | 甕<br>口縁～頸部欠 | — | 1.4 | — | 良好 | 黒褐色 | 密 | 外　頸部～胴部中位にかけて放射状のハケ目が13条。中位から上に2条のハケ目が環状にめぐる。中位～下位はヘラケズリ後若干のナデ | 胴部下位に径3㎜の小孔1 |
| 13 | 不明 | — | — | — | 良 | 茶褐色 | 白色微砂粒やや多く含 | 環状にまわるものと考えられるが、詳細不明、直径1cm | 土製品 |

70号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 甕<br>ほぼ完 | 18.0 | 5.1 | 27.2 | 良好 | 淡褐色～暗褐色 | 小石（5㎜大）やや多く含 | 外　口辺横ナデ、胴部タテケズリ後、斜方向ケズリ<br>内　口辺横ナデ、胴部ヘラナデ | |
| 2 | 甕<br>口縁～胴部下位1/4 | (22.9) | — | — | 良好 | 淡褐色 | 密（茶褐色粒やや多く含） | 外　口辺横ナデ、胴部ヘラケズリ<br>内　口辺横ナデ後ミガキ、胴部ヘラナデ後ヘラミガキ | |
| 3 | 甕<br>口辺～胴部1/2弱 | (14.1) | — | — | 良 | 茶～黒褐色 | 微砂粒多量に含 | 外　口辺横ナデ、胴部ヘラケズリ<br>内　ヘラナデ | 全体的に雑 |
| 4 | 甕<br>1/2弱 | 14.9 | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　口辺横ナデ、胴部ケズリ<br>内　ヘラナデ | 二次加熱を受け器面剝離激しい。 |
| 5 | 甕？<br>完 | 8.7 | — | 20.9 | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外　口縁ナデ、胴部細い単位のヘラケズリ～下から上へのヘラケズリ、底部ヨコケズリ、やや剝離激しい所もあり<br>内　口縁ナデ、胴部ヘラナデ、底部ヘラミガキ | 丁寧に作られる。 |
| 6 | 甕<br>底部のみ | — | 8.4 | — | 良好 | 淡茶褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ<br>内　ヘラナデ | 上げ底気味で底は非常に薄い。 |
| 7 | 甕<br>口縁一部欠 | 10.8 | 5.9 | 13.0 | 良好 | 暗～茶褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ<br>内　ヘラナデ | 内外面共器面の剝離激しい。 |
| 8 | 高坏<br>坏部3/4 | 18.6 | — | — | 良好 | 外　淡褐色<br>内　淡褐色一部黒色 | 密 | 外　口辺横位ナデ、ケズリ後ミガキ、ミガキ | 長脚高坏 |
| 9 | 高坏<br>脚部1/2 | — | 13.9 | — | 良好 | 褐色 | 密 | 外　脚部ケズリ、裾部ナデ<br>内　ナデ | 坏部なし |
| 10 | 坏　完 | 11.8 | — | 4.3 | 良好 | 淡褐色 | 密 | 外　ケズリ後ナデ<br>内　ヘラミガキ | |
| 11 | 坏<br>1/2強 | (13.1) | — | 4.6 | 良好 | 淡褐色 | 密 | 内外面共ミガキ、黒色処理 | 内外面共器面の剝離激しい。 |
| 12 | 坏<br>1/2 | 11.4 | — | 3.7 | 良好 | 黒褐色 | 密 | 内、外ミガキ、器面剝離激しい | 黒色処理 |
| 13 | 坏<br>ほぼ完 | 10.7 | — | 3.7 | 良好 | 淡暗褐色 | 密<br>微砂粒含 | 外　横ナデ後ミガキ<br>内　ケズリ後ミガキ、内外面黒色処理されるが、部分的にとぶ。 | 内面十文字暗文 |
| 14 | 坏<br>ほぼ完 | 11.0 | — | 3.3 | 良好 | 外　褐色<br>内　黒色処理 | 密 | 外　ケズリ後ミガキ<br>内　ミガキ | 内面十文字暗文 |
| 15 | 手捏ね鉢<br>口辺一部欠 | 8.3 | 6.3 | 5.4 | やや良好 | 淡茶褐色 | 微砂粒多く含 | 外　指ナデ<br>内　ケズリに近いヘラナデ | |
| 16 | 手捏ね鉢<br>口辺殆ど欠 | (7.4) | 4.8 | 6.0 | 良好 | 淡褐色 | 微砂粒多く含 | 内・外　指ナデ | 底部に枯葉状の木葉痕<br>木葉付着のまま乾燥か。 |
| 17 | 手捏ね鉢<br>口辺1/2弱欠 | 5.2 | 4.4 | 7.3 | 良 | 暗褐色 | 密 | 外　指ナデ<br>内　指ナデ（輪積痕が残る） | |
| 18 | 手捏ね<br>口辺部欠 | — | 6.2 | — | 良好 | 淡褐色 | 密（微砂粒若干） | 外　ヘラ状工具によるケズリ後指ナデ<br>内　雑なヘラナデ | |
| 19 | 支脚<br>ほぼ完 | — | 8 | 23.2 | 不明 | 淡橙褐色 | 微砂粒多量に含 | 二次加熱を受け、器面がボロボロ、裾部は一部高坏脚部の様に中空 | 断面円形 |

71号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 坏<br>1/3残存 | (10.6) | (5.7) | (5.6) | 良 | 暗褐色 | 微砂粒含 | 外　ハケ後指ナデ<br>内　ハケ | |
| 2 | 坏<br>1/4残存 | (9.0) | — | — | 良 | 淡茶褐色 | 微砂粒少量含 | 外　ハケ後ヘラミガキ<br>内　ハケ後ヘラミガキ | |
| 3 | 坩<br>1/6残存 | (5.3) | — | — | 良 | 淡暗褐色 | 微砂粒少含 | 外　ヘラナデ<br>内　ヘラナデ | |
| 4 | 坏<br>1/3残存 | (5.4) | (3.7) | (2.9) | 良 | 暗茶褐色 | 微砂粒少含 | 内外面指ナデ | |

72号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 甕<br>頸部1/10 | — | — | — | やや不良 | 暗褐色 | 密 | 外　ハケ一部指ナデ<br>内　ヘラナデ一部指ナデ | |
| 2 | 甕<br>底部のみ1/4残存 | — | (6.0) | — | やや不良 | 暗赤褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ<br>内　ヘラナデ | 内外面赤彩 |

73号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 甕<br>1/3残存 | — | 15.6 | — | 良 | 暗褐～暗茶褐色 | 密 | 外　ハケ後ヘラナデ、一部ヘラケズリ<br>内　ヘラナデ後、ヘラミガキ、一部指ナデ | |
| 2 | 甕 | — | 12.6 | — | やや不良 | 淡褐色 | 茶褐色粒やや多 | 外　ヘラミガキ<br>内　ハケ目若干残る。 | 内面は剝離激しい<br>底部に木葉痕 |
| 3 | 坏<br>1/2残存 | 14.9 | — | 6.8 | 良 | 暗赤褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ後、指ナデ、口縁横ナデ<br>内　ヘラナデ後指ナデ | 内外面赤彩 |
| 4 | 坩<br>1/4残存 | 9.7 | — | — | 良好 | 黒～暗茶褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁横ナデ<br>内　ヘラナデ後ヘラミガキ | |
| 5 | 高坏<br>坏部2/3残存 | 18.3 | — | — | やや不良 | 淡～暗褐色 | 密 | 外　ハケ後ヘラミガキ<br>内　ハケ後ヘラミガキ | 内外面やや剝離激しい |
| 6 | 高坏<br>坏部1/5残存 | — | — | — | 良 | 黒～暗褐色 | ローム粒多含 | 外　ヘラケズリ後ヘラミガキ<br>内　ヘラミガキ | |
| 7 | 高坏<br>坏部1/5 | — | — | — | 不良 | 暗茶褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ後ヘラミガキ<br>内　ヘラミガキ | 赤彩、内外面剝離激しい |
| 8 | 高坏<br>坏部1/6 | — | — | — | 不良 | 淡～暗褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ後ヘラミガキ<br>内　ヘラナデ後ヘラミガキ | 外面赤彩 |
| 9 | 高坏<br>脚1/4 | — | — | — | 不良 | 淡茶褐色 | 密 | 外　ヘラミガキ<br>内　ハケ後ヘラナデ | 外面赤彩 |
| 10 | 高坏<br>脚部一部のみ | — | — | — | 良 | 淡～暗褐色 | 密 | 外　ヘラミガキ<br>内　ヘラ状工具によるカキトリ | |
| 11 | 高坏<br>脚の1/3 | — | 9.9 | — | 良 | 暗褐色 | 微砂粒少含 | 外　ヘラミガキ後、指ナデ<br>内　ヘラナデ | |
| 12 | 器台<br>ほぼ完形 | 6.6 | 11.1 | 6.7 | 良 | 暗茶褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ後、ヘラミガキ<br>内　ヘラナデ後、指ナデ、ヘラミガキ | 赤彩 |
| 13 | 台付甕<br>台のみ完存 | — | 9.1 | — | 良 | 暗褐色 | 白色微砂粒多 | 外　ヘラケズリ後ナデ<br>内　ヘラナデ | |

74号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 3 | 坩<br>3/4 | 11.8 | — | 12.4 | 良 | 淡褐色 | 密 | 外　口縁～頸部指ナデ、胴ヘラケズリ後ナデ、一部ミガキ<br>内　口縁～頸部指ナデ、胴指ナデ後一部ミガキ | |
| 4 | 甕<br>胴1/2弱 | — | — | — | 良 | 淡褐色 | 密 | 外　ハケ後ナデ<br>内　ヘラナデ、一部ハケ | 丸底か？ |
| 5 | 高坏<br>脚1/3弱 | | (16.5) | | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　ナデ<br>内　脚カキトリ、雑なヘラケズリ、裾ナデ | 外面赤彩 |

75号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 甕<br>口縁1/8 | (17.0) | — | — | 良 | 暗褐色 | 微砂粒多 | 外　ナデ<br>内　ナデ | |
| 2 | 甕<br>底部部1/3 | — | (6.3) | — | 不良 | 暗褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ<br>内　ヘラナデ | 内外面剝離激しい。 |
| 3 | 高坏<br>坏部1/4 | — | — | — | 不良 | 暗褐色 | 密 | 外　ヘラケズリ<br>内　ヘラナデ | 内外面剝離激しい。 |
| 4 | 不明<br>脚状部欠 | 8.8 | — | — | やや不良 | 褐色 | 密 | 外　ヘラミガキ<br>内　ヘラナデ | 蓋か？ |

76号

| 図番 | 器種遺存度 | 法量（推定）cm | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 整形・調整等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 甕<br>口縁部のみ<br>1/4弱残 | (18.0) | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　口縁、横位ナデ、胴ハケ後ヘラミガキ<br>内　口縁、ハケ、一部横ナデ、胴ヘラナデ | |
| 2 | 甕<br>口縁部のみ<br>1/4残 | (18.2) | — | — | 良好 | 茶褐色 | 密 | 外　口縁、横位ナデ、胴ヘラケズリ後ヘラミガキ<br>内　口縁、ハケ、胴ヘラナデ | 一部スス付着 |
| 3 | 壺<br>頸部1/3 | — | — | — | 良好 | 暗褐色 | 密 | 外　ヘラミガキ<br>内　ヘラミガキ | |
| 4 | 甕？<br>底部全同 | — | 5.0 | — | やや不良 | 暗褐色 | 微砂粒多 | 外　ヘラケズリ、一部ハケ残<br>内　ヘラナデ | 底部に木葉痕 |
| 5 | 甕<br>底部の3/4 | — | 3.3 | — | 良 | 両面褐色と黒褐色 | | 外　ヘラケズリ、一部ハケ残<br>内　指ナデ | |
| 6 | 高坏<br>坏部1/10 | — | — | — | やや不良 | 淡褐色 | 密 | 外　ヘラミガキ<br>内　ヘラミガキ | |

# III　ま　と　め

今回の北旭台遺跡の調査によって、縄文時代～奈良・平安時代に宜る多数の遺物を検出し、得られた成果も多大なものがあった。ここでは紙面の都合上特に有鉤銅釧と北旭台遺跡の関係を中心としてまとめておきたい。

**有鉤銅釧の系譜と形態**

有鉤銅釧は、その系譜を南海産大型巻貝であるゴホウラ製立岩型貝輪に求め、(註1)同じく「鉤状突起」を持つ巴形銅器と伴に辟邪・破邪・破魔としての呪力を持つ我国独自の青銅器として捉えられている。(註2)

現在20遺跡53個体の製品と3鋳型が知られているが、(註3)立岩型貝輪の系統として捉えられる製品は16遺跡51個体であろう。(註4)これらの製品は立岩型貝輪に比べ、鉤状突起部が意識的に誇張して製作されたと考えられるものが多いが、基本的には内径縦長の一鉤型タイプのものであり、円環型銅釧に瘤状突起を有する製品等とは峻別されるものと考えられる。(註5)

次にこれまでに資料として報告された有鉤銅釧は、さらに細分も可能ながら現状では大きく次の5タイプに分類が可能かと思われる。

立岩形貝輪 ―― 一鉤型有鉤銅釧 ― 直線的 ― 白岳型……①
　　　　　　　　　　　　　　　└ 腕曲的 ― A茂手型……②
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└ B桜馬場型……③
　　　　　　二鉤型有鉤銅釧 ― 左右一対 ― 香椎型……④
　　　　　　　　　　　　　└ 片側二鉤 ― 富雄丸山型……⑤

①は鉤状突起が横方向に直線的にのびるものであり、白岳・巨摩廃寺例があげられる。(註6)②は鉤状突起の誇張は認められるものの最も立岩型貝輪に近い型状のものであり、腕曲的にのびる鉤状突起とその反対側が円弧状を呈するものである。原の述、茂手、要池、西山公園、矢崎、北旭台例があげられる。また全貌は不明ながら、御幸町、根丸島、了仙寺洞穴、手広八反目の鉤状突起の形状は極めて矢崎、北旭台例に類似することから、一まずこの範疇で捉えておきたい。(註7)③は、鉤状突起の反対側が、円弧状を呈しておらず、多面的となり角を持つタイプである。桜馬場例の2種の鋳型で製作された26個体が該当する。(註8)④はほとんど楕円形を呈し、左右一対の鉤状突起の存在が認められるものである。製品としては現在のところ存在しておらず、香椎松原遺跡において検出されたA・B両面の2種の鋳型が該当する。(註9)⑤は片側に2つの極端に誇張された鉤状突起を有するもので、もはや立岩型貝輪の系統としては捉えがたい製品である。富雄丸山古墳例が該当する。

以上分類についての要約を述べた。しかしながらこれまでに各地域において検出された製品・鋳型は、いずれも微妙にその形態が異なっており、現状ではさらにその同笵関係などの資料の増加が期待されるところでもあることを申し加えておきたい。(註10)このうち二鉤を有する④・⑤のタイプは、鉤状突起が持つとされる呪力の充実に重点を置き、ゴボウラ製立岩型貝輪の持つ原義からは半ば独立して生産

された製品であろうと考えられるとすれば、いわゆる立岩型貝輪の原義の系譜を受け継ぐものは一鉤型有鉤銅釧といえようか。(註11)

**分　布**

これまでに検出された有鉤銅釧及び鋳型の分布を第72～75図にまとめた。これによれば有鉤銅釧は対島を含む北部九州、近畿、北陸、東海、南関東地方に断片的に分布しており、最も多く検出された桜馬場例の26点、次いで西山公園例の９点を例外とすれば、すべて３～１点の検出である。次に鋳型は香椎松原、浜山、宮の上遺跡においてのみ検出されているが、いずれも北部九州福岡県地方に集中しているのが現状である。これらのことから、立岩型貝輪の系譜をもつ有鉤銅釧が、青銅器の国産化、あるいは腕輪多数着装化現象という動向の中で、まず北部九州地域においてその需要と供給地帯の一つが確立していたことは明瞭なところであるものの、北部九州地域に分布する鋳型をもって製造された製品が現在のところ検出されていないことや、北部九州のみならず、各遺跡において検出された有鉤銅釧の形状がいずれも異なっていることなどを考えあわせれば、各種青銅器の集中的に分布するそれぞれの地域において有鉤銅釧の需要と供給地帯が存在していた可能性も考えられよう。また、東海・南関東を中心とする地域に有鉤銅釧の濃密な分布を認めることができ、これらの製品はいずれも鉤状突起が偏平化し形状も類似するなどの共通性が認められることは十分に留意しなければならない。(註12)

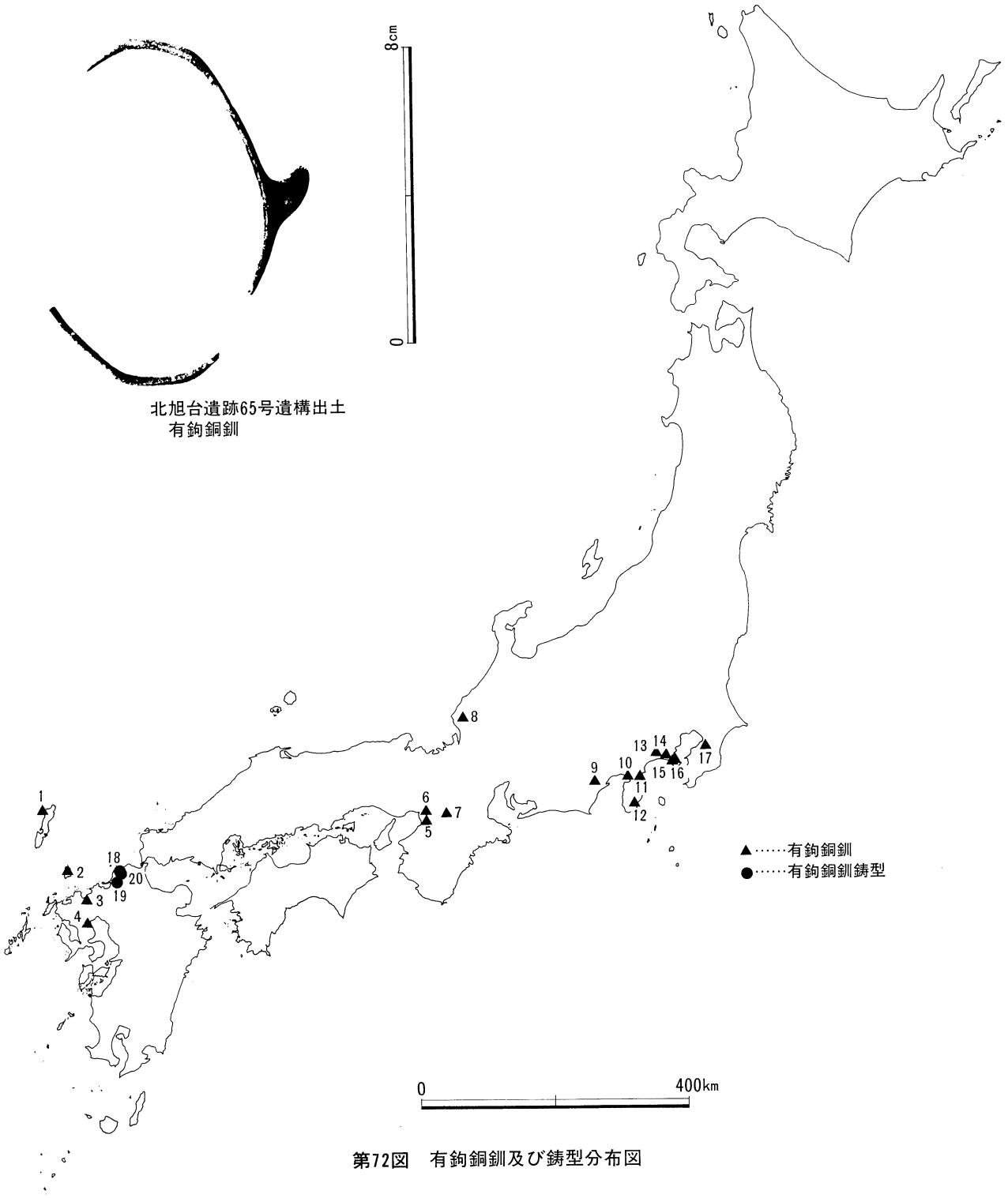
ここで、東海・南関東に分布する他の青銅器を含めて考えてみたい。まず伊勢湾を中心とする地域に三遠式銅鐸、単孔・多孔鏃が集中して検出される傾向があり、次に天竜川をを越えた南関東を含む地域は、帯状円環型銅釧(銅環)、小銅環、有鉤銅釧がやはり集中して検出されている傾向が認められる。さらに両者を含む地域には、鋳型を含めても全国30例しか検出されていないいわゆる小銅鐸の約半数近くが検出されていることなどを考えあわせる時、これらの地域においても、青銅器の需要と供給地帯の一つが存在する可能性が考えられよう。とすれば青銅器のうちでも特殊で、しかも最も広範囲に分布する有鉤銅釧及び小銅鐸さらには茨城県石岡市宮平遺跡検出巴型銅器などを含めることによって北部九州以外の各地における青銅器工房においてこれらの製品も生産された可能性も考えられよう。(註13)

**有鉤銅釧と北旭台遺跡の関係**

ここで有鉤銅釧と北旭台遺跡の関係についてふれておきたい。有鉤銅釧を検出した65号遺構は、下層に存在する66号遺構とは時期的にも接近し、炉の存在の有無などの例より極めて対照的な遺構関係であることは前述しておいた。またこの他にも時期的にも近似し、いわゆるベッド状遺構を伴う遺構として62・63・67号遺構が存在している。河野・熊野両氏の指摘のごとく、ベッド状遺構を持つ者が祭祀を司どる者として、共同体における代表者とすれば、北旭台遺跡における有鉤銅釧とベッド状遺構との関係は、まさに直接結びつくものとして捉えられる。ここでこれらの遺構関係やお互いの時間差などを考慮し、さらに想像をたくましくすれば次の様な仮説が浮かび上ってくるのではないだろうか。(註14)

まず65号遺構であるが、$P_7$・$P_{11}$などの上面によく焼けた面を有する１対のPitの存在を、64号遺構検出自然石に付着したタールの存在との関係から、あるいは松明等を使用した施設として想定した場合、同遺構においては一昼夜、あるいは数日間に及ぶ火に関連する儀式的祭祀が行なわれた場として捉えられるものであれば、下層に位置する66号遺構は炉の存在すら認められず、極めてこれと対照的な存在となる。また両者は切り合い関係があるものの、かなり接近した時期関係を有するものと考えられることから、あるいは66号遺構は司祭者となるべく共同体より選ばれた者が、司祭者たる資格

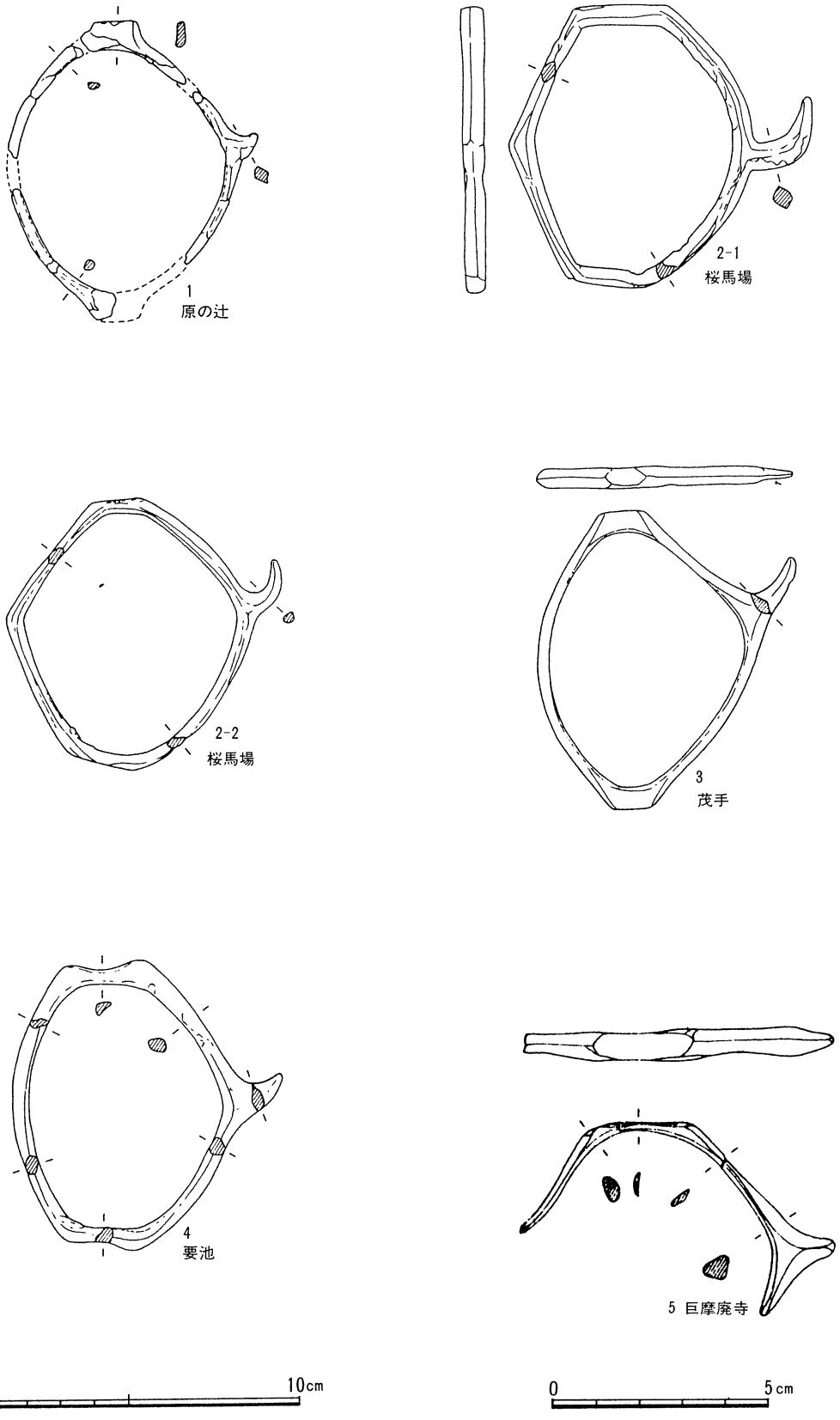
北旭台遺跡65号遺構出土
有鉤銅釧




第72図　有鉤銅釧及び鋳型分布図

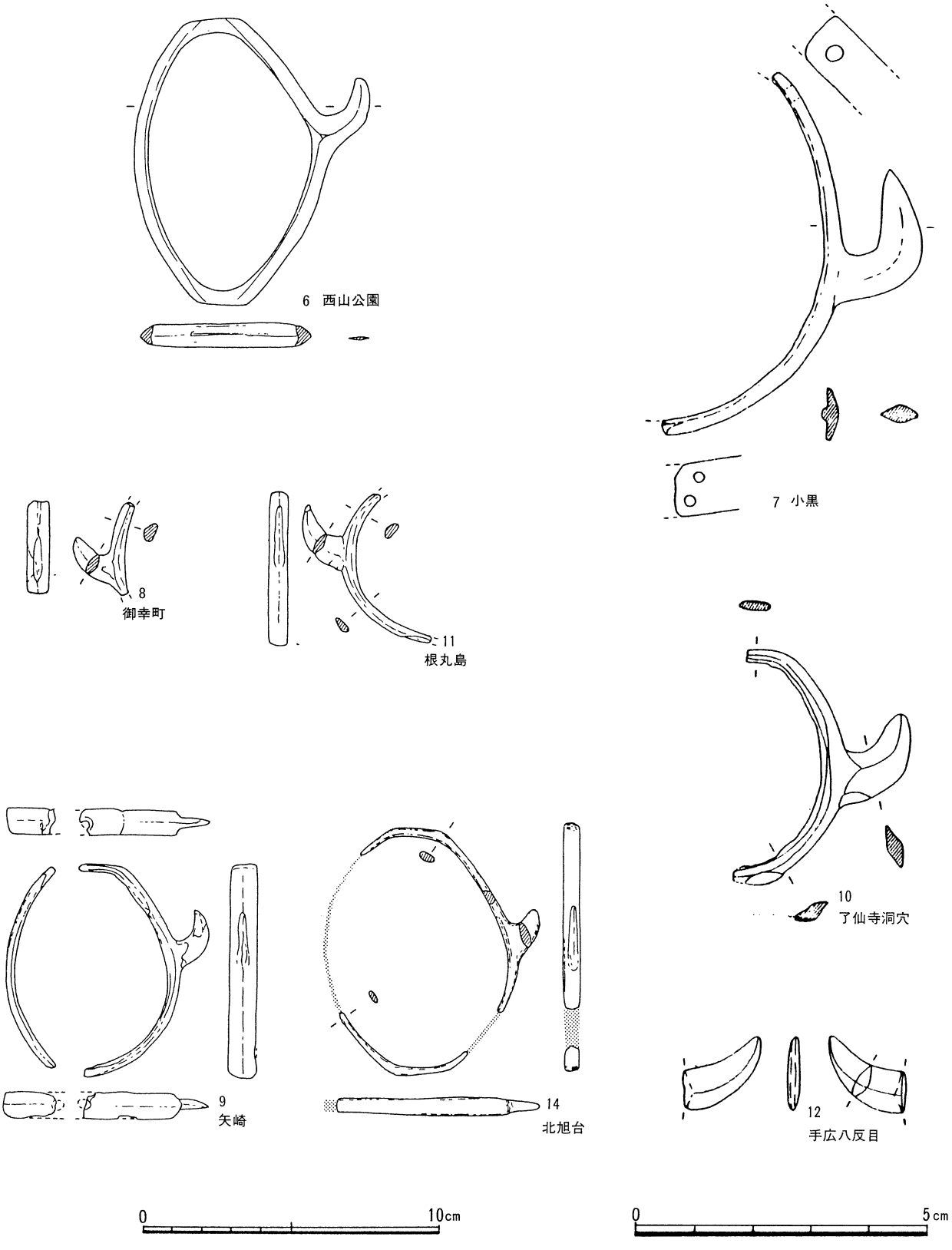
第４表　　有鉤銅釧出土遺跡

| No. | 県　名 | 市町村名 | 遺　跡　名 | 点数 | 備　　考(時期等) | No. | 県　名 | 市町村名 | 遺跡名 | 点数 | 備　　考(時期等) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 長　崎 | 上県町 | 白　　岳 | 1 | 積石塚群？ | 11 | 静　岡 | 清水町 | 矢　崎 | 2 | |
| 2 | 長　崎 | 壱岐郡 | 原の辻 | 3 | 甕棺墓地 | 12 | 〃 | 下田市 | 了仙寺洞穴 | 1 | 有鉤銅釧小型品 |
| 3 | 佐　賀 | 唐津市 | 桜馬場 | 26 | 甕棺墓　　中期 | 13 | 神奈川 | 泰野市 | 根丸島 | 1 | 弥生後期 |
| 4 | 〃 | 武雄市 | 茂　　手 | 1 | (建物跡？)　後期前半 | 14 | 〃 | 鎌倉市 | 手広八反目 | 1 | 住居跡弥生後期 |
| 5 | 大　阪 | 泉大津市 | 要　　池 | 1 | 布留期の溝 | 15 | 〃 | 逗子市 | 持　　田 | 1 | 住居跡久ヶ原(鉤状突起はみあたらない) |
| 6 | 〃 | 東大阪市 | 巨摩廃寺 | 1 | 沼状遺構　中期末を下らない | 16 | 〃 | 〃 | 池　　子 | 1 | 細詳不明 |
| 7 | 奈　良 | 奈良市 | 富雄丸山古墳 | 1 | | 17 | 千　葉 | 市原市 | 北旭台 | 1 | 住居跡五領前期 |
| 8 | 福　井 | 鯖江市 | 西山公園 | 8 | 後期 | 18 | 福　岡 | 福岡市 | 浜　　山 | | 鋳型？ |
| 9 | 静　岡 | 静岡市 | 小　　黒 | 1 | 弥生後期後半～古式土師 | 19 | 〃 | 〃 | 香椎松原 | | 鋳型 |
| 10 | 〃 | 沼津市 | 御幸町 | 1 | 古式土師 | 20 | 〃 | 〃 | 上の宮 | | 鋳型　(細詳不明) |



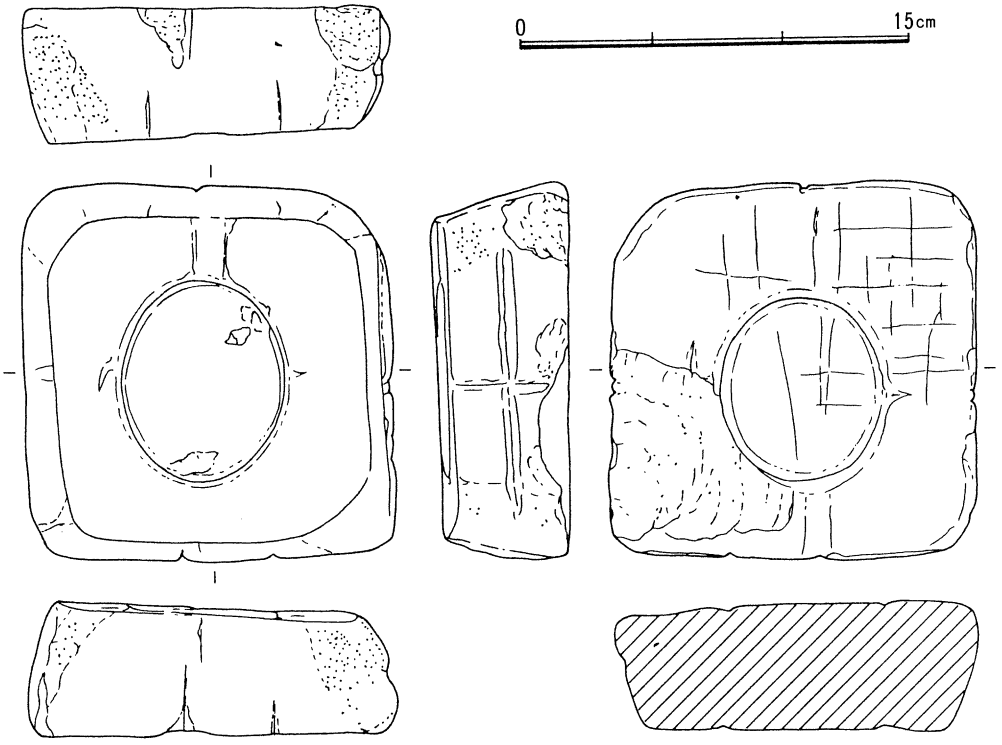

1～4（木下尚子1982より一部改変転載）
5（弥生時代の青銅器とその共伴関係1986より転載）

**第73図**　有鉤銅釧実測図

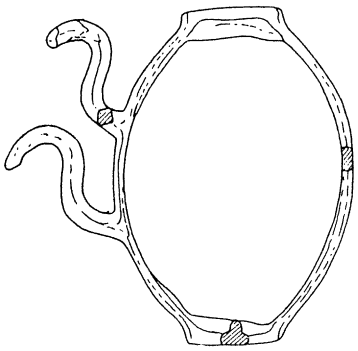



6・8・9・11(木下尚子1982より一部改変転載)
7・10・12(弥生時代の青銅器とその共伴関係1986より転載)

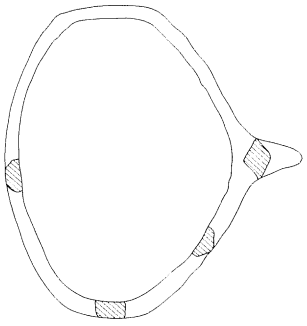
**第74図**　有鉤銅釧実測図




福岡県香椎松原出土鋳型



奈良富雄丸山古墳出土有鉤銅釧
（木下尚子1982より転載）



長崎白岳遺跡出土有鉤銅釧
後藤守一（1922より再トレース転載）
白岳例のみ縮尺不統一

**第75図**　鋳型及び有鉤銅釧実測図

を有するまでの他との隔絶を含めた修業的施設の場として捉えられないものであろうか。

次にベッド状遺構を保有する62・63・67号遺構のうち、62号入口施設と考えられるPitは63号遺構主柱穴の再利用が考えられること。63号遺構は66号遺構と同様に埋め戻しが行なわれていることを考え合せれば、この両者（62・63号）は、65号・66号遺構の関係と深く関連があり、しかも同一人物の移動として捉えることが可能であると思われる。また63号遺構は埋め戻された遺構覆土が、かなり硬く引き締っていることから、周辺が65号遺構に関る広場的要素を持っていた可能性も考えられる。また67号遺構については、65号遺構が単なる祭祀における儀式の場として捉えられた場合、65号遺構に関連する司祭者の居住の場として捉えることも可能ではないだろうか。

以上のことをまとめると北旭台遺跡における有鉤銅釧に関る司祭者は、少なくとも一時期二人以上存在したものと考えられ、一人は実際に有鉤銅釧を着装して火を中心とする儀式的祭祀を行なう巫女的シャーマンと、まつりごとも含めた祭祀を司どる司祭者という関係の想定も成り立つものと考えられる。この関係はたとえば魏志倭人伝における卑弥呼とその弟の関係などを想定させるものである。

しかしながら、北旭台遺跡におけるこの様な祭祀も古墳時代前期初頭を持って終了していることは、検出された遺構と遺物によって明らかであり、周辺地域における小銅鐸に関る遺構の最終帰属時期とほぼ同一なことは、極めて重要なことであろう。

**おわりに**

当センター職員をはじめ、関係諸氏の多大なる協力を得てやっと一冊の報告書として完成した本報告書ではあるが、筆者自身の力量不足から挿図の脱落などをはじめとして、極めて不十分な報告書となってしまったことに関して深く反省すると同時に、協力して下さった方々には深く頭を下げるばかりである。しかしながら日々量産される報告書の中でもひときわ不良といえる本報告書ではあるが、活用していただく機会に巡り会えるならば、十分にその責を果たしたものと考え終稿としたい。

註1　永井昌文　「5－II貝輪」『立岩遺跡』1977

橋口達也・三島　格　「南海産貝輪に関する考古学的考察と出土地名表」『立岩遺蹟』1977

〃　「腕輪・貝輪」『弥生文化の研究』8　1987

木下尚子　「貝輪と銅釧」『末盧国』1982

〃　「貝輪と銅釧の系譜」『季刊考古学』第5号　1983

柳田康男　「青銅器の創作と終焉」『九州考古学』60　1986

井上洋一　「銅釧」『季刊考古学』第27号　1989

ゴホウラ製貝輪は、利用部位及び形態によって広田型・全隅型・土井ケ浜型・立岩型・諸岡型の5型式に現在分類されている。このうち有鉤銅釧として継承されたものは、福岡県立岩運動場、立岩掘田K－34人骨右前腕に着装された立岩型貝輪を標識とするもので、同系譜の後出段階とされる福岡県上り立2号石棺検出貝輪と佐賀県茂手遺蹟出土の有鉤銅釧は、鉤状突起部分を除けば厚さ形態とも類似しており、中期後半～末葉にかけての時期には、貝から青銅器へと素材転換が開始されたものと考えられている。ただし、青銅器化とする際において、いわゆる「鉤状突起」と呼ばれる呪力を持つと信じられた部分を意識的に誇張して製作された可能性も指摘されている。

註2　三島　格　「鉤の呪力」『古代文化』22－5　1973

橋口達也・折尾　学　「小児に伴ったゴホウラ製貝輪」『九州考古学』47　1973

高倉洋彰　「右手の不使用－南海産貝製腕輪着装の意義－」『九州歴史資料館研究論集』1　1975

柳田康男　「青銅器の創作と終焉」『九州考古学』60　1986

橋口達也　「腕輪、貝輪」『弥生文化の研究』8　1987

北部九州を中心とする有鉤銅釧を含む立岩型貝輪着装者は、諸氏の論考等により、王あるいは司祭者、さらに両者を兼ね供えていた人物と考えられており、いずれにしても鉤状突起のもつ意義を十分達成するにふさわしい人物である。また有鉤銅釧関係については柳田氏が指摘する様に桜馬場例の特定個人、西山公園例の共同社会の共有物であるものに大別され、前者は副葬品として、後者は集落から出土するものも含めて共同体の祭具として意義づけられるものとすれば、北旭台例は明らかに後者に属することは明瞭である。とすれば有鉤銅釧を着装した祭祀を考える時、北旭台遺跡におけるシャーマンの存在が浮かび上ってくる。

註3　製品では鉤状突起が極端に誇張され、立岩型貝輪の系譜として捉えることにやや無理があると思われる奈良県富雄丸山古墳例、鉤状突起が見あたらない神奈川県持田例、鋳型では詳細不明（井上洋一氏の御教示によれば遺跡見学会資料が発表されているという。）の福岡県宮の上遺跡例を含んでいる。また福岡県浜山例は、有鉤銅釧の鋳型とするにはやや微妙である。

註4　註3における富雄丸山古墳例、持田例を除き、池子例を加える。

註5　岡田威夫　「関東地方出土の銅釧について」『世田谷区資料第8集』1975

栗田則久　「上赤塚1号墳」『千葉東南部ニュータウン』13　1982

小高幸男　「古墳出土釧の基礎的研究—金属製釧について—」『君津郡市文化財センター研究紀要III』1989

註6　巨摩廃寺例は約½呈欠在しているが、残存する鉤状突起の反対側のRが二次変形でないならば、桜馬場例の様に鉤状突起の反対側に角を持つタイプか、あるいは香椎鋳型例の様に二鉤タイプの製品になる可能性も考えられる。

註7　有鉤銅釧の形状は、おのおの別の同笵鋳型で製作されたと考えられる桜馬場の2例、及び西山公園の2例のみ、同一形状と考えられる以外は、すべての製品の形状が異なっている。しかし、東海・南関東に分布する製品のうち、小黒例を除くすべての鉤状突起が偏平で、形状とも類似することは注目しなければならない。（この場合根丸島例は二次変形の可能性があることを申し加えておきたい。）

註8　二種の鋳型で製作され、鉤状突起をはじめとして形状はまったく異なるものであるが、両者共鉤状突起の反対側に多辺形となる角を持つところに共通点がある。1の鉤状突起の形状は横方向からさらに上方へとのび、静岡県小黒例と類似している。

註9　二鉤となること自体、ゴホウラ製立岩型貝輪の原義から遠ざかるものであるが、二鉤とも有鉤銅釧の鉤状突起の形状から大きくはずれるものではなく（白岳・茂手型範疇の鉤状突起であると思われる）また先行する桜馬場例の角が、あるいはこの様に二鉤型有鉤銅釧を産み出す起因ともなっている可能性も考えられる。

註10　杉原荘介　「有鉤銅釧」『日本青銅器の研究』　1972

すでに桜馬場、西山公園、香椎例をそれぞれA式・B式・C式とする同氏の論考がある。

註11　厳密に言えば、両者は立岩型貝輪の原義からはずれており、鉤状突起のもつ呪力的要素のみ取り出し、製作された製品と考えられる。ただし香椎例は前述のごとく一鉤型有鉤銅釧の鉤状突起範疇内の二鉤であるのに対し、富雄丸山古墳例は、完全なる創作的誇張が認められる。

註12　註7に同じ

註13　井上洋一　「鉤釧」『季刊考古学』第27号　1989

松井一明　「静岡県袋井市愛野向山II遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』75—2　1989

鈴木敏則　「東海地方の青銅器」『古文化談叢』第17号　1987

田中勝弘　「銅鏃」『弥生文化の研究』9　1986

白井久美子・福田依子　「千葉県市原市草刈遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』75—2　1989

安藤敏孝他『宮平遺跡』　1989

木對和紀　「千葉県北旭台遺跡出土の有鉤銅釧」『考古学雑誌』75—3　1990

合田芳正　「関東地方の青銅製品について—大庭域遺跡発見の銅鏃をめぐって」『考古学雑誌』65—4　1980

これら諸氏の発表・論考等によって、特に伊勢湾周辺を中心とする地域に青銅器生産工房の存在した可能性が唱えられている。また、これまで長野県武石例が東限とされ、北部九州から山陽地方にかけての地域がその分布の中心と考えられていた巴形銅器が、分布の東限を大幅に塗り変えて茨城県石岡市より検出された例もある。ここでは井上氏の「弥生時代、特定個人の腕を飾った銅釧は、銅鐸などの地域性との形成ともあいまって各地の青銅器生産工房で製作された可能性がある」との指摘をもって諸氏の論考のまとめのことばとしておきたい。

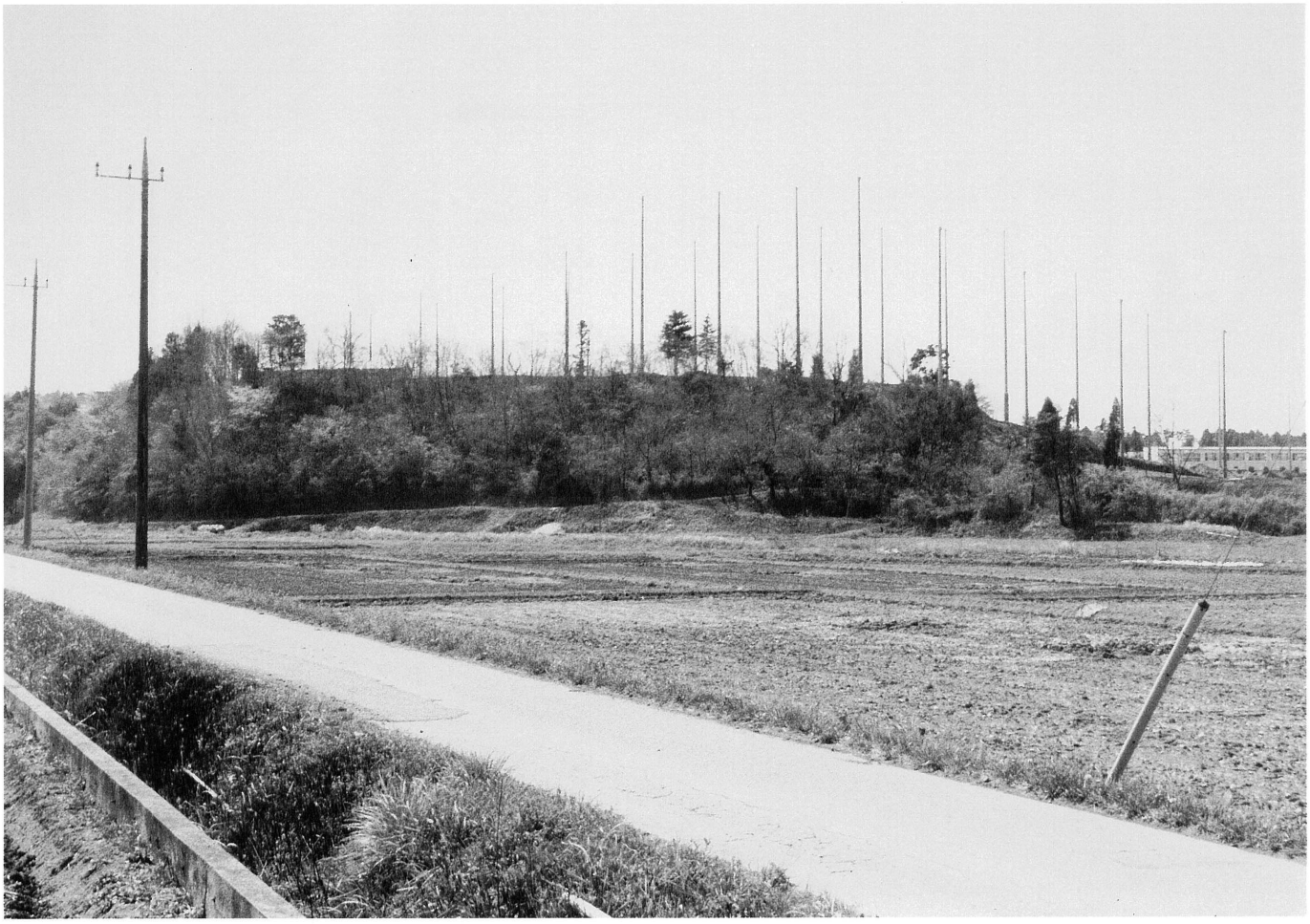
註14　熊野正也　「弥生時代集落構造の一考察—ベッド状遺構をもつ住居跡を中心として—」『史館』2　1974

河野真知郎　「初期農耕集落の解明」『Circum—Pacific』　1975

# 写　真　図　版



69号遺構西南コーナー部遺物出土状況



北旭台遺跡近景（北側より）



北旭台遺跡遠景（北側より）

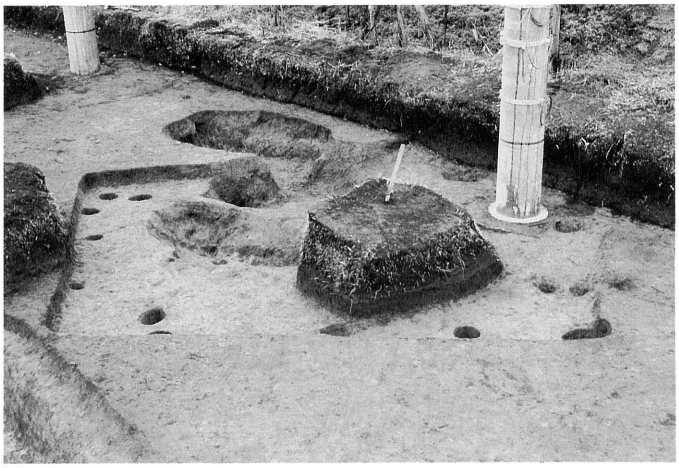
図 版 2



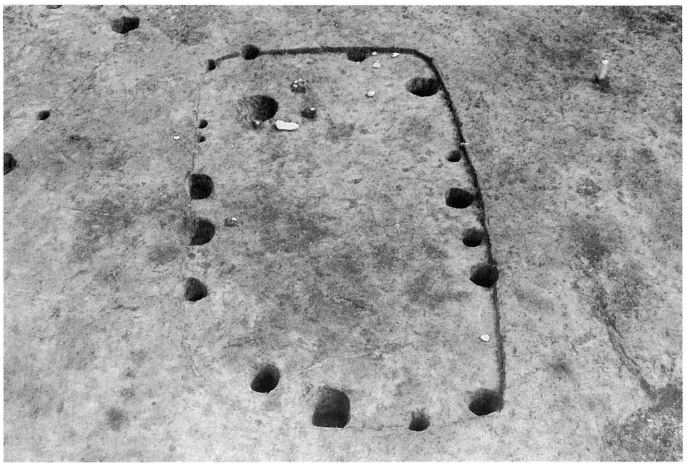
北旭台遺跡近景（西側より）



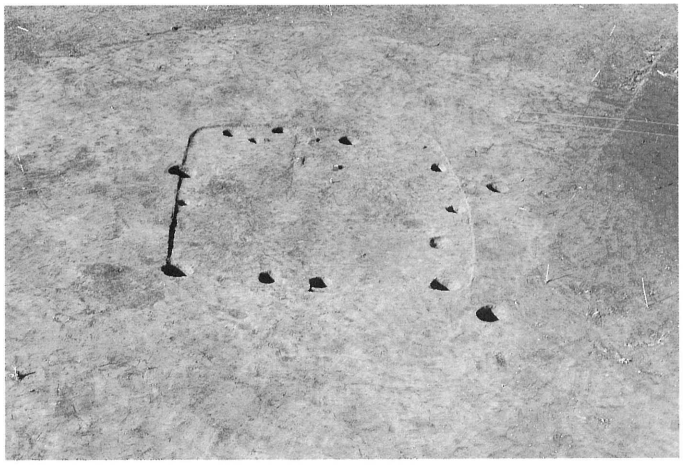
遺構群　手前より75・ 2 ・ 6 ・52・73遺構



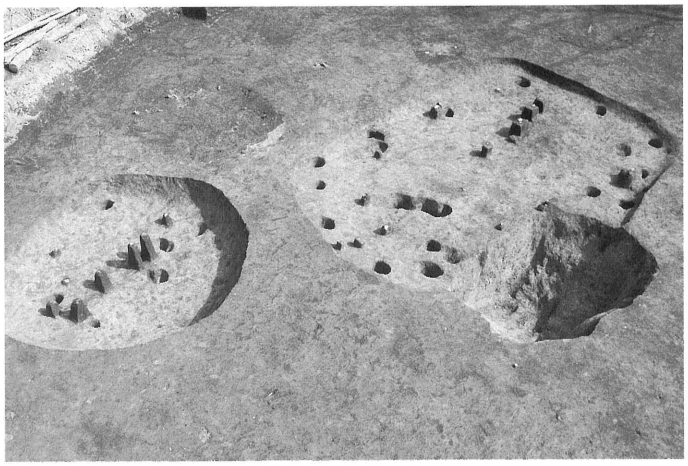
1 号遺構



3 号遺構



4 号遺構



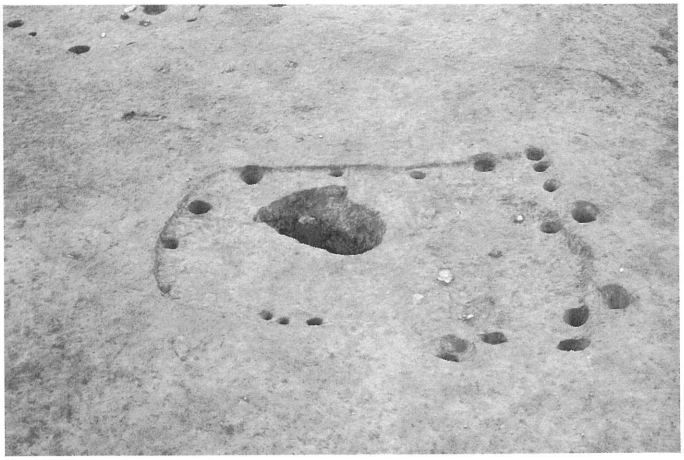
5 号遺構(左)・12号遺構(右)



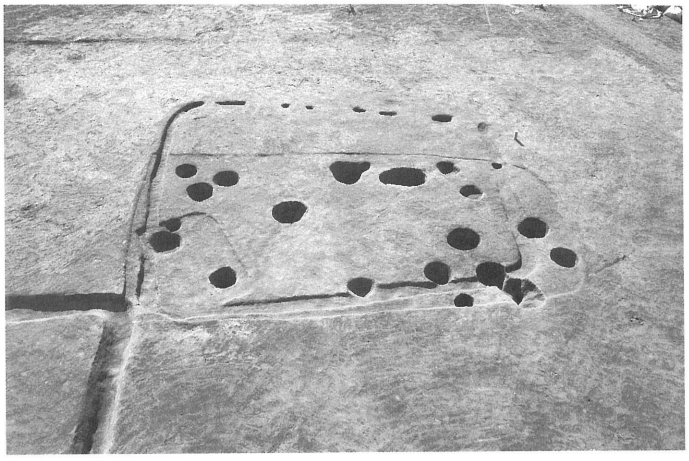
6 号遺構・52号遺構(手前)



7 号遺構(右)・60号遺構(左)

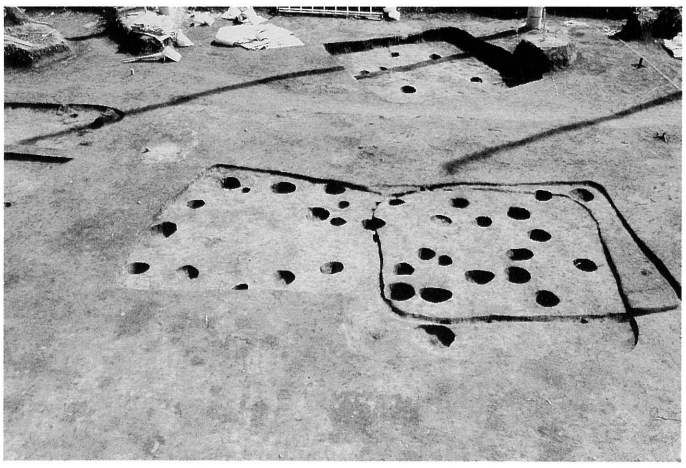


8 号遺構(住居跡)・50号遺構(土坑)

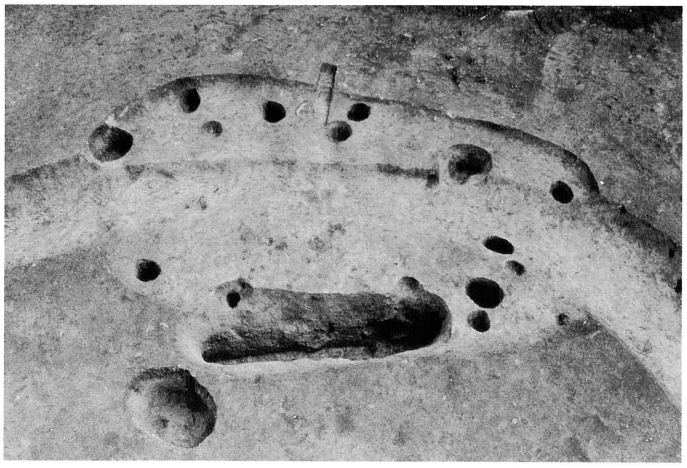


9 号遺構(住居跡)

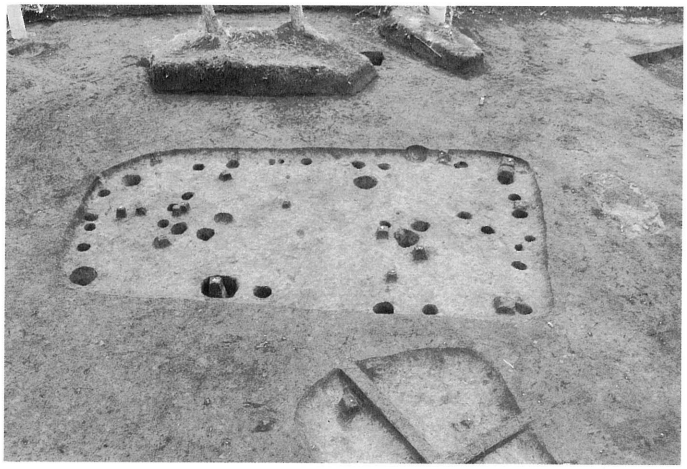
図 版 4



10・68・78号遺構全景(左側が10号)



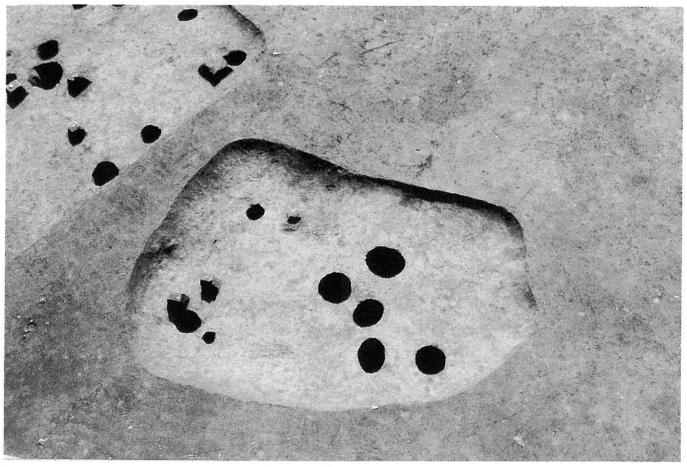
11・25・33号遺構全景(最上が10号)



13号遺構



14号遺構



15号遺構



18号遺構



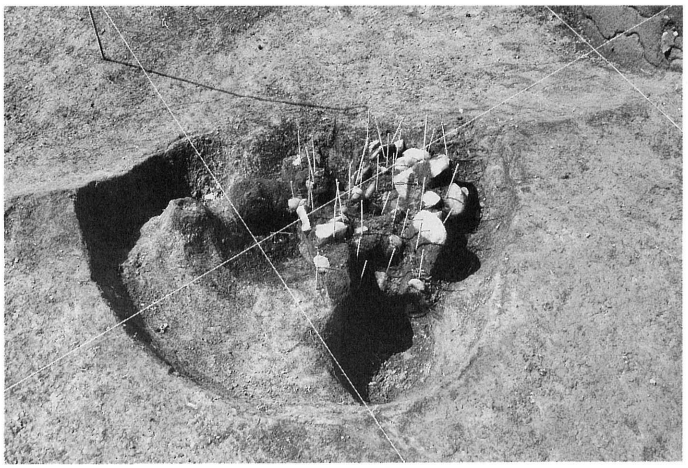
19号遺構



20号遺構



21号遺構礫検出状況



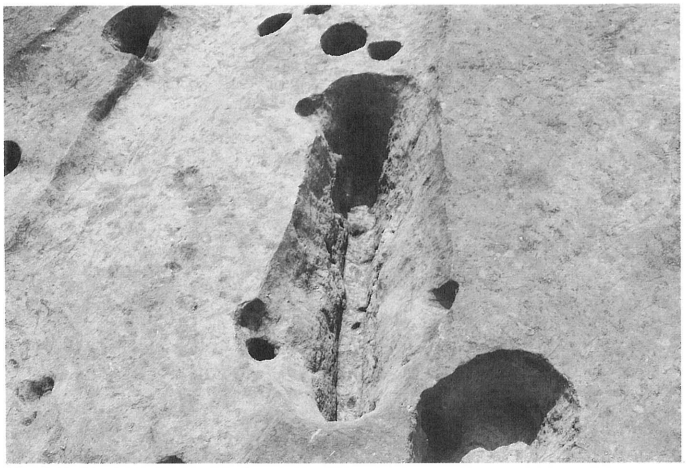
22号遺構礫検出状況



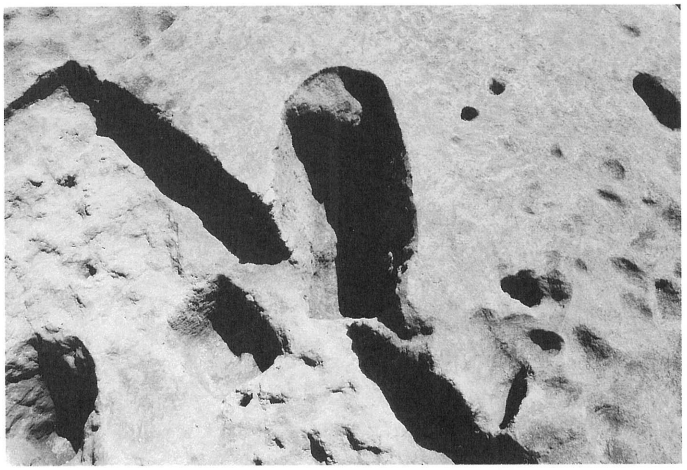
23号遺構



24号遺構



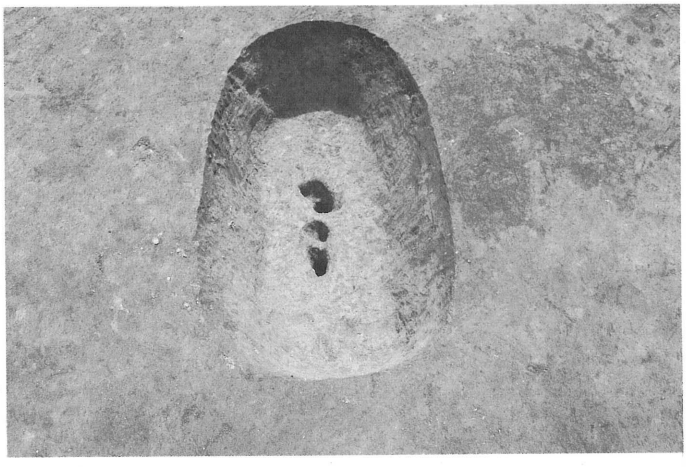
25号遺構



26号遺構



27号遺構

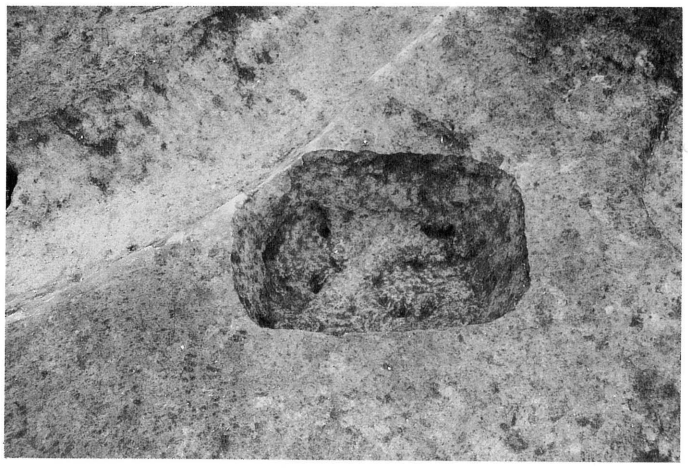


28号遺構

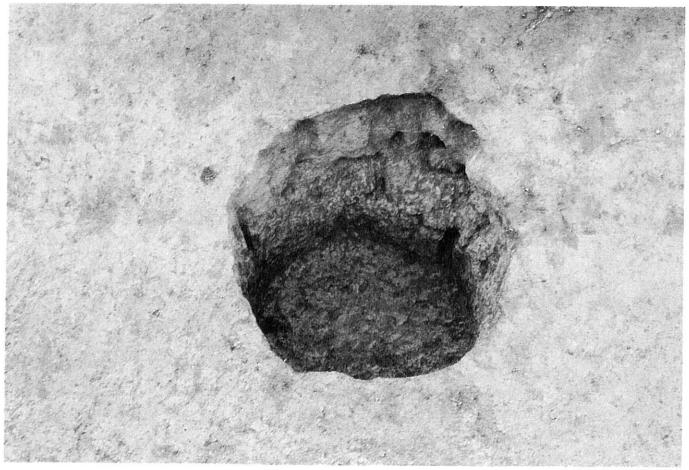
図 版 6



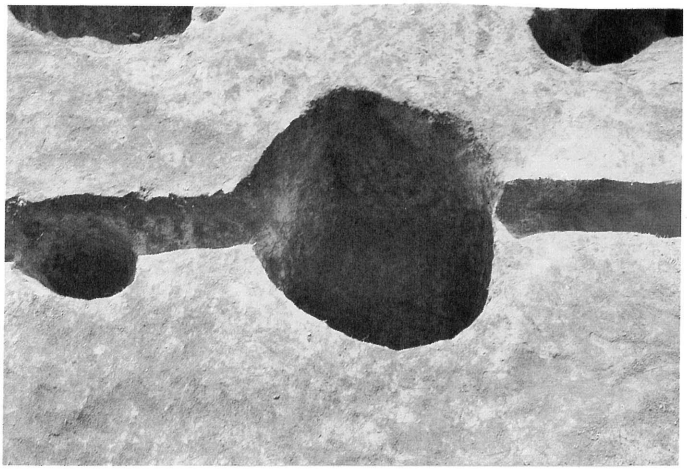
29・64号遺構



30号遺構



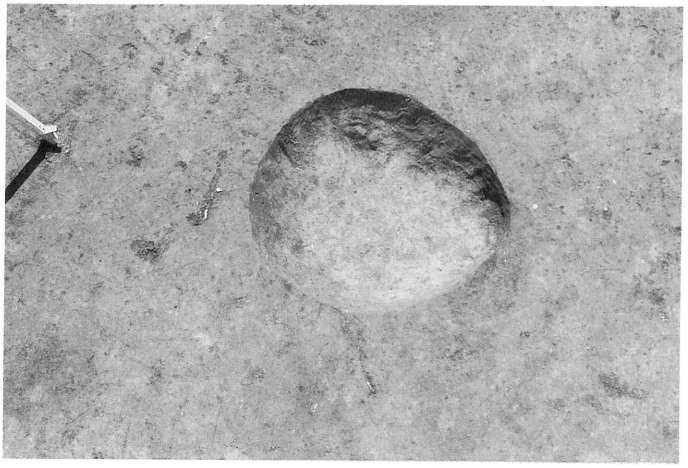
31号遺構



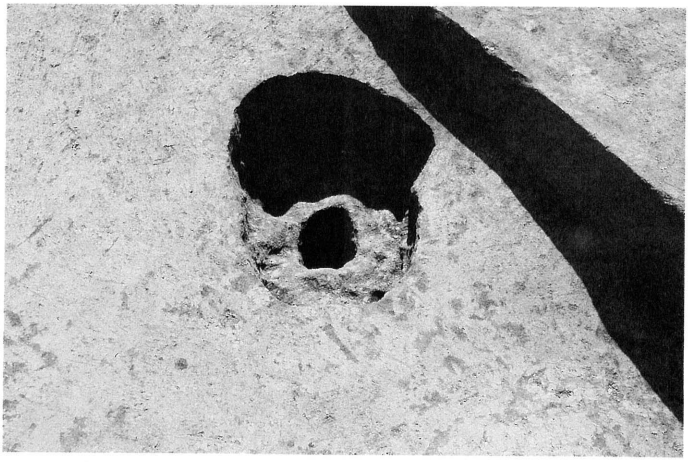
32号遺構



33号遺構



34号遺構



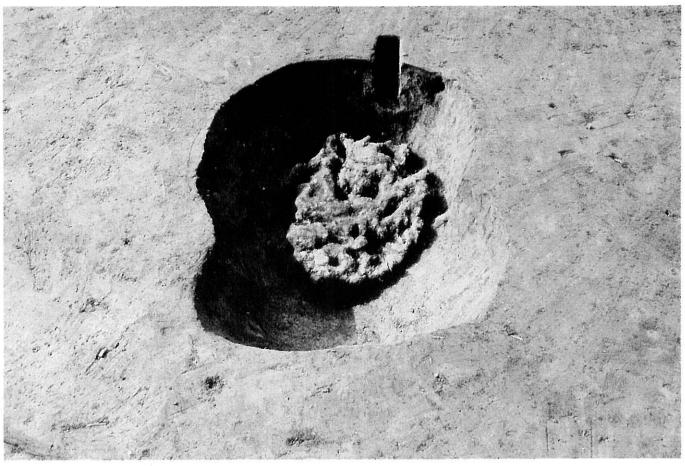
36号遺構



38・39号遺構



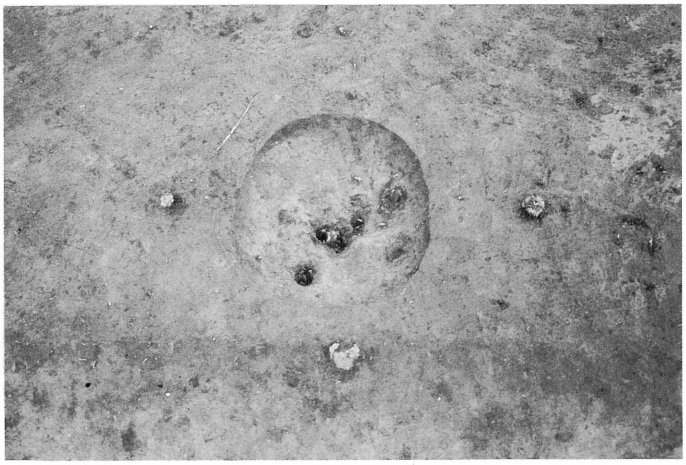
40号遺構



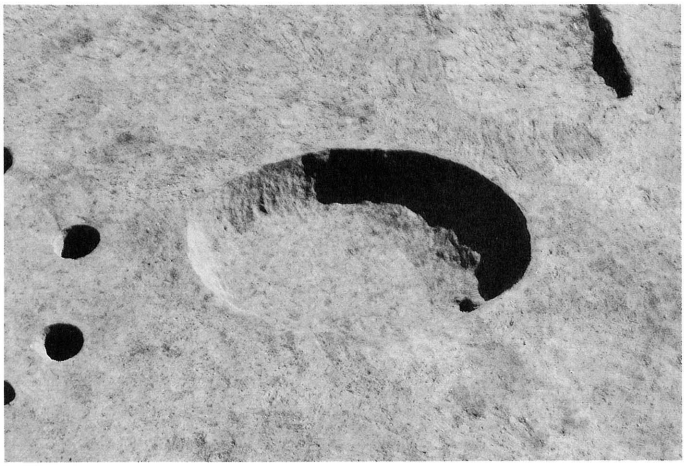
41・42号遺構



43号遺構



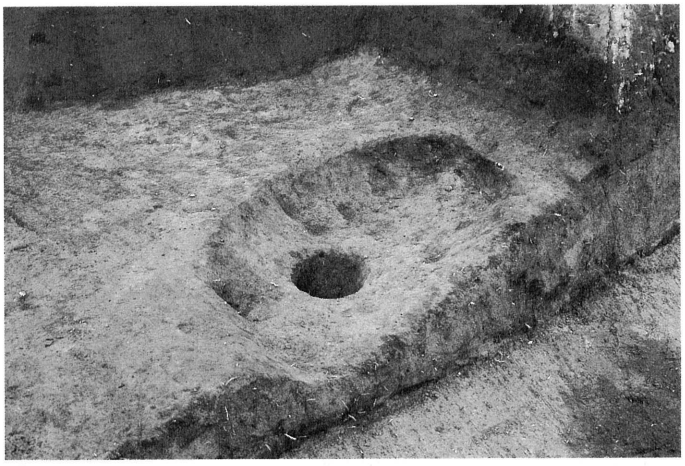
44号遺構



45号遺構



47号遺構(手前は97号遺構)

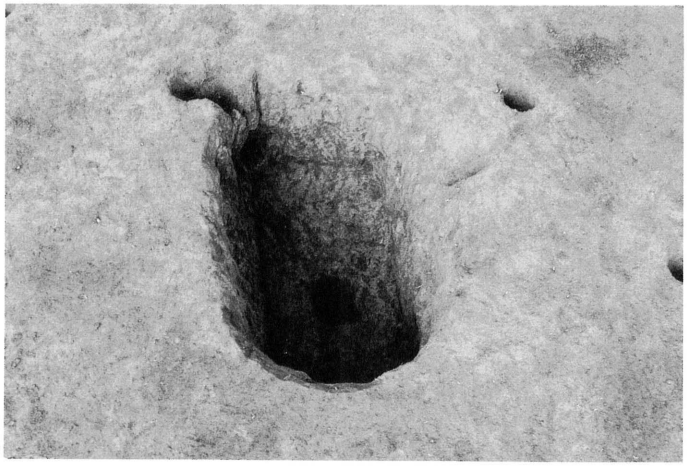


48号遺構



49号遺構

図 版 8



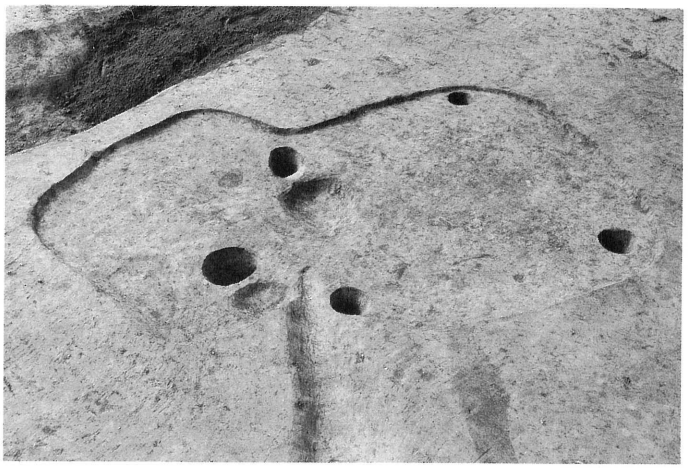
50号遺構



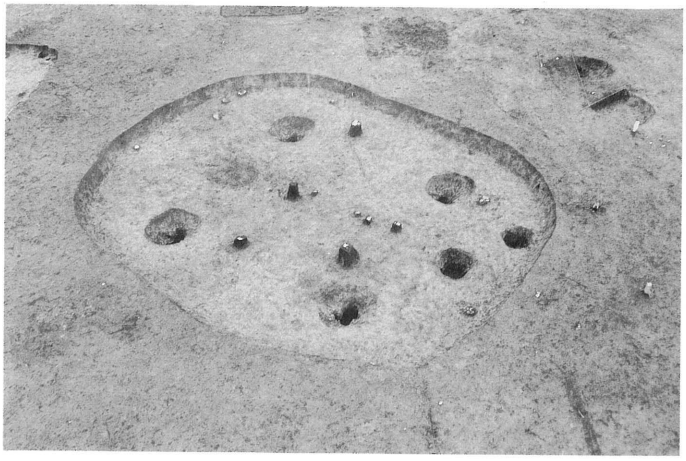
51号遺構



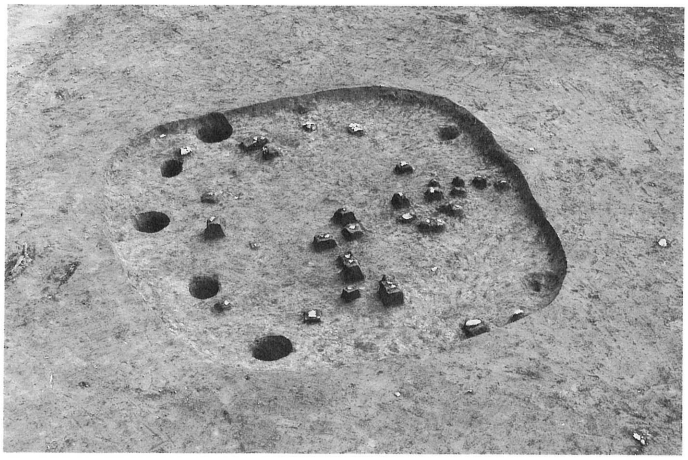
52号遺構



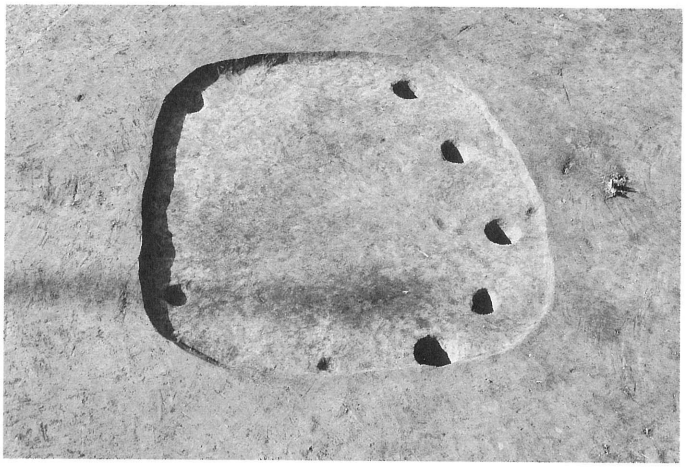
53号遺構(右)・61号遺構(左)



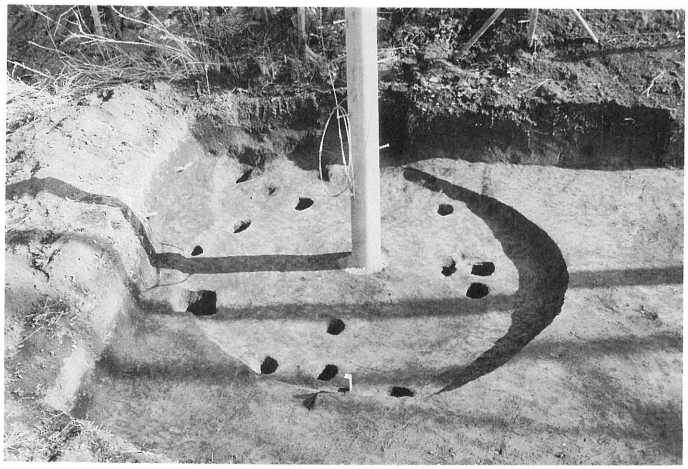
54号遺構



55号遺構遺物出土状況



55号遺構(完掘状況)



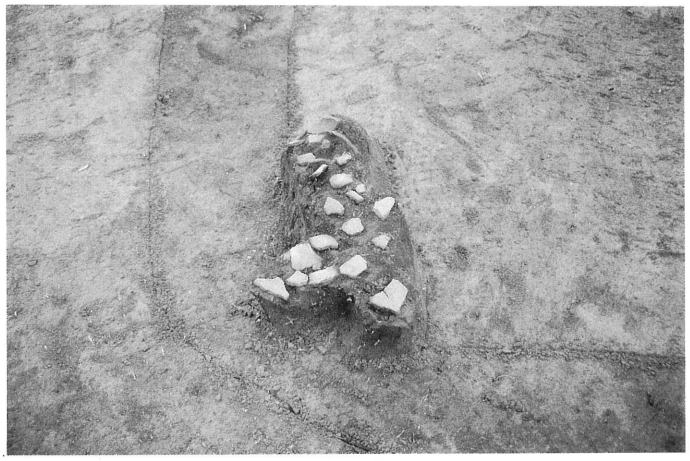
37号遺構(奥)・56号遺構(手前)



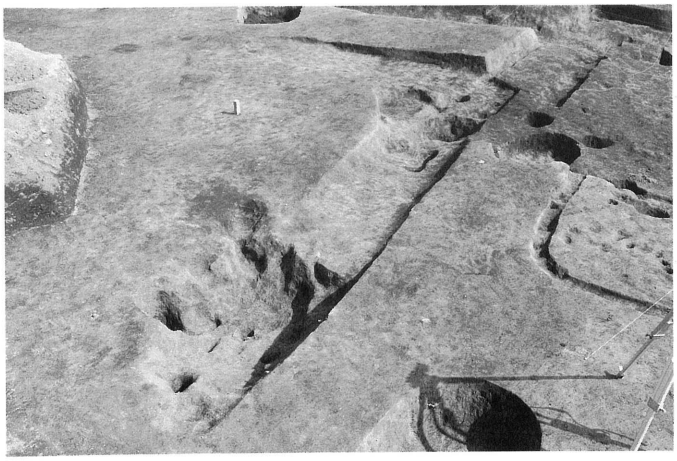
57号遺構検出状況



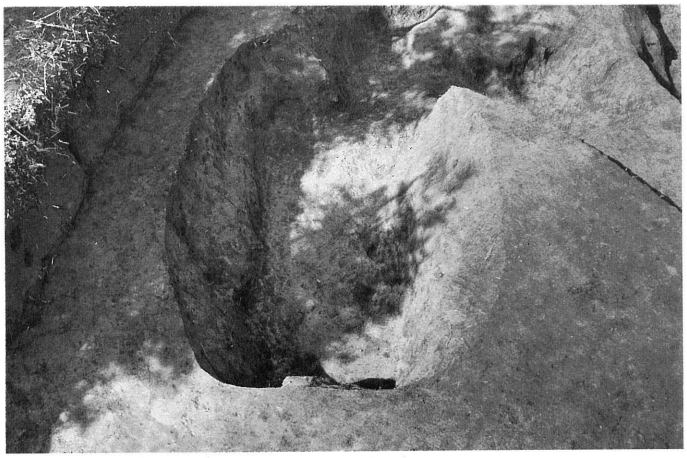
57号遺構



57号遺構コーナー部遺物出土状況

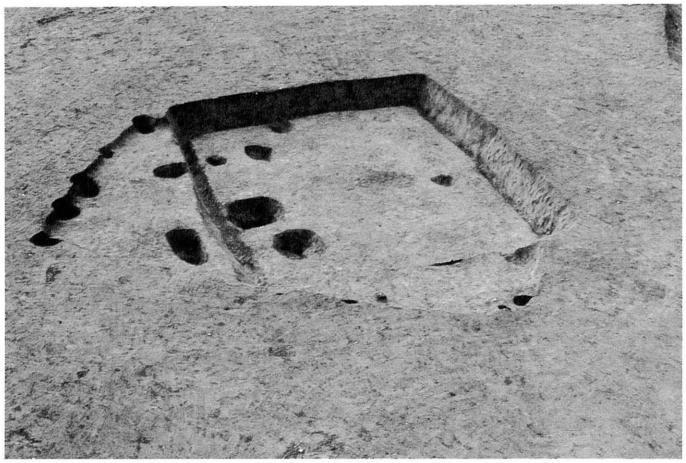


58号遺構

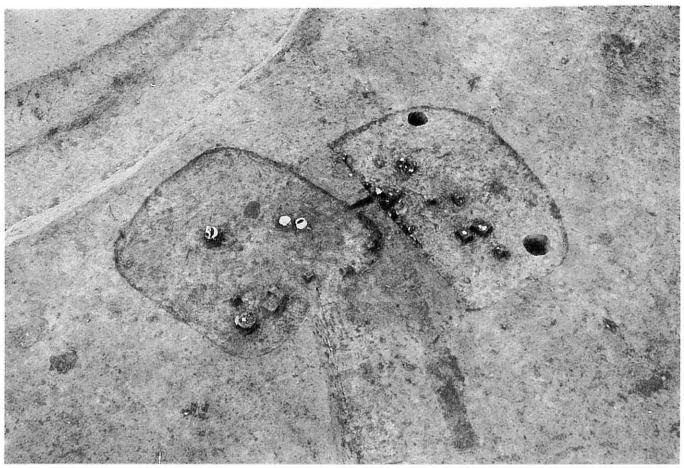


59号遺構

図 版 10



60号遺構（手前は 7 号遺構）



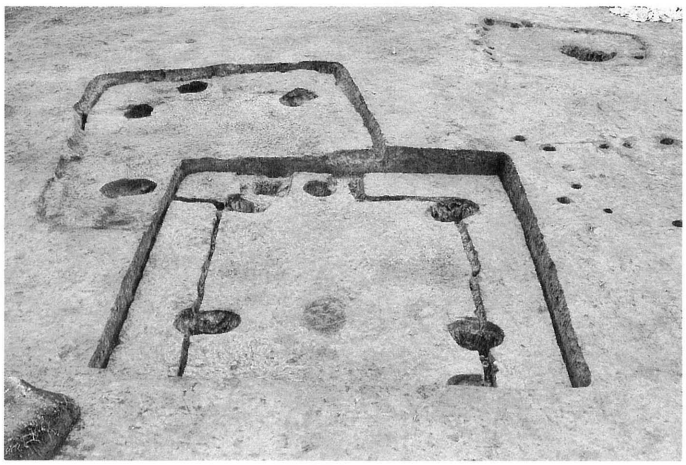
61号遺構調査状況（右は53号遺構）手前は重機キタピラ痕



61号遺構遺物出土状況 1



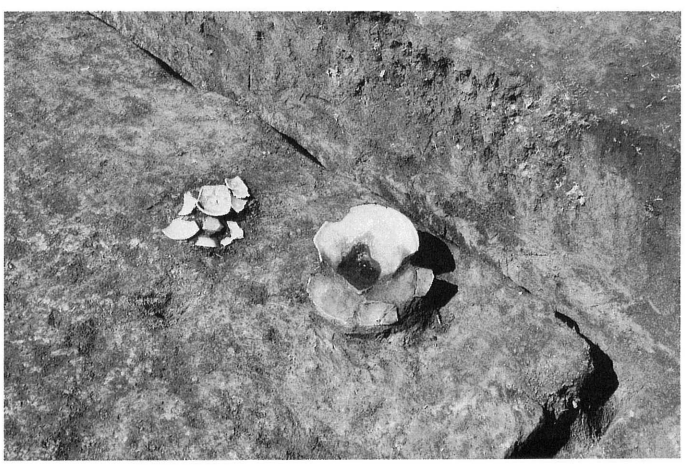
同　2



62・63号遺構



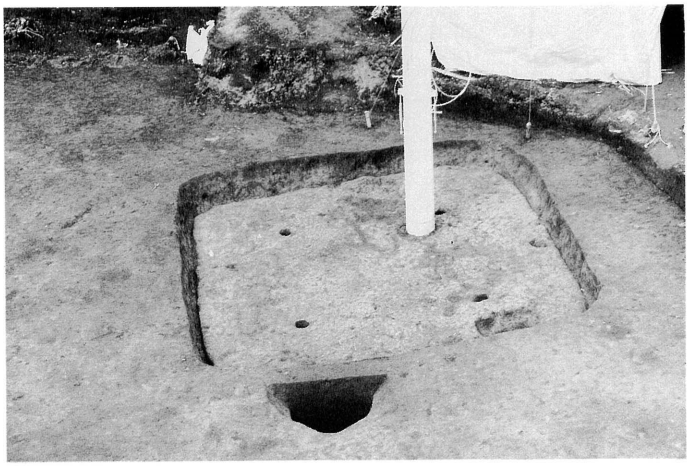
63号遺構遺物出土状況 1



同　2



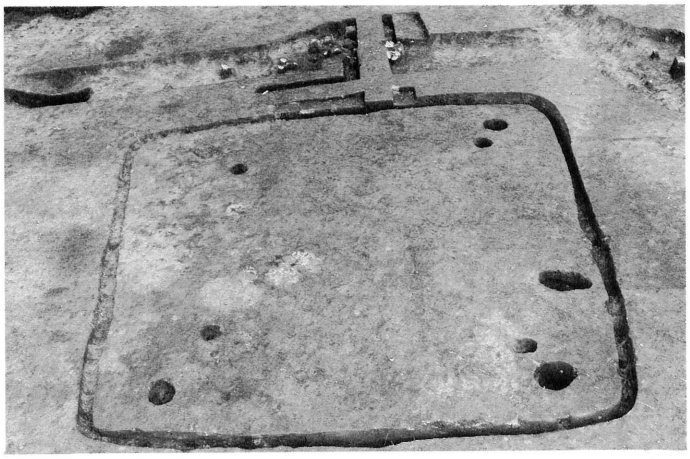
63号遺構床上ローム検出状況



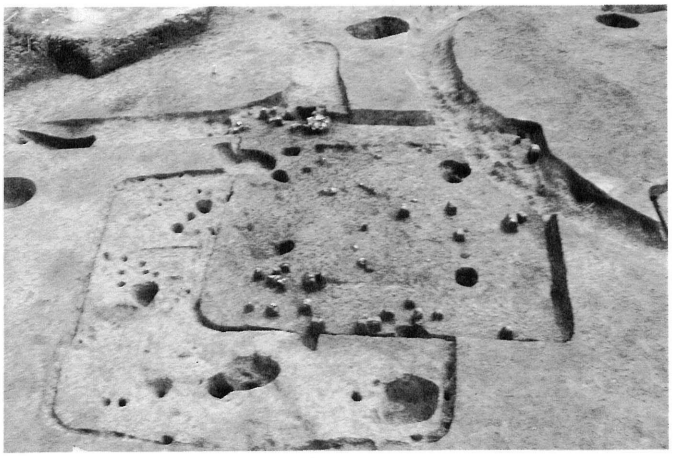
64号遺構



65号遺構調査風景



65号遺構



65号遺構掘り方



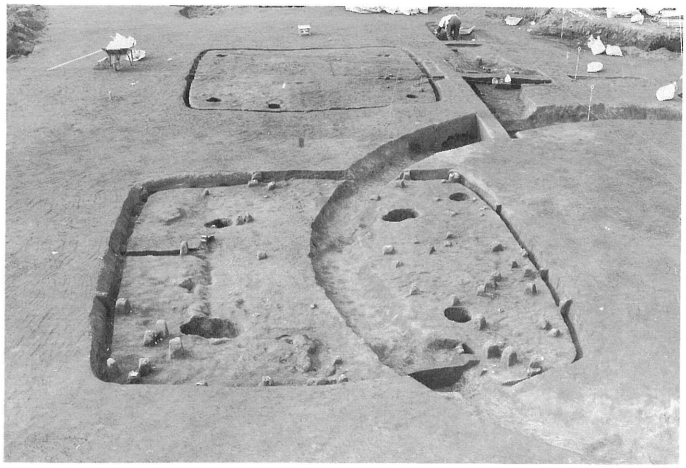
65号遺構　有鉤銅釧検出状況



66号遺構



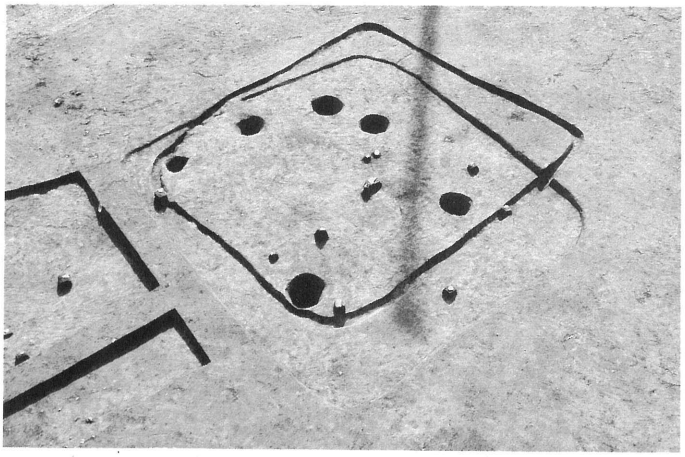
66号遺構遺物出土状況



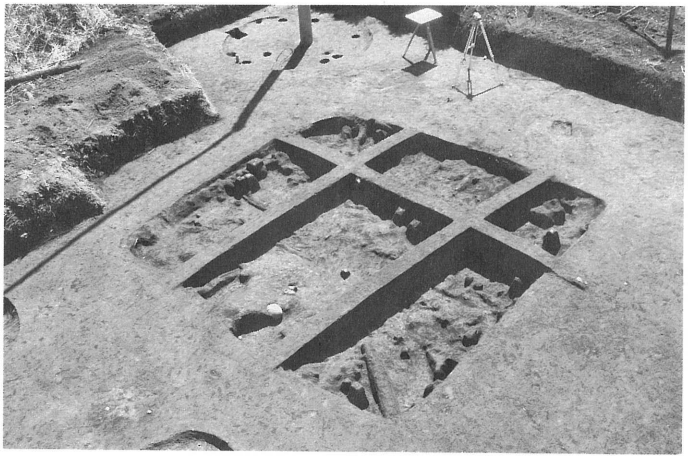
67号遺構



67号遺構遺物出土状況



68号遺構(周溝は78号遺構)



69号遺構焼土・炭化材検出状況



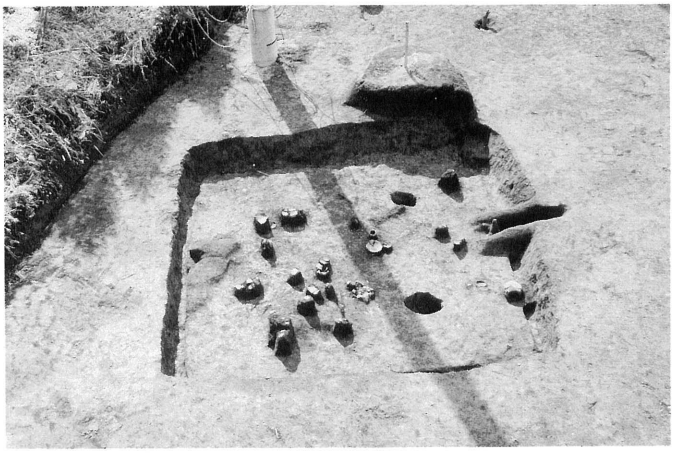
69号遺構炭化材及び遺物出土状況 1



同　2



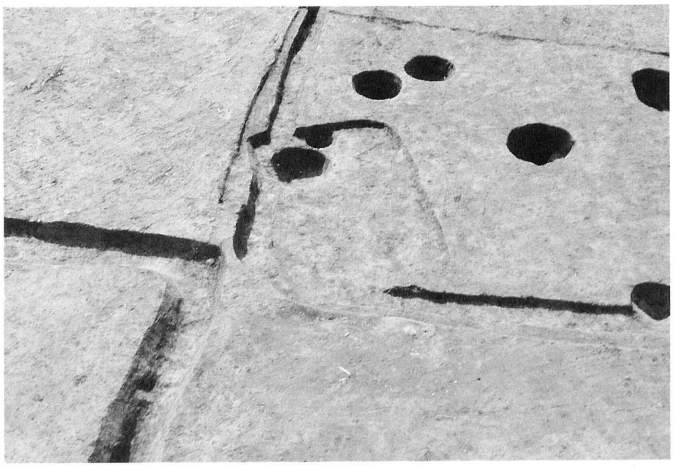
70号遺構完掘状況



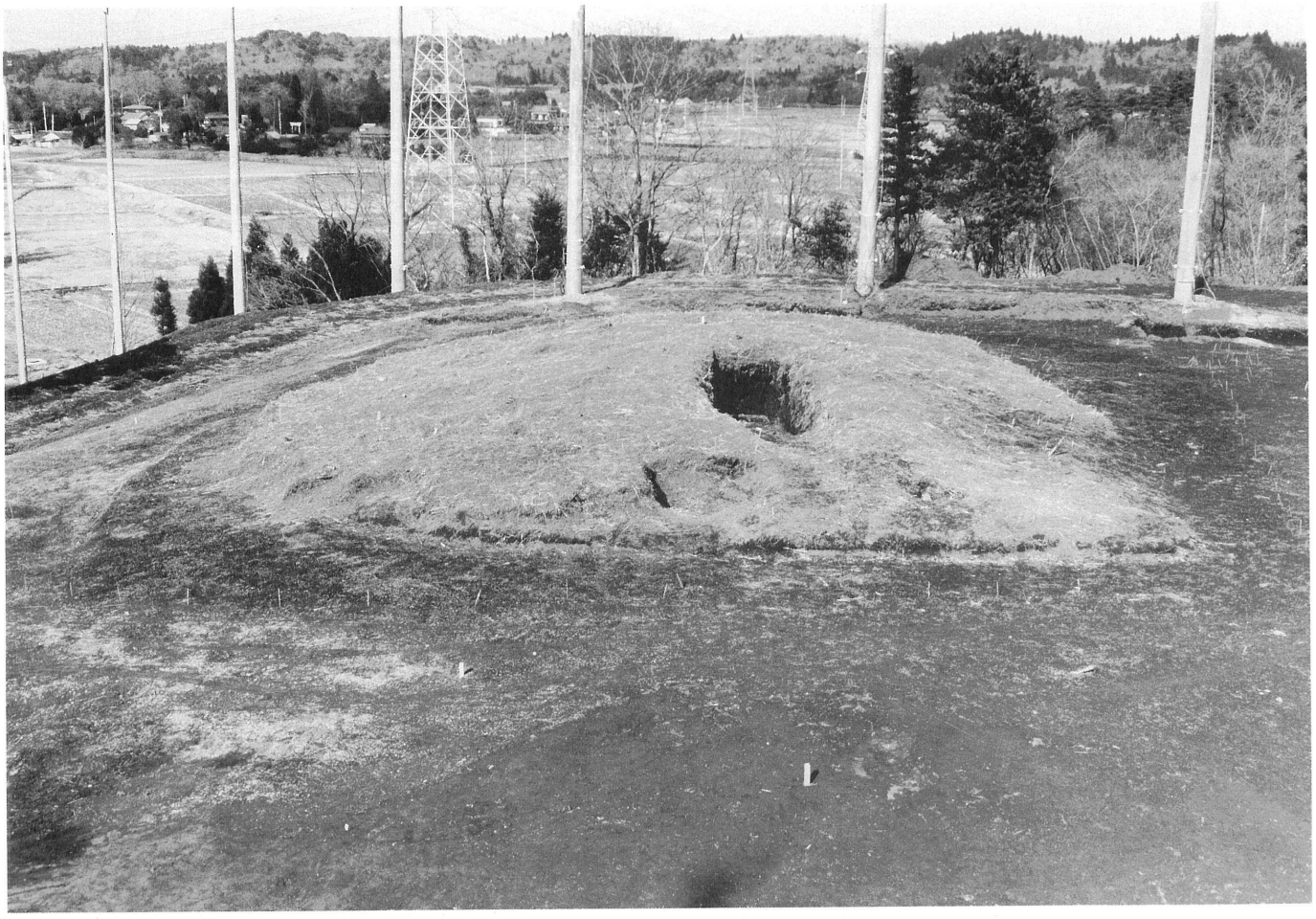
同遺物出土状況 1



同　2



71号遺構



73号遺構（調査前）

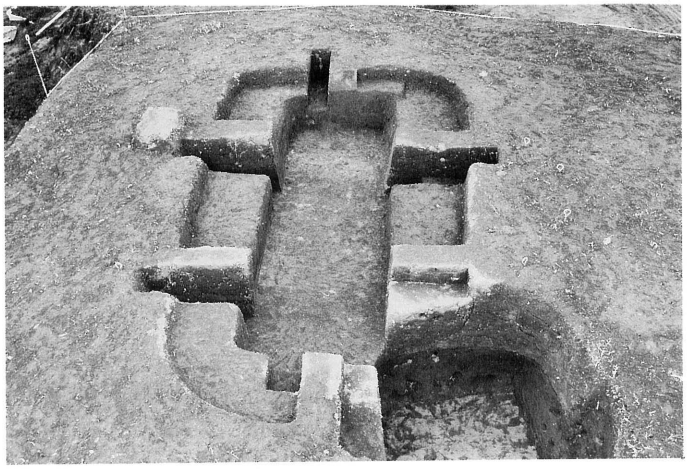
図 版 14



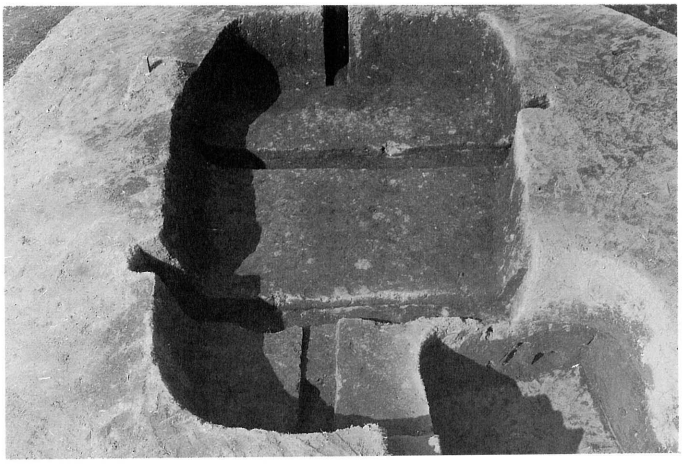
73号遺構(カクラン穴より手前周溝に及ぶものは重機削平箇所)



73号遺構　旧表土上面遺物出土状況及び周辺の遺構



73号遺構主体部



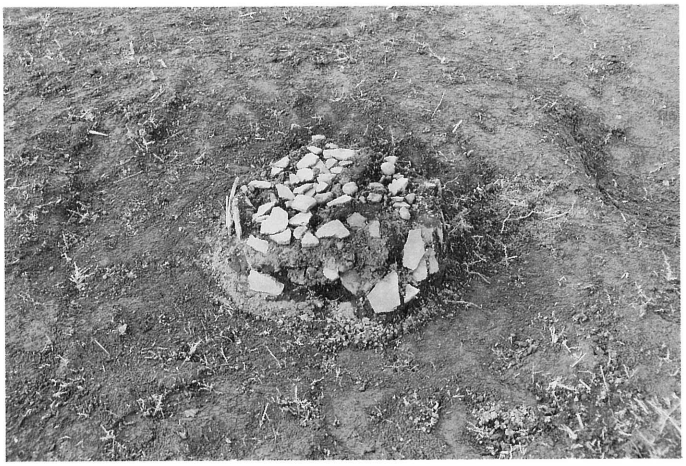
同　完掘状況



土層断面と旧表土出土遺物



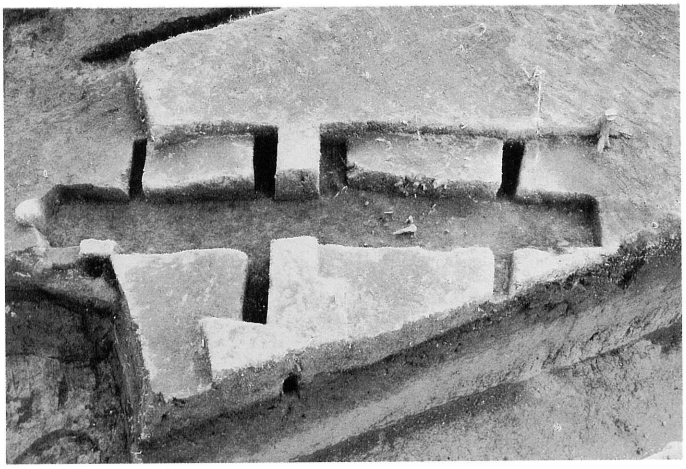
遺物出土状況



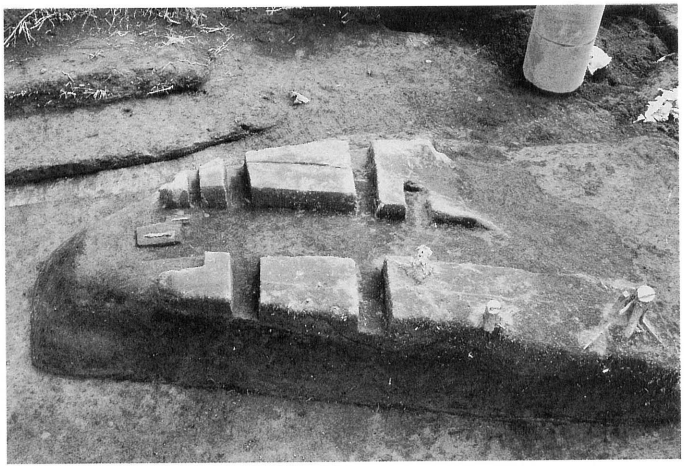
73号遺構北西コーナー大甕出土状況 1



同　2



74号遺構第 1 主体部



同　第 2 主体部

図 版 16



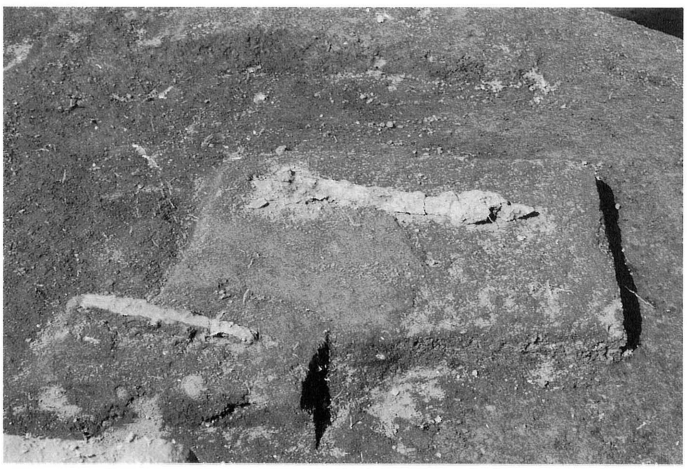
74号遺構全景及び第 1 主体部完掘状況（ポール際小トレンチ痕が前回調査範囲端）



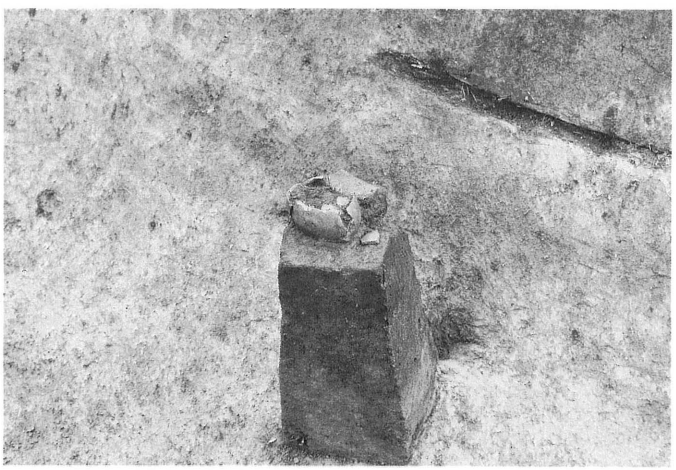
同　第 2 主体部遺物出土状況 1



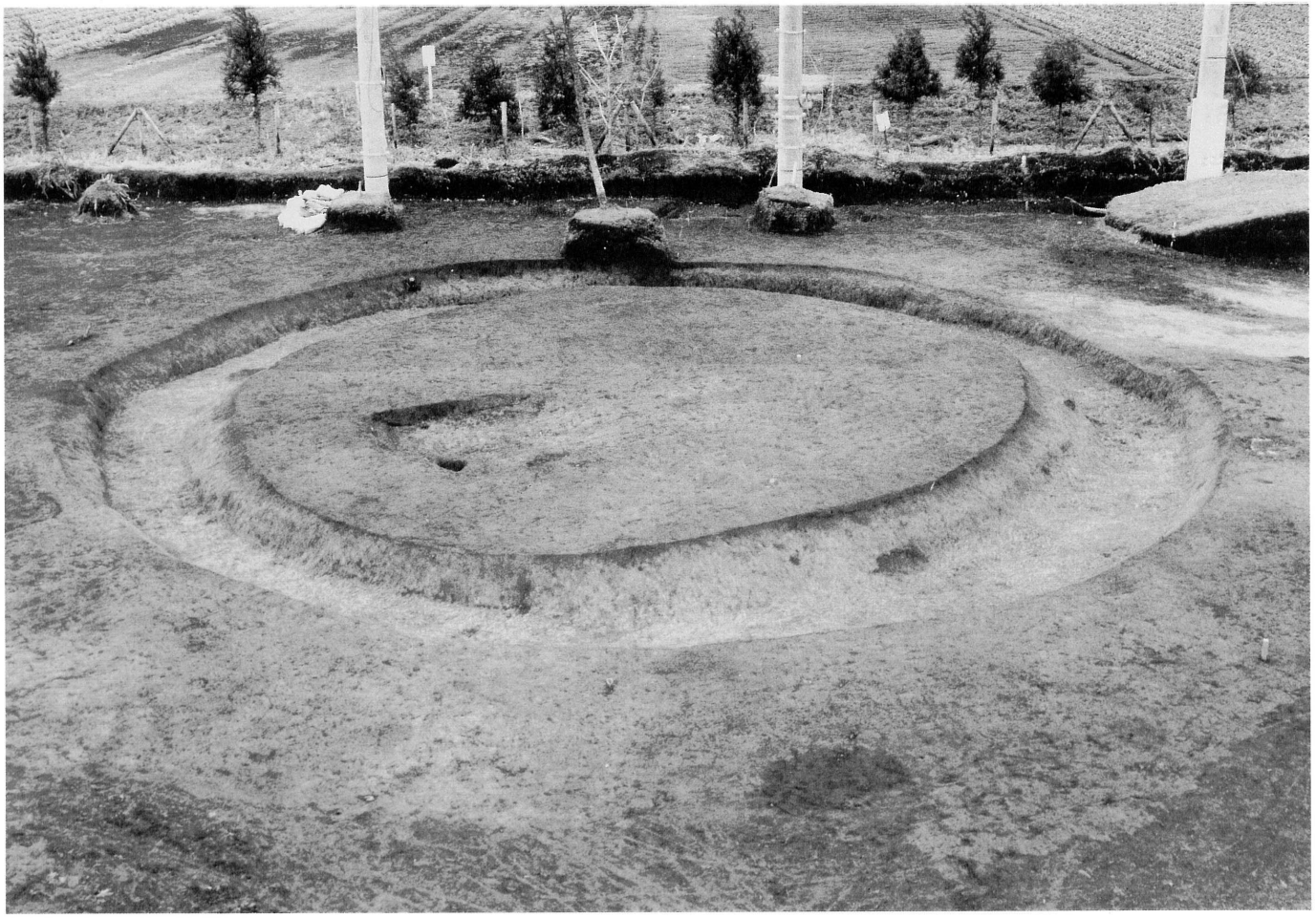
同　2（西側より）



同　3（南側より）



同　周溝内遺物出土状況

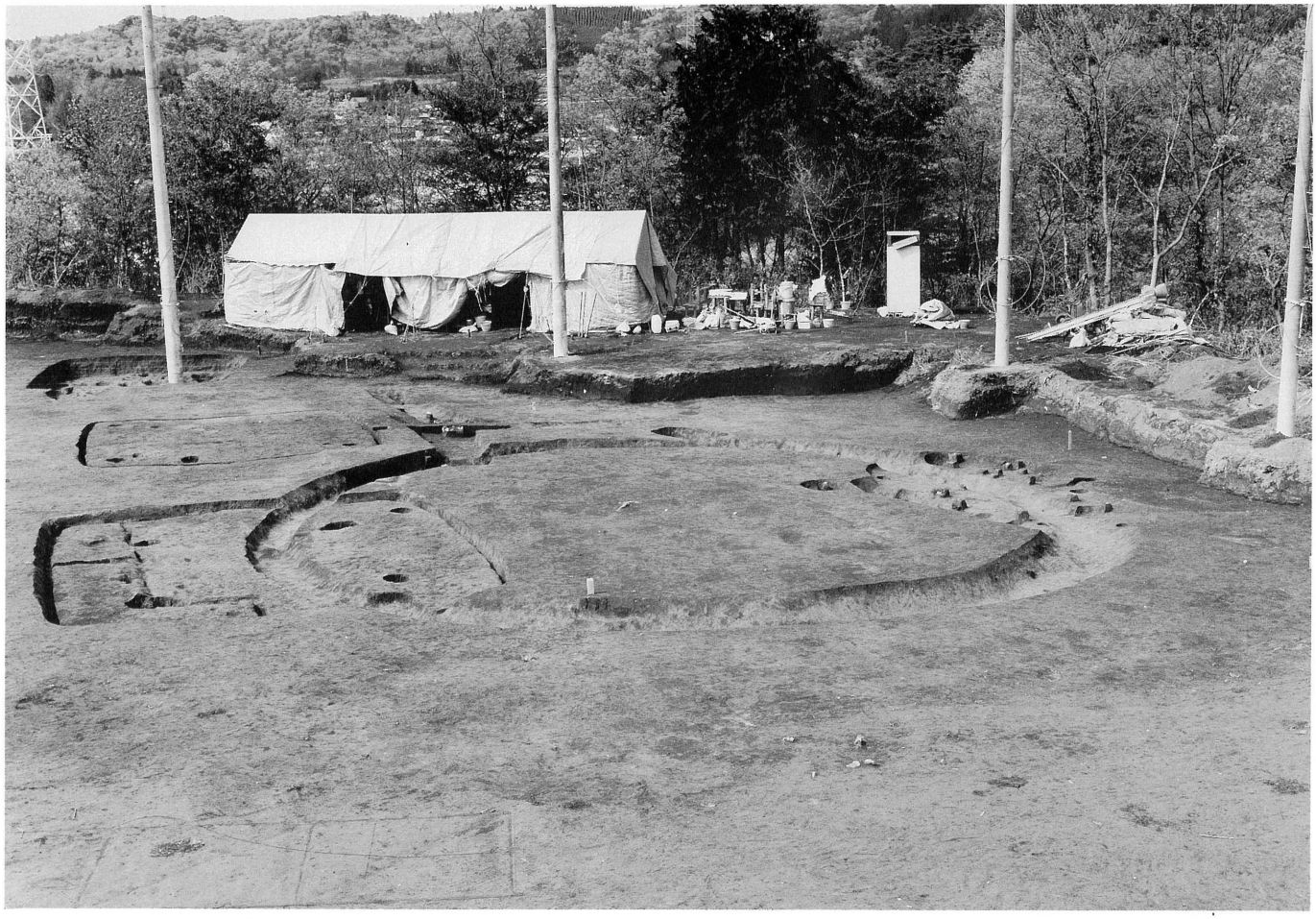


75号遺構全景



76号遺構全景

図 版 18



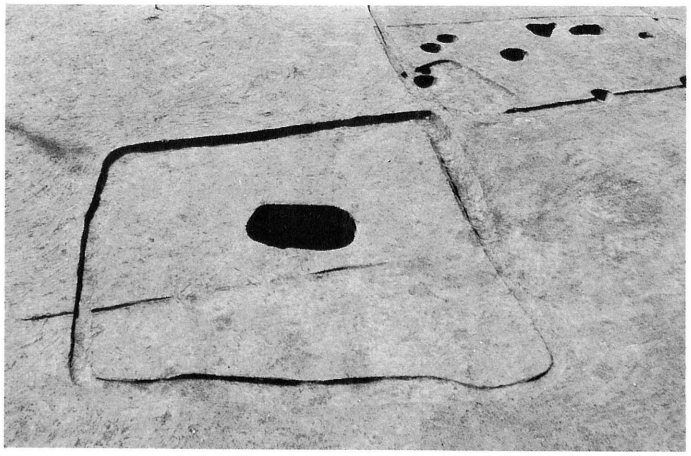
76号遺構及び周辺の遺構



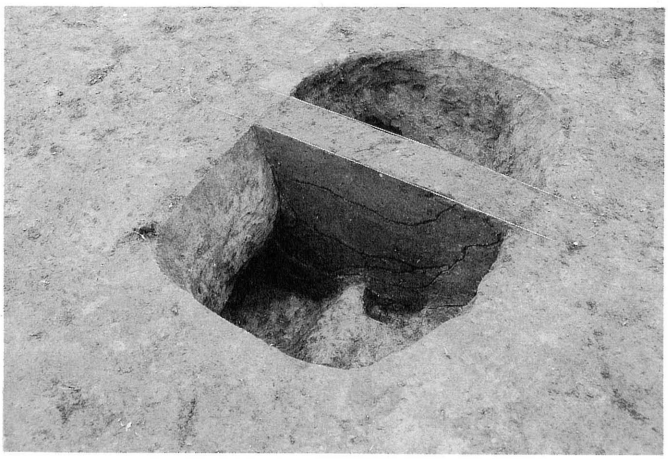
調査風景(76号遺構周辺)



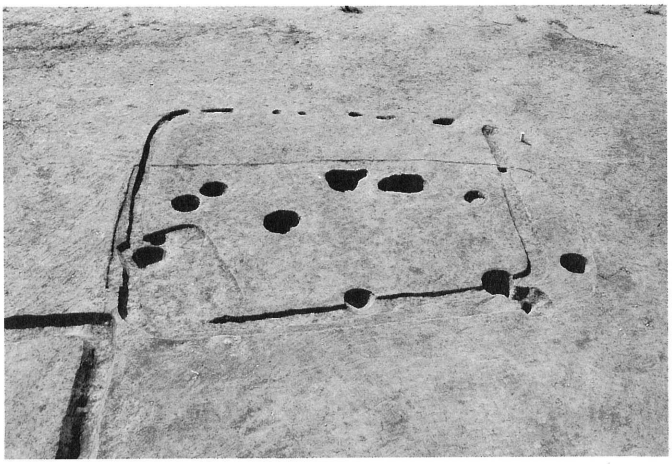
76号遺構周溝内土坑



77号遺構全景



同　主体部断面



78号遺構全景



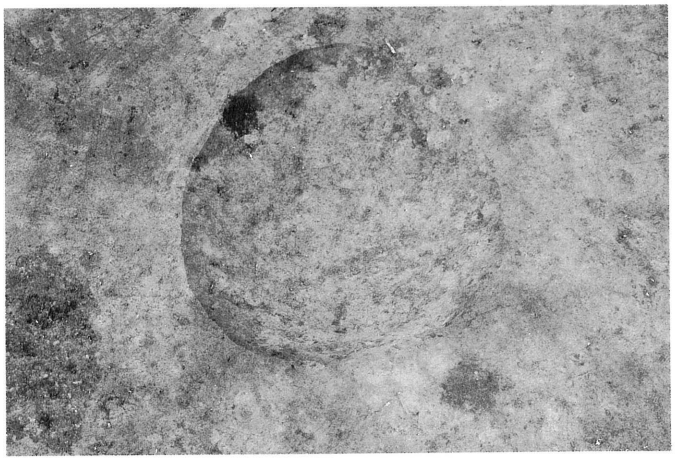
79号遺構全景



81号遺構全景



82号遺構全景



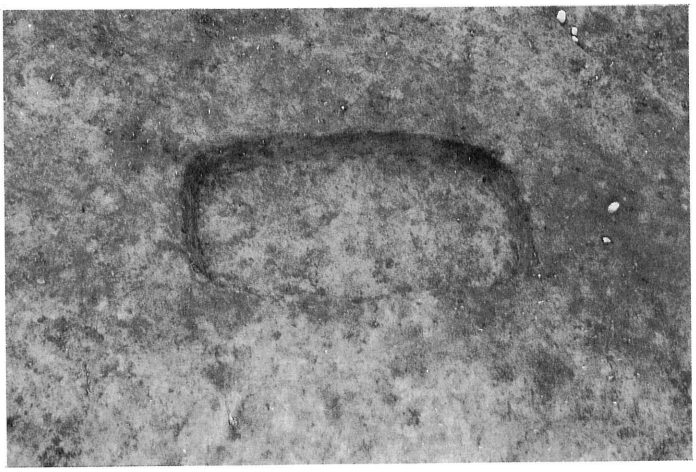
83号遺構全景



85号遺構全景

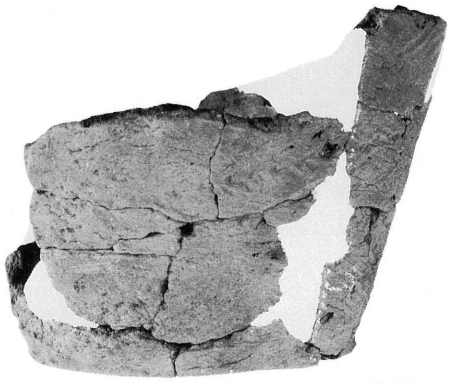


87号遺構全景

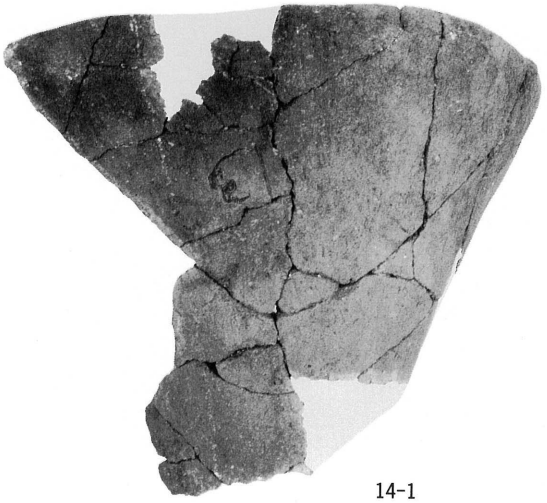


88号遺構全景

図 版 20



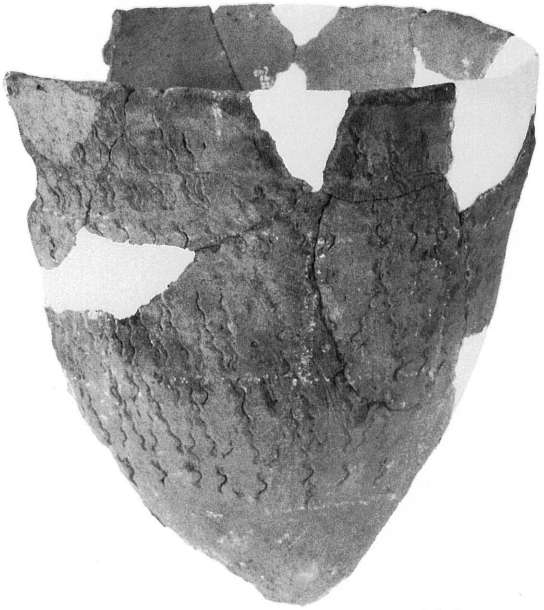
8-13



14-1



11-13



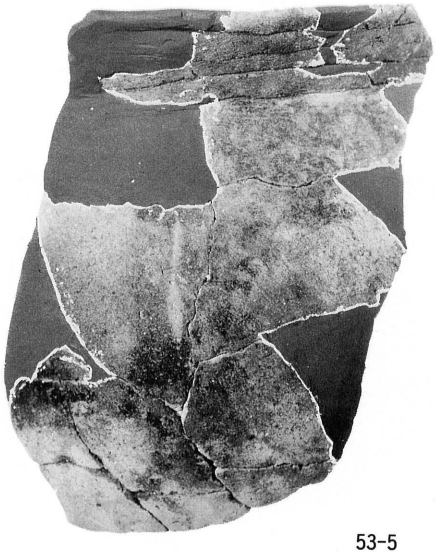
14-2



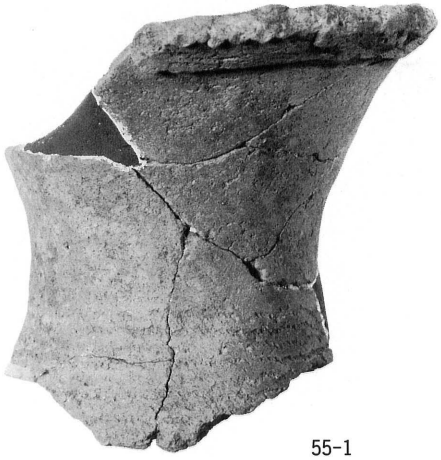
53-1



53-3



53-5



55-1



55-3



57-1



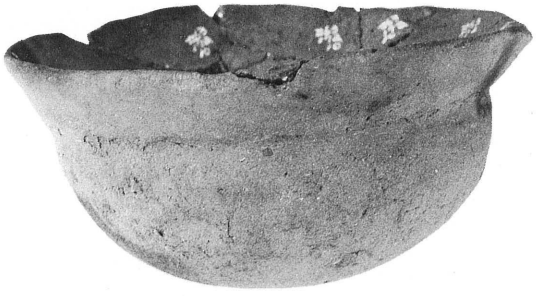
60-1



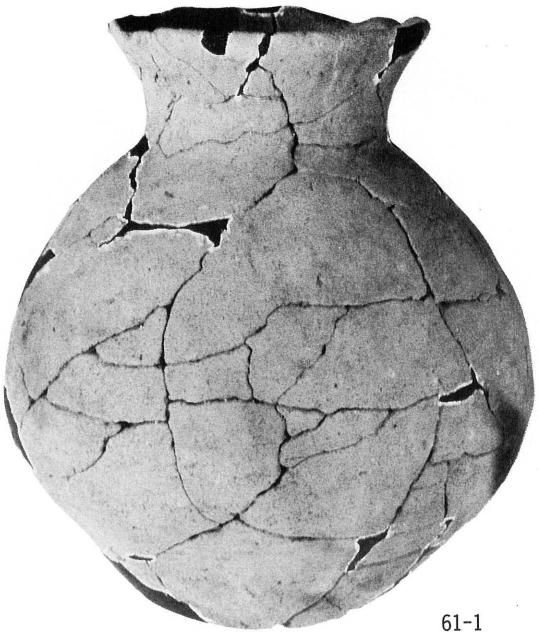
60-2



60-4



60-5



61-1



61-2



61-4



61-3



62-4



62-15



62-6



62-20



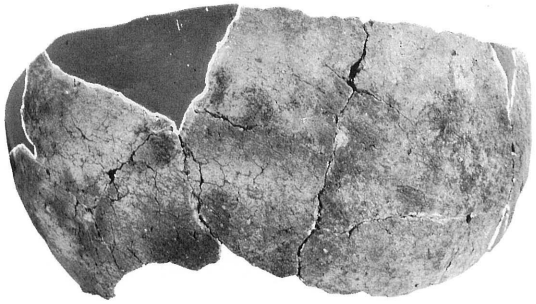
62-5



62-21



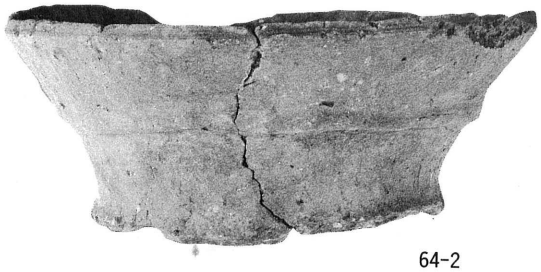
63-8



63-5



63-6



64-2



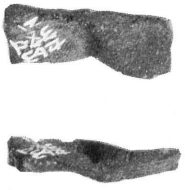
64-5



64-7



64-6



65-3

図 版 24



66-1



66-3



66-5



66-9



66-2



67-5



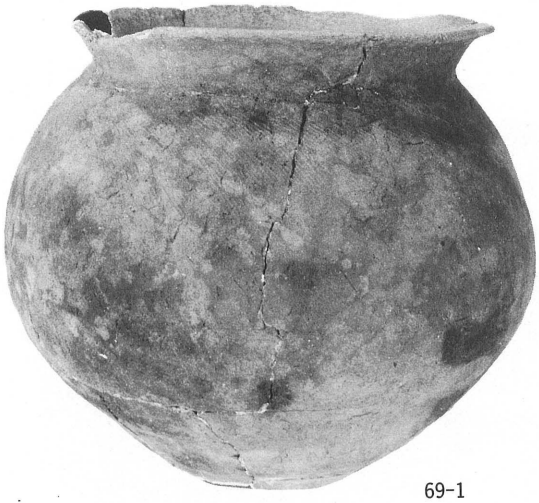
67-13



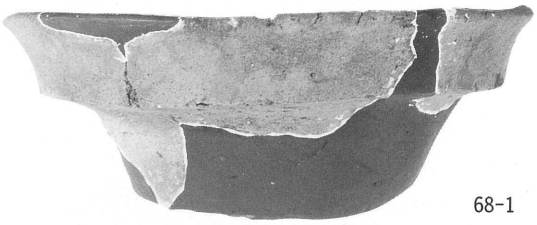
67-13



67-12



69-1



68-1



69-2



69-10



69-3



69-6



69-8

図 版 26



69-4



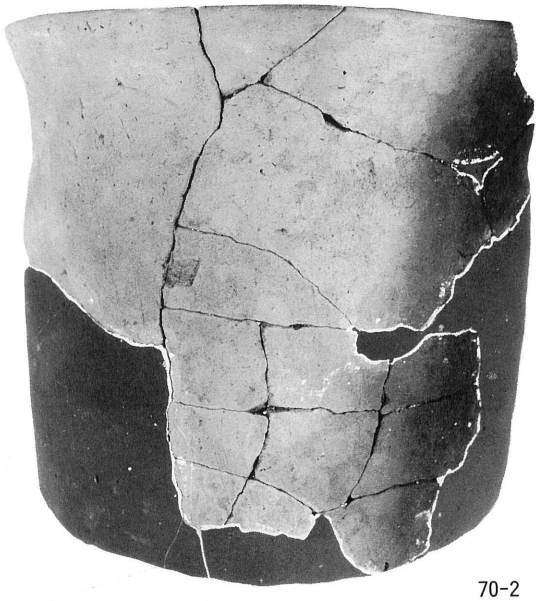
69-9



69-11



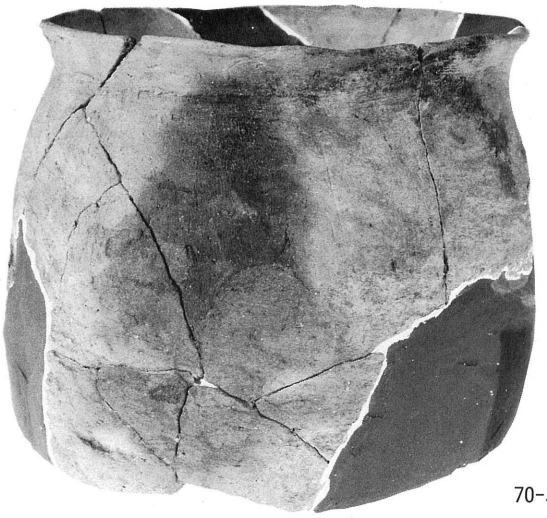
70-1



70-2



70-4



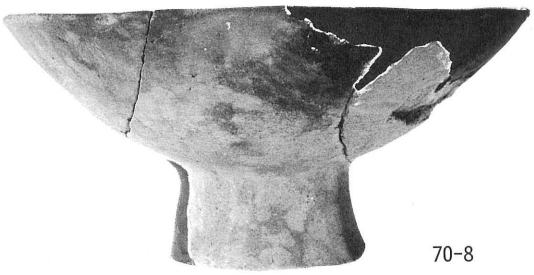
70-3



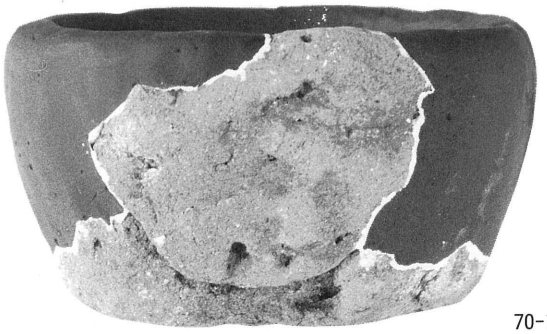
70-5



70-15



70-8

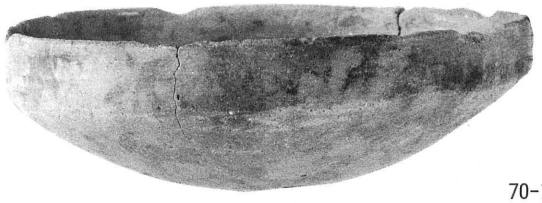


70-16

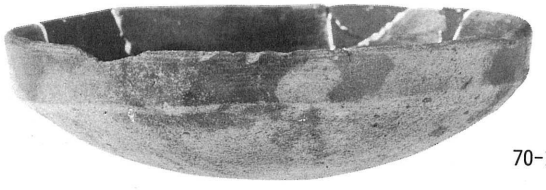




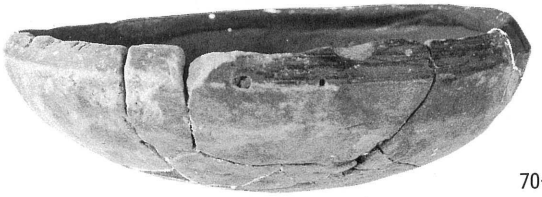
70-18



70-13



70-14



70-12

図 版 28



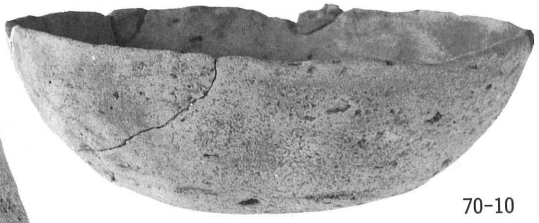
70-9



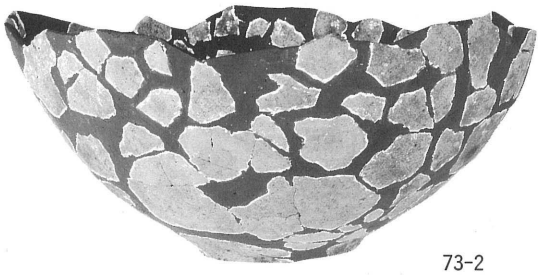
70-19



70-6



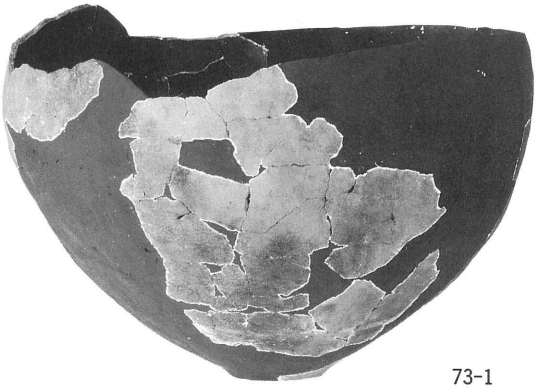
70-10



73-2



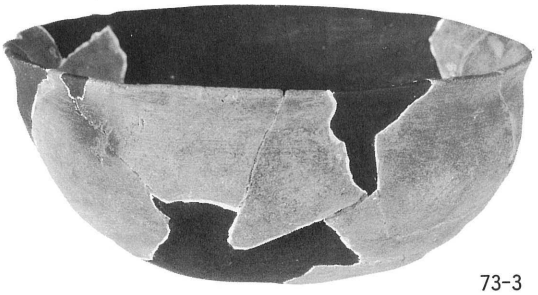
73-12



73-1



73-5



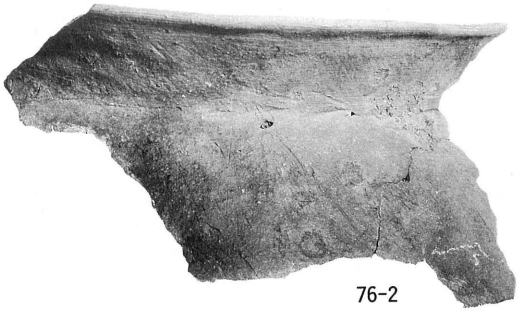
73-3



73-13



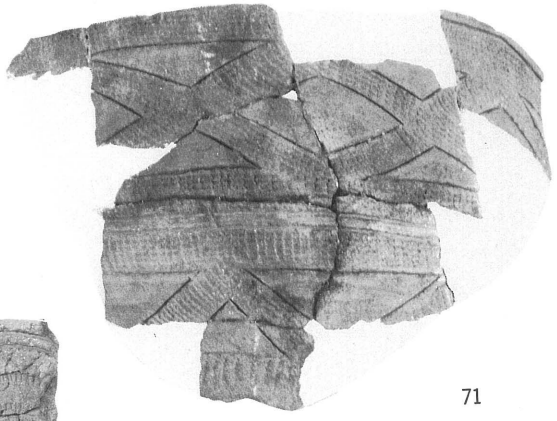
76-1



76-2


47


48

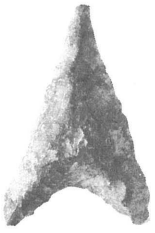

71


106


107


108


109


31


32


35


18


22


26


24


28


29


39


38


15

包含層及び遺構外出土遺物

財団法人　市原市文化財センター調査報告書　第39集

# 市原市北旭台遺跡

平成２年３月23日　印刷
平成２年３月30日　発行

編　集　　財団法人　市原市文化財センター

発　行　　財団法人　市原市文化財センター
千葉県市原市馬立817番地
ＴＥＬ　0436（95）２７５５

印　刷　　株式会社　弘　文　社
千葉県市川市市川南2-7-2
ＴＥＬ　0473（24）５９７７